



# 研究紀要 26

平成21年11月

財団法人 千葉県教育振興財団

# 研究紀要 26

平成21年11月

財団法人 千葉県教育振興財団



## 発刊の辞

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付けで名称変更）は、昭和49年11月の設立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物等に見られるとおりです。

研究活動につきましては、埋蔵文化財調査に関連する研究成果を研究紀要としてとりまとめてまいりました。昭和50年度に第1号を刊行しました研究紀要は、以来第1期から第5期に分けて共通のテーマを設定し、これまでに25冊を著しました。この間、昭和60年度には『創立10周年記念論集』、平成6年度には『創立20周年記念論集』、平成16年度には『創立30周年記念論集』を刊行するなど、房総文化の解明に努めてまいりました。

当財団では、数多くの遺跡を調査し、調査報告書や研究紀要を通して各時代・各分野の様々なデータを多量に蓄積してきました。しかしながら、昨今の発掘調査により、新事実が解明される一方においては新たな課題や問題点も生まれ、これらの蓄積資料を改めて整理し分析することが課せられてもいます。

このため、第5期ではこれまでの研究紀要ではとりあげられていなかった各時代の遺跡、遺物、文献等の資料集成を主とし、「各時代における諸問題」と題して新たに展開することにし、平成13年度に本シリーズの成果報告の1冊目として研究紀要22『尖頭器石器群の研究』、第2冊目として研究紀要23『房総における原始古代の農耕』、第3冊目として研究紀要25『房総における郡衙遺跡の諸問題－下総国を中心に－』を刊行しました。

このたび、本シリーズの4冊目として、研究紀要26『房総における縄文時代の非在地系土器について－早期から中期を中心として－』を刊行することになりました。本書が考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための一助として広く活用されることを期待してやみません。

平成21年11月

財団法人 千葉県教育振興財団  
理事長 篠塚俊夫



# 目 次

## 房総における縄文時代の非在地系土器について －早期から中期を中心として－

発刊の辞	
はじめに	3
序章	5
第1節 共同研究にあたって	5
第2節 縄文土器の胎土分析　－房総における分析事例を中心に－	6
1 はじめに	6
2 縄文土器胎土分析の研究略史	7
3 調査・研究史からみた胎土分析の傾向と問題点	12
第1章 早期の非在地系土器　－押型紋土器について－	15
第1節 研究の現状	15
第2節 出土資料について	15
1 概要	15
2 出現期の押型紋土器	16
3 三戸式以降に併行する押型紋土器	25
第2章 前期の非在地系土器	28
はじめに	28
第1節 木島式土器	28
1 研究略史	28
2 千葉県内における出土遺跡	30
第2節 北白川下層式土器	39
1 研究略史	39
2 千葉県内における出土遺跡	40
第3節 前期大木式系土器	56
1 研究略史	56
2 千葉県内における出土遺跡	59
第4節 まとめ	80
1 千葉県内における非在地系土器の分布	80
(1) 木島式土器の分布	80
(2) 北白川下層式土器の分布	80
(3) 前期大木式系土器の分布	80
第3章 中期の非在地系土器　－房総半島におけるいわゆる曾利式系土器について－	87
はじめに	87

第1節	研究略史	87
1	非在地的な曾利式系土器に対する関心	87
2	房総半島の曾利式系土器に関する視点	89
3	問題の所在	91
第2節	千葉県内における曾利式系土器の類例	91
1	集成の方針	91
2	集成した事例	95
3	分布とその特徴	112
第3節	層位的出土例からみた曾利式系土器の時期	117
1	時期設定の大枠について	117
2	型式学的に想定される土器群の時期	118
3	遺構伴出例からみた土器群の時期	119
4	層位的出土例からみた土器群の時期	120
5	曾利式系土器の時期的な所見	126
第4節	房総半島における曾利式系土器の位置付け（素描）	129
1	房総半島における曾利式系土器のあり方	129
2	曾利式系土器1類について	130
	おわりに	131
第4章	胎土分析	153
第1節	分析資料	153
1	早期の分析資料	153
2	前期の分析資料	155
3	中期の分析資料	157
第2節	千葉県内出土縄文土器の胎土分析 - 早期から中期の土器を中心として -	164
第3節	胎土分析を終えて	187

## 挿図目次

### (第1章)

第1図	県内における押型紋土器出土遺跡の分布	16
第2図	県内の押型紋土器資料(1)	18
第3図	県内の押型紋土器資料(2)	19
第4図	県内の押型紋土器資料(3)	20
第5図	県内の押型紋土器資料(4)	21
第6図	県内の押型紋土器資料(5)	23
第7図	県内の押型紋土器資料(6)	24

### (第2章)

第8図	木島式土器出土遺跡の分布	31
第9図	柏市(旧沼南町)石揚遺跡	32
第10図	松戸市幸田貝塚(第2次調査)	34
第11図	松戸市幸田貝塚(第6次調査)	35
第12図	松戸市幸田貝塚(第10次調査)	36
第13図	市川市向台貝塚	37
第14図	千葉市弥三郎第2遺跡	38
第15図	北白川下層式土器出土遺跡の分布	41
第16図	野田市北前貝塚	43
第17図	市川市上台貝塚	44
第18図	市川市庚塚遺跡	45
第19図	船橋市法蓮寺山遺跡	46
第20図	船橋市古和田台遺跡	47
第21図	印西市一本桜遺跡	48
第22図	四街道市木戸先遺跡	49
第23図	千葉市五味ノ木遺跡	49
第24図	千葉市有吉北貝塚	50
第25図	千葉市バクチ穴遺跡	51
第26図	千葉市文六第1遺跡	51
第27図	袖ヶ浦市豆作台遺跡	53
第28図	勝浦市上長者台遺跡(1)	54
第29図	勝浦市上長者台遺跡(2)	55
第30図	前期大木式系土器出土遺跡の分布	57
第31図	野田市二ツ塚古墳群	59
第32図	野田市本郷遺跡	59

第33図	柏市中山新田I遺跡	60
第34図	柏市(旧沼南町)金山宮後原遺跡	60
第35図	船橋市西の台遺跡	61
第36図	八千代市ヲイノ作南遺跡	63
第37図	八千代市芝山遺跡	64
第38図	栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4 地点	64
第39図	成田市南羽鳥中岫第1遺跡	65
第40図	成田市西向野I遺跡	65
第41図	酒々井町墨新山遺跡	66
第42図	佐倉市鏑木諏訪尾余遺跡	66
第43図	佐倉市野間台遺跡	67
第44図	四街道市池花南遺跡	67
第45図	四街道市和良比遺跡	68
第46図	四街道市上野遺跡	69
第47図	四街道市中ノ尾余遺跡	70
第48図	四街道市木戸先遺跡(1)	71
第49図	四街道市木戸先遺跡(2)	72
第50図	千葉市文六第1遺跡	73
第51図	市原市門脇遺跡	74
第52図	袖ヶ浦市豆作台遺跡	74
第53図	香取市(旧佐原市)綱原屋敷跡遺跡	75
第54図	香取市(旧小見川町)白井大宮台 貝塚	75
第55図	銚子市粟島台遺跡	77
第56図	東金市大谷台遺跡	78
第57図	東金市針ヶ谷遺跡	79
第58図	勝浦市上長者台遺跡	79

### (第3章)

第59図	地域区分	92
第60図	東葛飾地域(1)	97
第61図	東葛飾地域(2)	98
第62図	印旛周辺地域	100
第63図	香取・東総・山武地域	101
第64図	千葉市周辺地域	103



第65図	市原市域(1)……………	104	第78図	出土状況(5)……………	127
第66図	市原市域(2)……………	105	第79図	出土状況(6)……………	128
第67図	市原市域(3)……………	106	<b>(第4章)</b>		
第68図	君津地域……………	108	第80図	早期・胎土分析資料(1)……………	154
第69図	長生・安房地域……………	109	第81図	早期・胎土分析資料(2)……………	155
第70図	その他の曾利式系土器……………	111	第83図	中期・胎土分析実施遺跡……………	159
第71図	曾利式系土器出土遺跡分布図……………	113	第84図	中期・胎土分析資料(1)……………	160
第72図	分類別分布(1)……………	115	第85図	中期・胎土分析資料(2)……………	161
第73図	分類別分布(2)……………	116	第86図	中期・胎土分析資料(3)……………	162
第74図	出土状況(1)……………	121	第87図	中期・胎土分析資料(4)……………	163
第75図	出土状況(2)……………	123	第88図	クラスター分析の結果……………	179
第76図	出土状況(3)……………	124	第89図	骨針状物質……………	185
第77図	出土状況(4)……………	125			

## 表 目 次

### **(第2章)**

第1表	木島式土器の出土遺跡……………	30
第2表	北白川下層式土器の出土遺跡……………	42
第3表	前期大木式系土器の出土遺跡……………	58

### **(第3章)**

第4表	曾利式系土器出土遺跡地名表……………	136
第5表	曾利式系土器出土遺構一覧表……………	142

### **(第4章)**

第6表	千葉県内出土縄文土器の 胎土分析結果……………	175
-----	----------------------------	-----

房総における縄文時代の  
非在地系土器について  
— 早期から中期を中心として —



はじめに

管理普及部長 加藤 修 司

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、昭和49年に創設以来、埋蔵文化財の発掘調査及びこれに関する研究事業・普及事業を主な業務としています。

この間、緊急調査と学術調査によって数多くの遺跡を発掘調査し、刊行した調査報告書も500冊以上に達しています。さらに調査を通じて集積された膨大な資料の整理・検討から各時代・各分野の問題点の解明について積極的に取り組んできたところであります。

『研究紀要』は、各時代・各分野における文化・遺跡・遺構・遺物等の問題点を抽出し、これらの解明に向けた文献、遺構・遺物などの資料の収集・整理、そして論考を加えるための共同研究を通して、当財団職員の日頃の研究成果を社会に提示、還元するものであります。平成10年度からは第5期として「各時代における諸問題」という新しい主題による研究が開始され、22号・23号・25号でその成果を刊行しています。本号では、「房総における縄文時代の非在地系土器について」と題して、房総半島の縄文時代早期から中期における非在地的な特徴を持つ土器にスポットをあて、検討を加えることとしました。

千葉県下においては、これまで数多くの縄文時代遺跡が発掘調査されてきましたが、出土遺物の大半を占めるのは縄文土器であります。縄文土器の研究は、日本考古学の黎明期から、特に編年整備を主眼とした研究が続けられ、現在でも毎年多くの論考が発表される活発な研究分野です。高度成長期以降、開発に伴う調査数の増加とともに資料の集積がなされ、これをもとにした編年研究が進んだ関東地方においては、大枠としての土器編年はおおむね完成の域に達したと考えられます。もちろん、細部での議論はあるものの、大きな土器型式の編年的な位置が逆転したりするような事態は、ほとんど発生する余地がない感があります。そうした研究状況の中で、縄文土器を対象とした研究は、単純な時間軸の整備を目的とした研究は少なくなり、さまざまな視点による研究が増えてきています。そうした中、在地的な土器と他地域の土器との関係を問う研究も多く、こうした研究においてはいわゆる「異系統土器」などと呼ばれる土器が重要視されています。

ただし一口に「異系統土器」といっても、時期・地域によっては「異系統土器」の接触地帯となり、二つの土器型式が並存するようなケースがあります。房総半島はその地理的な特徴から、縄文時代のみならず、他の時代においてもそうしたケースが散見されます（例えば弥生時代後期の東（北）関東系土器と南関東系土器が対峙するような状況）。今回の検討においては、明らかに在地的な土器とは異なる特徴を持った土器について「非在地系土器」と呼称し、縄文時代の房総半島において他地域で主体に分布すると考える土器の存在を明らかにし、その実態に接近することを研究の目的としました。

方針としては、房総半島という限られたエリアにおいて、通時的・網羅的に「非在地系土器」の集成・分析を行うこととしました。これは、長い縄文時代において、ある一定のエリアにおける「非在地系土器」の動態を通時的に俯瞰することで、新たな知見を得ることを期待したものであります。また、こうした意図を持って集成した資料について、理化学的な胎土分析を実施することとしました。土器の胎土分析に関しては、当財団が昭和59年に刊行した『研究紀要』8号において、「自然科学の手法による遺跡、遺物の研究3－土器胎土分析の基礎的研究－」と題して、縄文時代から歴史時代にわたる多様な資料を対象

とした網羅的な研究を実施しており、この分野における先駆的な業績として高く評価されております。胎土分析については、近年、非破壊的な手法の進展と、コンピュータによる高度な分析データの解析が可能となったことから、土器の生産や流通に係る新たなデータを提供する分析手法として、大いに注目されています。これまで遺跡ごとに個別的な分析が行われることが多い傾向にありましたが、今回は「非在地系土器」を中心とした、明確な意図を持って集めた資料群について分析を行うことで、そうした分析とは異なった知見を得ることを期しました。

本書は、平成13年度から平成18年度の6か年を費やして実施してきた研究成果をまとめたものであります。今後の縄文時代研究に寄与することがあれば幸いです。なお、執筆については、文化庁文化財部美術学芸課の建石徹氏に直接ご担当いただいた他、以下の関係各位に多大なる御指導、御協力を賜りました。ここに御芳名を録し、深く感謝の意を表します。

〈協力機関〉(五十音順)

市川市教育委員会、市川市立市川考古博物館、大多喜町教育委員会、香取市(旧佐原市)教育委員会、木更津市教育委員会、京都大学総合博物館、財団法人印旛郡市文化財センター、芝山古墳・はにわ博物館、下総考古学研究会、白井市郷土博物館、袖ヶ浦市教育委員会、千葉市教育委員会、銚子市教育委員会、東京学芸大学文化財科学研究室、東京芸術大学保存科学研究室、成田市教育委員会、沼津市文化財センター、野田市教育委員会、富士宮市教育委員会、房総のむら(旧千葉県立房総風土記の丘)、松阪市文化財センター、松戸市立博物館、三重県埋蔵文化財センター、南房総市(旧富浦町)教育委員会、四街道市教育委員会

〈協力者〉(五十音順、敬称略)

池谷信之、今福利恵、植月 学、関間俊明、大村 裕、奥住 純、小倉和重、加納 実、上守秀明、櫛原功一、倉田恵津子、黒尾和久、小林謙一、小林弘美、小松 繁、阪口英毅、佐野 隆、高橋大地、武川夏樹、田坂 仁、津村宏臣、冨井 眞、中山真治、西野雅人、西本豊弘、二宮修治、原田昌幸、藤田昌代、本堂弘之、馬飼野行雄、松葉和也、山田 猛、領塚正浩

〈共同研究及び胎土分析〉

文化庁文化財部美術学芸課 建石 徹

〈担当者〉

平成13年度 横山 仁、小笠原永隆、大内千年  
平成14年度 横山 仁、小笠原永隆、大内千年  
平成15年度 横山 仁、小笠原永隆、大内千年  
平成16年度 横山 仁、吉野健一、大内千年  
平成17年度 横山 仁、吉野健一、大内千年  
平成18年度 横山 仁、大内千年

〈執筆分担〉

横山 仁 第2章  
小笠原永隆 第1章、第4章第1節1  
大内 千年 序章第1節、第3章、  
第4章第1節2・3  
吉野 健一 序章第2節  
建石 徹 第4章第2節

※第4章第3節については、横山、小笠原、大内、  
建石の共同執筆

# 序 章

## 第1節 共同研究にあたって

千葉県は房総半島をその県域としており、三方を海に囲まれることもあって、古来から遠来の様々な文化が交差する地域であった。例えば、房総半島の地名のいくつかは遠く紀伊半島と共通し、特産の醤油造りや捕鯨といった伝統もこの地域に由来すると考えられることが知られている。こうした海を介した遠隔地との結びつきは、比較的現代に近い時代に限られたものではなく、おそらくはより古い時代まで遡りうるものであろう。

実際、県内の遺跡からは遠隔地との関わりを示すと考える様々な遺物が出土し、各時代において地域間の交流が活発であったことを窺わせる。縄文時代においては、石器の主要石材である黒曜石が、遠隔地からもたらされた遺物の代表例であろうが、その他にも遠隔地間の交流が窺える遺物がいくつか存在する。いわゆる「異系統土器」と呼ばれる土器は、地域間交流を示す遺物の一つと考えられよう。

こうした「異系統土器」への関心は近年とみに高まっていると言える。その要因の一つは、縄文土器編年研究の大枠がほぼ確定し、これまで研究の中心であった編年研究とはやや異なった視点からの土器研究を模索する試みがあると考えられよう。そこには、ある地域に存在する土器群総体を理解したいという関心と、土器から見た地域間の関係を問うという二つの視点が存在するように見える。今回の我々の研究も、縄文土器研究におけるこうした一連の動きと関連するものである。

ただし地域間交流という視点からすると、「異系統土器」は比較的広範な概念を含む用語であり、「ある地域における少数の他地域の土器」を示すだけではなく、様々なケースが想定される。特に房総半島はその地理的な特性から、海を介した地域間の交流が盛んである一方、半島という条件から様々な地域の文化要素がふきだまったような状況が見出しうる場合が多い。縄文時代あるいは他の時代において、「異系統土器」が房総半島内において共存し、「異系統土器」同士の分布の接触地域となっている場合がある。縄文時代においては前期の浮島式・諸磯式の関係や中期の阿玉台式・勝坂式の関係が代表例であろう。「異系統土器」は時々によって、在地的な土器以外の少数派として存在する場合と、「異系統土器」同士が主要な土器として房総半島内で分布を分かちつつ混在して存在する場合があるのである。

今回、こうした縄文時代の「異系統土器」のうち、明らかに房総半島以外の地域に分布の中心を持つと考える土器、乃至その特徴をもつ土器について、「房総における非在地系土器」と呼称することとし、その集成的な研究を行うこととした。これは、前述のように関東地方の縄文土器編年の大枠が確定しつつある状況の中で、房総半島という地域に存在する土器群総体への関心、そしてその中で房総半島以外の地域の土器群の影響がどの程度のものなのか、といった点への関心による。他地域からの影響を端的に示す土器群を「非在地系土器」として認識することで、土器から見た地域間交流の一端を浮き彫りにすることがねらいである。

もちろん、房総における「非在地系土器」のすべてを網羅することは我々の力が及ぶものではなく、今回は縄文時代早期から中期に時期を限り、この時期における「非在地系土器」の代表的なものだけを取りあげることとした。スタイルとしては、各時期ごとに担当者を決め、それぞれの視点から各論をまとめるという方針を取った。このため各時期ごとに若干の方法論や視点の違いがあろうが、房総半島における早

期から中期の「非在地系土器」を、ある程度通覧することが可能となった。近年高まりつつある「異系統土器」への関心に対し、網羅的な基礎的データを提示することも目的の一つとした。

さらに、これら「非在地系土器」の一部について、近年進展著しい理化学的な土器胎土分析に供し、旧来の考古学的手法とは異なった視点でのデータを蓄積することとした。こうした分析は、個人論文以外では、調査報告書の巻末に付される場合がほとんどであり、遺跡ごとの個別的なデータとなりやすい。今回、地理的には房総半島内に限られるものの、ある程度広範囲で、しかも縄文時代早期から中期にわたる通時的な資料を網羅的に揃えることができた。地理的・時代的にまとまった稀有な分析事例と言え、今後同様の分析の際の基礎的なデータになるものと思う。

各章の内容については、基本的に各担当者の研究方針を尊重した。ただし、表記については、当財団の刊行物に関する内規に従い「縄文」の用語に統一した。また、土器型式等について旧字体は用いず、すべて新字体で統一した。ただし引用文に関しては原文のままとした。

最後に、共同研究の立ち上げからすでに数年が過ぎ、担当者の異動など様々な制約の中で遂行された研究紀要であった。実際には各担当が日常業務の合間を見ておこなった研究と言え、関係各所にご迷惑を掛けた場合もあったかと思う。逐一お名前を挙げることはできないが、ここに感謝の意を表しておきたい。

本書が縄文時代研究の一資料として、今後の研究に資するものがあれば幸いである。

## 第2節 縄文土器の胎土分析 - 房総における分析事例を中心に -

### 1 はじめに

土器の胎土分析とは、一般に土器の胎土を顕微鏡や分析機器を用いて、土器胎土を構成する要素を明らかにすることである。

胎土分析は、異なる個体の土器の胎土を比較したり、土器が製作された地域の粘土と土器の胎土を比較することによって、主に土器の製作地を推定したり、異なる個体の土器同士での製作集団、製作された地域、技法などの違いを明らかにすることを目的として行われる。とりわけ生産地推定的手段として使用される場合が多い。現在行われている胎土分析の中でもっとも成果のあがっているのは、須恵器や陶磁器などを対象にした生産地推定であると考えられる。須恵器や陶磁器は、生産遺構である窯跡の調査が進んでおり、窯跡出土資料の胎土のデータの蓄積がなされている。これらと、集落遺跡などから出土した資料の胎土のデータを比較することで、生産地の推定を比較的容易に行うことができる。

それに対し、縄文土器などの生産遺構がほとんど検出されないタイプの土器は、生産地が明確にならないため須恵器等と同じ手法がとれない。しかし縄文土器研究においても、土器の生産地推定は今日的な課題であり、そのために様々な試みがなされている。特に、在地系土器（ある地域で主体として存在する土器）と非在地系土器（在地系土器に対し、客体的に存在する土器）の関係に関する研究においては、非在地系土器であっても搬入品ではなく在地系土器と同様の胎土を持つ土器が存在することが明らかになってきており、研究方法の確立が求められている。

冒頭で述べた分析の対象とする「土器胎土を構成する要素」には、様々な捉え方がある。土器の胎土は、粘土と、粘土に意図的に混ぜられた「混和材」とに大きく分けられる。混和材は、砂や特定の鉱物あるいは動植物の繊維など様々である。また分析手法は大きく分けて、光学顕微鏡観察によるものと、分析機器によるものがある。土器胎土の中のなにを分析対象とし、どの手法を用いるかによって、分析結果も

異なる。

顕微鏡観察による分析は、これら混和材等の物質（主に鉱物・岩片）を観察により同定し、鉱物組成等を導き出す手法である。それに対し、分析機器による分析は、粘土や混和材の元素組成等を導き出すのである。大きく2つに分けた分析方法の中にはさらに様々な方法があり、それぞれの間の分析結果の互換性は小さい。今回は、これらの手法の違いや問題点について詳しくは述べない。しかし後にも触れるが、このような分析方法の多様さが、胎土分析の成果が集約されずに、まとまった成果とならない要因となっているという点については、留意しなければならない。なお、胎土分析の研究史や技法については、松田ほか（1999）、大屋（2005）・建石（2007）などに詳しいので、参考にして頂きたい。

本稿では、2004年までに実施された、千葉県内の主な縄文土器の胎土分析について概略を紹介し、その傾向や問題点についてまとめ、あわせて本書における胎土分析の方向性を示すこととする。

## 2 縄文土器胎土分析の研究略史

### (1) 縄文土器の胎土分析の発端

日本で最初に行われた学術的発掘調査である、E.S.モースの大森貝塚の調査報告においては、赤色顔料の分析を行っているが、胎土そのものの分析はない（モース 1879）。日本国内において最初に胎土分析を行ったのは、村本（直良）信夫である（村本1923a、b他）。

村本は、実体顕微鏡により岩手県細浦貝塚出土の縄文土器を観察し、珪線石のようなものを検出し、土器の焼成温度に言及している。また村本（1924）においては、顕微鏡観察の結果が土器の製作地復元に役立つ可能性を示唆しており、併行して湿式法による科学分析の結果からも同一遺跡から出土した土器の化学組成の類似を指摘した上で、遺跡周辺に主要な製作地が存在した可能性を指摘したり、遺跡間で化学組成の類似した土器群を指摘した上で、同一製作地からの分配の可能性を示唆したりしている。これら村本が行った研究は、現在主流となっている、土器胎土分析により土器の製作地を推定するという方向性をすでに示している点で極めて重要である。しかし一方で、村本自身を含めその後の研究者が、村本の視点を引き継ぐことはなかった。

日本で土器の胎土分析が盛んに行われるようになったのは、1970年代以降である。松田ほか（1999）によると、佐原真が1970～1974年に連載した「土器のはなし(1)～(12)」の中で、アメリカやヨーロッパでの胎土分析が紹介されたことも刺激の一つになっている可能性が高いという。1970年代以降、多数の研究がなされているが、それらを大別すると光学顕微鏡観察による分析と、機器による分析に大別される（松田ほか1999）。光学顕微鏡観察による分析の先駆的な研究は、鈴川（1972）、増島（1972）、清水（1973）などがあり、機器による分析では、市川（1971）がある。

機器による分析は、陶磁器等の胎土分析から端を発しており、市川（1971）においては、縄文土器の胎土分析を行っているものの、主要な分析対象は須恵器であり、縄文土器の分析結果にはあまり言及されていない。機器による胎土分析は、須恵器や陶磁器を対象としたものが多い。それは須恵器・陶磁器は、生産地である窯跡から出土した資料があるため、遺跡出土の資料と生産地の資料を比較することによって、生産地同定が比較的明確に行えるためである。市川の研究は、須恵器の製作地推定法を確立した三辻（1983）の研究に影響を与えていると考えられる。

以後、多くの縄文土器の胎土分析が行われてきた。その歴史や成果、問題点については松田ほか（1999）



に詳しいので、そちらに譲ることとする。

## (2) 千葉県内における縄文土器胎土分析の調査・研究史

千葉県内における最初の胎土分析の成果は、1973年のものである。このような早い時期から分析が行われた背景には、研究者が多く集まる東京から地理的に近く、かつこの時期、大規模な発掘調査が数多く行われていたためと考えられる。以下にその概略を紹介する。

### 船橋市古和田台遺跡における縄文時代前期土器の胎土分析（金子ほか 1973）

縄文時代前期後葉の興津式、浮島Ⅲ式、諸磯b式、諸磯c式の各土器型式、そして赤色塗彩土器について分析を行っている。望月明彦によって分析は行われており、胎土内の鉱物を分析するためにX線粉末回折を行っている。9個体の土器と2個体の球状耳飾りについて分析を行った結果、いずれの資料にも胎土には差が見られないことが明らかになった。

### 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵにおける縄文時代前期土器の胎土分析（千葉都市公社 1978）

前期後葉の諸磯a式、諸磯b式、浮島式の土器片16点について、古城泰により、偏光顕微鏡による岩石学的分析を行っている。具体的には、各土器資料について1点ずつ薄片を作成し、70倍の顕微鏡で、粒径約0.05mm以上のものを対象に、含まれる鉱物、岩石の種類、量、粒径、形状を観察し、その結果を遺跡周辺の地質条件と比較するという方法が採用された。

その結果、次のようなことが明らかになった。

- ・ 諸磯a式土器には異なる胎土を示す4つのグループがあり、その中の1つがこの遺跡およびその周辺で製作されたもの、それ以外の3つのグループがそれぞれ異なる製作地から持ち込まれた搬入土器である可能性が高いこと。
- ・ 浮島Ⅰ式土器の胎土は全て類似しており、その製作地は遺跡および周辺の地域の可能性が高いこと。
- ・ 諸磯b式土器は、浮島Ⅰ式、諸磯a式と若干異なる胎土であるが、岩石学的には搬入土器とする確証が得られないこと。

### 成田市木の根No.6遺跡における縄文時代早期から中期土器の胎土分析

（財団法人千葉県文化財センター 1981）

早期井草式から中期初頭の五領ケ台式に属する資料31点を対象として、古城泰により偏光顕微鏡による含有鉱物の定性的、定量分析を行っている。具体的な土器型式名および資料数は、井草式5点、夏島式2点、稲荷台式1点、花輪台式2点、早期4点、常世式類似資料3点、後期後葉3点、興津式2点、諸磯c式2点、前期後半～中期初頭4点、前期後葉1点、五領ケ台式1点、そして焼けた粘土塊1点であった。

土器胎土の肉眼による観察の結果、在地のものと考えられる資料と、搬入品であると考えられるものを選び出し、分析を行うことで、分析結果と肉眼による観察とを比較している。

分析の結果、次のようなことが明らかになった。

- ・ 井草式2点、花輪台式1点、稲荷台式1点、早期後葉2点、諸磯c式1点、前期後葉～中期初頭1点、五領ケ台式1点が搬入土器である可能性が高い。
- ・ 西関東に分布の中心がある諸磯c式であるが、2点分析した中で1点が在地で製作された可能性が高く、1点が搬入土器の可能性が高い。
- ・ 肉眼観察の結果、深成岩と見られる礫を胎土に含んでいることから搬入の可能性が指摘された井草式の

2点については、分析の結果、在地の土器の可能性が高いと判断された。

・搬入土器については、それぞれ胎土に含まれる鉱物、岩石に特徴があるが、それらをもってこれらの土器の製作地を決定することは困難であった。

#### 千葉県文化財センター研究紀要8 自然科学の手法による遺跡、遺物の研究3—土器胎土分析の基礎的研究—における県内出土土器の胎土分析（財団法人千葉県文化財センター 1984）

財団法人千葉県文化財センターは、1980年刊行の『研究紀要6』以降、「自然科学の手法による遺跡、遺物の研究」という統一テーマのもとで研究を続けていたが、1984年に刊行された第8冊において、土器の胎土分析を取り上げた。

分析資料は、千葉県内出土の縄文時代から中世までの土器・埴輪・陶磁器と多岐にわたっている。分析は、清水芳裕が岩石学的分析法、安田博幸が化学的分析法、三辻利一と沢田正昭が蛍光X線分析法を担当した。

第2章では、土器胎土の基礎的検討と題し、①土器の「部位」によって胎土に違いが見られるか、②「器種」によって胎土が異なるか、③「時期」によって胎土が異なるか、の3点を検証している。分析の結果、①については、若干の相違はあっても著しく異なることはないという結論に達した。②については、縄文土器において深鉢と浅鉢では、胎土が異なることが明らかとなったが、個体差の可能性が想定された。③については、縄文土器と弥生土器、土師器では胎土に明らかな違いが見られたが、1遺跡の各時代においてはまとまった状況を示しており、遺跡周辺から原料を採取していると想定された。

第3章では、近い時期の土器において在地の土器と搬入品の可能性が想定される土器の胎土を比較している。縄文土器については、千葉県および茨城県南部と東京都から出土している後・晩期の土器について、在地の土器と想定される安行式と搬入品の可能性がある亀ヶ岡系土器、製塩土器の胎土について、岩石学的分析を実施した。その結果、19点分析した亀ヶ岡系土器の中で、5点が搬入品とされたが、東北地方の胎土分析例が少ないことから、製作地までは明らかにすることができなかった。また製塩土器については、製塩遺跡の所在地に近い茨城県道成寺貝塚出土の製塩土器と県内出土の製塩土器を比較したが、搬入品であるという明確な証拠は得られなかった。

#### 大網白里町一本松遺跡における縄文時代後期土器の胎土分析（財団法人山武郡市文化財センター 1994）

一本松遺跡では、粘土採掘坑が確認され、そこで採取された粘土で土器製作が行われたと推測されることから、粘土採掘坑付近の粘土層を含む土壌サンプルと、遺跡出土の土器の胎土を比較検討している。

分析に用いた土壌は立川ローム層上部から武蔵野ローム層、粘土・ローム混在層、粘土層、そして砂質土層まで及び、層厚は1.65mに及んだ。また分析に用いた土器は、堀之内1式に含まれる土器片8点を用いた。

分析方法は蛍光X線分析で、土壌試料および土器胎土の主成分元素や微量成分元素を定量的に分析している。分析は石川隆司により行われている。SiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>とCaO/K<sub>2</sub>Oの相関について粘土層の試料と土器の試料を比較したところ、両者の間にSiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の値において、粘土層の方が土器よりも値が大きいという点に違いが見られた。粘土層の粘土を素材として土器が製作されたと想定した場合、粘土に苦鉄質岩<sup>1)</sup>の混和材を添加してSiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の値を低下させている可能性が想定されるが、その場合、CaO/K<sub>2</sub>Oの値が連動して高くなると考えられるのに対し、実際には高くはないことから、さらに検討を要すると結んでいる。

### 君津市練木遺跡における縄文時代中期土器の胎土分析（大村 2002、建石 2002a）

君津市練木遺跡出土の阿玉台Ⅰa式、阿玉台式（Ⅰa式～Ⅲ式）、勝坂式（Ⅱ式～Ⅴ式）、加曾利E式古段階および勝坂式併行の資料32点について分析を行っている。分析は建石徹により行われ、分析方法は、粘土部分については蛍光X線分析によって、河原砂等の「混和材」の可能性が高い大粒粒子については実顕微鏡により径0.1mm程度以上のものについて観察し、その内容を記載している。

蛍光X線分析は非破壊で行われ、分析対象元素はSi、Ti、Al、Fe、Mg、Ca、K、Mnとし、ファンダメンタルパラメーター法により8元素の酸化物の和を100とする重量濃度比を求めた。そしてこれらの測定を5回行い、測定結果についてクラスター分析を行い、同一のクラスターを形成した場合は、それぞれの元素の測定値の平均をその土器の値とし、同一のクラスターを形成しない場合はさらに測定を行い5つの測定結果が同一のクラスターを形成した段階で、その5回の平均値を算出した。元素組成の比較は、風化などの影響が少ないと考えられるSiとFeの相関によって行った。

またこれらの土器から得られたデータの比較対象として、練木遺跡から出土した砂岩と木更津市内から出土した石英斑岩についても同様の分析を行い、元素組成を算出・比較した。

これらの分析により、勝坂式の3点と非在地的な文様を持つ完形土器1点が、他の試料と大きく値が外れ、かつ石材の分析結果とも外れることから、非在地の土器である可能性が高いという結果が得られた。勝坂式の3点は西関東周辺のものであると推測され、完形土器はこの3点とも異なった元素組成を示し、大村が考古学的分析により想定した多摩丘陵地域の地質学的な特徴とも一致しないという結果が得られた。

他の試料についてはまとまった特徴を示すことから在地の土器であると推測されるが、断定はできないことを強調している。

### 松戸市中峠遺跡における縄文時代中期土器における胎土分析（建石 2002b）

松戸市中峠遺跡出土の縄文土器について、建石徹により粘土の蛍光X線分析および混和材の肉眼による観察を行っている。分析の方法は前出の君津市練木遺跡と同様である。分析対象は阿玉台式、勝坂式、中峠式、加曾利E1式、大木8a式、三原田式？、有孔鏝付土器（加曾利E3式）、曾利式系に属するもの18点である。

分析の結果、これらの土器群は、SiO<sub>2</sub>の割合が40%以下のものと、40%～55%前後のものと大きく2つに分類され、さらに後者は40%台のものと50%台のものに2分される可能性を指摘している。遺跡周辺の地質学的特徴と比較すると40%未満のものを「非在地的」、40%以上のものは「非在地的」とはいえないという意味もふくめながら、広い意味で「在地的土器」としている。「非在地的」とした中には、阿玉台Ⅲ式、曾利式系、有孔鏝付土器（加曾利E3式）があり、これらの一部は武蔵野台地などのより西側の地域からの搬入である可能性が指摘された。その一方で、酸性の強い個体が全くないことは、酸性が強い地質的な特徴をもつ現利根川下流域との関係が必ずしも強くはない可能性を示唆しており、型式学的な研究との関連で興味深い結果が得られている。

### 横芝光町（旧光町）神山谷遺跡(2)における縄文時代早期土器の胎土分析

（財団法人東総文化財センター 2002）

分析はパリノ・サーヴェイによって行われている。早期後半～早期末の土器片6点を分析している。具体的には子母口式2点、下吉井式1点、入海式の可能性がある土器1点が含まれている。

分析方法は、重鉍物分析<sup>2)</sup>を用いている。試料を粉碎、洗浄した後に乾燥、ポリタングステン酸ナトリウムにより重液分離し、重鉍物プレパラートを作成し、偏光顕微鏡で同定した。下総台地の常総層の重鉍物組成と、土器の組成を比較すると、子母口式1点と下吉井式とした1点が在地の土器の可能性が高いと推測された。また、重鉍物の検出が100点未満であった2点についても在地の土器の可能性が高いと考えられた。一方、入海式と考えられる1点は、下総台地周辺のものである可能性が低く、東海地方および長野県諏訪付近から天竜川流域、あるいは伊豆半島東側以東を含む地域からの搬入である可能性が高いと考えられた。また早期末の1点は、ザクロ石を含んでいて特徴的であり、在地の土器とは異質であることや下総台地東部の地質学的特徴とは異なることから、他地域からの搬入である可能性が高いと推測された。

#### 香取市（旧佐原市）朝日森遺跡第9号土坑出土の入れ子状出土の中期土器の胎土分析（大村ほか 2003）

論文は、大村裕による土器の型式学的研究と建石徹による胎土分析によって構成されている。土坑内から入れ子状となって出土した土器（勝坂V式と加曾利E式）と、遺跡採集の土器片について分析・比較を行っている。建石の方法は、君津市練木遺跡で示した方法と同様で、非破壊による粘土の蛍光X線分析と混和材の実体顕微鏡による観察である。分析試料は中期初頭の土器、阿玉台式、勝坂式、いわゆる中峠式、加曾利E 1式、加曾利E 3式、堀之内1式、後期安行式に属する土器、合計23点である。

分析の結果、これらの土器はいずれも利根川流域の代表的な表層地質である花崗岩等の酸性岩の特徴と一致することから、非在地的な要素は認められず、広い意味での在地的粘土が用いられたと推測された。

#### 千葉県うなすず遺跡における縄文時代中期土器の胎土分析

（財団法人千葉市教育振興財団 埋蔵文化財センター 2004）

千葉県うなすず遺跡から出土した中期末の土器1点と多部田貝塚から出土した中期末の土器1点と晩期の土器3点を分析した。分析者は、パレオ・ラボの藤根久、今村美智子である。分析方法は、プレパラートを作成し、顕微鏡によって微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）、鉍物等の大型粒子の観察・記載を行っている。

分析の結果、ここで分析を行った5点の試料については、砂粒においては多少組成が異なるものの、おおむね堆積岩類を主体とした組成であることから、同一地域の材料の組成であると推測された。また、その一方で遺跡周辺の地質的特徴と胎土中の微化石類の特徴を比較すると、遺跡周辺の常総粘土層には多量の骨針化石、少量の海水種珪藻化石、淡水種珪藻化石が含まれるのに対し、胎土中には骨針化石、珪藻化石ともに含有量が少ないことから、常総粘土層由来の粘土ではない可能性が指摘されている。

#### 松戸市小野遺跡第16地点における縄文時代前期土器と土師器の胎土分析（松戸市遺跡調査会 2004）

縄文時代前期の繊維土器と古代の土師器（武蔵型甕）の化学組成を測定している。目的は、松戸市内の諸遺跡出土の土器類との胎土の比較を行うための基礎資料を得ること、当遺跡の新旧がある繊維土器同士での胎土成分を比較することである。分析は、松本建速が実施している。

試料は、黒浜式土器10点（内、古段階5点、新段階5点）、8世紀後半の住居跡から出土した甕3点である。分析は誘導結合プラズマ発光分光分析法 inductively coupled plasma atomic emission spectrometry (ICP-AES) である。試料から1cm四方ほどの破片を採取し、表面を研磨した後で粉碎・すり潰し、複数の薬品処理、加熱処理を施して溶液試料として、ICP-AESで定量分析を行い、20種類の元素を測定した。

分析の結果、武蔵型甕と黒浜式土器では、武蔵型甕にはMg、角閃石が多く含まれることから完全に分

離することができ、武蔵型甕は松戸市内、あるいは松戸市周辺で作られたものではないと推測された。黒浜式土器の新旧については、胎土に若干の違いがあったが、それは同一地域における小さな差異であると考えられた。

### 3 調査・研究史からみた胎土分析の傾向と問題点

#### (1) 千葉県における縄文土器胎土分析の傾向

これまで、1973年から2004年までの千葉県内における縄文土器の胎土分析に関する主な文献を概観してきた。10件の分析例をとりあげたが、これらの分析は、方法や技術が多岐にわたっている。偏光顕微鏡による含有鉱物等の同定、分析が4件、蛍光X線分析による粘土等の微量元素分析が4件、X線粉末回折、誘導結合プラズマ発光分光分析がそれぞれ1件ずつである。また分析作業の中で、試料の取扱い方としては、破壊して測定するものが多く、非破壊の分析は4件であった。

分析が行われた遺物の帰属時期は、早期2件、前期5件、中期6件、後期2件、晩期1件であるが、分析点数を見ると、中期が最も多く、続いて前期後葉が多い。分析の目的を見ると、在地系土器（千葉の土器）と非在地系土器（搬入土器）を識別し、型式学的な分析結果と対比するというのが最も多い。

分析が行われた遺跡の位置を見てみると、香取地域1件、東総地域1件、印旛地域2件、山武地域1件、千葉地域1件、東葛地域1件、君津地域1件と広範囲に亘っている。しかし、外房地域や安房地域における分析例がなく、いわゆる下総地域に大きく偏っている。

これまでの分析結果をふまえると、次のような問題点が明確になってくる。

- ・分析が遺跡ごと、あるいは調査ごとであるため、成果が散発的で比較資料がない。
- ・分析方法が同一ではないため、分析データ間の相互比較が難しい。
- ・分析が行われる資料の時期や型式に偏りがある。
- ・地域的な偏りがあり、広い地域を網羅した成果があがりにくい。
- ・分析時に資料を破壊する場合があるため、型式学的な分析に良好な完形・半完形資料に対する分析をする機会が少ない。

これらのことから、これまで千葉県内で行われてきた縄文土器の胎土分析の成果の多くは、それぞれのデータの優秀さや重要性は認められるものの、千葉県内の縄文土器全体をみわたした研究、とりわけ在地の土器と非在地系土器との関係、あるいは在地の土器と搬入土器との関係を検討するための材料としては、その分析件数や偏りによって未だ不十分であるといえる。しかし、これは埋蔵文化財調査の一環において個々の遺跡の調査研究を命題とする作業の中で行われる分析に対し、評価こそすれ批判すべき事柄ではないことはいうまでもない。また、埋蔵文化財保護の観点から、遺物を破壊しなければならない分析に対し、資料を容易に提供できないということも考慮しなければならない。

#### (2) 胎土分析を行うにあたって

本章の冒頭でも述べたように、縄文土器は、窯跡のような生産遺構が明らかではないため、産地推定が困難である。そのため、その地域における「在地系土器」の胎土の特徴をもって生産地の特徴として、非在地系土器の胎土と比較したり、試料とした土器の出土した遺跡の土壌などを分析し、土器の胎土の特徴と比較したりと様々な試行が行われている。このような方法は、須恵器など生産地が明確なもののようにピンポイントで産地推定ができるわけではないが、比較的広い範囲で網羅的に試料を収集して分析し、

比較することによって傾向が表れることが期待できる。

以上のような縄文土器の持つ試料としての特性と、千葉県内における縄文土器の胎土分析成果とをあわせて検討した結果、今回千葉県内の縄文土器について胎土分析を行うに際し、以下のような点に特に留意して研究を進めた。

- ・在地の土器と非在地的な土器について問題が明瞭な時期を抽出する。
- ・課題となる時期についてなるべく県内全域を網羅するように資料を収集し、非在地系土器の分布を把握する。
- ・課題となる時期の非在地系土器と在地系土器について、なるべく網羅的に同じ方法で分析を行う。

分析対象とする時期は、草創期から晩期の各時期において行うことが本来望ましいが、土器胎土分析について全県的かつ網羅的な研究がほとんど存在しない現状では、まず研究の基礎の部分構築する必要がある。そのためには、まず型式学的な研究において在地系土器と非在地系土器の関係について問題点が明確な時期を抽出することが効果的であると考えられる。

#### [註]

- 1) 苦鉄質岩は、マグネシウム、鉄等を多く含み、SiO<sub>2</sub>を45%～52%程度含む岩石である。
- 2) 数種類の鉱物が混合したものの中から特定の鉱物を選別するために、比重の大きな液体にそれらを投入して、密度の差により分離する方法。

#### [文献]

- E.S.モース (1879)『Shell Mounds of Omori』(近藤義郎・佐原 真訳 1988『大森貝塚』岩波文庫)
- 市川米太 (1971)「X線回折による産地分析について」『考古学と自然科学』4
- 大村 裕 (2002)「二つの「顔」を持った土器－千葉県君津市練木遺跡出土中期縄紋土器の研究－」『土曜考古』26
- 大村 裕・建石 徹 (2003)「入れ子状に出土した二つの土器－千葉県佐原市朝日森遺跡第9号土坑出土中期縄紋土器の研究－」『佐原の歴史』3、佐原市教育委員会
- 大屋道則 (2005)「土器類の産地推定についての基礎的検討」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子浩昌・西本豊弘 (1973)『古和田台遺跡 縄文前期集落址発掘調査報告』船橋市教委員会
- 財団法人山武郡市文化財センター (1994)『大網山田台遺跡群Ⅰ－縄文時代篇－』
- 財団法人千葉県文化財センター (1981)『木の根』新東京国際空港公団
- 財団法人千葉県文化財センター (1984)『研究紀要』8
- 財団法人千葉市教育振興財団 埋蔵文化財センター (2004)「うならず遺跡」『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ』
- 財団法人東総文化財センター (2002)『千葉県匝瑳郡光町神山谷遺跡2』
- 佐原 真 (1970～1974)「土器のはなし(1)～(12)」『考古学研究』79、考古学研究会
- 清水芳裕 (1973)「縄文土器の岩石学的分析－滋賀里遺跡出土の北陸、東北系土器について」『湖西線関係遺跡調査報告書 本文編・図版編』湖西線関係遺跡発掘調査団／滋賀県教育委員会
- 鈴木朝宏 (1972)「縄文土器の製作について」『物質文化』17、物質文化研究会
- 建石 徹 (2002a)「練木遺跡採集縄文中期土器の胎土分析ならびに黒曜石の産地推定－大村論文へのコメント－」『土曜考古』26
- 建石 徹 (2002b)「中峠遺跡(第4次調査)出土土器の胎土分析」『下総考古学』16
- 建石 徹 (2007)「自然科学の手法を用いた縄文土器の研究」『日本の美術』496、至文堂

- 千葉県都市公社（1978）『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』
- 増島 淳（1972）「縄文土器の鉱物組成（愛鷹山東麓地域の縄文早期土器について）」『静岡地学』23、静岡県地学会
- 松戸市遺跡調査会（2004）『松戸市小野遺跡第16地点』
- 松田光太郎・建石 徹（1999）「関連科学研究 胎土分析」『縄文時代』10、縄文時代研究会
- 三辻利一（1983）『古代土器の産地推定法』考古学ライブラリー14、ニューサイエンス社
- 村本信夫（1923a）「目黒の上高地に於ける先史人類遺跡遺物及び文化の化学的考察（上）」『社会史研究』10-1、社会史研究所
- 村本信夫（1923b）「目黒の上高地に於ける先史人類遺跡遺物及び文化の化学的考察（下）」『社会史研究』10-2、社会史研究所
- 村本信夫（1924）「化学的に観る日本石器時代遺物」『中央史壇』9-5、国史講習会

# 第1章 早期の非在地系土器 – 押型紋土器について –

## 第1節 研究の現状

関東地方における押型紋土器の研究史は、岡本（1989）の研究に詳しいので、ここでは県内資料に関係する部分の概略を述べるにとどめたい。

神奈川県横須賀市平坂遺跡の調査（岡本 1953）以降、捺糸紋土器には押型紋土器は伴わないという見解が優勢となり、少なくとも関東地方においては、しばらくの間優勢な見解となっていた。しかし、1977年の千葉市東寺山石神遺跡の調査（鈴木他 1977）において、稲荷台式捺糸紋土器の破片に山形押型紋が併用された資料が発見され、再び捺糸紋土器と押型紋土器との併行関係を認める意見が出てくることとなる。その後、あしあと同人の高野安夫氏らを中心として、主に北総台地の精力的な分布調査が行われ、断片的ながら多数の資料が採集・報告された（高野 1983・1986、戸村 1990）。なかでも高野（1986）は、押型紋に伴って表採された資料にも注意を払い、時期による押型紋土器の違いについて言及している。特に稲荷台式期には、山形紋および複合施紋（三角紋と山形紋等の複合形）が縦位帯状に施紋される傾向にあり、密接化するものは若干新しいと指摘し、北関東地方の普門寺式に併行するという、極めて重要な指摘を行った。その後、原田（1988）が東金市久我台遺跡出土の出土資料を分析し、花輪台式を中心とする捺糸紋土器後半の県内編年を組み立てた。それをもとに原田（1991）は、捺糸紋土器全体の編年の中に県内資料の位置づけを行った。

以上、各論者によって立場の違いはあるものの、少なくとも県内において押型紋土器が出現するのは稲荷台式以降で意見は一致している。

## 第2節 出土資料について

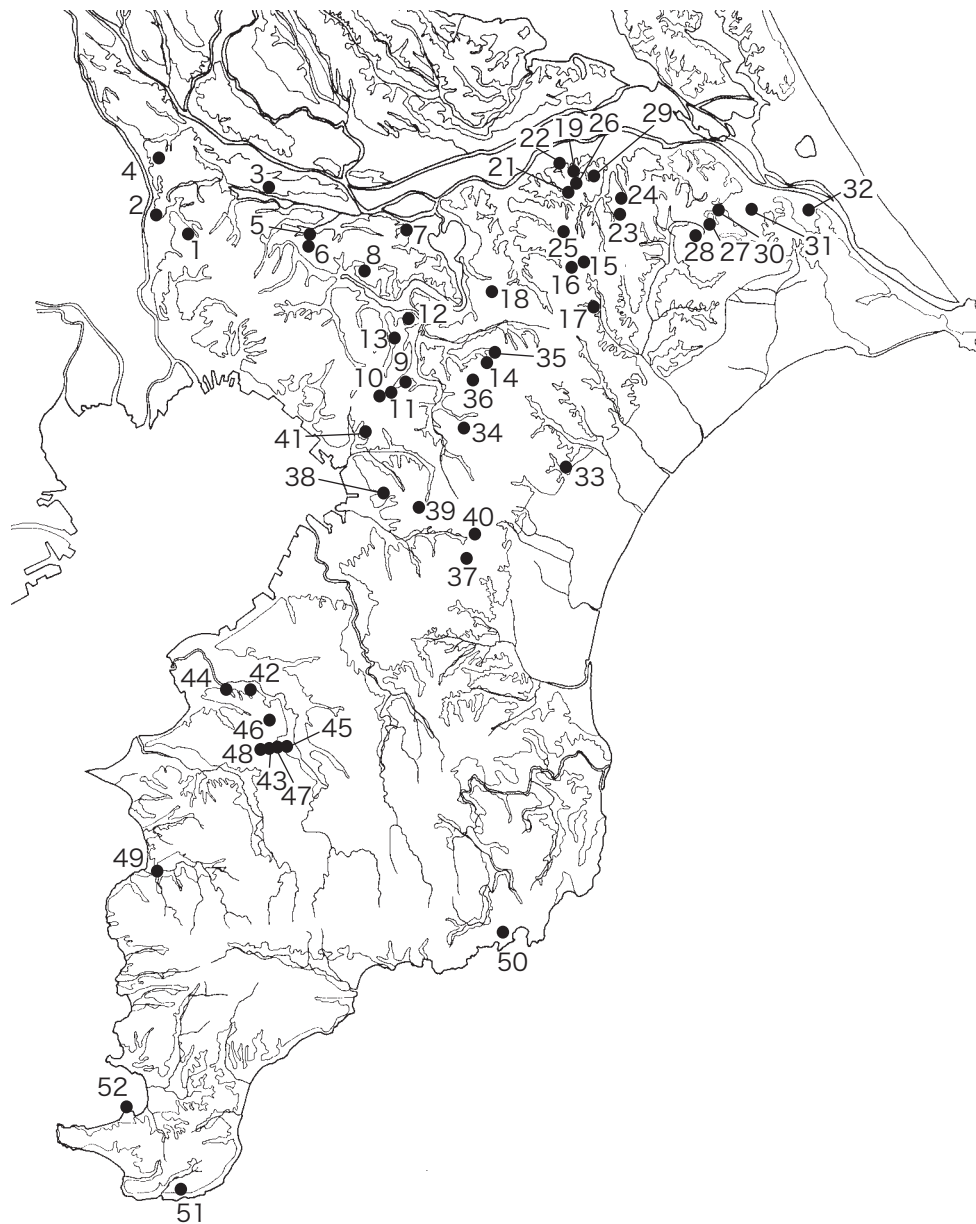
### 1 概要

千葉県における捺糸紋終末期は、稲荷台式や花輪台式のほかに、金堀式（篠原 1979）、木の根Ⅰ・Ⅱ式（池田 1984）など地域的に分布が限定される土器が出現することはよく知られているところである。稲荷台式までは比較的齊一的であった土器が、その後半から急激に崩壊し、地域的特徴の強い土器が出現する状況となる。まさしくカオスである。しかし、そのカオスも長くは続かず、東北地方との強い親縁性を持つ三戸式が成立すると再び急速に齊一化し、田戸下層式段階にはかなり広範囲に齊一的な土器が分布するようになる。

本来ならば、これらの資料の位置づけ及びその変遷過程についても言及すべきであるが、まだ議論が不十分であることから、今回は押型紋土器に係わる部分だけを取り扱うにとどめたい。

県内出土の押型紋土器資料を集成し、概観したところ、伴出資料や紋様の状況から稲荷台式をはじめとする捺糸紋土器後半期に併行する資料及びそれ以降に併行する資料（三戸式以降）と、大きく2時期に分別することが可能と考えられ、前者はさらに二分別できる可能性が指摘されている（小笠原2003a）。





- 1 ニツ木向台遺跡、2 鱒ヶ崎貝塚、3 水神山遺跡、4 ボタモチ山遺跡、5 向台Ⅱ遺跡、6 捕込附遺跡、7 鶴塚遺跡、8 新井堀(2)遺跡、9 井戸作遺跡、10 和良比長作No.2遺跡、11 鹿渡(向柳作)遺跡、12 江原台(第1)遺跡、13 生谷境堀遺跡、14 新山遺跡、15 一畝田甚兵衛山北遺跡、16 東峰御幸畑西遺跡、17 東峰御幸畑東遺跡、18 西向野Ⅰ遺跡、19 長稲葉遺跡、20 青山甚太山遺跡、21 岩谷台遺跡、22 台楽遺跡、23 庚塚遺跡、24 所遺跡、25 雨郷台遺跡、26 下塚遺跡、27 小塚野遺跡、28 山倉大山遺跡、29 鶴崎天神台遺跡、30 城ノ台北貝塚、31 布野台遺跡、32 今郡カチ内遺跡、33 久我台遺跡、34 小問子遺跡、35 真井原遺跡、36 水呑遺跡、37 中鹿子第2遺跡、38 南二重堀遺跡、39 辺田山谷遺跡、40 千葉市小山遺跡、41 東寺山石神遺跡、42 滝ノ口向台遺跡、43 御所塚遺跡、44 清水谷遺跡、45 赤坂台遺跡、46 蔵坪遺跡、47 久野遺跡、48 下根田A遺跡、49 東天王台遺跡、50 上長者台遺跡、51 長尾陣屋跡・泉遺跡、52 沖ノ島遺跡

第1図 県内における押型紋土器出土遺跡の分布

## 2 出現期の押型紋土器

### 千葉市東寺山石神遺跡出土資料(第5図24~37)

これらの資料については、前述したように鈴木(1977)により押型紋と捺糸紋が同一個体に施紋されて

いる例(34)が示され、両者の同時性が指摘された。捺糸紋は間隔がまばらであるとの特徴から、稲荷台式期のものとされている。施紋順序は不明であるが、両者とも縦位施紋されている。他の資料をみると、山形、矢羽状及び三角状の押型紋が縦位に施紋され、間隔を空けて帯状になる傾向がある。さらに、29・30をはじめ、多くの資料に縦位の磨り消しが加えられており、帯状の施紋効果を図ったものと考えられる。また、本遺跡では稲荷台式及び花輪台式が多く出土し、後者の中で独自性の強い一群を「石神式」として型式設定している。

#### 八街市真井原遺跡(第4図47~52)

高野(1986)により資料紹介および分析が行われている。47・50は捺糸紋と縦位の山形押型紋が併用されているものである。49・51は縦位の山形押型紋のみが施紋されるものである。これらの資料は「台地中央よりの草創期後半の土器(筆者注-捺糸紋土器)を主体に出土する地点より採集」したものとされている。

#### 八街市小間子遺跡(第4図44~46)

高野(1986)により資料紹介および分析が行われている。44は「山形・平行線上・矢羽状の押型紋が縦位帯状に複合施紋された」ものである。45は山形・平行線状の押型紋が併用され、縦位帯状に施紋されている。採集地点については、「先土器時代から縄紋時代前期までの遺物の散布を見るが、主体を占めるのは草創期後半の捺糸紋土器で稲荷台式土器が目立つ」とされている。

#### 松戸市ニツ木向台貝塚(第2図1~3)

1は庄司他(1974)に、2・3は森(1992)により、それぞれ資料紹介されている。1・2は矢羽状の押型紋土器の破片である。1は稲荷台式および花輪台式に共伴しているとされている。

#### 四街道市和良比長作No.2遺跡(第2図19・30)

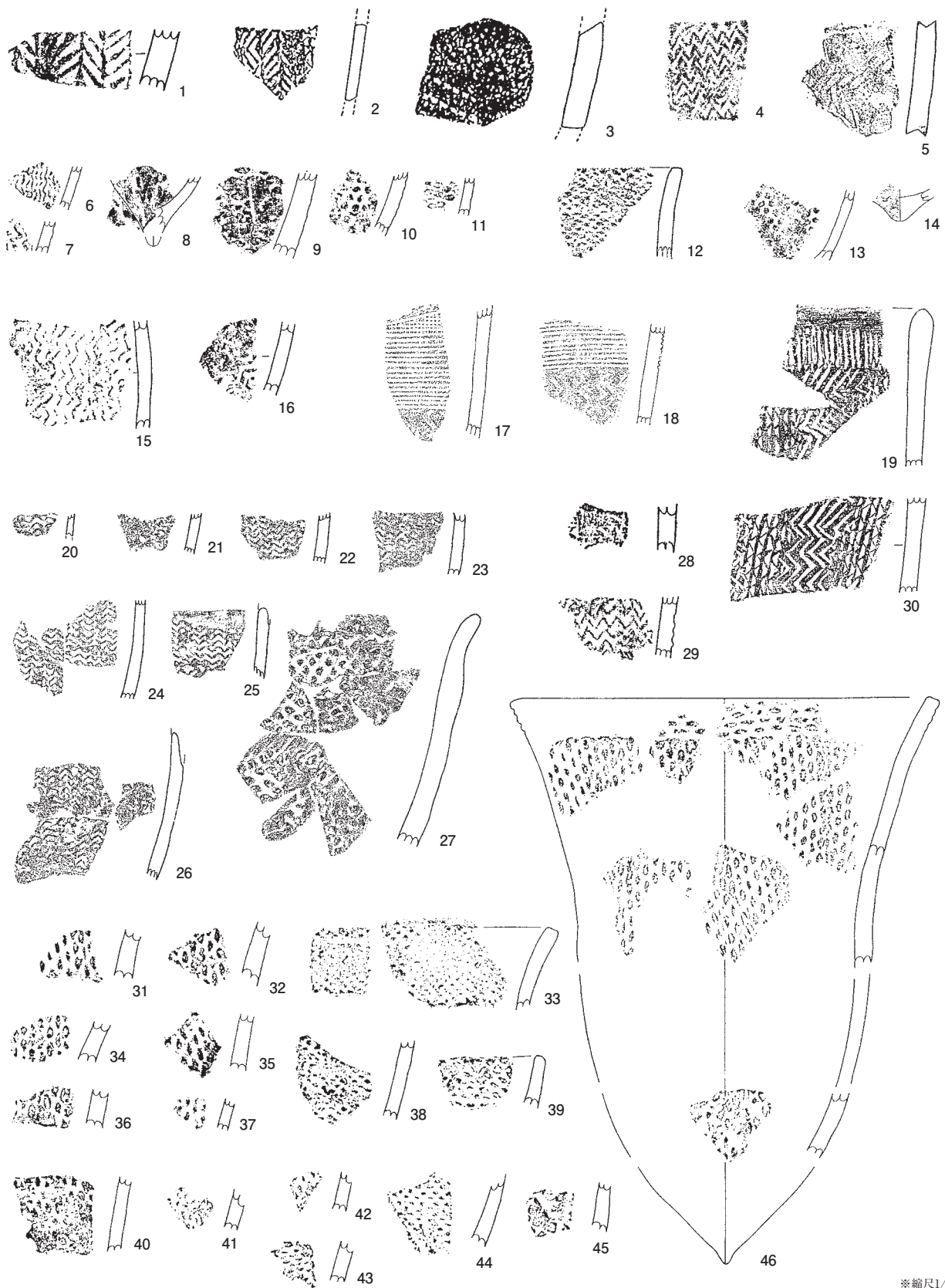
川端・佐東(1993)により報告されている。三角状押型紋と山形押型紋を斜位密接に施紋している。施紋順序は、先に三角形状紋を帯状に施紋した後、無文部に山形紋を充填するような形で縦位に施紋している。口縁部下端には、絡条体を押し引いて集合沈線状に施紋されている。井草式、夏島式、稲荷台式が伴出し、製作は稲荷台式に類似している。

#### 四街道市鹿渡遺跡

1981・82年、北総考古学研究会によって、学術調査が行われ、篠原(2000)により資料紹介がなされている。注目すべきは、押型紋土器を主体とする住居跡である。伴出土器を含めて、東寺山石神遺跡例に類似した内容となっている。捺糸紋土器は、稲荷台式の特徴を色濃く持つが、花輪台式に比定できると考えられる。押型紋土器は東寺山石神遺跡例に比べ、バラエティーに富む内容である。ここでの詳述はあえて避けるが、縦位および斜位の矢羽状押型紋に磨り消しが加えられている資料では、斜位の部分を集中的に磨り消している傾向が窺われ、興味深い。今後はより詳細な観察を行った上で、再度検討する必要がある。

#### 袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡(第6図1~6)

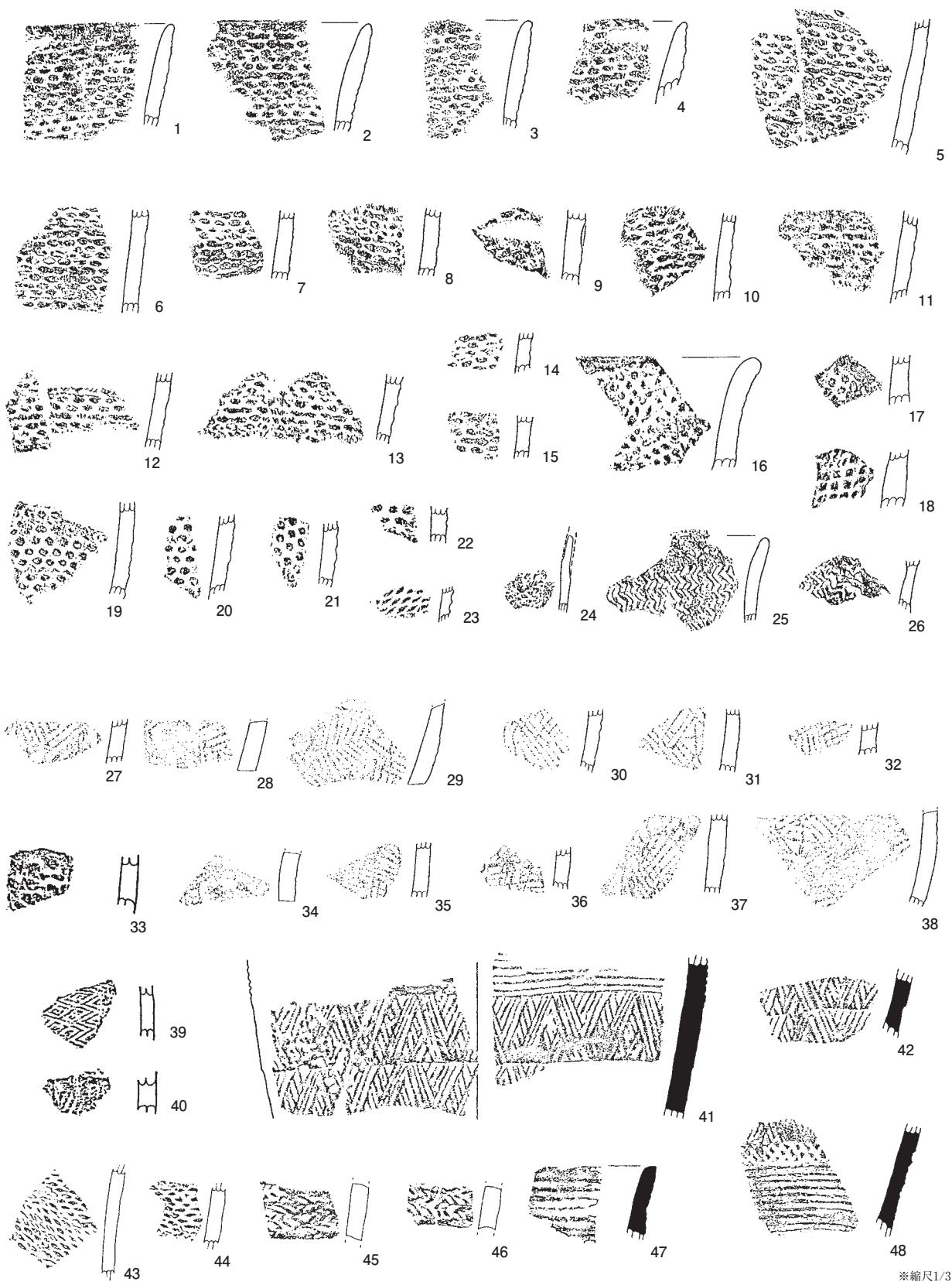
縦位帯状の山形押型紋とまばらな捺糸紋が併用される資料である。報告者である加納(1993)により稲荷原式新段階に位置づけられている。口縁部には横位一条の縄紋原体の側面圧痕が施されている。破片を観察する限り、捺糸紋→押型紋の順序で施紋が行われている。本遺跡では花輪台式の出土は認められず、稲荷台式・稲荷原式・東山式に対比される資料が多く出土している。



※縮尺1/3

1～3 松戸市ニツ木向台遺跡 (庄司他 1974・森 1992)、4 流山市鱈ヶ崎貝塚 (江坂 1942)、5 我孫子市水神山遺跡 (菊地 1969)、6～11 野田市ボタモチ山遺跡 (中山他 1998)、12 印西市鶴塚遺跡 (鷹野 1974)、13・14 白井市向台Ⅱ遺跡 (高橋 1991)、15・16 四街道市井戸作遺跡 (新井 1982)、17・18 印西市新井堀(2)遺跡 (吉野 2003)、19・30 四街道市和良比長作No.2 遺跡 (川端他 1993)、20～27 成田市東峰御幸畑東遺跡 (宮他 2003)、28 酒々井町新山遺跡 (高野 1986)、29 香取郡多古町一畝田甚兵衛山北遺跡 (新田他 1995)、31～46 成田市西向野Ⅰ遺跡 (高橋 1991)

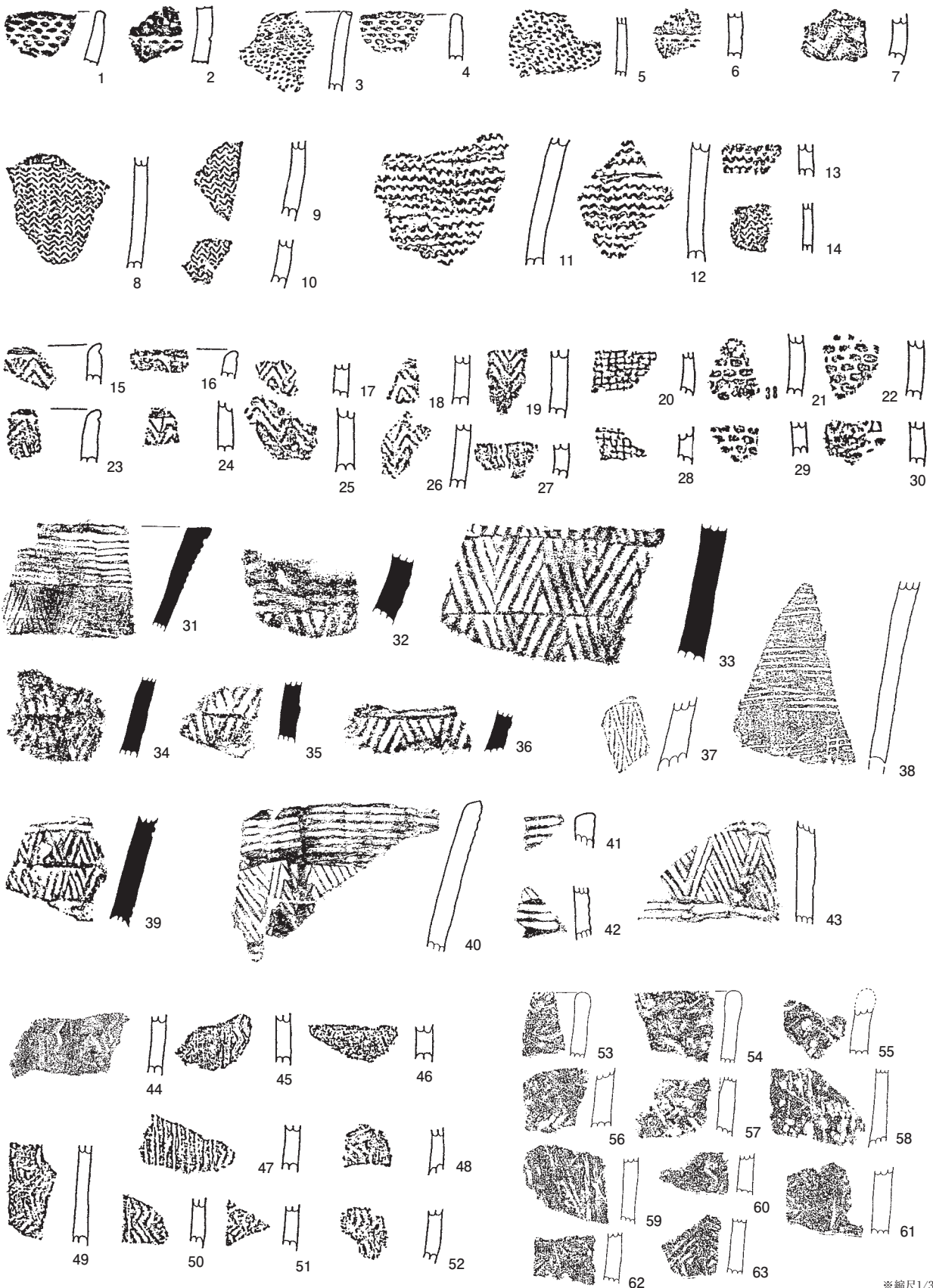
第2図 県内の押型紋土器資料(1)



※縮尺1/3

1～26 成田市東峰御幸畑西遺跡 (宮 2000)、27～32・34～38 成田市長稲葉遺跡 (高柳 1994)、  
 33 成田市岩谷谷遺跡 (高野 1986)、39・40 成田市台楽遺跡 (高野 1986)、41・42・48 成田市  
 青山甚太山遺跡 (黒沢 2000)、43～47 成田市庚塚遺跡 (岡田他 1987)

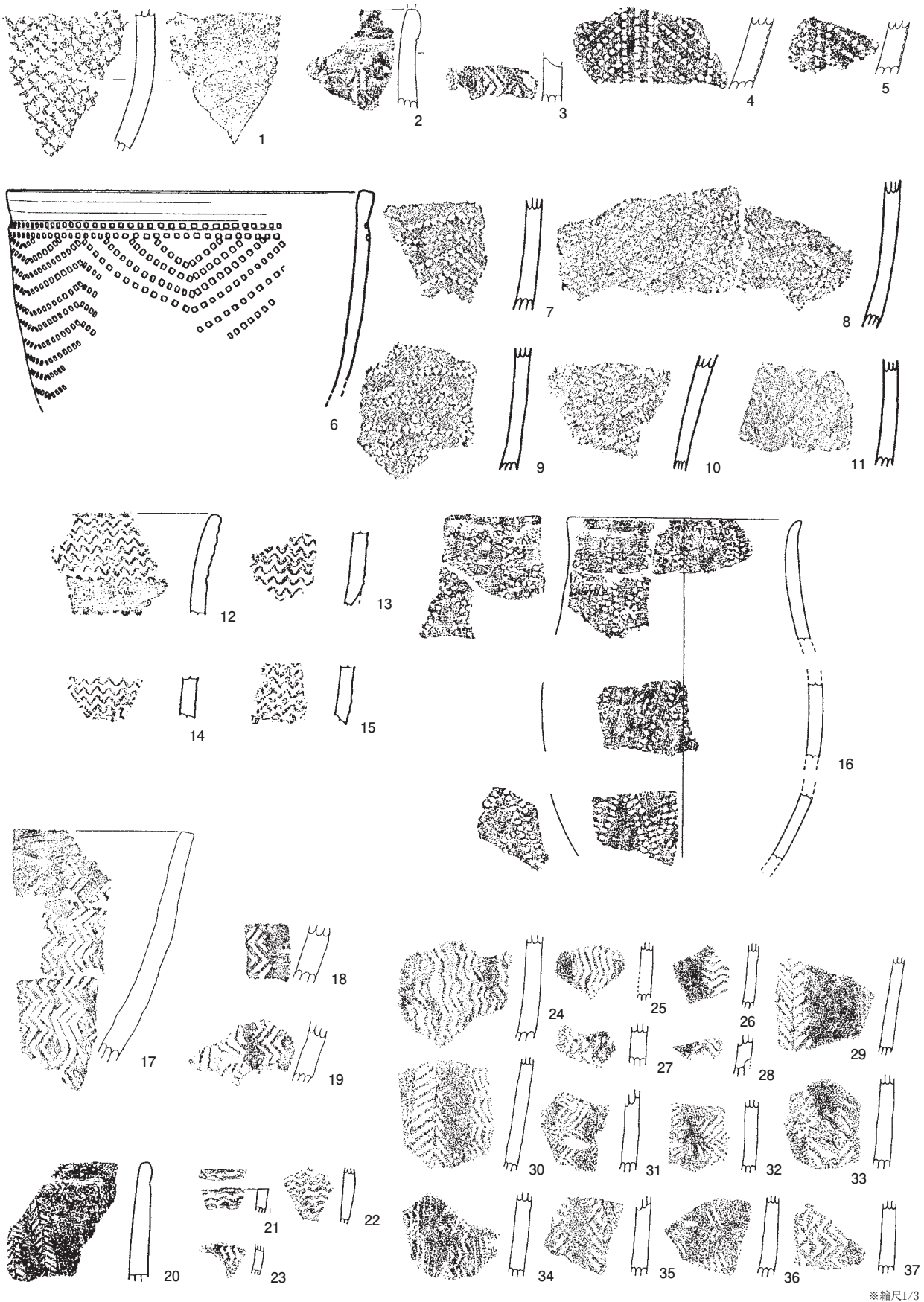
第3図 県内の押型紋土器資料(2)



※縮尺1/3

1～6 成田市所遺跡 (高野 1983・高野 1986)、7 香取市小塚野遺跡 (高野 1986)、8～10 成田市雨郷台遺跡 (高野 1986)、11～14 香取郡神崎町下塚遺跡 (高野 1986)、15～30 香取市山倉大山遺跡 (高野 1986)、31～36 香取市鶴崎天神台遺跡 (荒井 1994)、37・38 香取市城ノ台北貝塚 (吉田 1989)、39 香取市布野台遺跡 (平野 1989)、40～43 香取郡東庄町今郡カチ内遺跡 (小宮 1984)、44～46 八街市小間子遺跡 (高野 1986)、47～52 八街市真井原遺跡 (高野 1986)、53～63 八街市水呑遺跡 (戸村 1990)

第4図 県内の押型紋土器資料(3)



※縮尺1/3

1 佐倉市江原台(第1)遺跡(内田 1979)、2~5 東金市久我台遺跡(原田 1988)、6~11 佐倉市生谷境堀遺跡(桑原 1974)、12~16 白井市捕込附遺跡(高野 1985)、17~19 千葉市中鹿子第2遺跡(横田 1992)、20 千葉市南二重堀遺跡(古内他 1983)、21~23 千葉市辺田山谷遺跡(宮 1986)、24~37 千葉市東寺山石神遺跡(鈴木 1977)

第5図 県内の押型紋土器資料(4)

#### 東金市久我台遺跡出土資料（第5図2～5）

4・5は、原田（1988）が花輪台式に影響された回転押型紋土器として報告し、花輪台式併行期に位置づけている。原田の観察では、「歯車のような原体を回転」したとしているが、実見したところ、むしろ彫刻棒を押圧し、列点状紋様を描出した可能性も指摘できると思われる。つまり、花輪台式の紋様構成を絡条体圧痕紋に置換した「金堀式」（篠原 1979）の手法に極めて類似する技法と位置づけられよう。2・3は、原田（1988）も指摘するように、幅狭の変形押型紋が縦位帯状（？）に施紋されるものである。口縁部の形態は花輪台式に類似している。

#### 千葉市小山遺跡（第7図30～34）

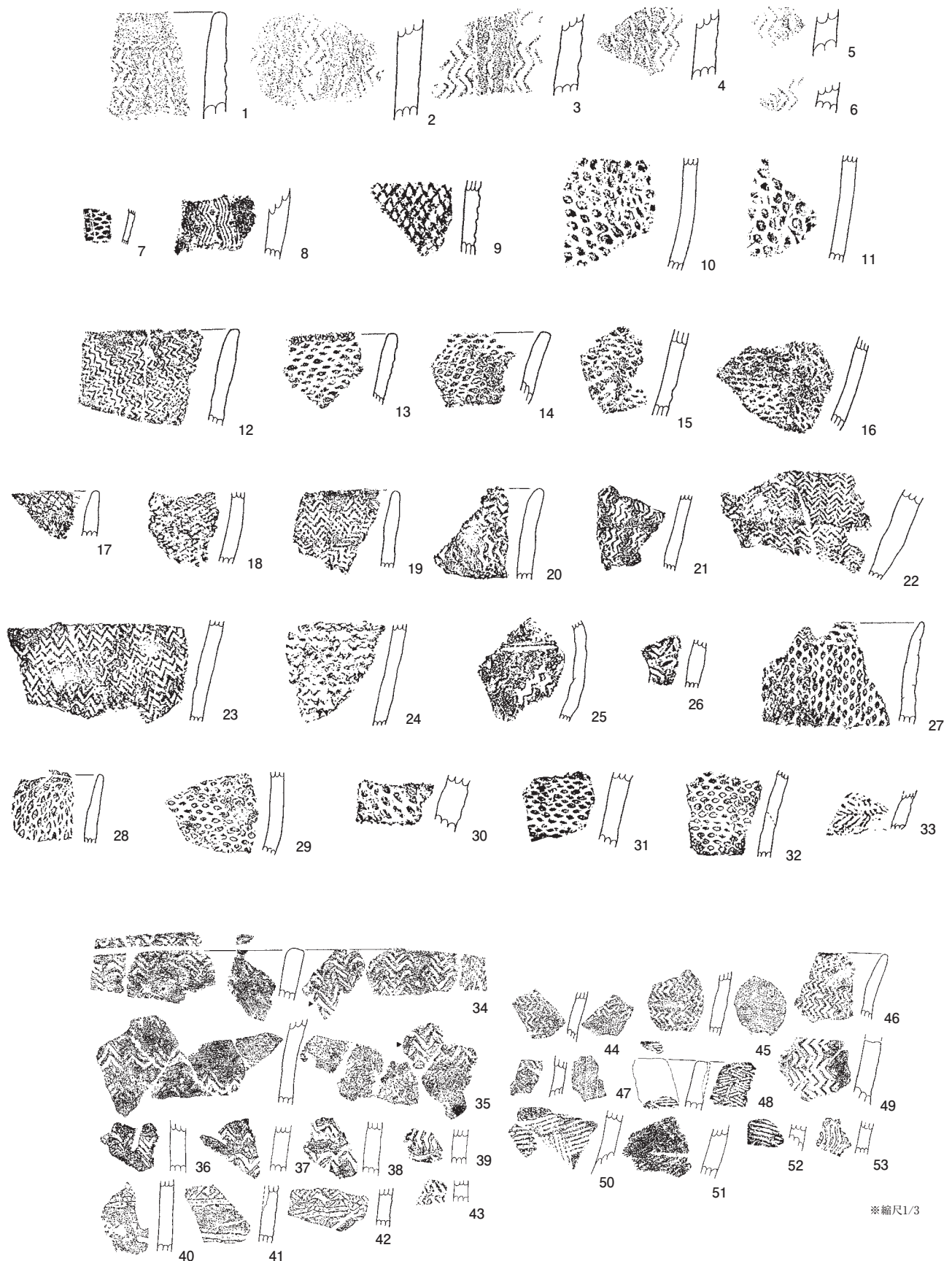
30・32は、報告・分析を行った原田（1994）により、「トラクターのタイヤのような原体を回転させてつけた帯状の」押型紋土器とされたものであるが、久我台遺跡例と同様に資料の再検討を行う必要があると思われる。紋様は原田も指摘するように花輪台式によく類似するものである。このような列点状押型紋は、花輪台式期の住居跡（2号住）内に共伴している。他の出土資料を見ると、稲荷台式および花輪台式が多く見られる。

#### 南房総市長尾陣屋・泉遺跡（第7図25～29）

稲荷台式の撚糸紋土器が多く出土する中で、縦位の山形紋（25）及び楕円紋（26）の押型紋土器が出土している。28のような列点状紋様については、佐倉市生谷境堀遺跡例（第5図6～11）、白井市捕込附遺跡例（第5図16）に類例が見られるほか、上述した久我台遺跡例や小山遺跡例との関連が考えられる。

以上、県内における出現期の押型紋土器を見たところ、高野（1986）らの見解を裏付けるように、稲荷台式をさかのぼって出現する資料はないものと考えられる。また、伴出資料から稲荷台式に伴い、この中でも古い方に属すると思われるのは、東寺山石神遺跡例、真井原遺跡例、小間子遺跡例であり、鹿渡遺跡例、二ツ木向台貝塚例、和良比長作No.2遺跡例、滝ノロ向台遺跡例が続くものと思われる。さらに、久我台遺跡例・小山遺跡例もこの前後（花輪台式期）に位置するものと考えられる。ここで古い方、すなわち稲荷台式に伴うと考えられる資料を見ると、高野（1986）が指摘するように、山形紋の縦位帯状施紋を基本として、矢羽状などの変形押型紋が加わっている様相が看取できる。変形紋は別として、縦位帯状の山形紋に関する編年的位置は、中部地方との比較で容易に想定できよう。東寺山石神遺跡例のように、磨り消してまで帯状を表現する様は、その関係の強さが窺われる。矢羽状紋に関しては、その出自についてさらに検討する必要があるが、時間の経緯とともにモチーフが複雑化する様相が想定でき、花輪台式期までこの系統が続くようである。久我台遺跡例や小山遺跡例は、時期的には近接した位置にあるが、絡条体圧痕紋が発展する金堀式（篠原 1979）の強い影響を受ける別系統のものとしても考えられる。その施紋技法については、今後の詳細な検討が必要であるが、編年的位置の重要な鍵になると思われる。

以上の資料の詳細な編年的位置については、花輪台式期を中心とする小地域的様相の整理が必要であり、単純に一つの時間軸にのせて説明することはできない。金堀式（篠原 1979）や木の根Ⅰ・Ⅱ式（池田 1984）についても、型式設定以降の新出資料を含めた再検討が不十分といわざるを得ず、併せて考えなければならない。次の三戸式段階へのつながりを考える上でも、必須の検討事項となろう。

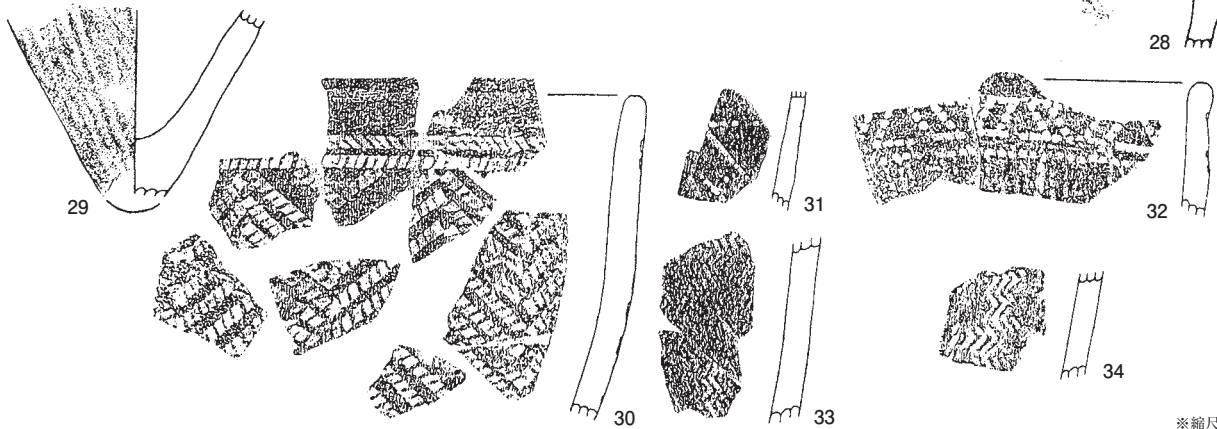
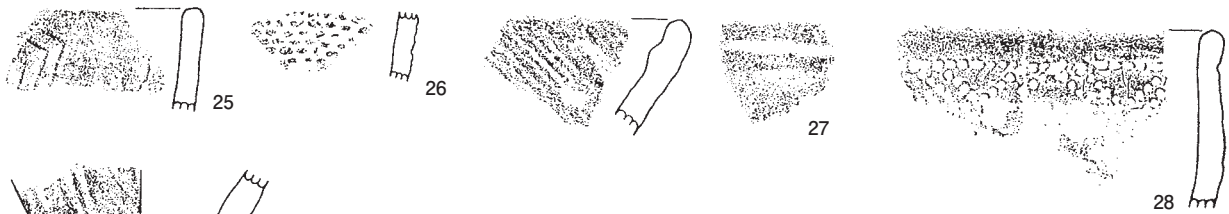
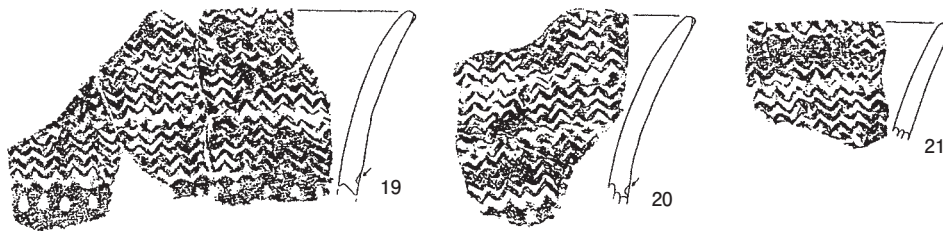
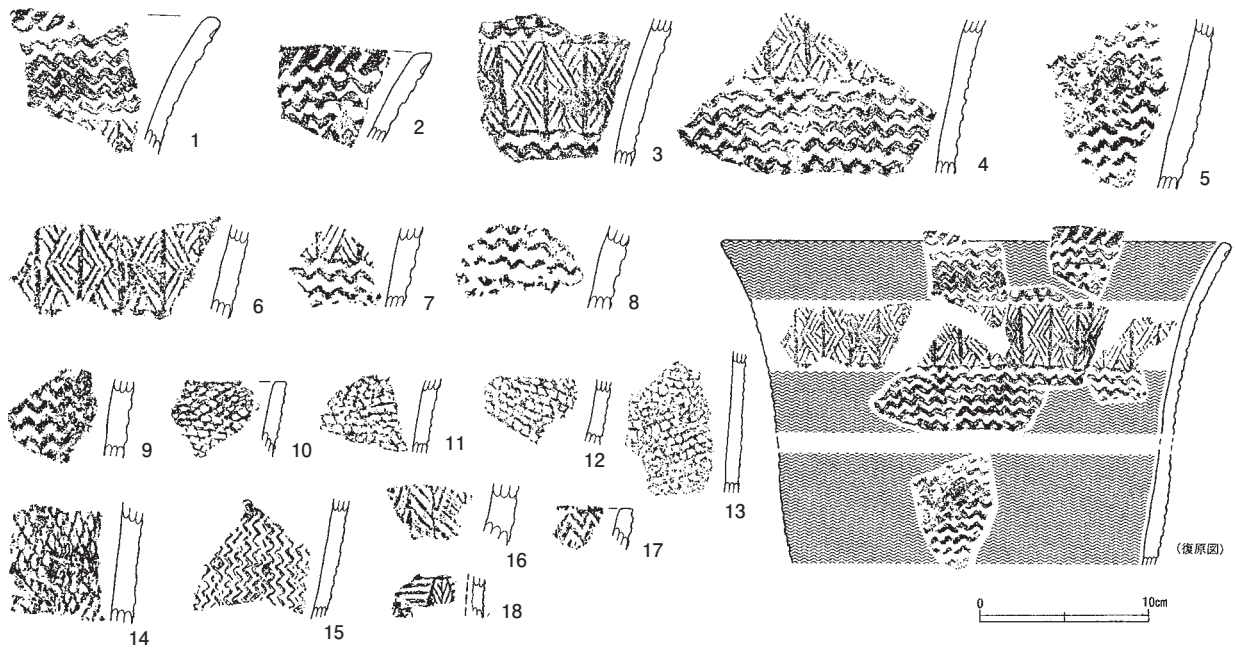


※縮尺1/3

1～6 袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡 (加納 1993)、7・8 富津市東天王台遺跡 (戸倉 1988)、9 木更津市御所塚遺跡 (安藤 1996)、10・11 木更津市清水谷遺跡 (中山 1975)、12～16 木更津市赤坂台遺跡 (井上 1999)、17～33 木更津市蔵坪遺跡 (諸墨 1992・諸墨他 2000)、34～53 木更津市久野遺跡 (吉野 1999・小笠原2003)

第6図 県内の押型紋土器資料(5)





※縮尺1/3

1~18 木更津市下根田A遺跡(安藤 1996)、19~24 勝浦市上長者台遺跡(原田 1992)、25~29 南房総市長尾陣屋跡・泉遺跡(鈴木 2002)、30~34 千葉市小山遺跡(原田 1994)

第7図 県内の押型紋土器資料(6)

### 3 三戸式以降に併行する押型紋土器

本時期になると、出土遺跡数の増加が見られるだけでなく、一遺跡からも比較的まとまった量の出土が認められるようになる。以下、地域別の概要を見ていくこととする。

北総台地、中でも成田地域周辺からは楕円紋・山形紋の資料が三戸式～田戸下層式土器と伴出する様子が確認できる（成田空港関連遺跡：第2図20～27・29、第3図1～26、成田市西向野Ⅰ遺跡：第2図31～46）また、印西市新井堀(2)遺跡例（第2図17・18）は、三戸式土器の紋様と縦位の山形押型紋が併用されている。

やや東側の旧香取郡市域に目を向けると、様相が異なる様子が看取される。成田市（旧下総町）長稲葉遺跡例（第3図27～32・34～38）は、原体不明の一群が、多くの三戸式土器と共に検出されている。同じく青山甚太山遺跡例（第3図41・42・48）、香取市（旧佐原市）鴛崎天神台遺跡例（第4図31～36）、東庄町今郡カチ内遺跡例（第4図40～43）は、東北地方の日計式押型紋土器と関連する資料が、多くの三戸式土器に伴出している。また、伴出土器は明確でないが、香取市（旧山田町）山倉大山遺跡例（第4図15～30）は、山形紋・格子目紋・楕円紋の資料がまとめて表採されており、興味深い一例である。

上総地域に目を転じると、木更津市赤坂台遺跡例（第6図12～16）、同蔵坪遺跡例（第6図17～33）において三戸式～田戸下層式土器に伴出して、楕円紋・山形紋土器の資料が出土している。同久野遺跡例（第6図34～53）は、山形紋土器を中心とする一群であり、三戸式土器に伴出すると考えられる（小笠原2003）。また、同下根田A遺跡例（第7図1～18）は、変形紋が横位の山形紋によって区画される構成の資料のほか、格子目紋、縦位山形紋の資料が見られ、三戸式土器に関連する資料として位置づけられる。復元図の紋様構成を見ると、香取地方の日計式押型紋関連資料が想起されるが、下根田A遺跡例は変形紋、横位区画紋共にやや異なっており、「より三戸式に近い形」と考えられよう。

安房地域では、館山市沖ノ島遺跡（岡本ほか2004・2006）から多数の山形紋を中心とする資料が出土している。少数ながら木更津市下根田A遺跡や富津市東天王台遺跡に見られる変形押型紋に類似する資料も見られる。伴出資料は三戸式及び併行する無紋土器が多く出土しており、押型紋の資料もこれに共伴すると思われる。上総～安房地域にかけての資料は、神奈川県内の資料に共通する部分も多くみられ、地域的な親縁性がうかがわれる。中部地方南部との比較も可能であり、今後の更なる分析が求められよう。

#### 【引用・参考文献】※種別・年代順に掲載

（報告書）

菊池徹夫（1969）『我孫子古墳群』 東京大学文学部考古学研究室・我孫子町教育委員会

桑原 護（1974）「第1部 生谷境堀遺跡」『飯重』 佐倉市教育委員会

中山吉秀（1975）『清水谷遺跡』 清水谷遺跡発掘調査団

篠原 正（1977）『金掘遺跡発掘調査概報』 富里村史編纂委員会

鈴木道之助他（1977）『東寺山石神遺跡』 財団法人千葉県文化財センター

内田儀久（1979）『江原台－土地区画整理事業に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡Ⅱ区の発掘調査報告書』 佐倉市教育委員会

新井和之（1982）「第2章 第2節 1 井戸作遺跡」『北総線』 東京電力北総線遺跡調査会

村山好文（1982）「第5章 No.3地点の調査」『龍角寺ニュータウン遺跡群』 龍角寺ニュータウン遺跡調査会・日本考古学研究所

古内 茂・伊藤智樹（1983）『千葉東南部ニュータウン12-南二重堀遺跡-』 財団法人千葉県文化財センター

- 小宮 孟 (1984)「第3章 今郡カチ内遺跡」『東総用水』財団法人千葉県文化財センター
- 高野安夫 (1985)「第4章 捕込附遺跡」『寺向・捕込附遺跡発掘調査報告書-松戸市菅白井聖地公園計画用地内遺跡-』白井聖地公園遺跡調査会
- 宮 重行 (1986)『千葉県辺田山谷遺跡-千葉県小児医療センター(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
- 岡田光広他 (1987)「第1篇 庚塚遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ-大栄地区(2)』財団法人千葉県文化財センター
- 財団法人君津都市文化財センター (1988)「29. 東天王台遺跡」『君津都市文化財センター年報No.6-昭和62年度-』
- 原田昌幸 (1988)「3章 1節 縄文・弥生時代の遺物」『東金市東久我台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 戸倉茂行 (1988)『東天王台遺跡』財団法人君津都市文化財センター
- 財団法人君津都市文化財センター (1991)「藪台遺跡群・上馬船遺跡」『君津都市文化財センター年報No.9-平成2年度-』
- 平野 功 (1989)「第1章 布野台遺跡」『小見川町内遺跡群発掘調査報告書』小見川町教育委員会
- 高橋 誠 (1991)「第1編 第2章 第2節 縄文時代」『西向野Ⅰ遺跡・西向野Ⅱ遺跡』財団法人印旛都市文化財センター
- 高橋 誠 (1991)『松戸市菅白井聖地公園埋蔵文化財調査報告書-向台Ⅱ遺跡』財団法人印旛都市文化財センター
- 原田昌幸 (1992)「5 A. 上長者ヶ台遺跡出土の縄文時代早期の土器」『上長者ヶ台遺跡-リゾートマンション建設に伴う遺跡発掘調査報告書』上長者ヶ台遺跡調査会
- 諸墨知義 (1992)『木更津市内遺跡群発掘調査報告書-蔵坪遺跡-』木更津市教育委員会
- 横田正美 (1992)「第6章 中鹿子第2遺跡」『千葉中央ゴルフ場遺跡分発掘調査報告書』財団法人千葉市文化財調査協会
- 川端弘士・佐東正規 (1993)「1 和良比長作No.2遺跡の発掘調査」『四街道市内遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会
- 能城秀喜 (1993)「御所塚遺跡」『君津都市文化財センター年報No.10-平成3年度-』
- 加納 実 (1993)「第2章 縄文時代」『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』財団法人千葉県文化財センター
- 高柳圭一 (1994)『主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』財団法人千葉県文化財センター ※下総町長稲葉遺跡
- 荒井世志紀 (1994)『鶴崎天神台遺跡』財団法人香取都市文化財センター
- 原田昌幸 (1994)「第Ⅳ編 小山遺跡」『土気地区南地区遺跡群Ⅳ』財団法人千葉市文化財調査協会
- 新田浩三他 (1995)『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-一鍛田基平山北遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 安藤道由 (1996)「第3章 下根田A遺跡」『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡-かずさアカデミアパーク建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(4)』財団法人君津都市文化財センター
- 安藤道由 (1996)「第4章 下根田B遺跡」『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡-かずさアカデミアパーク建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(4)』財団法人君津都市文化財センター
- 井上賢他 (1998)『山王台遺跡・下向山遺跡』財団法人君津都市文化財センター
- 石橋宏克・松浦史浩他 (1998)『松戸市二ツ木向台貝塚資料調査報告書 千葉県史編さん資料』千葉県
- 井上 賢 (1999)『赤坂台遺跡』財団法人君津都市文化財センター
- 吉野健一 (1999)『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2-木更津市久野遺跡-』財団法人千葉県文化財センター
- 井上 賢 (2000)『上用瀬遺跡Ⅱ』財団法人君津都市文化財センター
- 宮 重行 (2000)『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ-東峰御幸畑西遺跡(空港No.61遺跡)-』財団法人千葉県文化財センター
- 黒沢哲郎 (2000)『青山甚太山遺跡』財団法人香取都市文化財センター
- 石橋宏克他 (2000)「平成10年度の調査 西和田古墳群」『佐原市内遺跡群発掘調査概報-平成10年度・平成11年度-』佐原市教育委員会

- 鈴木 昭 (2002)『長尾陣屋跡・泉遺跡』財団法人総南文化財センター
- 吉野健一 (2003)『印西市新井堀(2)遺跡・前戸遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 宮重行他 (2003)『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ－東峰御幸畑東遺跡(空港No.62遺跡－)』財団法人千葉県文化財センター
- 岡本東三ほか (2004)「千葉県館山市沖ノ島遺跡第1次発掘調査概報」千葉大学文学部考古学研究室
- 岡本東三ほか (2006)「千葉県館山市沖ノ島遺跡第2・3次発掘調査概報」千葉大学文学部考古学研究室
- (論文等)
- 江坂輝彌 (1942)「千葉県鰯ヶ崎出土の山形押型文土器」古代文化13-5(日本古代文化学会)
- 岡本 勇 (1953)「相模平坂貝塚」駿台史学3(駿河台史学会)
- 篠遠喜彦 (1955)「千葉県東葛飾郡二ツ木第二貝塚」『日本考古学年報3(昭和25年度)』日本考古学協会
- 庄司 克・堀越正行 (1974)「松戸市二ツ木向台遺跡における早期縄文式土器の研究」史館2(史館同人)
- 鷹野光行 (1974)「鶴塚遺跡の縄文式土器」古代58(早稲田大学考古学会)
- 鈴木道之助 (1978)「花輪台式土器とその終末」史館10(史館同人)
- 篠原 正 (1979)「北総台地における縄紋時代草創期後半について」千葉県の歴史17(千葉県史編纂室)
- 鈴木道之助 (1980)「東寺山遺跡の捺糸紋系土器について」『東寺山石神遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 伊藤聖一 (1982)「高倉下根田遺跡採集の縄文早期資料」さざなみ23(地域研究会)
- 杉山典子 (1983)「花輪台貝塚の土器－南山大学所蔵資料の再検討－」南山考古2(南山考古学会)
- 高野安夫 (1983)「大栄町所遺跡採集の三戸式土器」フィールド考古足あと1(足あと同人)
- 池田大助 (1984)「北総台地における沈線文土器群の出現」研究紀要8(財団法人千葉県文化財センター)
- 高野安夫 (1986)「北総台地採集の押型紋土器」フィールド考古足あと4(足あと同人)
- 中山吉秀・原田昌幸 (1988)「ボタモチ山遺跡」『東葛上代文化の研究』古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会
- 吉田 格 (1989)「千葉県城ノ台北貝塚の日計式押型文土器」立正考古29(立正大学考古学研究会)
- 戸村 智 (1990)「印旛郡八街町水呑遺跡の採集資料」フィールド考古足あと6(足あと同人)
- 森 崇史 (1992)「二ツ木向台遺跡の縄文早期の土器」南山大学人類学博物館館報27
- 原田昌幸 (1997)「捺糸文系土器様式の型式変容－千葉県小山遺跡の資料から」奈和35(奈和同人)
- 岡本東三 (1989)「立野式の出自とその系統をめぐって」先史考古学研究2(阿佐ヶ谷先史考古学会)
- 原田昌幸 (2000)「74. 小山遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 横田正美 (2000)「77. 中鹿子第2遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 鈴木道之助 (2000)「78. 東寺山石神遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 安藤道由 (2000)「80. かずさ遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 諸墨知義・領塚正浩 (2000)「81. 蔵坪遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 高橋 誠 (2000)「102. 西向野I遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 篠原 正 (2000)「106. 鹿渡遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県
- 小笠原永隆 (2003a)「千葉県内における押型紋土器出現期の研究展望」利根川24・25(利根川同人)
- 小笠原永隆 (2003b)「木更津市久野遺跡出土押型紋土器の再検討」研究連絡誌65(財団法人千葉県文化財センター)

## 第2章 前期の非在地系土器

### はじめに

現在までに、千葉県において多数の遺跡が発掘され、遺構や遺物が大量に発見されている。しかも出土土器は年々増加の一途を辿っている。その中に非在地系土器が含まれており、資料数も多くなってきた。県内では、非在地系土器に対する研究は未だ発展途上にあり、これからの研究として一石をを投じる意味で非在地系土器を取り上げることにした。そこで、本章では千葉県内における前期の非在地系土器について焦点を当て、考えてみた。

ここでは、前期の非在地系土器として東海地方に標式遺跡が所在する木島式土器、関西地方に標式遺跡が所在する北白川下層式土器、東北地方に標式遺跡が所在する前期大木式系土器を取り上げ、各非在地系土器を出土した遺跡が千葉県内においてどのように分布しているのかを探ることにした。

なお、文中での敬称は省略させて頂いた。あらかじめ御了承を願う次第である。

### 第1節 木島式土器

木島式土器は早期末葉から前期初頭に帰属する土器群で、静岡県木島遺跡を標式遺跡とし、東海地方を中心に関東地方にまで分布している。それは器厚が非常に薄い土器で、いわゆる「オセンベ土器」とも呼ばれ、関東地方の在地系土器との相違は一目瞭然である。

#### 1 研究略史

昭和11年(1936)に、加藤明秀・芹沢長介は木島遺跡の出土土器において器厚が薄く、指痕を有し、細線文を主体とする土器群を「細線紋指痕薄手土器」と命名し、学会に報告した(加藤・芹沢 1936)。これが木島式土器研究の始まりである。この経験を生かして、芹沢は昭和23年(1948)に静岡県時ヶ谷遺跡から出土した縄文土器の中に「細線紋指痕薄手土器」と類似する非常に薄手で、全面に指痕のある無文土器を発見した。このとき、発見した土器が細線文ではなく無文であることに注目し、「細線紋指痕薄手土器」は「時ヶ谷期」と「木島期」に分離できると仮説を立てた(芹沢 1948)。

その後「木島式土器」という現在の呼称になり、江坂輝弥は昭和34年(1959)に、「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」の一覧で早期末葉に木島1式、前期初頭に木島2式を当て、細分を試みている(江坂 1959)。そして昭和39年(1964)には、「縄文土器型式の編年比較表」の中で木島1式が前期初頭の花積下層式、木島2式が前期前葉の関山式に併行させている(江坂 1964)。しかし、二細分した根拠資料や、編年設定が異なった理由は提示されていない。

さらに研究が進み、昭和38年(1963)に紅村弘は、愛知県天神山遺跡の出土土器が最下層から最上層にかけて上ノ山式土器→入海式土器→石山式土器→(仮称)天神山式土器→木島式類似の土器の順に包含されていることを突き止めた(紅村 1963)。また昭和40年(1965)に磯部幸男・杉崎章・久永春男は、愛知県塩屋遺跡の出土土器が下層に入海式土器、中層に石山式土器、上層に(仮称)塩屋式土器を主体としており、型式差がみられることを報告した(磯部・杉崎・久永 1965)。これを機に、早期末から前期初頭にかけての土器群が層位的に検証され、型式編年が確立されていくことになった。

それ以降、「木島式土器」の編年研究は益々さかんになっていった。しかし、多くの研究者によって細分化されると同時に、見解の相違が起り、「木島式土器」の編年は混沌としていった。各研究者の見解は以下のとおりである。

増子康眞は昭和52年（1977）、木島式に類する土器群を総称して「オセンベ土器群」と表現し、愛知県内では塩屋式→上ノ山Z式→石塚下層式（清水ノ上I式）の3型式に細分できることを確認した。そして「オセンベ土器群」は静岡県中部以東の地域で発生し、東海地方へ波及してきた型式と推察している。さらに編年の立場から、関東地方の各型式との関係について上ノ山Z式が花積下層式、石塚下層式（清水ノ上I式）が関山式に併行することを確定した（増子1977）。時を経て、平成9年（1997）には「オセンベ土器群」の終末に当たる清水ノ上I式が二細分され、細線文を主体とする石塚下層式（古い部分）と、無文を主体とする仮称清水柳北式（新しい部分）を設定した（増子1997）。さらに平成11年（1999）、塩屋式の新しい部分は前期の始まりと考え、塩屋新式を設定し、東海地方の「オセンベ土器群」を塩屋式→塩屋新式→上ノ山Z式→石塚下層式→仮称清水柳北式の順に細分した（増子1999）。

澁谷昌彦は昭和56年（1981）、木島遺跡における第4次発掘調査の出土土器を分類し、木島式土器を8型式に細分した。さらに型式学的、編年学的検討を加え、翌年には10型式に設定した。それによると、木島I式・II式を早期末葉、木島III式～X式を前期初頭～前葉に置き、関東地方の各型式との併行関係は木島I式が神之木台I式、木島II式が神之木台II式、木島III式が下末吉式・花積下層式、木島IV式・V式が下末吉式・花積下層式（渦巻き状の撚糸側面圧痕）、木島VI式・VII式が下末吉式・花積下層式、木島VIII式が花積下層式（新田野段階）、木島IX式が二ツ木式、木島X式が関山I式に位置付けた。また、塩屋式は早期末葉の木島II式と、前期初頭の木島III式を包括しているため、塩屋式を使用しないことにした（澁谷1982）。そして昭和59年（1984）には、花積下層式を三細分し、木島IV式・V式が花積下層I式、木島VIII式が花積下層II式、木島IX式が花積下層III式に併行させている（澁谷1984）。

吉田哲夫は昭和59年（1984）、『木島式』はその成立から終焉に至るまでの質的变化や周辺地域への分布などの時間的・空間的な面で一貫した内容を保っており、ひとつの型式群－木島系土器群－として理解することが可能であると結論付け、「木島系土器群」の編年が石山式→天神山式→塩屋式→木島式（清水ノ上I式）→仮称清水ノ上II a式→仮称清水ノ上II b式→仮称清水ノ上II c式へと変遷し、関東地方の各型式との関係について石山式・天神山式が打越式、塩屋式が神之木台式・下吉井式、木島式（清水ノ上I式）が菊名下層式・花積下層式・二ツ木式、仮称清水ノ上II a式が関山I式、仮称清水ノ上II b式が関山II式・黒浜式（古）、仮称清水ノ上II c式が黒浜式に併行すると考察した。しかし、仮称清水ノ上II a式と仮称清水ノ上II c式における関東地方の各型式との併行関係については発掘調査で検証されていない（吉田1984）。

池谷信之は昭和60年（1985）、静岡県平沼吹上遺跡の調査結果から「指頭圧痕の施文部位と施文方法の変化」に焦点を当て、木島式が「第I段階：器面が分帯される段階（A類1・2）、第II段階：隆帯によって口縁部と胴部に文様帯が分帯される段階（B類1・2）、第III段階：隆帯が消滅し分帯の意図が不明確になる段階（C類・D類）」に細分でき、時間差を有する可能性がある」と指摘した。このときの型式細分は木島式土器を「上ノ山Z式段階以降の細線文の施される土器と規定」し、木島式が上ノ山Z式・清水ノ上I式に併存すると言及している（池谷1985）。

山下勝年は昭和62年（1987）、磯部が型式設定した清水ノ上I式とII式に対する様々な解釈や疑義に答

えるため、愛知県清水ノ上貝塚の第2次調査を行い、清水ノ上Ⅰ式土器を主体に包含するH層の上部に、清水ノ上Ⅱ式土器を主体に包含するH貝層を発見し、両型式を層位的に確認した（山下1988）。さらに平成8年（1996）、清水ノ上貝塚の第2次調査で出土した土器を検討し、清水ノ上Ⅰ式のC・D類が清水ノ上Ⅱ式に伴わないことや、清水ノ上Ⅱ式が細分化できないことを改めて強調した。また「清水ノ上Ⅰ式土器は、木島式土器とは系統を同じくしつつも、それとは異なった消長をたどり始めた土器群」とし、木島式系統の土器は最終段階で東海地方の西部と東部において地域差が生じてくると考察している（山下1996）。

関野哲夫は平成2年（1990）、静岡県清水柳北遺跡から出土した木島式土器を「a指で隆帯上に押捺したもの、b木島式に特徴的な隆帯を摘み上げ突起状にしたもの、c棒状工具で押捺し列点状としたもの、d半截竹管状工具で押し引いて連続刺突状、刻み目としたもの、e半截竹管状工具で爪形文に近い刺突したもの」に分類し、住居址の切合い関係や配置を根拠に、a・b・cが型式学的に細分される可能性を示唆している（関野ほか1990）。

下島健弘は平成14年（2002）、「木島式土器」を一つの系統として捉え、「木島系統土器群」と呼称した。型式分類に際しては「器形が時間的には軸になる」という考えから、文様よりも器形に重点を置き、「木島系統土器群」について塩屋式→上ノ山Z式→木島1段階→木島2段階の変遷を設定した。そして清水ノ上Ⅰ式が木島2段階の時期に相当し、分類した刺突文の比率から、清水ノ上Ⅰ式と木島2段階は地域差と結論付けた（下島2002）。

## 2 千葉県内における出土遺跡

千葉県において木島式土器が出土した遺跡は、これまで7遺跡報告されている。地域別にみると、東葛地区及び葛南地区の北西部地域が5遺跡、千葉地区の中央部地域が1遺跡、夷隅地区の南東部地域が1遺跡である（第8図、第1表）。遺跡の概略と、各遺跡から出土した木島式土器の特徴は以下のとおりである。

第1表 木島式土器の出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	石揚遺跡	柏市（旧沼南町）泉字石揚1254ほか	
2	二ツ木向台貝塚	松戸市二ツ木字向台534ほか	
3	幸田貝塚	松戸市幸田2丁目	
4	向台貝塚	市川市曾谷1丁目121-3ほか	
5	宮久保A遺跡	市川市宮久保2丁目20-22ほか	
6	弥三郎第2遺跡	千葉市緑区大椎町弥三郎2番地575ほか	
7	新田野貝塚	いすみ市（旧大原町）新田野字根畑138	

### (1) 柏市（旧沼南町）石揚遺跡（第9図）

柏市（旧沼南町）泉字石揚1254ほか

本遺跡は、手賀沼の南岸に面した標高20m～22mの台地上に位置する。平成元年（1989）12月から平成2年（1990）10月にかけて手賀の丘少年自然の家建設に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積28,000㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は早期後葉に属する条痕文系期の竪穴住居跡4軒・炉穴39基・土坑17基・陥穴21基、前期初頭に属する花積下層式期の竪穴住居跡21軒・土坑11基、前期



第8図 木島式土器出土遺跡の分布

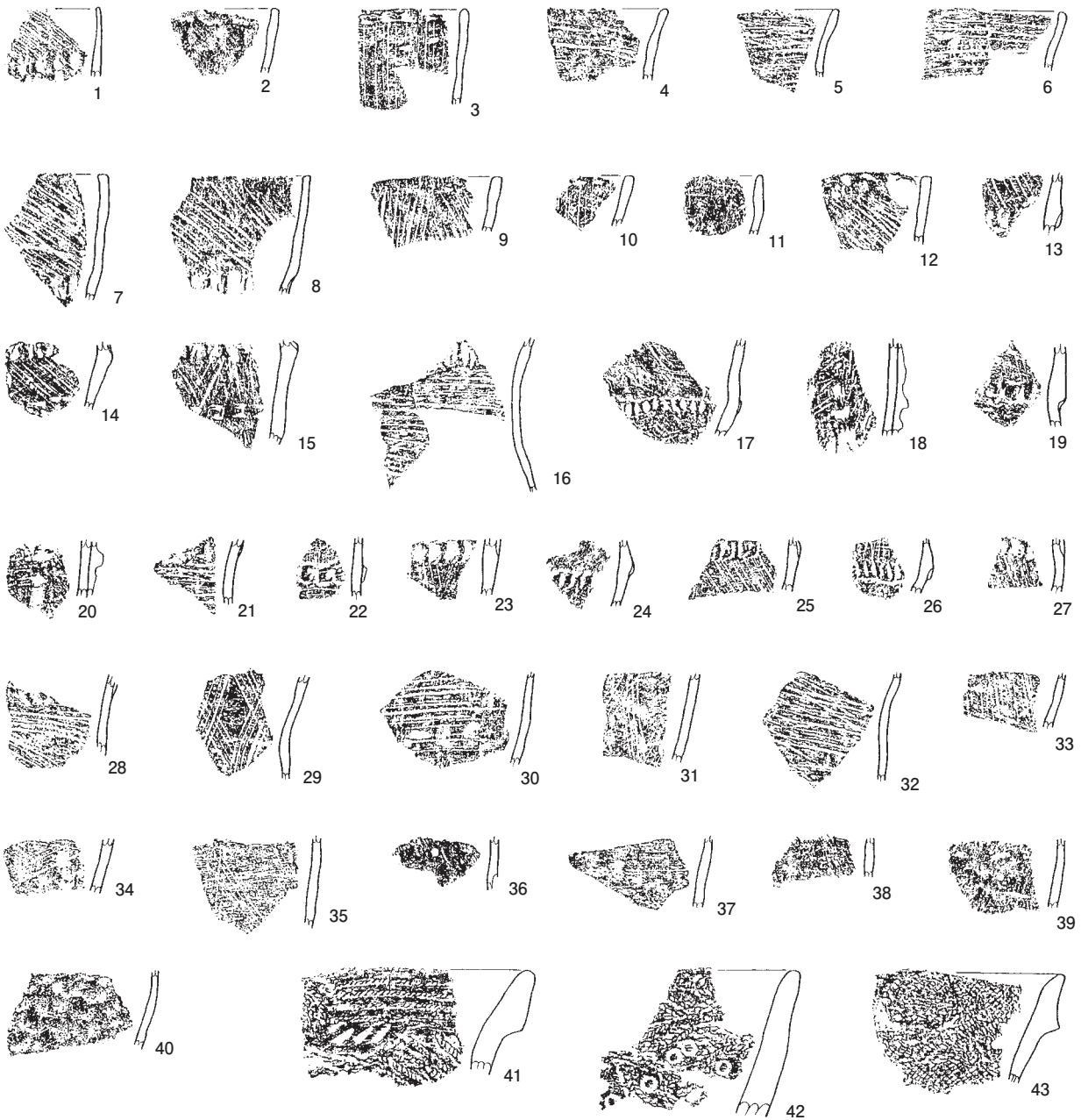
中葉に属する黒浜式期の竪穴住居跡1軒、中期後葉から後期初頭の竪穴住居跡2軒・土坑69基が検出された。

このような遺跡に、遺物包含層から木島式土器が出土している。1～40の特徴は、報文によれば「1～12は口縁部の破片である。いずれも極めてうすく、焼成は良好。縦ないしは斜め方向の条線と指頭圧痕文とを組み合わせる。口唇上は平らにそぎ落とされるものが多い。10・12の口唇部は、列点状のキザミが入る。13～40は胴部で、段状の屈曲を境に内湾するもの、ゆるやかに外反するものなどが見られる。屈曲部



分には指頭圧痕が配される。条線は斜めないしは横方向が多い。18は縦方向の隆帯が貼り付けられる」と観察されている（安井ほか 1994）。

今回胎土分析に供した資料は木島式土器（3・8）と、遺物包含層から出土した同時期併行の花積下層式土器（41～43）である。



第9図 柏市（旧沼南町）石揚遺跡

## (2) 松戸市二ツ木向台貝塚

松戸市二ツ木字向台534ほか

本貝塚は、東京湾に注ぐ江戸川中流左岸の標高約19mの台地斜面部に位置する。昭和25年（1950）に国道建設工事中において発見され、8月4日から9月16日にかけて日本考古学研究所により二ツ木第二貝塚<sup>1)</sup>の名称で発掘調査が実施された。調査の結果、貝層中より前期初頭に属する花積下層式期から前期前葉に属する関山式期の縄文土器が大量に出土した。そこで、「花積下層式と関山式との間に、その中間型式として、本貝塚から出土したとき一群（可能ならば二ツ木式）が介在するのではないか」と推察している。

このような遺跡に貝層から木島式土器が出土しており、報告書中の写真図版に3点掲載されている。しかし、土器片が小さいため、文様がはっきりしていない。ちなみに、木島式土器を鉤括弧書きで「指痕細線薄手土器」と別称している（篠遠・グロート1955）。

昭和25年（1950）9月24日に、岡田茂弘ら学習院高等科の学生たちが遺物の表面採集を実施している。この時、遺物の公表はされなかったが、後に千葉県史編さんに伴う資料調査により遺物の内容が報告された。それによると、早期前葉の撚糸文系土器と前期前葉の二ツ木式土器及び前期後葉の諸磯・浮島式土器が主体であった。しかし、木島式土器は採集されなかったようである（堀越ほか1998）。

昭和38年（1963）10月に、庄司克が遺跡踏査を行い、遺物の表面採集を実施している。その結果、早期前葉の稲荷原式土器・花輪台式土器・押型文土器、前期前葉の二ツ木式土器、前期中葉の黒浜式土器などの破片を採集した。また、少量の木島式土器を採集したようである。しかし、木島式土器は挿図や写真図版などで報告されていない（庄司・堀越1974）。

その後、昭和41年（1966）に国道6号線の道路拡張工事が行われ、一部破壊されてしまった。そこで、下総考古学研究会は同年5月24日に工事現場を訪れ、遺物の表面採集を実施している。その結果、早期前葉の撚糸文系土器と前期前葉の二ツ木式土器を主体とする破片を採集した。しかし、木島式土器は採集されなかったようである（江森1968）。

## (3) 松戸市幸田貝塚（第10～12図）

松戸市幸田2丁目

本貝塚は、江戸川中流で合流する坂川とその支流である藤川に囲まれた標高約19mの台地縁辺部に位置する。大山史前学研究所が昭和5年（1930）7月3日に本貝塚における最初の発掘調査を実施し、前期前葉の蓮田式土器を出土した（大山ほか1933）。

その後、矢島清作が前期前葉に属する関山式期の竪穴住居跡を発見する目的の学術調査として、昭和15年（1940）8月1日から昭和16年（1941）2月9日にかけて断続的に8回の発掘調査を実施した。調査の結果、予想に反して関山式期よりも古い、前期初頭に属する花積下層式期の竪穴住居跡が2軒検出された（矢島1941）。

それから30年後、松戸市教育委員会が史跡公園のための保存事業や区画整理事業などに伴い、昭和45年（1970）から平成14年（2002）にかけて断続的に17回の発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期初頭に属する花積下層式期が14軒、前期前葉に属する関山式期が140軒検出された（八幡ほか1971・1972・1973・1975a・1975b、大塚1977、大塚ほか1978・1979・1987・1989・1991、古里ほか1985・1986・1988、関山ほか1999・2004）。

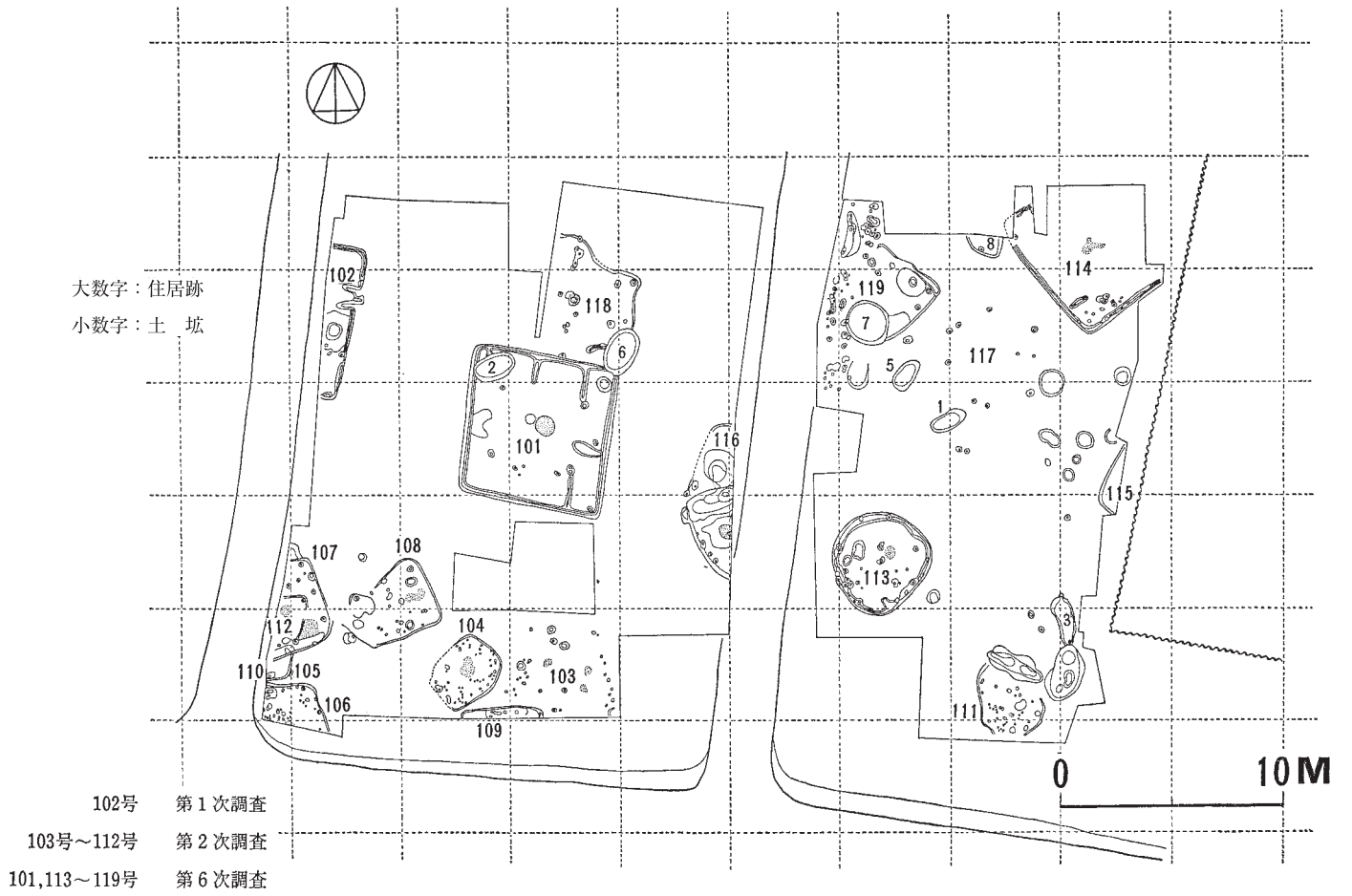
このような遺跡に、竪穴住居跡内から木島式土器が出土している。概要は以下のとおりである。

昭和46年（1971）の第2次調査において、花積下層式期の103・104号住居跡内に堆積していた貝層中から花積下層式土器と木島式土器を出土した。しかし、1～3がどちらの竪穴住居跡から出土したのか不明である。特徴は、報文によれば「1から3は、器壁に繊維を含まず、しかも薄手、堅緻な土器で、内外面の随所に製作時の指痕がみられる。文様は綾杉文状の細い沈線文を基調としている」と観察されている（八幡ほか 1972）。

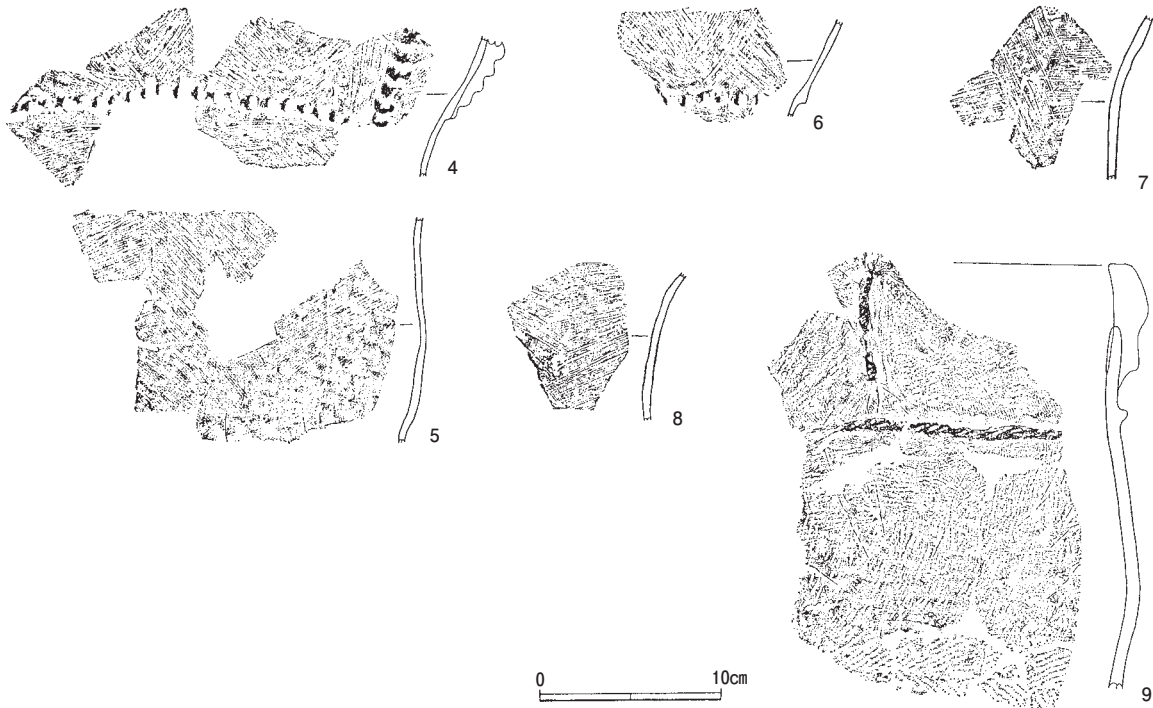
昭和51年（1976）の第6次調査において、花積下層式期の113号住居跡内に堆積していた貝層中から花積下層式土器と木島式土器を出土した。4～8の特徴は、報文によれば「胎土に繊維を含まず、薄手で堅緻な土器で、内外面の随所に製作時の指痕が見られる。文様は細い綾杉状沈線を基調としている。4は頸



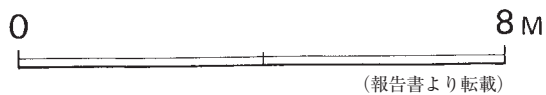
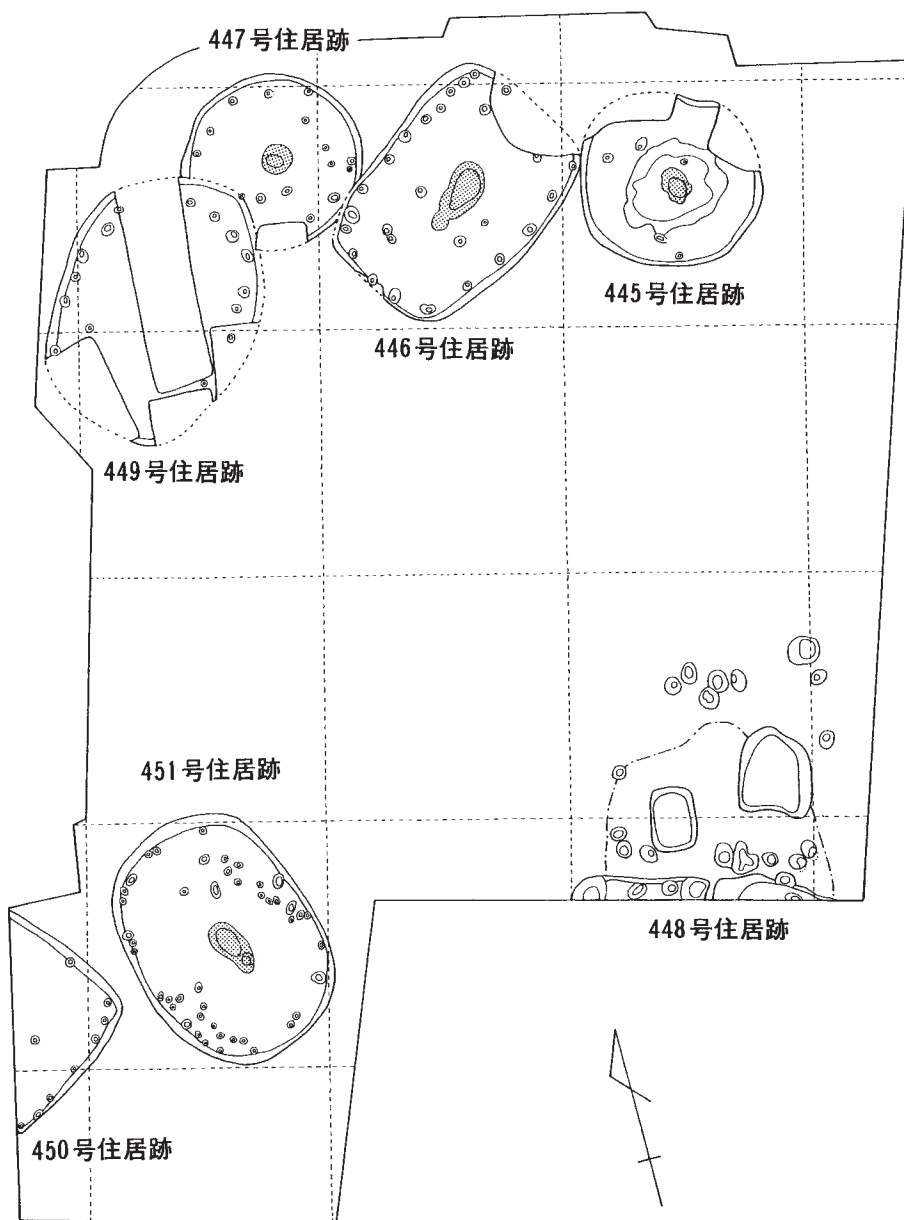
第10図 松戸市幸田貝塚（第2次調査）



(報告書より転載)



第11図 松戸市幸田貝塚 (第6次調査)



第12図 松戸市幸田貝塚 (第10次調査)

部に瘤状突起を貼り付け、口縁部より刻目を有した隆帯を頸部に向け貼り付けてある。器型は口縁部が外反し胴部がやや張り出した深鉢型土器である。4～8とも同一個体の破片である」と観察されている（大塚 1977）。

昭和59年（1984）の第10次調査において、446号住居跡内から木島式土器を出土した。10・11の特徴は、報文によれば「胎土に繊維を含まず、堅緻な土器で内外面に製作時の指痕が見られる。器壁は約4mmと非常に薄い。10は深鉢の口縁部で、口縁直下に半截竹管による連続刺突文が2段平行に廻っている」と観察されている（古里ほか 1985）。

分析資料は113号住居跡内から出土した木島式土器（6～8）と、同住居跡から出土した同時期併行の花積下層式土器（9）である。

#### (4) 市川市向台貝塚（第13図）

市川市曾谷1丁目121-3ほか

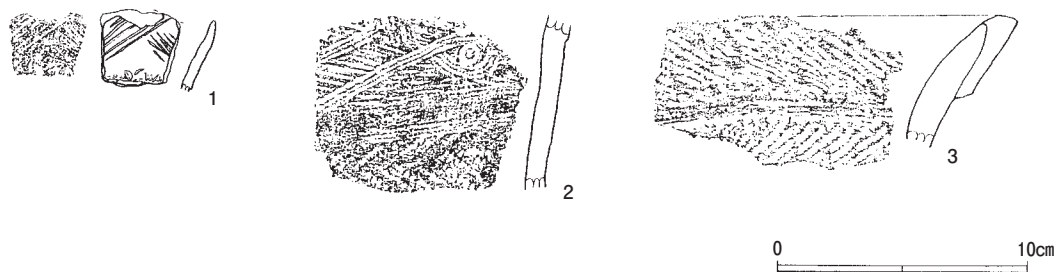
本貝塚は、東京湾に注ぐ真間川の支流である国分川左岸の標高約20mの台地上に位置する。昭和42年（1967）6月1日から7月10日にかけて学術調査として、明治大学考古学研究室により発掘調査が実施されたが、発掘調査報告書は未刊である。しかし、『市川市史』において、前期から中期の竪穴住居跡35軒・小竪穴30基等が検出されたとの報告がある（杉原・戸沢 1971）。

その後、市川市教育委員会が住宅建て替えのための事前調査として、平成4年（1992）から平成11年（1999）にかけて断続的に5回の発掘調査を実施した（松本ほか 1994、堀越ほか 1999）。

昭和42年（1967）から平成11年（1999）にかけて断続的に調査された成果は、縄文時代の主な遺構が前期から中期の竪穴建物跡<sup>2)</sup> 42軒、中期中葉から後葉の小竪穴48基確認された。

このような貝塚に、遺構外から木島式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「折返し口縁の下端に『ハ』の字状の爪形文を施し、櫛歯状工具を用いた条線文で文様を描いている」と観察されている（堀越ほか 1999）。

分析資料は木島式土器（1）と、遺構外から出土した同時期併行の花積下層式土器（2・3）である。



第13図 市川市向台貝塚

#### (5) 市川市宮久保A遺跡<sup>3)</sup>

市川市宮久保2丁目20-22ほか

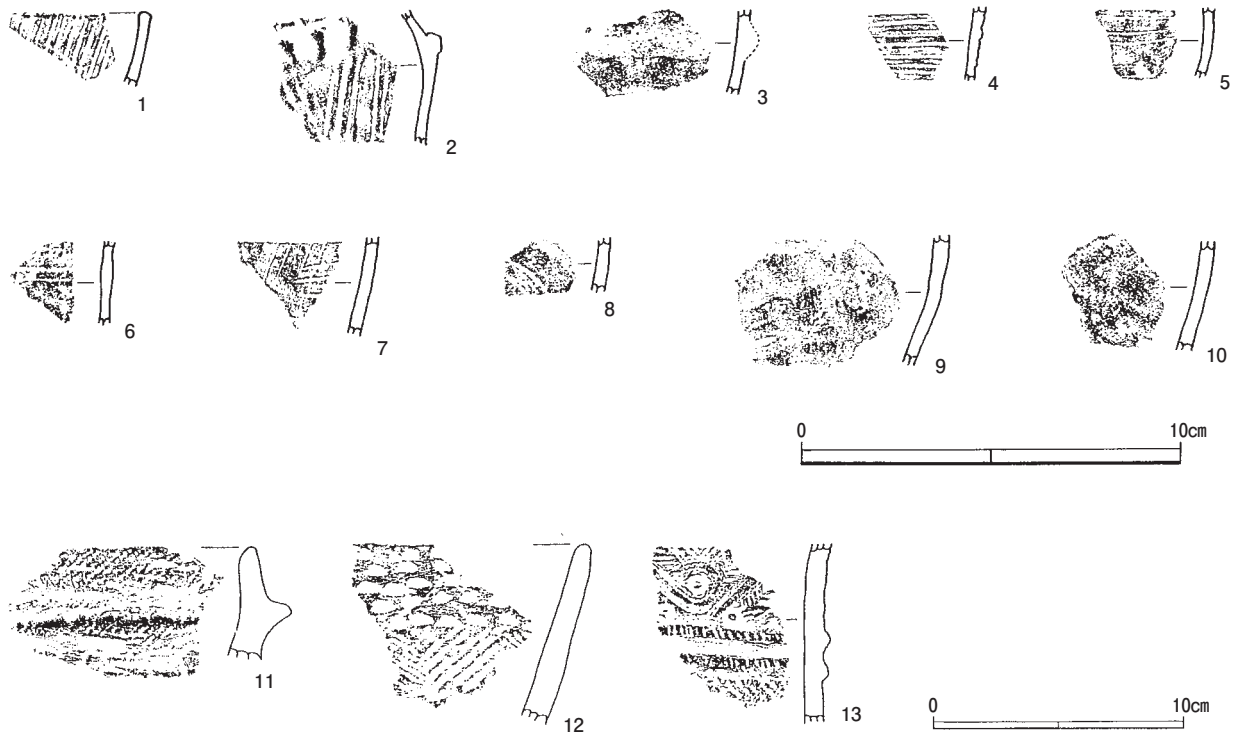
本遺跡は、東京湾に注ぐ真間川の支流である国分川左岸の標高約20mの台地先端部に位置する。加藤明秀が「静岡縣に於ける細線紋指痕薄手土器と其伴出石器」（加藤・芹澤 1936）の中で本遺跡を紹介し、木島式土器の出土を記載している。しかし、現在、遺跡は消滅している。

(6) 千葉市弥三郎第2遺跡 (第14図)

千葉市緑区大椎町弥三郎2番地575ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ村田川上流右岸の標高80m~90mの台地上に位置する。昭和55年(1980)5月22日から10月23日にかけて土地区画整理事業に伴い、千葉市土気地区遺跡調査会により面積3,000㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は早期後葉に属する茅山上層式期の竪穴住居跡1軒・早期後葉から前期初頭の陥穴5基・土壙10基が検出された。

このような遺跡に、遺構外から木島式土器20点が出土している。1~10の特徴は、報文によれば「同一個体と考えられる資料で、1は唯一の口縁部破片である。外反する平口縁で、文様は斜行してヘラ状工具による平行する細線が施されている。2・3は、凸帯が貼付された破片で、凸帯上には指圧痕が認められる。また4~8の胴部破片の器面には縦・横ないし斜行する細線文が施され、9・10は器面祖佐川に指頭圧痕が目立つ資料である。器厚は全体に薄く、3~4mmを側っている。胎土には僅かな繊維のほか砂粒が多く含まれ、焼成は概して良好といえる」と観察されている(寺門ほか1992)。



第14図 千葉市弥三郎第2遺跡

## (7) いすみ市（旧大原町）新田野貝塚

いすみ市（旧大原町）新田野字根畑138

本貝塚は、夷隅川中流で合流する落合川支流の新田野川左岸の自然堤防上に位置する。昭和45年（1970）8月10日から25日にかけて学術調査として、立教大学考古学研究会により発掘調査が実施された。調査の結果、遺構は検出できなかったが、前期初頭の花積下層式土器が大量に出土した。

このような貝塚に、遺構外から木島式土器が20点ちかく出土している。それらの特徴は、報文によれば「器肉はうすく3mm前後で、黄褐色を呈している。いずれも小破片で、器形をうかがうことはできない」と観察されている（武井ほか1975）。

## 第2節 北白川下層式土器

北白川下層式土器は前期に帰属する土器群で、京都府北白川小倉町遺跡を標式遺跡とし、関西地方を中心に関東地方にまで分布している。その特徴は薄手で、文様が条痕文+爪形文、縄文+爪形文、縄文+特殊突帯文の構成である。

### 1 研究略史

北白川下層式土器が初めて登場するのは大正7年（1918）、浜田耕作が大阪府国府遺跡から出土した土器を「原始縄紋土器」として紹介したことによる（濱田1918）。また昭和9年（1934）、羽館易が中心となって北白川小倉町遺跡を発掘調査し、調査に携わった小林行雄が翌年に、「下層に縄文、爪形文等を主とする相似た形を持つ<sup>ママ</sup>土器様式」を主体に包含していると報告した（小林ほか1935）。そのような事象を鑑み、山内清男は昭和12年（1937）に「国府北白川1式」を設定し、前期後葉に位置付けた（山内1937）。

その後「北白川下層式」と名称が替わり、編年研究は多くの研究者によって細分されていくことになった。各研究者の見解は以下のとおりである。

小島俊次は昭和31年（1956）、北白川下層式土器群を4型式に細分し、北白川下層Ⅰ式が「縄文が器面にあらわれないで、器の内外面に貝殻腹縁による条痕が横走し、爪形文のみが間隔も雑多にほどこされたもの」、北白川下層Ⅱ式が「Ⅰ式と同様に二枚貝の腹縁によったと見られる爪形文で、前者より幅広く、細い爪形文を連続的に、最も密に並べたもの」、北白川下層Ⅲ式が「口縁に近く数帯の爪形文を密にめぐらし、下方に羽状縄文を印するもの」、北白川下層Ⅳ式が「爪形を相当な間隔を置いて直接、あるいは二本の平行線の間数条の爪形文をほどこしたもの」とした（小島1956）。

鎌木義昌は昭和31年（1956）、「北白川下層式土器の古い様相」が羽島下層Ⅲ式に併行するとし（鎌木・木村1956）、昭和34年（1959）に、北白川下層式を三細分し、北白川下層Ⅰ式が「条痕のある丸底土器で、爪形状の刺突文、圧痕文がおもな文様であり、縄文はみられない」もの、北白川下層Ⅱ式が「平底で、条痕は帯びない。形は口のひらいた深鉢が多く、文様は上部に刺突状爪形文か連続爪形文がほどこされ、下半は斜縄文か羽状縄文となっている」もの、北白川下層Ⅲ式が「ほとんど全面に縄文がほどこされた凸帯文ある」ものとした（鎌木1959）。しかし、同書において江坂輝弥が作成した巻末の一覧では四細分され、しかも表記が北白川下層Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅳ式となっており、統一性がないようだ（江坂1959）。昭和40年（1965）には、「縄文式土器編年表」で北白川下層Ⅰ式、Ⅱa式、Ⅱb式、Ⅱc式、Ⅲ式に細分している。そして、関東地方の各型式との併行関係では、北白川下層Ⅰ式が黒浜式・植房式、北白川下層



Ⅱ a 式が水子式、北白川下層Ⅱ b・Ⅱ c 式が諸磯 a 式、北白川下層Ⅲ 式が諸磯 c 式に当てている（鎌木 1965）。ここでも、同書の中で「近畿」を担当した岡田茂弘と細分が異なっており（岡田 1965）、見解が不統一である。

森川昌和は、昭和37年（1962）に同志社大学と立教大学が発掘調査した福井県鳥浜貝塚から出土した土器をもとに、翌年、層位的観点から鳥浜Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅳ式を設定し、鳥浜Ⅰ式が北白川下層Ⅰ式、鳥浜Ⅲ式が北白川下層Ⅱ式に併行することを考察した（森川 1963）。

岡田茂弘は昭和40年（1965）、鳥浜貝塚の出土土器を検討し、北白川下層Ⅰ a 式、Ⅰ b 式、Ⅱ a 式、Ⅱ b 式、Ⅱ c 式、Ⅲ 式に細分した。それぞれの特徴は、北白川下層Ⅰ a 式が「施文原体管外側によるD字形爪形文と刺突文からなる」もの、北白川下層Ⅰ b 式が「管内側によるC字形爪形文がくわわった」もの、北白川下層Ⅱ a 式が「連続爪形文を主にする」もの、北白川下層Ⅱ b 式が「C字形爪形文を主にする」もの、北白川下層Ⅱ c 式が「突帯上に刻目文または縄文をほどこした」もの、北白川下層Ⅲ 式が「羽状縄文または斜縄文を地文とし、いわゆる特殊突帯文をつけた平底」のものとした（岡田 1965）。

網谷克彦は、昭和47年（1972）と昭和50年（1975）に発掘調査された鳥浜貝塚の出土土器を整理し、昭和54年（1979）に「文様を中心に層位知見を加えて12群に型式分類した」。それによると、「内外面を二枚貝条痕で調整し、爪形文を施文する」第4群土器を北白川下層Ⅰ式土器、「口縁部に連続爪形文帯をもち、胴部に縄文を施文する」第6群土器を北白川下層Ⅱ a 式土器、「口縁部に爪形文帯をもち、胴部に縄文を施す」第7群土器を北白川下層Ⅱ b 式土器、「突帯文と縄文を併用する」第9群土器を北白川下層Ⅱ c 式土器とし、型式編年が北白川下層Ⅰ式→北白川下層Ⅱ a 式→北白川下層Ⅱ b 式・Ⅱ c 式に変遷することを確認した（網谷ほか 1979）。さらに昭和56年（1981）、爪形文の分類によって、北白川下層Ⅰ式はD字形爪形文を北白川下層Ⅰ a 式に、C字形（連続形）爪形文を北白川下層Ⅰ b 式に細分した。また、岡田が型式設定した北白川下層Ⅰ a 式は、羽島下層Ⅱ式併行と北白川下層Ⅰ a 式に分類できることを層位的事象から実証した。このときの羽島下層Ⅱ式併行土器とは、文様が「2連規制の働く刺突文」を特徴とし、「爪形文に先行する」ものと説明している（網谷 1981）。さらに研究を進展させ、昭和57年（1982）に、北白川下層Ⅰ式が「羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅰ a 式、北白川下層Ⅰ b 式の3型式に細分される」と論究した。ちなみに、北白川下層Ⅱ式については岡田編年の三細分を継承している（網谷 1982）。

南久和は昭和14年（2002）、前期の編年を五期に分けている。その中で、21期（花積下層併行）土器群が鳥浜Ⅰ式、22期（関山併行）土器群が鳥浜Ⅱ式、23期（黒浜併行）土器群が鳥浜Ⅲ式、24期前半（諸磯 a 併行）土器群が北白川下層Ⅱ b 式、24期後半（諸磯 b 併行）土器群が北白川下層Ⅱ c 式に設定した。そして22期（関山併行）土器群＝鳥浜Ⅱ式は羽島下層Ⅱ式併行型式とし、網谷が細分した羽島下層Ⅱ式と北白川下層Ⅰ a 式を包括している。さらに23期（黒浜併行）土器群＝鳥浜Ⅲ式は網谷が設定した北白川下層Ⅰ b 式と北白川下層Ⅱ a 式を含むものとしている（南 2002）。

## 2 千葉県内における出土遺跡

千葉県内において北白川下層式土器は、これまで14遺跡報告されている。地域別にみると、東葛地区及び葛南地区の北西部地域が6遺跡、印旛地区・千葉地区・君津地区の中央部地域が6遺跡、夷隅地区の南東部地域が1遺跡、安房地区の南部地域が1遺跡である（第15図、第2表）。遺跡の概略と、各遺跡から出土した北白川下層式土器の特徴は以下のとおりである。



第15図 北白川下層式土器出土遺跡の分布

第2表 北白川下層式土器の出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	北前貝塚	野田市堤台字北前	北白川下層Ⅱb式土器
2	上台貝塚	市川市中国分5-556-1ほか	北白川下層Ⅱa式土器
3	庚塚遺跡	市川市曾谷2-366-1ほか	北白川下層Ⅱb式土器
4	法蓮寺山遺跡	船橋市藤原町1-225-4ほか	北白川下層Ⅰ式土器
5	古和田台遺跡	船橋市高根町字古和田台955-6	
6	一本桜遺跡	印西市木刈5丁目	北白川下層Ⅱc式土器
7	木戸先遺跡	四街道市鷹の台2丁目1243-1ほか	
8	五味ノ木遺跡	千葉市稲毛区萩台町360-4ほか	
9	有吉北貝塚	千葉市緑区有吉町730ほか	北白川下層Ⅱc式土器
10	バクチ穴遺跡	千葉市緑区大金沢町	北白川下層Ⅱc式土器
11	文六第1遺跡	千葉市緑区小食土町1165番地13ほか	北白川下層Ⅱc式土器
12	豆作台遺跡	袖ヶ浦市代宿8番地	北白川下層Ⅱc式土器
13	上長者台遺跡	勝浦市松部字上長者台	北白川下層Ⅱc式土器
14	加茂遺跡	南房総市(旧丸山町)加茂字神門1	

(1) 野田市北前貝塚 (第16図)

野田市堤台字北前

本貝塚は、東京湾に注ぐ江戸川上流左岸の標高約15m～16mの台地上に位置する。昭和42年(1967)5月18日から31日にかけて学術調査として、野田市郷土博物館により発掘調査が実施された。調査の結果、早期後葉に属する子母口式期の炉穴1基、前期後葉に属する浮島Ⅰ式期の竪穴住居跡2軒が検出された。

このような貝塚に、浮島Ⅰ式期の第1号住居址内から北白川下層Ⅱb式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「3mm巾の平行線を描き、その上に右開きの爪形文を同じ施文具でつけている。爪形は1mmぐらいの深さである。一条目と二条目の間はベニガラが塗られ、におい朱色をしている。胎土は小石や石英などを含み、よくしまつて焼成もよい。土器片全体がクリームに近い色で、厚さは5mmである」と観察されている(村田ほか1979)。

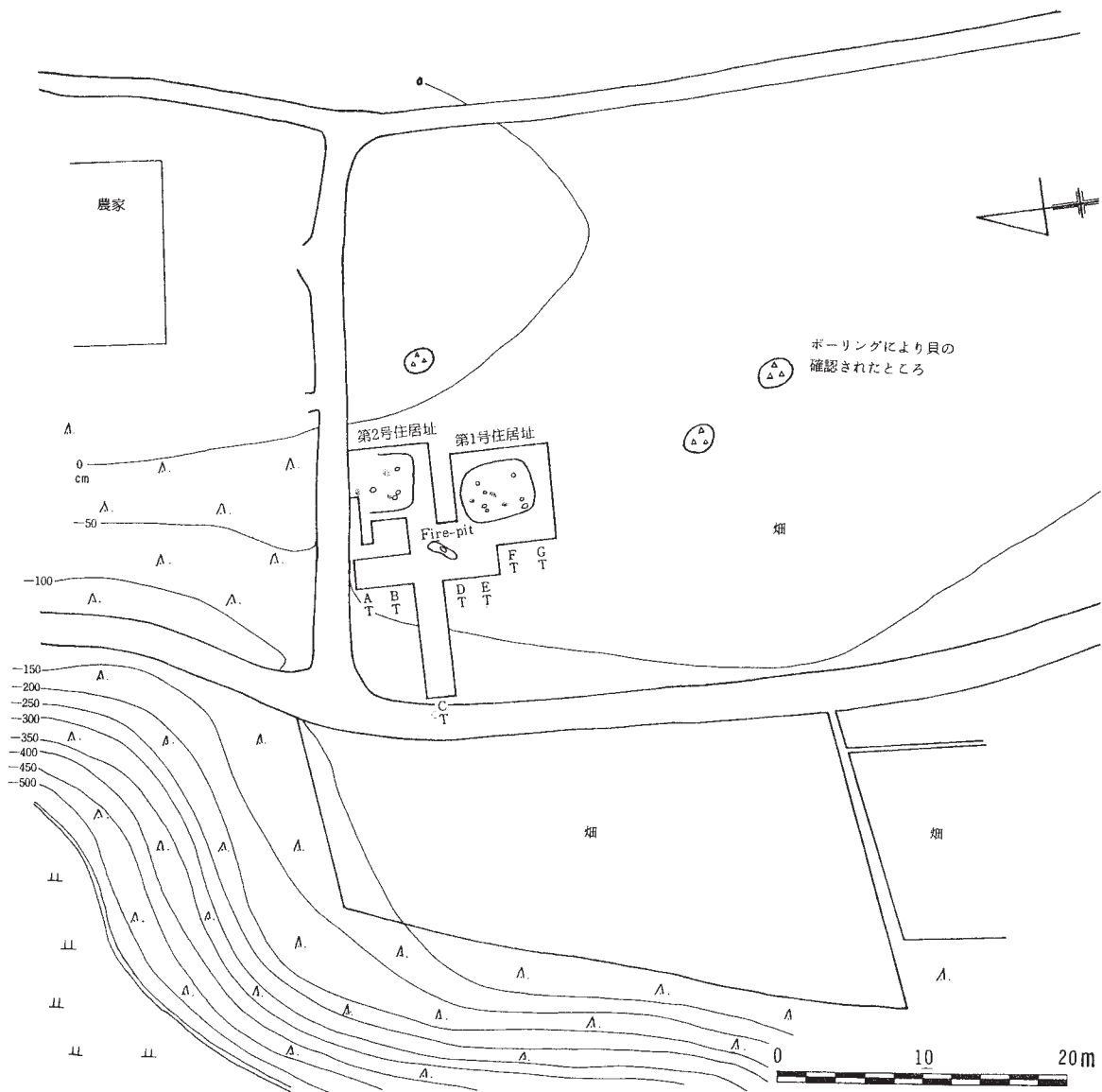
(2) 市川市上台貝塚<sup>4)</sup> (第17図)

市川市中国分5-556-1ほか

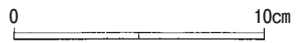
本貝塚は、東京湾に注ぐ真間川の支流である国分川右岸の標高約23mの台地縁辺部に位置する。昭和9年(1934)4月に、稲生典太郎がこの地を訪れ、遺物の表面採集を実施している。その結果、前期前葉の蓮田式土器と前期後葉の諸磯式土器の破片を採集した。しかし、北白川下層式土器は採集されなかったようである(宮崎・稲生1935)。

昭和32年(1957)5月24日から29日にかけて学術調査として、早稲田大学考古学研究室により発掘調査が実施された。調査の結果、前期中葉に属する黒浜式期の竪穴住居跡1軒、前期後葉に属する諸磯a式期の竪穴住居跡1軒が検出された(西村1961・1963)。

その後、昭和41年(1966)11月25日から12月3日にかけて市史編纂事業の一環として、明治大学考古学研究室により面積512㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、前期後葉に属する諸磯a式期の竪穴住居



(報告書より転載)



第16図 野田市北前貝塚

跡1軒、諸磯b式期の竪穴住居跡2軒が検出された（杉原・戸沢 1971、堀越 1988）。

このような貝塚に、表土層から北白川下層Ⅱa式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「厚さは、薄い部分で2.6mm、厚い部分で4mmを測る。外面の色調は赤褐色、内面は黒色で、胎土には黄白色の微粒子が含有されている。連続爪形文の施文は浅く、しかも浮島式の波状貝殻文のように、千鳥状に支点を変えて爪形文を施文している。条痕調整の欠如により、北白川下層Ⅰ式ではなく、北白川下層Ⅱa式くらいに比定できよう」と観察されている（堀越 1988）。



第17図 市川市上台貝塚

### (3) 市川市庚塚遺跡（第18図）

市川市曾谷2-366-1ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ真間川の支流である大柏川右岸の標高約23mの台地上に位置する。昭和37年（1962）に学術調査として、明治大学考古学研究室により発掘調査が実施された。これが本遺跡における最初の発掘調査である。調査の結果、前期中葉の黒浜式期に属する竪穴住居跡が2軒検出された（杉原・戸沢 1971）。

平成元年（1989）5月31日から8月31日にかけて土地分譲に伴い、市川市教育委員会により面積268㎡の確認調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は前期の竪穴住居跡5軒・土坑1基が確認された（田中 1990）。

その後、平成8年（1996）2月6日から3月7日と、5月26日から8月30日にかけて農地造成に伴い、市川市教育委員会により断続的に発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期古段階のものが1軒、黒浜式期中段階のものが1軒、黒浜式期新段階～前期後葉に属する諸磯a式期古段階のものが2軒検出された（植月ほか 1997）。

このような遺跡に、諸磯a式期新段階～諸磯b式期古段階を主体とする時期の貝層Bの中から北白川下層Ⅱb式土器2点が出土している。報文によれば、1の特徴は「爪形が異質で器壁が薄く、色調は乳白色を呈する」とし、2の特徴は「直線的に立ち上がる部分と屈折した部分が明瞭な胴部破片である。器厚は5～8mmと薄く、胎土はきめの細かい粘土質を主体とした小礫を微量に含んでおり、色調は表裏面共に灰褐色である。文様は直線的に立ち上がる部分は竹管文により区画された変形木葉文モチーフが横方向に展開され、区画内に縄文を施文し区画外を磨消した磨消縄文帯とし、屈折した部分には縄文が施文されている。そして磨消部分には赤色顔料の塗布が認められる」と観察されている（植月ほか 1997）。

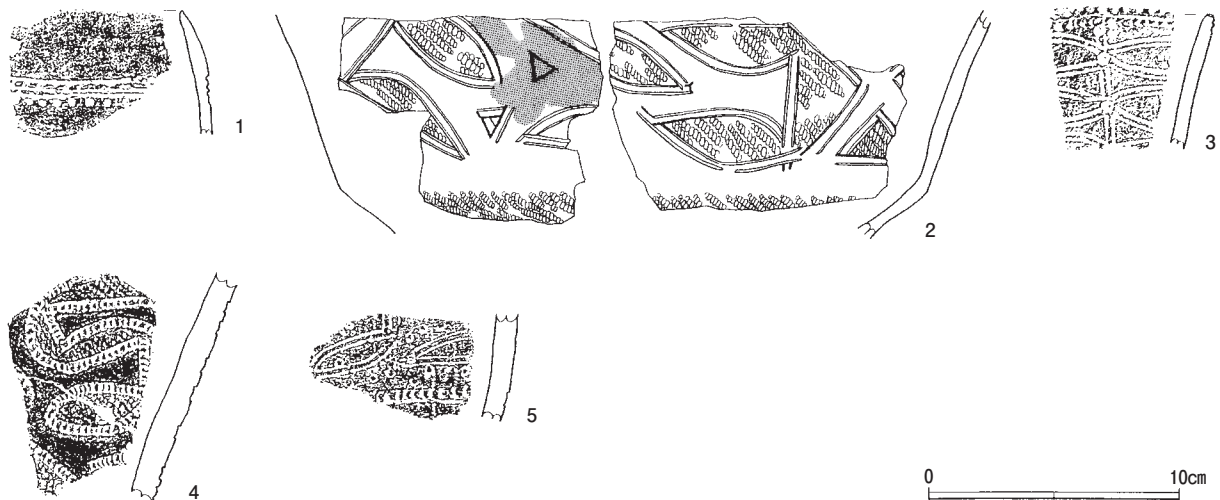
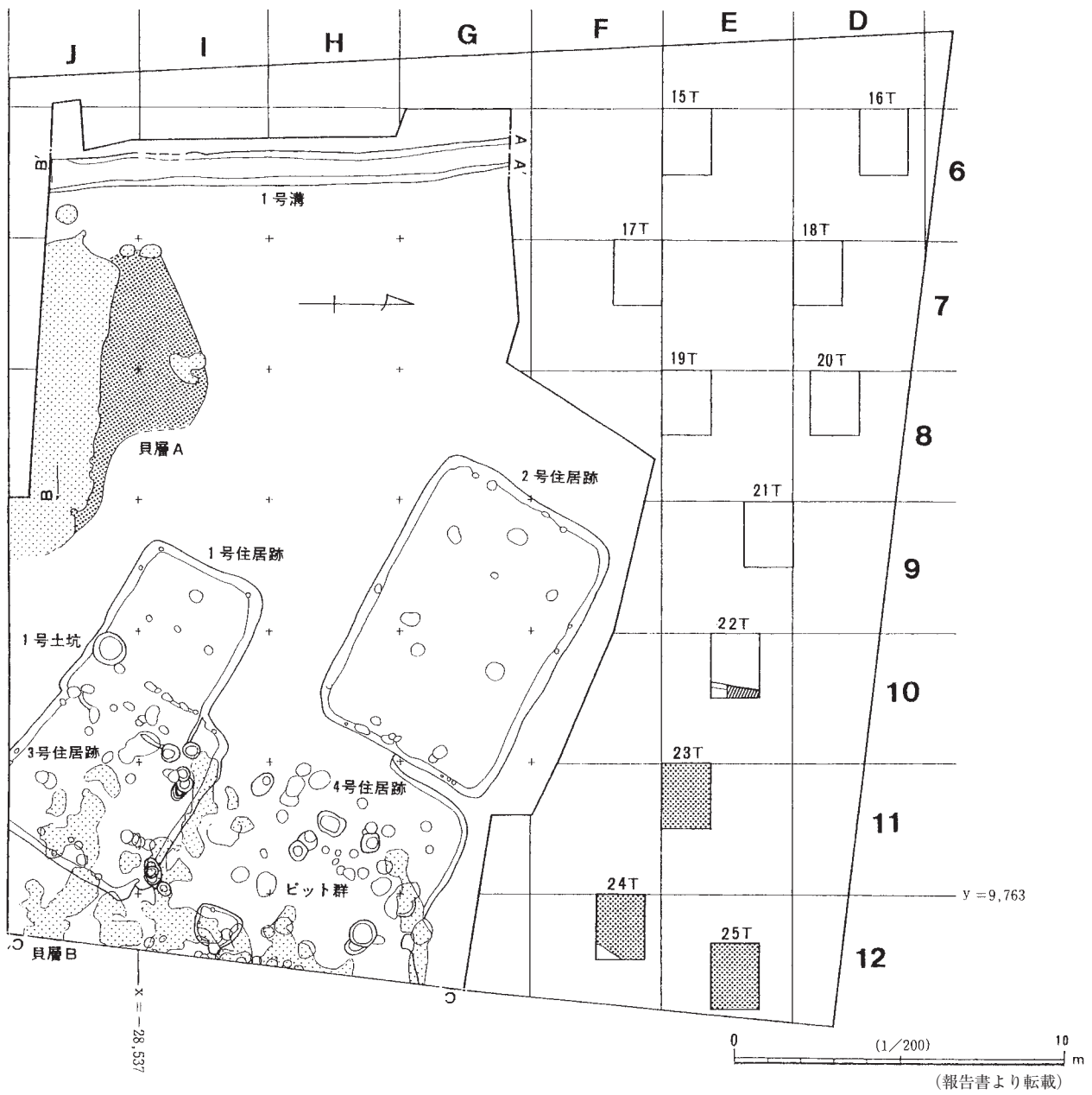
分析資料は北白川下層Ⅱb式土器（1・2）と、同貝層から出土した同時期併行の諸磯a式土器（3～5）である。

### (4) 船橋市法蓮寺山遺跡（第19図）

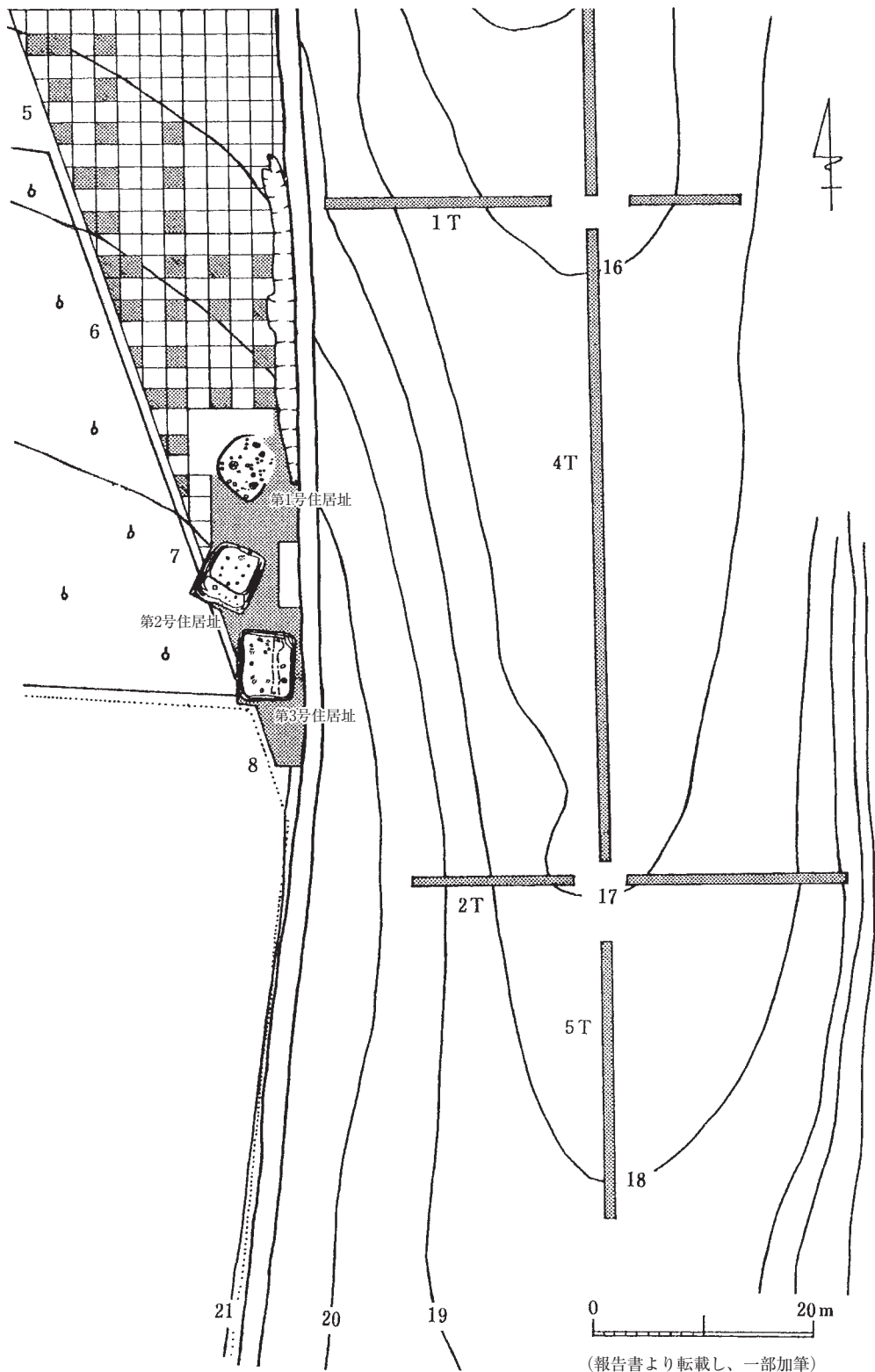
船橋市藤原町1-225-4ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ真間川の支流である大柏川左岸の標高12m～21mの台地縁辺部に位置する。昭和47年（1972）7月14日から9月21日にかけて小金線建設工事に伴い、（財）千葉県都市公社により発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は前期中葉に属する黒浜式期の竪穴住居跡2軒、前期後葉に属する諸磯式期の竪穴住居跡1軒が検出された。

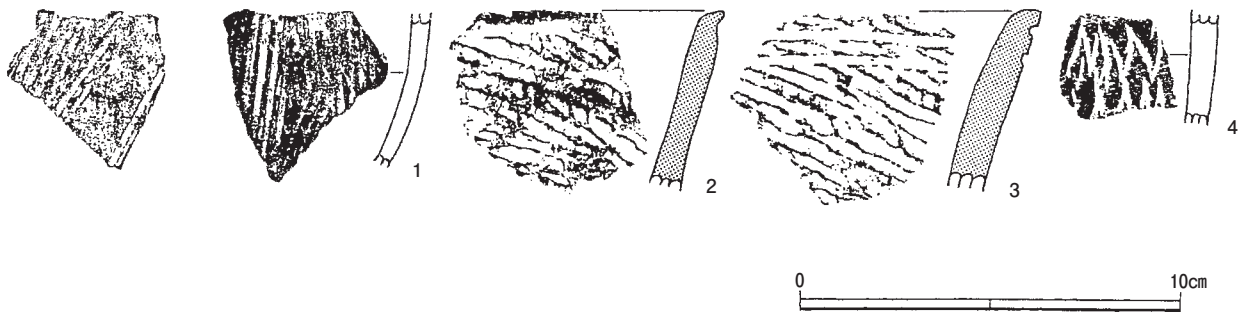
このような遺跡に、黒浜式期の第2号住居址内から北白川下層Ⅰ式土器が1点出土している。その特徴



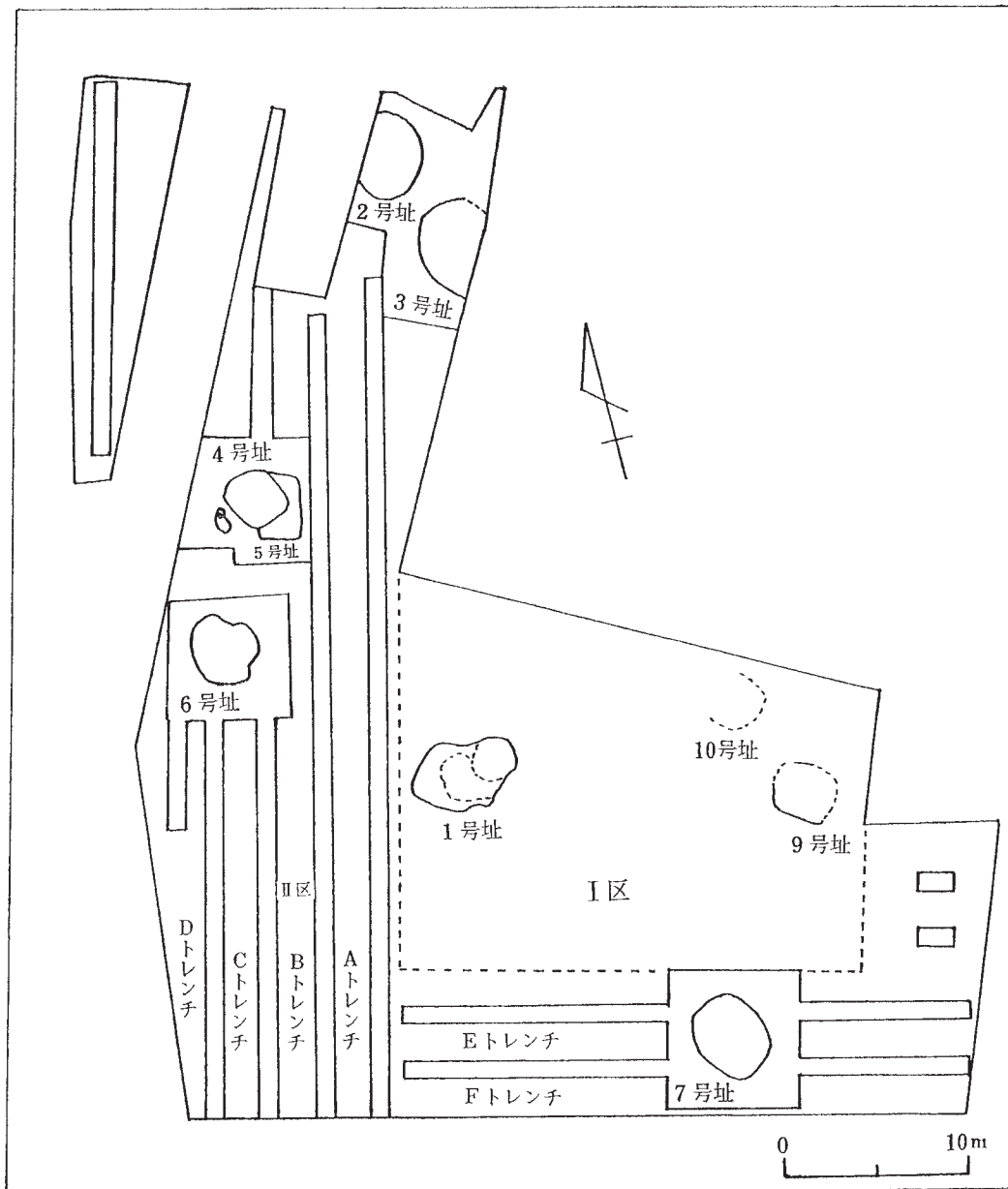
第18図 市川市庚塚遺跡



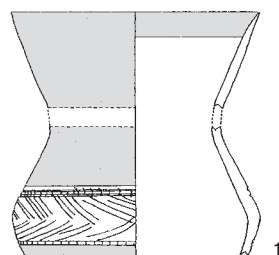
(報告書より転載し、一部加筆)



第19図 船橋市法蓮寺山遺跡



(報告書より転載)



0 10cm

第20図 船橋市古和田台遺跡



は、報文によれば「内外面に貝殻条痕の認められる極めて薄手の土器である。胎土に繊維の混入なく、焼成良好、堅緻である。表面黒褐色、内面黒色を呈する」と観察されている（宮入ほか1973）。

分析資料は第2号住居址の床面付近から出土した北白川下層Ⅰ式土器（1）・黒浜式土器（2）と、同住居址の混貝土層から出土した黒浜式土器（3）・浮島式土器（4）である。

#### (5) 船橋市古和田台遺跡（第20図）

船橋市高根町字古和田台955-6

本遺跡は、東京湾に注ぐ海老川上流左岸の標高約26mの台地上に位置する。昭和46年（1971）3月11日から25日にかけて小学校建設工事に伴い、船橋市教育委員会のもと古和田台遺跡調査団が結成され、面積約1,550㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、前期後葉に属する諸磯b式期の竪穴住居跡1軒、前期後葉に属する浮島Ⅲ式期の竪穴住居跡3軒・土壇2基、前期末葉に属する興津式期の竪穴住居跡4軒、時期不明の竪穴状遺構1基が検出された。

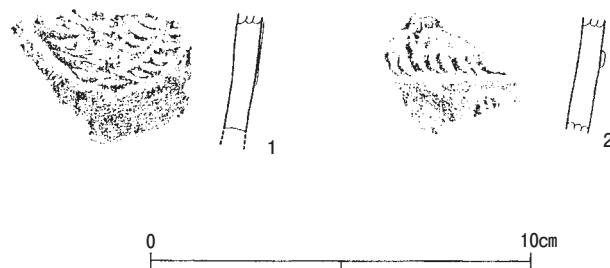
このような遺跡に、諸磯b式期の第2号住居址内と浮島Ⅲ式期の第3号住居址内から同一個体の北白川下層式土器と思われる破片が数点出土している。その特徴は、報文によれば「器形は、胴部が『く』の字状に内彎する平縁の土器である。口縁部の断面は、内面がしだいに薄くなる片刃状を呈し、非常に薄く、小孔が一つ穿たれている。この小孔は、焼成前に表面より、焼成後に内面より穿たれたものである。胎土は灰黄色の精製された緻密な粘土が用いられ、焼成はあまり堅緻とはいえない。内面には横位の整形痕を残すが、表面、内面ともに丁寧な仕上げである。文様構成は、屈曲部に限られ、半截竹管による平行沈線が綾杉状に施文され、その下に爪形文が文様帯を区画するように施文されている。赤色顔料による彩色は、この文様帯を除き、全面に施され、口縁部内側にも及ぶ。彩色の施された面は光沢を帯びている」と観察されている。

この土器をX線粉末回折によって胎土分析を実施した結果、「赤色塗彩土器と他の土器、又、型式を異にする土器の胎土には差がなく、おそらく遺跡周辺の入手が簡単な所から粘土を採取したものであり、用途などの違いによってとくに粘土の選択は行っていないであろう。但し、肉眼による観察によれば赤色塗彩土器の胎土は他の土器の胎土に比較して非常に細かく、何らかの方法を用いて粘土を細かくするような操作が行われた可能性がある」と推察している。また、赤色顔料は「鉛丹」と分析されている（溝井ほか1973）。

#### (6) 印西市一本桜遺跡（第21図）

印西市木刈5丁目

本遺跡は、印旛沼に注ぐ神崎川中流左岸の標高約20mの台地上に位置する。昭和47年（1972）1月21日から4月28日にかけて千葉ニュータウン造成事業に伴い、(財)千葉県都市公社により面積17,000㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、前期前葉に属する関山式期又は中葉に属する黒浜式期の竪穴住居跡1軒、前期後半の土壇1基、前期末葉に属する興津式期の竪穴住居跡1軒、時期不明の土壇2基が検出された。



第21図 印西市一本桜遺跡

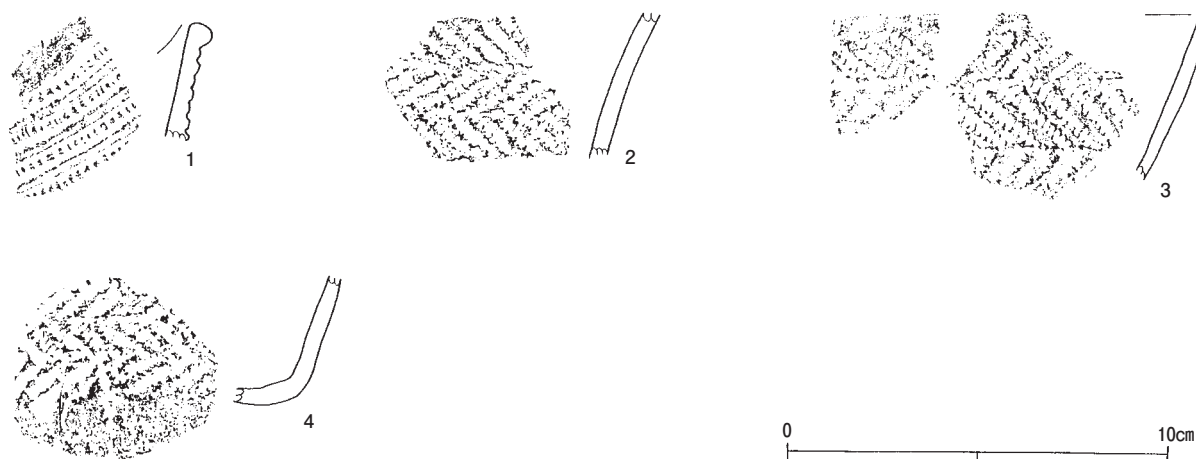
このような遺跡に、遺構外から北白川下層Ⅱc式土器が2点出土している。それらの特徴は、報文によれば「器壁が4～5mmを計り、器面の表裏を丹彩（ベニガラ）した土器で、貼付による突帯文には刻目文が施文されており、…中略…。土器の胎土は石英、小礫の混入がみられるが、古墳時代の須恵器の如く、焼成の良好な土器である」と観察されている（中山ほか1973）。

(7) 四街道市木戸先遺跡（第22図）

四街道市鷹の台2丁目1243-1ほか

本遺跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川中流左岸の標高約30mの台地上に位置する。平成2年（1990）4月1日から平成3年（1991）3月31日にかけて御成台団地宅地造成事業に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期後半のものが8軒検出された。

このような遺跡に、遺物包含層から北白川下層式土器が4点出土している。1～4の特徴は、報文によれば「1は爪形文が4条施文された波状口縁の破片で、薄手の丁寧な作りである。胎土には銀色の雲母が少量含まれている。2・3は同一個体とみられ、0段多条の単節縄文で羽状縄文を作り出している。3には銀色の雲母が目立っている。4は底部破片である。やはり薄手の作りで、丸底気味の形態である。2次焼成を受けている。2・3と同一個体の可能性もある」と観察されている（高橋ほか1994）。

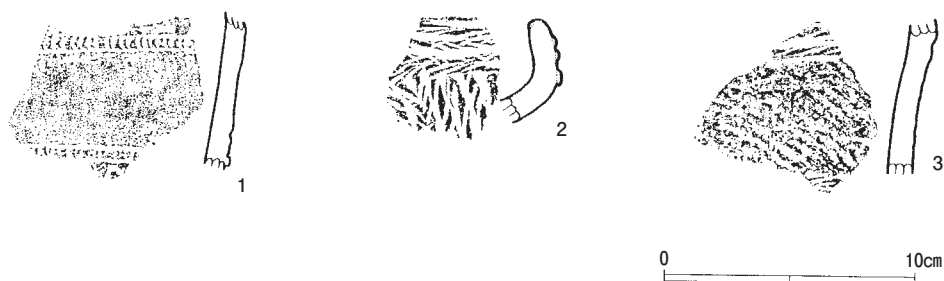


第22図 四街道市木戸先遺跡

(8) 千葉市五味ノ木遺跡（第23図）

千葉市稲毛区萩台町360-4ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ都川下流で合流する葭川右岸の標高25m～29mの台地上に位置する。昭和57年



第23図 千葉市五味ノ木遺跡

(1982) 10月1日から昭和58年(1983) 2月23日にかけて千葉都市モノレール建設に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積4,100㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は中期の土壇1基、後期の竪穴住居跡1軒が検出された。

このような遺跡に、遺構外から北白川下層式土器に類するものが1点出土している。その特徴は、報文によれば「爪形文が施されている」と観察されている(池田ほか1986)。

分析資料は北白川下層式土器(1)と、遺構外から出土した同時期併行の諸磯b式土器(2・3)である。

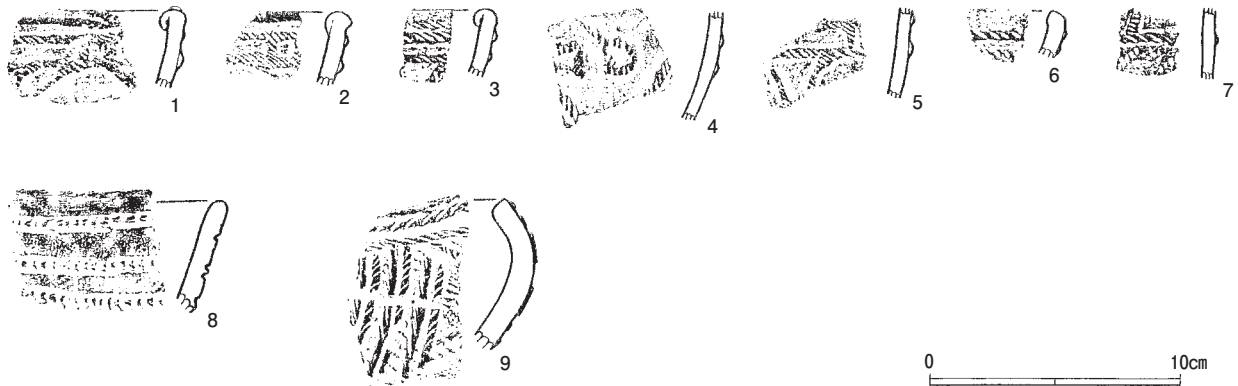
(9) 千葉市有吉北貝塚(第24図)

千葉市緑区有吉町730ほか

本貝塚は、東京湾に注ぐ村田川中流右岸の標高約35mの台地上に位置する。昭和59年(1984) 4月1日から昭和62年(1987) 11月16日にかけて千葉東南部地区土地区画整理事業に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積29,030㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は早期の炉穴8群25基、早期～前期の陥穴状土坑12基、前期の土坑1基・土器埋設遺構1基、中期の竪穴住居跡168軒・土坑770基(いわゆる小竪穴を含む)・土器埋設遺構2基・ピット群1か所・斜面貝層5か所、後期の竪穴住居跡1軒・土坑2基・斜面貝層1か所が検出された。

このような貝塚に、遺構外から北白川下層Ⅱc式土器が7点出土している。1～7の特徴は、報文によれば「6・7を除き、同一個体の可能性がある。薄手の器壁を呈し、刻み目を施す扁平な隆線(凸帯文)により、幾何学状の文様を構成することである。また、色調も灰色系であり、ほか類土器と比して異色である」と観察されている(小笠原ほか1998)。

分析資料は北白川下層Ⅱc式土器(1・4)と、遺構外から出土した同時期併行の諸磯a式土器(8)・諸磯b式土器(9)である。



第24図 千葉市有吉北貝塚

(10) 千葉市バクチ穴遺跡(第25図)

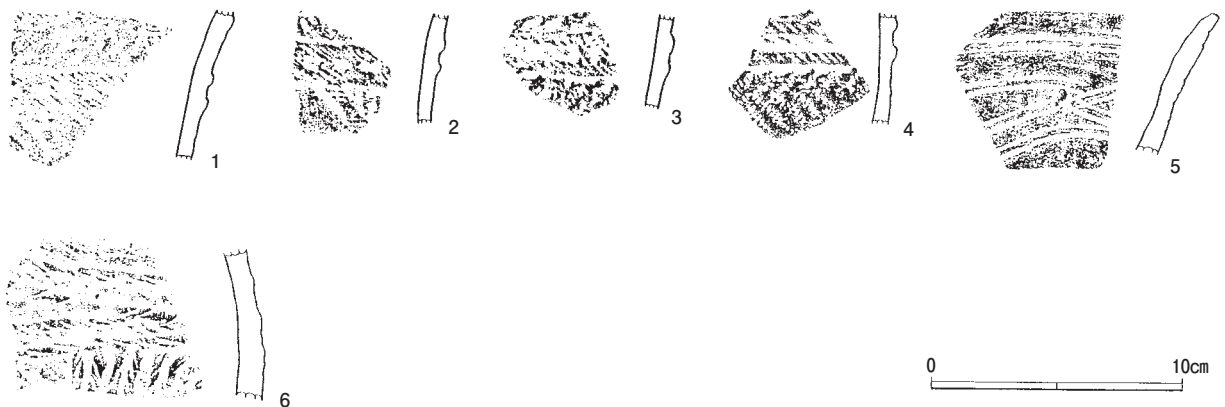
千葉市緑区大金沢町

本遺跡は、東京湾に注ぐ村田川中流右岸の標高約50mの台地上に位置する。昭和55年(1980) 1月4日から2月29日と、昭和56年(1981) 8月1日から12月5日にかけて千葉東南部地区土地区画整理事業に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積8,000㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は早期の炉穴2群26基、早期後葉に属する茅山上層式期の炉穴2群5基・土坑1基、前期の土坑4基、前期初頭に属する花積下層式期の土坑1基、中期後葉に属する加曾利EⅡ式期の埋甕1基・土坑1

基、後期前葉に属する堀之内1式期の竪穴住居跡1軒・堀之内1～2式期の竪穴住居跡1軒、時期不明の土坑1基が検出された。

このような遺跡に、遺構外から北白川下層Ⅱc式土器が4点出土している。1～4の特徴は、報文によれば「浮線文が施されるが、胎土は粗く肉薄で、文様構成も明らかに異なり、一見して区別されるものである。ともに浮線頂部を斜位に刻み、器面には羽状を呈する縄文が施される」と観察されている（大野ほか1983）。

分析資料は北白川下層Ⅱc式土器（1・4）と、遺構外から出土した同時期併行の諸磯a式土器（5）・諸磯b式土器（6）である。

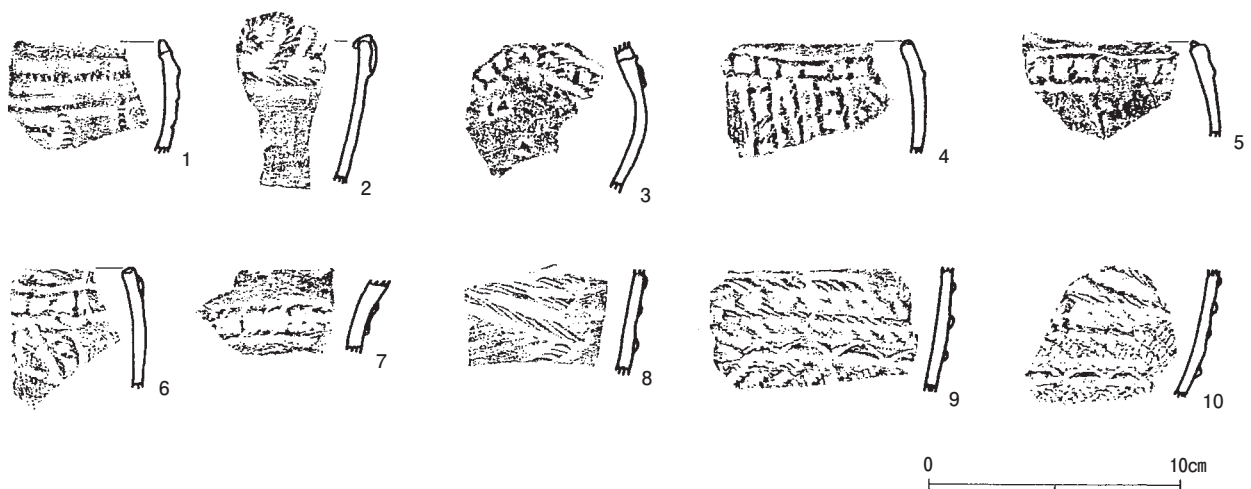


第25図 千葉市バクチ穴遺跡

(11) 千葉市文六第1遺跡（第26図）

千葉市緑区小食土町1165番地13ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ村田川上流右岸の標高92m～95mの台地上に位置する。昭和54年（1979）8月17日から昭和61年（1986）2月26日にかけてJR土気駅南地区土地区画整理事業に伴い、千葉市土気地区遺跡調査会（昭和60年度以降は財団法人千葉市文化財調査協会が事業を継承）により断続的に数回の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期前半のものが1軒、早期後半のものが4軒、前期



第26図 千葉市文六第1遺跡

初頭のもものが2軒、前期後半のもものが12軒、前期末葉のもものが1軒、中期後半のもものが2軒検出された。

このような遺跡に、遺構外から北白川下層Ⅱc式土器が約120点出土している。県内で最も多く出土した遺跡である。1～10の特徴は、報文によれば「口縁部・胴部を問わず、いずれも5.0mm余の薄い器肉をもつもので、諸磯式・浮島式系土器等のいわゆる在在系土器に較べて、一様に器肉の作りが薄いことが特徴である。器形的には、胴部中ほどから内傾気味に立上がる深鉢と考えられ、口縁形態が平口縁を呈するもの(1)と波状口縁をもつもの(2・3)との両者が認められた。器面に施された文様は、斜めや鋸歯状の刻みを付した細めの粘土紐貼付文(凸帯文)が特徴的で、器表面に横走させたり、弧状・梯子状に配したりして、モチーフ文様を描出するものが多く、地文に縄文等をもつもの(9・10)と無文地のものがみられた。色調は概して灰褐～黄色味が強く、胎土には小砂利が含まれるものの粘土は精製されており、焼成は良好である。文様・整形等の状態から1と2、3～7、それに8～10がそれぞれ同一個体の破片と考えられる」と観察されている(寺門ほか1993)。

#### (12) 袖ヶ浦市豆作台遺跡(第27図)

袖ヶ浦市代宿8番地

本遺跡は、東京湾に注ぐ久保田川中流右岸の標高50m～60mの台地上に位置する。平成7年(1995)9月1日から平成9年(1997)3月31日にかけて東京都千葉福祉園整備工事に伴い、(財)君津郡市文化財センターにより発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期後葉に属する鶴ガ島台式期のもものが2軒、前期後半のもものが18軒、時期不明のもものが4軒検出された。

このような遺跡に、前期後半の008号住居内と遺構外から北白川下層Ⅱc式土器が12点出土している。1～4は008号住居内、5～12は遺構外からの出土である。報文によれば、1～4の特徴は「浮線文(1種)の同一個体だが、器壁が極めて薄い」とし、5～12の特徴は「浮線文は梯子状を基調としている。5～7、10～12はそれぞれ同一個体である」と観察されている(井上ほか1999)。

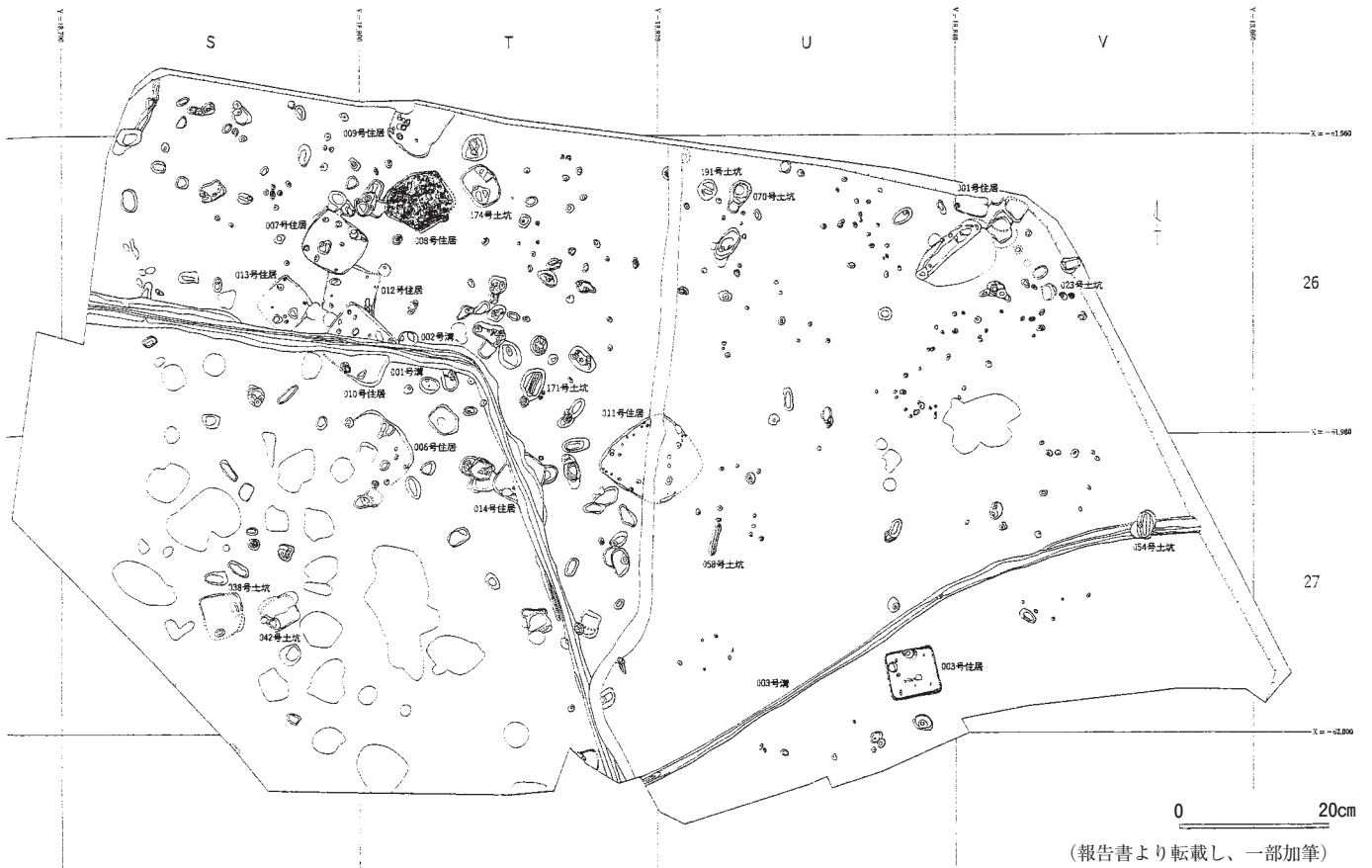
#### (13) 勝浦市上長者台遺跡<sup>5)</sup>(第28・29図)

勝浦市松部字上長者台

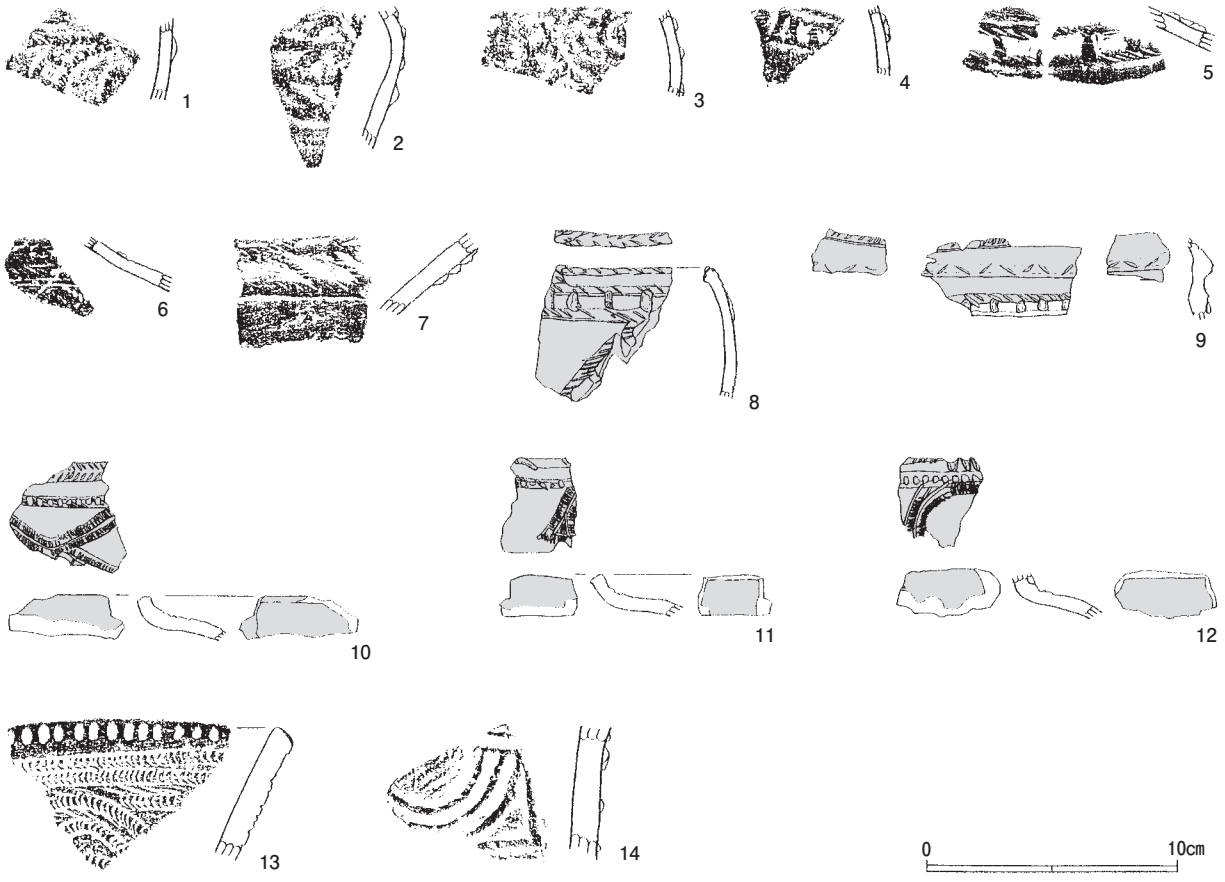
本遺跡は、太平洋を臨む標高約100mの丘陵先端に位置する。昭和48年(1973)12月20日から28日と、昭和49年(1974)3月14日から31日にかけて埋蔵文化財の保護・保存と郷土史の究明の観点から、勝浦市教育委員会により発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期前葉に属する関山式期のもものが1軒、前期前葉から中葉のもものが1軒、前期中葉に属する黒浜式期のもものが1軒、前期後葉に属する諸磯b式期のもものが1軒、前期末葉に属する加曾利EⅣ式期のもものが1軒、時期不明のもものが1軒検出された(加藤・橋口1974)。

その後、平成2年(1990)5月21日から7月28日にかけてリゾートマンション建設に伴い、勝浦市教育委員会に委託された上長者台遺跡調査会により発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する平坂式期のもものが1軒、前期初頭に属する花積下層式期のもものが6軒、前期初頭から前葉のもものが1軒、前期前葉に属する二ツ木式期のもものが4軒、前期前葉に属する関山Ⅰ式期のもものが1軒、前期中葉に属する黒浜式期のもものが4軒、前期後葉に属する諸磯b式期又は浮島Ⅰ式期のもものが4軒、前期末葉に属する諸磯c式期又は興津式期のもものが1軒、中期前葉に属する阿玉台Ⅱ式期のもものが2軒検出された(新井ほか1992)。

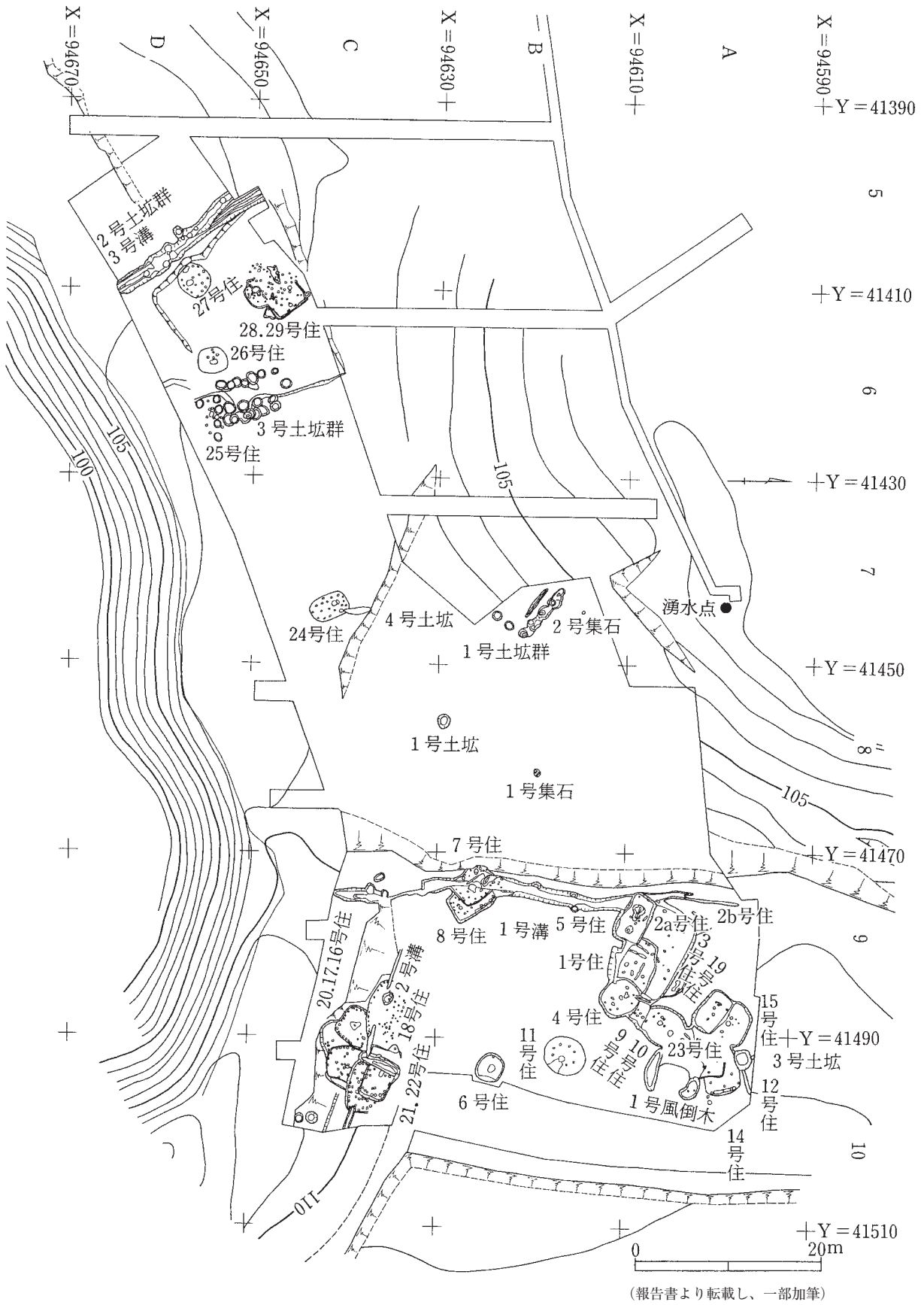
このような遺跡に、黒浜式期の2a号住居址内及び諸磯b式期又は浮島Ⅰ式期の第9号住居址内と、遺



(報告書より転載し、一部加筆)

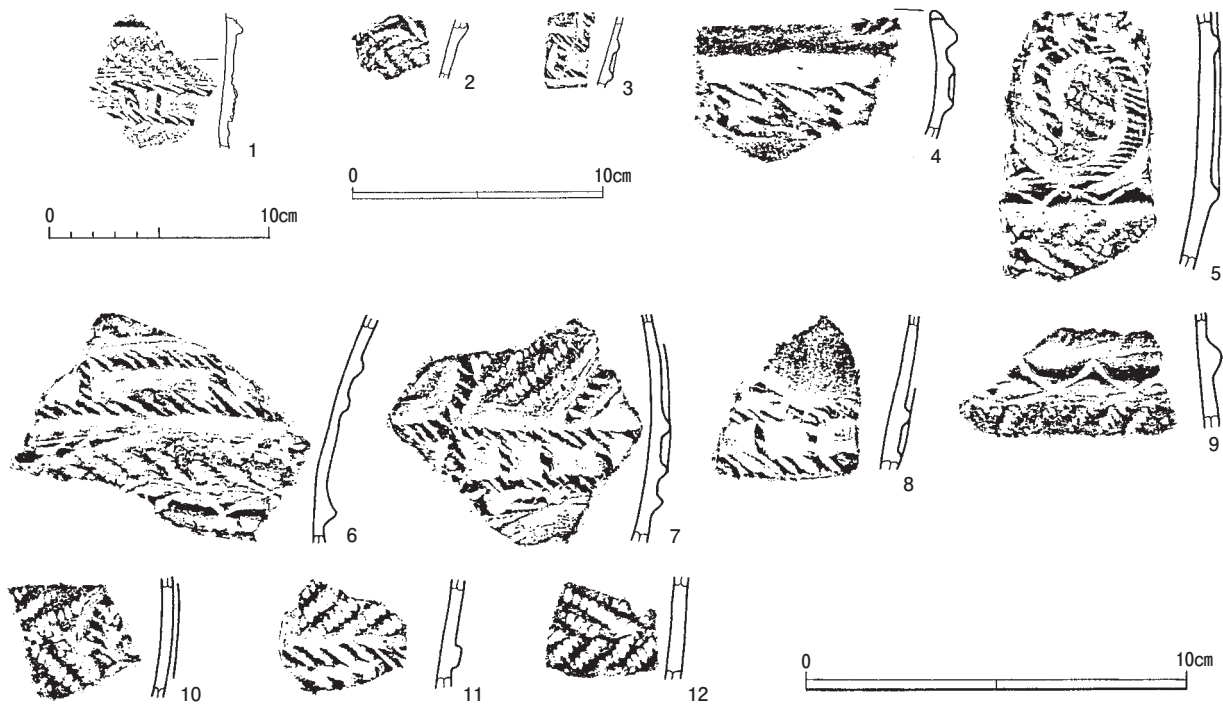


第27図 袖ヶ浦市豆作台遺跡



第28図 勝浦市上長者台遺跡(1)

構外から北白川下層Ⅱc式土器が数点出土している。1は2a号住居址内、2・3は第9号住居址内、4～12は遺構外からの出土である。報文によれば、1の特徴は「焼きが固く薄手で、色調は灰色を呈する明らかに異質な土器」とし、2・3の特徴は「浮線文の上に刻みを付けている。2の縄文は直前段0段3条のL $\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ とR $\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ である」と観察されている。また、4～12の特徴は「薄手で焼きが良く淡い茶色を呈する。ほとんどが同一個体らしい。地文はL $\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ と、R $\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ の羽状縄文で浮線文に刻みを施し、浮線文で文様を形成する」と観察されている（加藤・橋口1974、新井ほか1992）。



第29図 勝浦市上長者台遺跡(2)

#### (14) 南房総市（旧丸山町）加茂遺跡

##### 南房総市（旧丸山町）加茂字神門1

本遺跡は、太平洋に注ぐ丸山川下流右岸の標高約20mの丘陵裾部に位置する。昭和23年（1948）12月に、慶応義塾大学文学部考古学研究室により学術調査として発掘調査が実施された。調査の結果、泥炭層中より前期中葉に属する黒浜式期から中期前葉に属する阿玉台式期の縄文土器を出土した。特筆すべき点は、木製品として独木舟・櫂・弓等が発見されたことである。

このような遺跡に、泥炭層から北白川下層式土器と思われる土器片が出土している。報告書中には、図版に1点掲載されている。この土器は、今回紹介した千葉市五味ノ木遺跡のものと同類と思われる。その特徴は、報文によれば「口頸部より外反した浅鉢形土器の口縁部破片であり、口頸部には略5糎の間隔を置いて口頸部の張り出し部の上と、口縁直下の二ヶ所に口縁に平行に二條の爪形文帯があり、この爪形文帯の中間の口頸部の縄文が篋状工具により磨消され、その部分に丹と漆を混合したチョコレート色の漆を塗彩したもので、相当厚く塗られて居り、発掘後乾燥させた爲土器面より厚紙の如く剥離した部分もある。又下部爪形文下の胴部の斜縄文の部分にも一部塗彩された痕跡がある。又上部の爪形文及びその上の口唇部にも塗彩され、内面も深さ4.5糎のところまで塗彩されている。なおこの土器片の漆は光澤を持っ



ている。土器片の厚さは約0.7㎝である」と観察されている（江坂ほか1952）。

### 第3節 前期大木式系土器

大木式土器は前期から中期に帰属する土器群で、宮城県大木囲貝塚を標式遺跡とし、東北地方南部を中心に関東地方にまで分布している。大木式土器は13型式に細分され、大木1式～6式が前期、大木7a式～10式が中期である。そのうち、本節では前期に属する大木1式～6式の土器を対象とする。

#### 1 研究略史

大木式土器の型式編年を確立させたのは山内清男である。彼は、宮城県の大木囲貝塚において層位的に発掘調査を行い、「大木式」を設定し、1式、2a式、2b式、3式、4式、5式、6式、7a式、7b式、8a式、8b式、9式、10式に細分した。そして昭和12年（1937）に型式編年表を作成し、前期の大木式が1式～6式に属することを位置付けた。また、関東地方の各型式との関係は大木1式が関山式、大木2a式・2b式が黒浜式、大木3式～5式が諸磯a式・b式、大木6式が「十三坊台式」に併行させた。しかし、細分した大木式土器について具体的な解説がなく、各研究者が理解するのに困難であった（山内1937）。

昭和31年（1956）、江坂輝弥は山内が細分した大木式土器の特徴を解説している。それによると、大木1式土器は昭和11年（1936）に角田文衛が報告した船入島貝塚出土の第二類土器（角田1936）を該当させ、大木2a式、大木2b式、大木3式、大木4式土器は山内が発掘した資料を「まだあまり見ていないので、ここにその詳細を記せない」としながらも、大木2a式土器の特徴に木目状結束撚糸文の施文を、大木4式土器の特徴に鋸歯状沈線文の施文を挙げている。大木5式土器は縄文を地文とし、細い粘土紐による鋸歯状文・渦巻文・平行線文・梯子状文が口頸部に施文されたもので、大木6式土器は「はりつけた粘土紐の上を、縦に半割した竹管状の工具の先端で、斜め右から連続刺突して爪形文を附しているものが多い」としている（江坂1956）。しかし、不透明な点が多く、依然、大木式土器の解明は不十分であった。昭和39年（1964）に、江坂は「縄文土器型式の編年比較表」を作成し、関東地方の各型式との併行関係について大木1式土器が関山式、大木2a式が（文蔵式）、大木2b式が黒浜式、大木3式が諸磯a式・水子式、大木4式が諸磯b式・矢上式・四枚畑式、大木5式が諸磯c式・草花式、大木6式が十三菩提式に対比させている（江坂1964）。

昭和40年（1965）、鎌木義昌は「縄文式土器編年表」を作成し、大木式を関東地方の各型式と対比させ、大木1式が関山式、大木2a式が黒浜式・植房式、大木2b式が水子式、大木3式が諸磯a式、大木4式が諸磯b式・浮島式、大木5式が諸磯c式、大木6式が十三菩提式・興津式に併行させている（鎌木1965）。

興野義一は大木囲貝塚の「比較資料として、どうしても同種貝塚の発掘による層位的対比事実の裏付けが必要」と考え、昭和37年（1962）に宮城県長者原貝塚、昭和39年（1964）に宮城県糠塚貝塚を発掘調査した。その結果、対応関係が分かり、山内編年の大木式が正しいことを改めて実感したようだ。そして昭和42年（1967）から昭和45年（1970）にかけて、興野は写真資料や実測図を掲載しながら、前期の大木式土器の特徴を具体的に解説した。それによると、大木1式土器は羽状縄文・ループ文の施文、大木2a式土器は縄文・正製撚糸文・不整撚糸文の施文、大木2b式土器は不整撚糸文・S字状連鎖沈線の施文、大木3式土器は爪形文・竹管円文・刺突文・串引文・刻目付粘土紐貼付文の施文、大木4式土器は小波状の



第30図 前期大木式系土器出土遺跡の分布

粘土紐貼付文の施文、大木5式土器は鋭利な鋸歯状の粘土紐貼付文の施文、大木6式土器は竹管沈線文・ボタン状貼付文・棒状貼付文の施文を特徴に挙げている。なお、大木5式土器は二細分されることを提唱し、「口縁部の肥厚した鋸歯状装飾体の切込みは深いが鋸歯数はすくない」ものを大木5a式、「鋸歯状装飾体は小形化し口縁の半周または全周にひろがるので鋸歯数ははなはだ多くなる」ものを大木5b式とした。また、「文様帯の上下をはさむ粘土紐による区画直線文」を根拠に、大木5a式と大木5b式の線引きをしている（興野1967・1968・1969・1970a・1970b）。

最近の研究では、平成14年（2002）、松田光太郎が十三菩提式土器の変遷を考察する中で、大木6式を十三菩提式中2段階と新1段階に併行させている（松田2002）。また平成18年（2006）に、今村啓爾が大

第3表 前期大木式系土器の出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	二ツ塚古墳群	野田市二ツ塚	大木2a式土器
2	本郷遺跡	野田市西三ヶ尾字本郷	大木2a・2b式土器
3	中山新田I遺跡	柏市十余二572ほか	大木2式土器
4	金山宮後原遺跡	柏市（旧沼南町）金山字宮後原1001番地ほか	大木5式土器
5	西の台遺跡	船橋市二和町10-23ほか	大木6式土器
6	ライノ作南遺跡	八千代市大和田新田字ライノ作	大木2a式土器
7	芝山遺跡	八千代市大和田新田字芝山877番地	
8	龍角寺ニュータウン遺跡群	印旛郡栄町龍角寺字前原ほか	大木6式土器
9	南羽鳥中岫第1遺跡	成田市南羽鳥字松ヶ下567-1番地ほか	大木2b・5式土器
10	西向野I遺跡	成田市飯田町字西向野143番48ほか	大木4又は5式土器
11	墨新山遺跡	印旛郡酒々井町墨字山入887-1ほか	
12	鑄木諏訪尾余遺跡	佐倉市鑄木町336-1ほか	大木5b式土器
13	間野台貝塚	佐倉市生谷字間野1554-13ほか	
14	池花南遺跡	四街道市内黒田字池花146ほか	
15	和良比遺跡	四街道市和良比字本山ほか	大木6式土器
16	上野遺跡	四街道市上野字上31ほか	
17	中ノ尾余遺跡	四街道市吉岡字中ノ尾余1460ほか	
18	木戸先遺跡	四街道市鷹の台2丁目1243-1ほか	大木2b式土器
19	文六第1遺跡	千葉市緑区小食土町1165番地13ほか	
20	門脇遺跡	市原市磯ヶ谷字門脇8番地13ほか	
21	豆作台遺跡	袖ヶ浦市代宿8番地	大木5式土器
22	綱原屋敷跡遺跡	香取市（旧佐原市）多田字綱原	
23	白井大宮台貝塚	香取市（旧小見川町）白井161ほか	大木5式土器
24	粟島台遺跡	銚子市南小川町616ほか	大木6式土器
25	居合台遺跡	山武郡芝山町大台字居合下2681番地ほか	大木6式土器
26	大谷台遺跡	東金市滝字大谷台144ほか	
27	鉢ヶ谷遺跡	東金市小野字鉢ヶ谷1113番地ほか	大木6式土器
28	上長者台遺跡	勝浦市松部字上長者台	大木5式土器

大木6式を五期に区分し、関東地方の十三菩提式との併行関係について大木6式1期が十三菩提式古段階前半、大木6式2期が十三菩提式古段階後半、大木6式3期が十三菩提式中段階、大木6式4期が十三菩提式新段階前半、大木6式5期が十三菩提式新段階後半に対比させている（今村 2006）。

## 2 千葉県内における出土遺跡

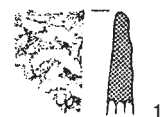
千葉県内において前期大木系式土器は、これまで28遺跡報告されている。地域別にみると、東葛地区及び葛南地区の北西部地域が7遺跡、印旛地区の北部地域が6遺跡、香取地区・銚子地区・山武地区の北東部地域が4遺跡、印旛地区・千葉地区・山武地区・市原地区・君津地区の中央部地域が10遺跡、夷隅地区の南東部地域が1遺跡である（第30図、第3表）。遺跡の概略と、各遺跡から出土した前期大木系式土器の特徴は以下のとおりである。

### (1) 野田市二ツ塚古墳群（第31図）

#### 野田市二ツ塚

本遺跡は、太平洋に注ぐ利根川中流右岸の標高約15mの台地上に位置する。昭和53年（1978）8月から昭和54年（1979）3月にかけて宅地開発に伴い、野田市遺跡調査会により面積45,000㎡と古墳5基の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は検出されなかったが、早期から晩期までの縄文土器が出土した。

このような遺跡に、遺構外から大木2 a式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「不整然糸文と呼ばれているもの」と観察されている（飯塚ほか 1985）。



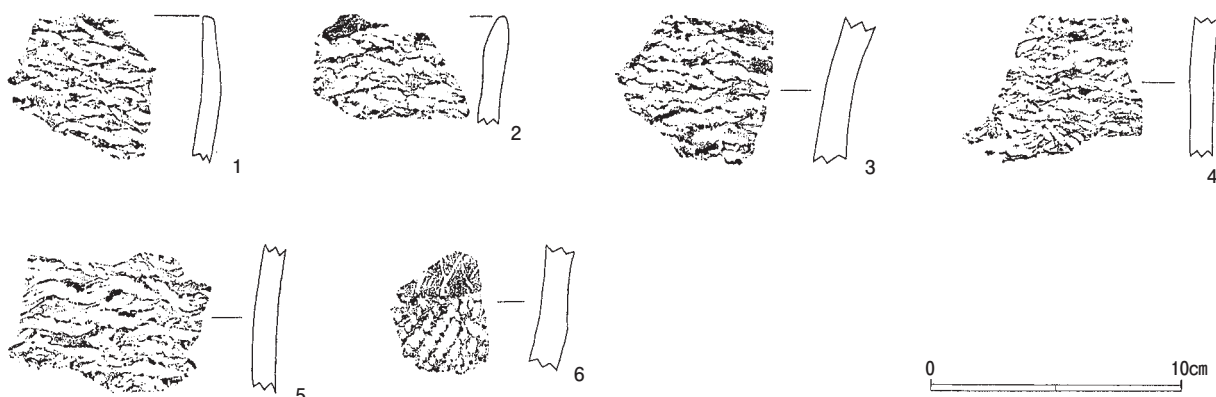
第31図 野田市二ツ塚古墳群

### (2) 野田市本郷遺跡（第32図）

#### 野田市西三ヶ尾字本郷

本遺跡は、太平洋に注ぐ利根川中流右岸の標高約13mの台地上に位置する。昭和51年（1976）5月11日から6月10日と、昭和53年（1978）11月9日から昭和54年（1979）2月27日にかけて工業団地造成に伴い、野田市本郷遺跡調査団により断続的に発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は前期中葉に属する黒浜式期の遺構（性格不明）が1基検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木2 a式土器（1～5）5点と、大木2 b式土器（6）1点が出土し



第32図 野田市本郷遺跡

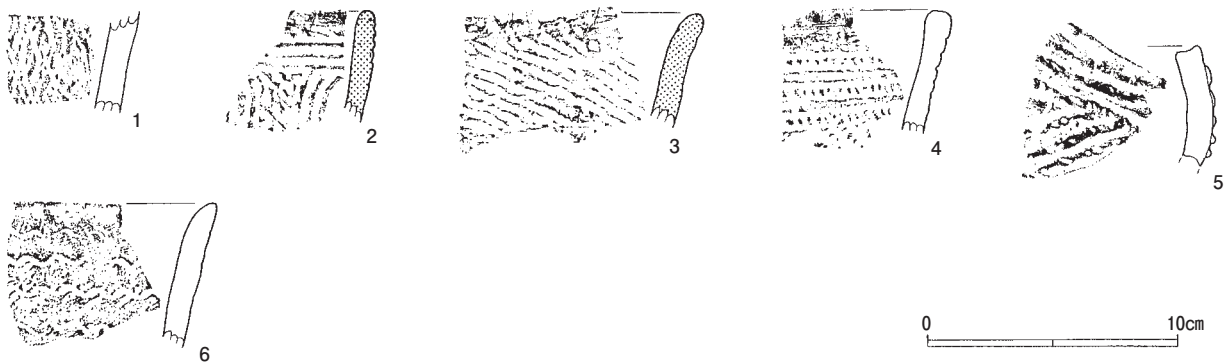
ている。報文によれば、1～5の特徴は「結節を複数作出した原体を横位施文したものと考えられる。不整撚糸文と称されるもの」とし、6の特徴は「網目状になるかと思われる撚糸文を施文する部分をもつ」と観察されている（飯塚ほか1980）。

### (3) 柏市中山新田 I 遺跡（第33図）

柏市十余二572ほか

本遺跡は、東を利根川、西を江戸川に挟まれた標高約17mの台地上に位置する。昭和53年（1978）1月9日から27日と、昭和55年（1980）4月1日から昭和56年（1981）1月12日にかけて常磐自動車道建設に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積22,500㎡と馬土手1,000㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は早期後半の炉穴22基、中期前葉に属する阿玉台式前半期の竪穴住居跡及び竪穴状遺構9基、中期後葉に属する加曾利E式期の竪穴住居跡2軒、後期前葉に属する堀之内式期の竪穴住居跡1軒・土坑3基、時期不明の竪穴状遺構6基・土坑8基が検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木2式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「網目状撚糸文が施された胴部片」と観察されている（原田ほか1986）。分析資料は大木2式土器（1）と、遺構外から出土した関山Ⅱ式土器（2）・黒浜式土器（3）・諸磯b式土器（4・5）・前期末葉～中期初頭の土器（6）である。

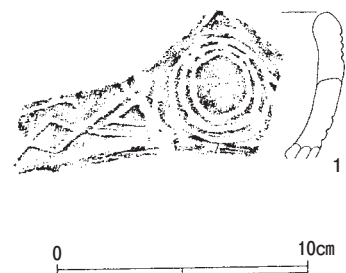


第33図 柏市中山新田 I 遺跡

### (4) 柏市（旧沼南町）金山宮後原遺跡（第34図）

柏市（旧沼南町）金山字宮後原1001番地ほか

本遺跡は、手賀沼に注ぐ大津川中流右岸の標高約25mの緩斜面に位置する。昭和61年（1986）6月30日から7月26日と、10月2日から11月14日にかけて工場建設に伴い、金山宮後原遺跡調査会により面積約9,000㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は早期の炉穴2基、前期中葉に属する黒浜式期の竪穴住居跡7軒・土坑6基が検出された。



第34図 柏市（旧沼南町）金山宮後原遺跡

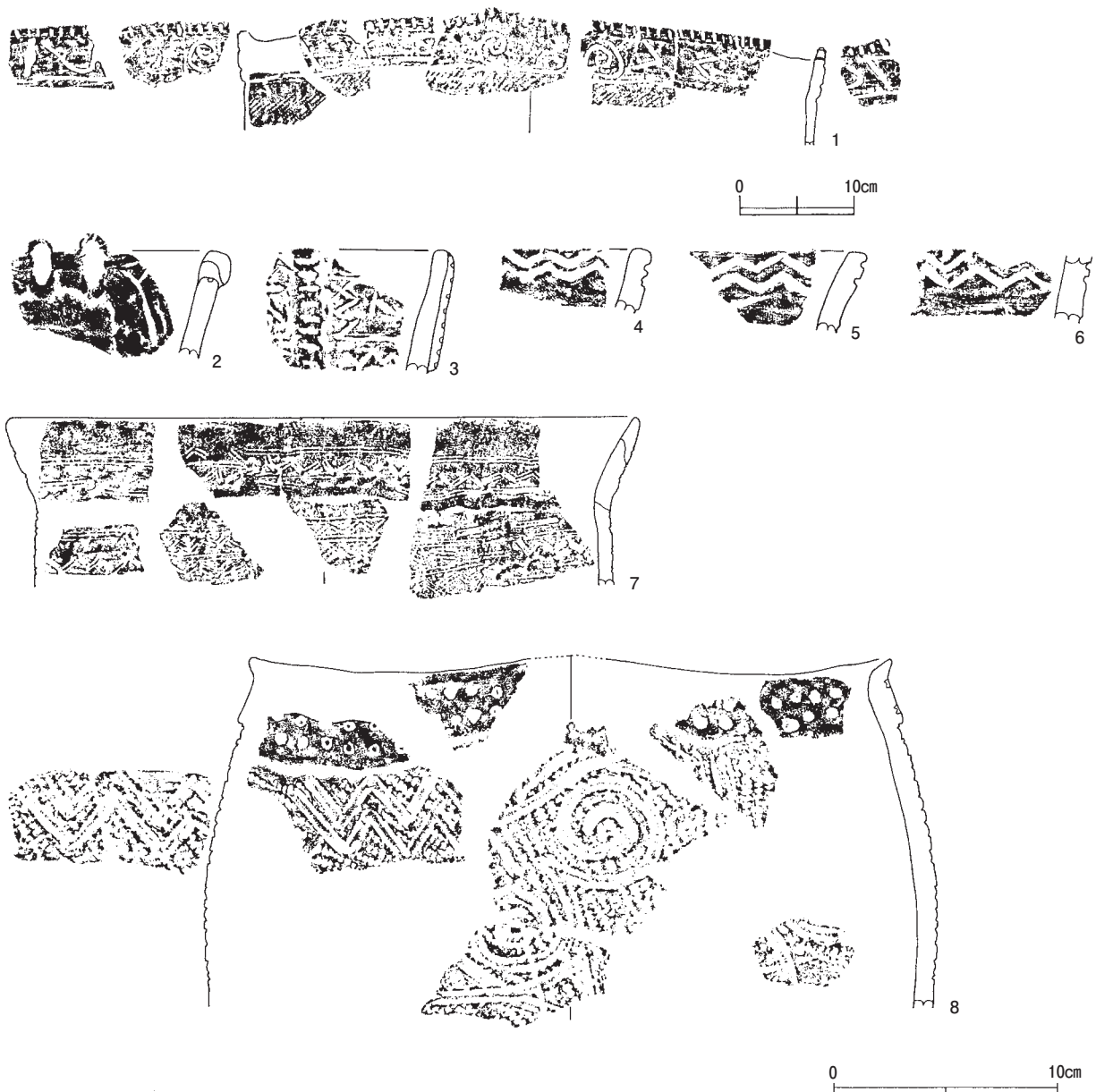
このような遺跡に、遺構外から大木5式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「沈線によって円形文と菱形文を描くもの」と観察されている（宇佐美ほか1994）。

(5) 船橋市西の台遺跡 (第35図)

船橋市二和町10-23ほか

本遺跡は、海老川上流で合流する金杉川上流左岸の標高27m前後の台地上に位置する。昭和57年（1982）10月1日から昭和58年（1983）10月15日にかけて宅地造成に伴い、船橋市遺跡調査会により面積約8,500㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期後葉に属する茅山式期のものが1軒検出された。

このような遺跡に、包含層から大木6式土器が出土している。1～8の特徴は、報文によれば「1は大形破片で、器形が復元出来た。ゆるやかな波状口縁で、口唇部は角頭状に近く、口唇部上には刻目を施文する。器面は部分的に指頭痕が見られる。文様は口縁部に蕨手状の沈線を施文する。波状口縁部の波頂部より渦巻き、波底部にV字状の右向きと左向きの沈線を入れて、口縁部文様帯を作出している。胴部は



第35図 船橋市西の台遺跡

L  $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$  の縄文が施文されている。2は波状口縁の波頂部で、口縁に隆起線を周らせている。波頂部に刻目を持ち、波頂部の脇には沈線を施す。3は口唇部は丸味を持ち、口縁部には刻目を付けた縦長の隆起線と横位の区画線を口縁に平行に走らせて、その間に鋸歯状の沈線を連続的に施す。4～6は同一個体で、2本1対の太い沈線で鋸歯文を作出する。口唇部は丸味を持ち、また、文様区画にはナヅリが行なわれている。7は口縁部で括れて外反し、口唇部は角頭状である。胴部はやや脹みながら底部に移行する。文様は細い半截竹管で鋸歯文を施すが、部分的に乱れている。8は内彎する土器である。折り返しを持つ、小波状口縁で、口唇部は内削ぎである。口縁部に円形竹管文を2列配し、胴部は地文にR  $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  の縄文を施文後、渦巻文と山形文を多截竹管の内側を使って施文している。色調は1, 8の口縁部が暗褐色、他は茶黄褐色を呈し。焼成は良好である。胎土は微細砂粒を多量に含まれているが、8は細砂粒が目立つ」と観察されている（新井ほか1985）。

#### (6) 八千代市ライノ作南遺跡（第36図）

八千代市大和田新田字ライノ作

本遺跡は、新川中流で合流する桑納川中流右岸の標高25m～27mの台地上に位置する。平成7年（1995）3月8日から28日、平成7年（1995）11月10日から12月15日、平成8年（1996）8月4日から12月19日にかけて宅地造成に伴い、八千代市遺跡調査会により面積8,400㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期のものが20軒検出された。

このような遺跡に、10Dと19Dの竪穴住居跡内から大木2 a 式土器が出土している。1は10Dの竪穴住居跡内、2は19Dの竪穴住居跡内から出土している。報文によれば、1の特徴は「口縁部文様帯が低い隆帯により区画され、上部文様帯には円形竹管文、下部文様帯には爪形文が施される。地文には単節縄文が施され、白色系を呈す胎土には雲母、長石、石英などの鉱物が多量に含まれる」とし、2の特徴は「縦位の無節縄文を地文とし、波状文が描出される。胎土は橙白色を呈し、口唇部は刻まれる」と観察されている（玉井ほか2000）。

#### (7) 八千代市芝山遺跡（第37図）

八千代市大和田新田字芝山877番地

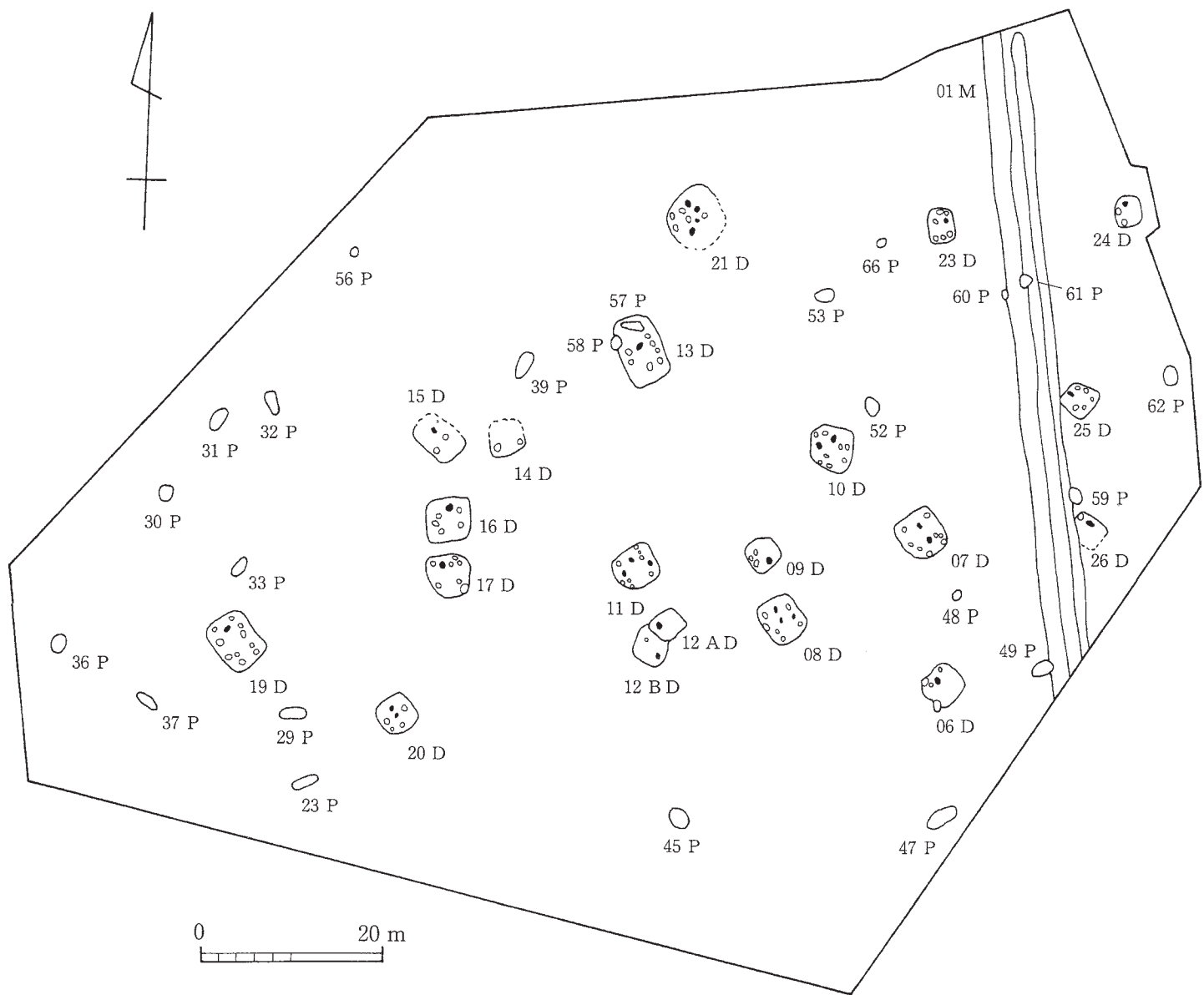
本遺跡は、新川中流で合流する桑納川中流右岸の標高28m前後の台地上に位置する。昭和60年（1985）1月7日から昭和62年（1987）8月31日にかけて東葉高速鉄道建設に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積67,200㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期のものが1軒、中期末葉に属する加曽利E IV 式期のものが1軒、後期中葉に属する加曽利B 2 式期のものが1軒検出された。

このような遺跡に、遺物包含層から大木式類似の土器が出土している。その特徴は、報文によれば「口縁端部に2個1単位の貼付文が小突起状につくもので、以下は撚りのゆるい単節縄文が施される」と観察されている（落合1989）。

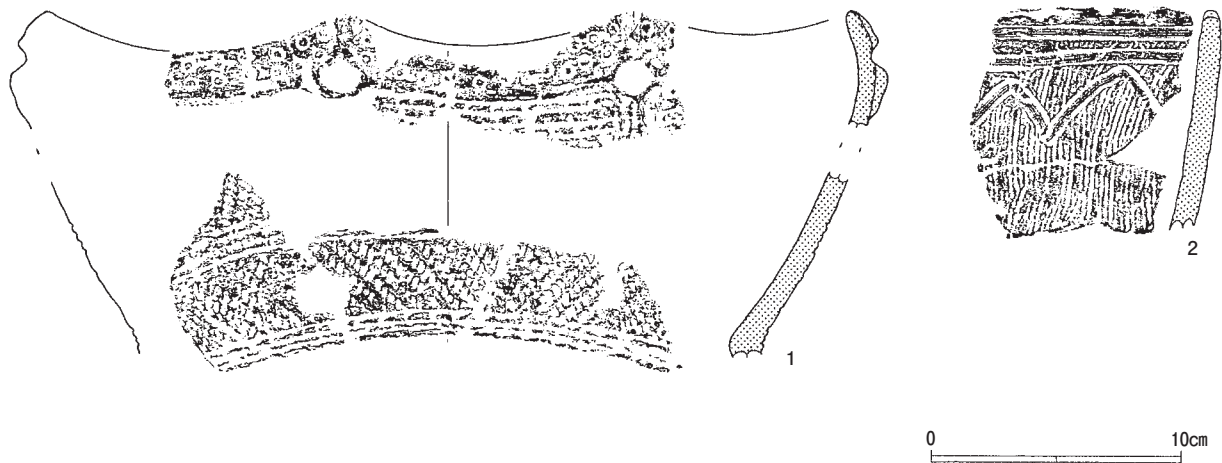
#### (8) 栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4 地点（第38図）

印旛郡栄町龍角寺字前原ほか

本遺跡は、印旛沼の北東岸に面した標高約25mの台地上に位置する。昭和54年（1979）9月3日から昭和55年（1980）10月20日にかけて龍角寺ニュータウン造成工事に伴い、龍角寺ニュータウン遺跡調査会により面積約49,300㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は中期末葉に属する加

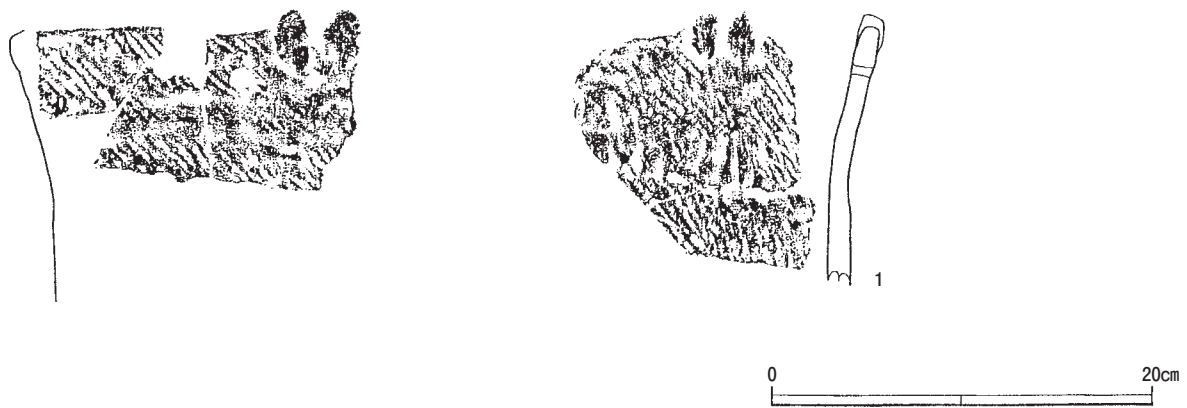


(報告書より転載)



第36図 八千代市ライノ作南遺跡

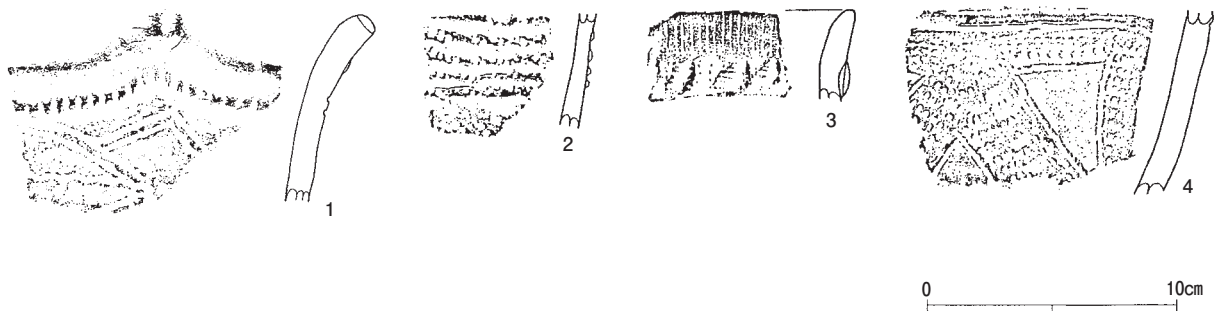




第37図 八千代市芝山遺跡

曾利EⅣ式期のものが9軒、加曾利EⅣ式期～後期初頭に属する称名寺式期のものが4軒、称名寺式期のものが2軒検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木6式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「波状口縁の波頂部に刻目を施し、微隆起線文を周らせて、その上に刻目を施している。刻目より下には縄文を地文にした菱形文を半載竹管文で施文している」と観察されている（柿沼ほか1982）。分析資料は大木6式土器（1）と、遺構外から出土した諸磯b式土器（2）・興津式土器（3・4）である。



第38図 栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点

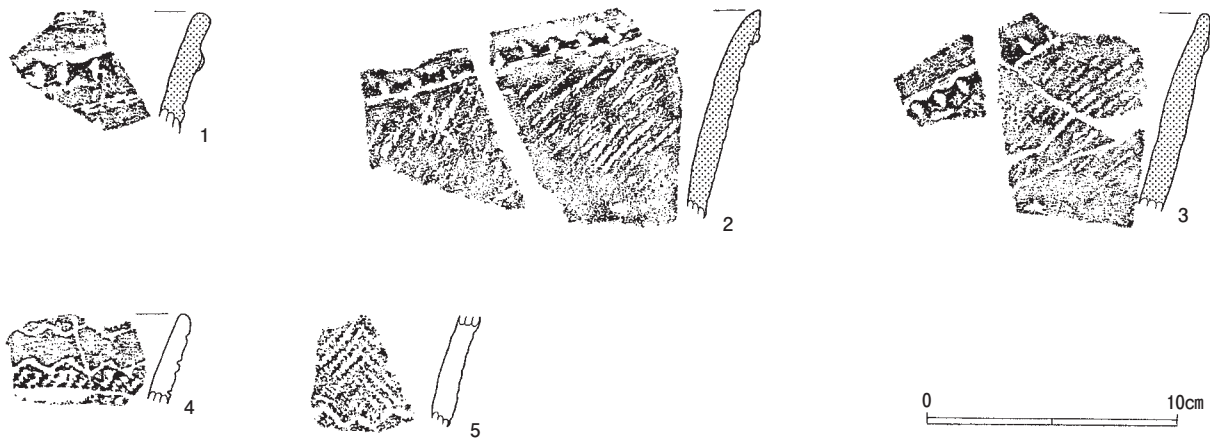
(9) 成田市南羽鳥中岫第1遺跡（第39図）

成田市南羽鳥字松ヶ下567-1番地ほか

本遺跡は、根木名川下流で合流する十日川中流左岸の標高約30mの台地上に位置する。平成元年（1989）12月1日から26日、平成3年（1991）1月7日から3月26日、平成3年（1991）4月8日から9月14日、平成5年（1993）12月7日から15日、平成6年（1994）5月2日から12月26日にかけて成田カントリークラブゴルフ場造成に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより面積100,129㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期のものが5軒、黒浜式期の可能性があるものが2軒、黒浜式期新段階～前期後葉に属する浮島Ⅰa式期のものが1軒、浮島Ⅰ式期のものが11軒、浮島Ⅱ式期のものが2軒、浮島Ⅲ式～前期末葉に属する興津Ⅰ式期のものが1軒、浮島式後半のものが1軒、浮島式期の可能性があるものが2軒、時期不明のものが3軒検出された。

このような遺跡に、遺物包含層から大木2b式土器（1～3）と、大木5式土器（4・5）が出土している。1～3の特徴は、報文によれば「1～3は胎土に繊維を含むものである。1～3は口縁部に沿って

刻みを加えた隆帯を巡らすもので、胴部にはLLと思われる太い縄文が施される。2、3は波状口縁になる。4は沈線で鋸歯状文を描き、LR縄文を充填する。無文部は<sup>マツ</sup>擦り消されている。5は羽状縄文を施文し、沈線で鋸歯状の文様を描く」と観察されている（松田ほか1997）。

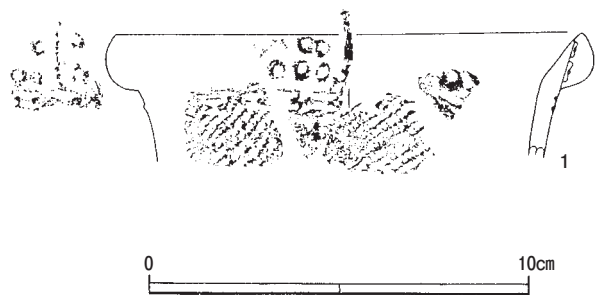


第39図 成田市南羽鳥中軸第1遺跡

(10) 成田市西向野 I 遺跡 (第40図)

成田市飯田町字西向野143番48ほか

本遺跡は、印旛沼に注ぐ江川中流右岸の標高約37m～40mの台地上に位置する。平成元年（1989）12月22日から平成2年（1990）3月23日と、7月3日から31日にかけて成田市都市計画道路3・3・5中台線整備事業に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより面積2,343㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期前葉に属する夏島期のものが1軒、早期中葉に属する三戸式～田戸下層式期のものが1軒検出された。



第40図 成田市西向野 I 遺跡

このような遺跡に、遺物包含層から大木4式土器又は大木5式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「推定口径18.6cm、現存高5.1cmを測る。口縁部文様帯を半截竹管による連続刺突文で区画し、耳状突起および円形の貼り付け文を施す。円形の貼り付け文は円形竹管による刺突が加えられている。胴部の単節LR縄文は文様帯区画後に横位施文される。原体長は2cmを欠く短いものである。色調は橙褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、内面にはケズリ痕が顕著に残る」と観察されている（高橋1991）。

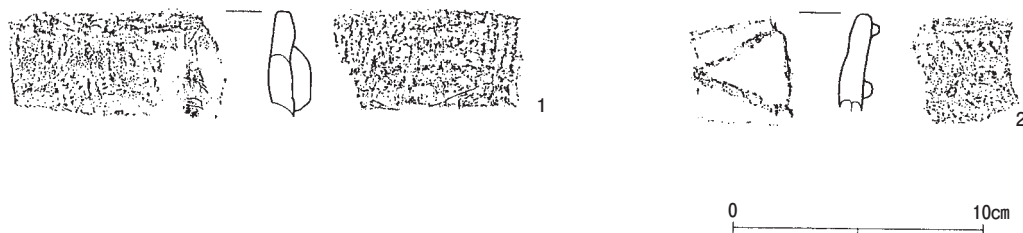
(11) 酒々井町墨新山遺跡 (第41図)

印旛郡酒々井町墨字山入887-1ほか

本遺跡は、鹿島川下流で合流する高崎川中流左岸の標高35m前後の台地上に位置する。平成4年（1992）7月1日から9月18日、平成4年（1992）9月21日から平成5年（1993）3月30日、平成5年（1993）4月1日から12月18日、平成6年（1994）4月1日から5月31日、平成7年（1995）6月1日から29日にかけて調理食品工場建設に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより面積49,900㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は中期後葉に属する加曾利E式期後半のものが17軒検出さ

れた。

このような遺跡に、遺構外から大木式系土器が2点出土している。1・2の特徴は、報文によれば「1は3cm弱の縦長の瘤状突起を付す。瘤の上端は口縁括れ部にあたる。口縁内外面、口唇部に縄文RLを施すが、かなり粗雑で部分的である。2は表面に粘土紐を三角形に付す。紐の幅は5～7mm、高さは6mm弱である。粘土紐両脇のなで付けはほとんどなされていない。断面形状は一定しない。内面にのみ1同様の縄文を施す。1と2は口縁部形態、口唇部施文の有無から異なる個体である。ともに褐色。ともに砂粒を含む」と観察されている（小倉ほか1997）。



第41図 酒々井町墨新山遺跡

(12) 佐倉市鎬木諏訪尾余遺跡（第42図）

佐倉市鎬木町336-1ほか

本遺跡は、鹿島川下流で合流する高崎川下流右岸の標高33mの台地上に位置する。昭和59年（1984）3月23日から5月19日にかけて佐倉厚生園新病棟及び庭園記念館建設に伴い、鎬木諏訪尾余遺跡調査会により面積約3,400㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期のものが2軒検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木5b式土器が3点出土している。1～3の特徴は、報文によれば「1～3は同一個体であり…中略…。2は補修孔を持っているが、外側より内側へ向かって穿っている。口辺部は折り返し口縁であり、右に開く半裁竹管による刺突列を3列施している。器面には羽状縄文を施し、その上に半裁竹管で連続山形文を縦位と横位に施文する。連続山形文は一部に爪形文を充填する。…中略…。1～3は他に比べ、特に白い様に思うし、また、混和物が少し大きい石粒を含む」と観察されている（新井ほか1984）。

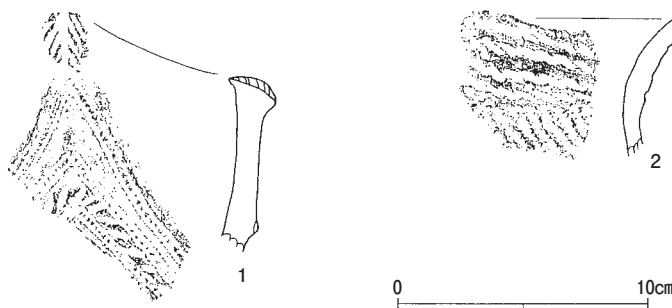


第42図 佐倉市鎬木諏訪尾余遺跡

(13) 佐倉市間野台貝塚 (第43図)

佐倉市生谷字間野1554-13ほか

本貝塚は、印旛沼に注ぐ鹿島川下流左岸の標高約28mの台地上に位置する。平成6年(1994)4月1日から8日と、5月11日から31日にかけて個人病院建設に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより面積992.06㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期後葉に属する鵜ガ



第43図 佐倉市野間台遺跡

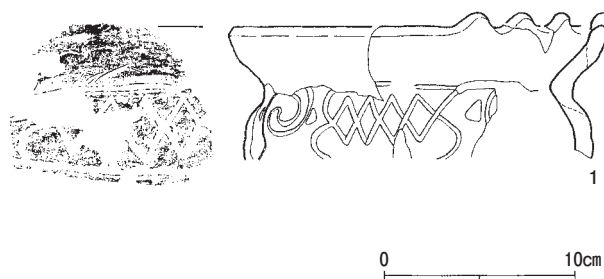
島台式期のものが4軒、早期後葉に属する条痕文期のものが2軒、前期後葉に属する諸磯b式期のものが1軒、諸磯式期のものが1軒、時期不明のものが2軒検出された。

このような遺跡に、遺物包含層から大木式類似の土器が2点出土している。1・2の特徴は、報文によれば「1は4単位の波状口縁となろう。波頂部に刻みを有する小突起を付する。器形に沿って爪形文と隆帯が施される。鉢形土器であろうか。2も波状口縁である。器形に沿って4条のLR撚紐圧痕が施される。以下も同様の原体を斜位に施す」と観察されている(喜多1996)。

(14) 四街道市池花南遺跡 (第44図)

四街道市内黒田字池花146ほか

本遺跡は、印旛沼に注ぐ手繰川上流右岸の標高26m~27mの台地上に位置する。昭和61年(1986)4月1日から昭和62年(1987)1月31日にかけて内黒田特定土地地区画整理事業に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積18,000㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期前葉に属する関山式(新)期のものが2軒検出された。



第44図 四街道市池花南遺跡

このような遺跡に、遺物包含層から大木5式併行と考えられる土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「口縁部は一旦開いてから内湾して終わり、部分的に小波状を呈している。頸部は強くくびれ、胴部はまた膨らむが、胴径は口径を超えることはあるまい。頸部以下には沈線による渦巻文他の文様が描かれる」と観察されている(渡辺1991)。

(15) 四街道市和良比遺跡 (第45図)

四街道市和良比字本山ほか

本遺跡は、鹿島川中流で合流する小名木川上流左岸の標高27m~30mの台地上に位置する。昭和55年度から平成2年度の11年次に亘って四街道市和良比地区土地地区画整理事業に伴い、四街道市教育委員会と(財)印旛郡市文化財センターにより面積220,000㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期のものが4軒、前期のものが10軒、中期のものが3軒、時期不明のものが3軒検出された。

このような遺跡に、遺物包含層から大木6式土器が出土している。1~27の特徴は、報文によれば「1は推定口径14.8cm、器厚8~11mmである。器形は、頸部が括れ胴部の張る深鉢と考えられる。口唇部は肥



第45図 四街道市和良比遺跡

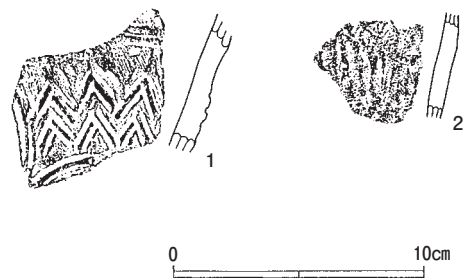
厚しくの字状に外反し、棒状工具による刻み目が加えられる。頸部には、半截竹管による刺突列が3列施される。胎土には石英や長石粒を多く含む。色調は淡褐色で、口唇部に黒色の斑文がかかる。底部の裏は黒色である。2～4は複合口縁に山形状の沈線の施される土器である。2は…中略…、口唇部に刻み目が入る。胎土は砂質性で白色の砂粒を多量に含み、色調は淡褐色を呈し黒色の斑文がかかる。3は…中略…。これらは同一個体である。山形状沈線施文具と同一工具により、口唇部に刻み目が入る。また、口縁の表から裏にかけて粘土紐が貼りつけられる。胎土は緻密で微細砂粒を多く含む。色調は淡褐色と茶褐色を呈する。5～12は山形沈線の施文される胴部片である。1～3のそれが断続的な山形状沈線だったのに対して、これらは連続して施文される。5～9は同一個体で、…中略…。地文にはLR縄文が施さ

れる。胎土に白色や灰白色の細砂粒を多く含み、色調は淡褐色から暗褐色を呈する。10は…中略…。胎土に1mm程の石英や長石粒を多く含み、色調は暗褐色を呈する。11は…中略…、沈線は波状にも見える。胎土には長石や石英・雲母粒などを多く含む。12は…中略…、やはり胎土に白色や黒色の細砂粒を含む。色調は茶褐色を呈する。13～15は…中略…同一個体の土器である。器厚5～6mmと薄く、格子状の沈線が施文される。胎土は砂質性で、色調は淡褐色を呈する。16は…中略…、器形が1に類似すると考えられる。口唇部には浅く刻み目が入る。胎土に白色や黒色の微細砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。17と18は同一個体で、…中略…。口唇部先端が細くなり、細かい刻み目が加えられる。細い半截竹管状工具によって、沈線や弧状の文様が描かれる。裏側には輪積痕が残る。黒色の微細砂粒を胎土に含む褐色の土器である。19は…中略…、複合口縁の土器である。口唇部にはU字形の切り込みが入る。器面には条線文が施される。胎土には白色や透明の細砂粒が含まれ、色調は暗褐色を呈する。20・23・24は円形竹管文の施される土器である。20は…中略…、複合口縁である。口唇部は角頭状で、口唇部上では口縁に沿う沈線と縦の沈線が十字形に交差する。胎土には白色の細砂粒が多く含まれ、色調は黒色から暗褐色を呈する。23は…中略…、24は…中略…。どちらも口唇部上にも刺突文が加えられる。胎土には白色や半透明の細砂粒を多く含む。色調は、23が暗褐色、24が表面が淡黄褐色で内部が灰色である。21・22・25・26は多截竹管による刺突文の土器である。…中略…。21の口唇部には、器面の文様施文の同一工具により刻み目が加えられる。26は別の工具により縦と横方向に沈線が施される。いずれも、胎土には白色や半透明の細砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈し、黒色の斑文がかかる。25は…中略…、肥厚した口唇部に指頭などによる押圧が等間隔に加えられる。やはり胎土に細砂粒を多く含む。27は…中略…、同心円状の沈線と縦に3本の沈線が施文される。縦方向の沈線間には、横にも細かく沈線が施される。…中略…。胎土には白色や灰白色、黒色の砂粒を多く含む。色調は淡褐色と褐色を呈する」と観察されている（中山ほか1991）。

(16) 四街道市上野遺跡（第46図）

四街道市上野字上31ほか

本遺跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川中流左岸の標高30m強の台地上に位置する。昭和63年（1988）6月20日から8月31日と、平成元年（1989）4月1日から8月11日にかけて四街道市総合運動公園建設に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより面積12,000㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は中期後葉に属する加曾利E3式期のものが3軒、時期不明ものが5軒検出された。



第46図 四街道市上野遺跡

このような遺跡に、遺物包含層から大木式系統の土器が2点出土している。1・2の特徴は、報文によれば「1は半截竹管状工具により、太い肉彫り状の山形文の施されたもので、同様の工具による弧線、口縁部下の平行沈線も見受けられる。内面にはヘラによる丁寧な調整痕が残されている。2には僅かながら、細い沈線による山形文が認められる」と観察されている（大澤ほか1993）。

(17) 四街道市中ノ尾余遺跡（第47図）

四街道市吉岡字中ノ尾余1460ほか

本遺跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川中流左岸の標高約29mの台地上に位置する。昭和57年（1982）11月5日

から昭和58年（1983）1月28日と、平成59年（1984）11月21日から昭和60年（1985）2月9日にかけて御成台研究学園都市の開発工事に伴い、四街道市吉岡遺跡群調査会により面積4,100㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期のものが2軒、中期後葉に属する加曾利EⅢ式期のものが2軒検出された。



第47図 四街道市中ノ尾余遺跡

このような遺跡に、遺構外から大木2式の影響を受ける土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「格子目状の撚糸が施文される」と観察されている（大賀ほか1986）。

(18) 四街道市木戸先遺跡（第48・49図）

四街道市鷹の台2丁目1243-1ほか

本遺跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川中流左岸の標高約30mの台地上に位置する。平成2年（1990）4月1日から平成3年（1991）3月31日にかけて御成台団地宅地造成事業に伴い、(財)印旛郡市文化財センターにより発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期後半のものが8軒検出された。

このような遺跡に、7・8号住居跡内と遺物包含層から大木2b式土器が出土している。1は7・8号住居跡内、2～6は遺物包含層からの出土である。報文によれば、1の特徴は「緩やかな4単位波状口縁の大型の深鉢形土器である。胴部で一度括れ、口縁部で外反する器形である。口縁部には縦位の刻みが施され、口縁部に取り付けられている隆帯にも刻みが施されている。隆帯は波頂部では上に向かっては弧状となり、下方には垂下させている。隆帯の交点と垂下部には円形の押捺が加えられている。地文はLRで、結節回転がみられる。胎土には土器内面に明瞭な痕跡を残す少量の繊維、および石英・長石の大きい丸粒を極めて多量に含んでいる」とし、2～6の特徴は「同一個体で、かなりの大型品の深鉢形土器である。…中略…。2・3は口縁部である。平縁とみられる。複合口縁風のつくりで、隆帯に指頭圧痕を加えている。以下は4・5にみるように、刻みを施した隆帯により文様帯区画と幾何学状のモチーフを作り出している。隆帯の起点部分はボタン状の貼りつけ文となっている。狭い口縁部および隆帯間には波状の沈線文が充填されている。胴部の縄文はかなり太い縄を用いたRRもしくは附加条縄文とみられ、縦位の施文と斜位の施文が交錯している。胎土には白色の砂粒が多量に含まれているが、大粒のものはみられない。厚手のつくりで、内面は良く磨かれており、精製された土器である」と観察されている（高橋ほか1994）。

分析資料は大木2b式土器（2～4）と、遺物包含層から出土した同時期併行の黒浜式土器（7～9）である。

(19) 千葉市文六第1遺跡（第50図）

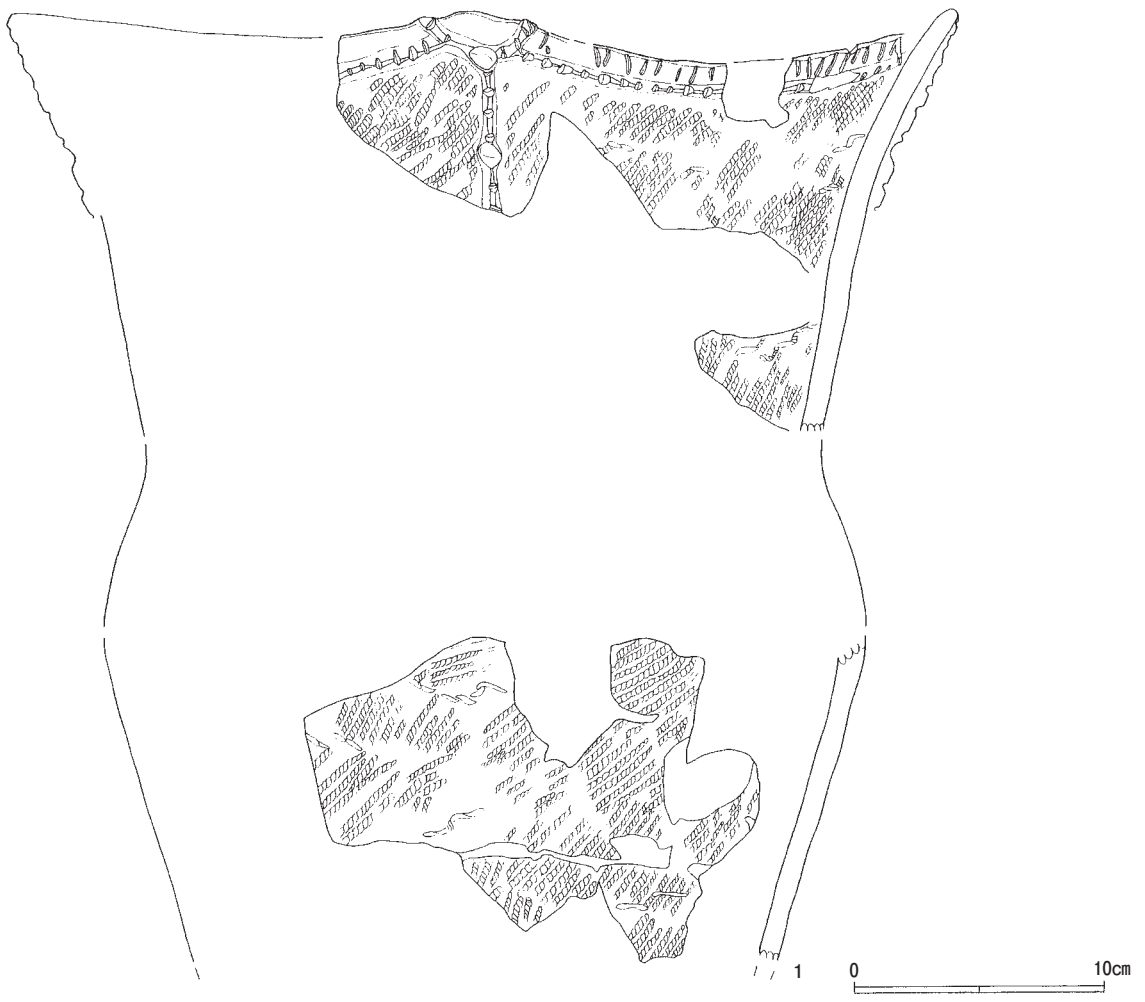
千葉市緑区小食土町1165番地13ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ村田川上流右岸の標高92m～95mの台地上に位置する。昭和54年（1979）8月17日から昭和61年（1986）2月26日にかけてJR土気駅南地区土地区画整理事業に伴い、千葉市土気地区遺跡調査会（昭和60年度以降は財団法人千葉市文化財調査協会が事業を継承）により断続的に数回の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期前半のものが1軒、早期後半のものが4軒、前期初頭のものが2軒、前期後半のものが12軒、前期末葉のものが1軒、中期後半のものが2軒検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木式様式の系統を持つ土器が出土している。1～4の特徴は、報文に

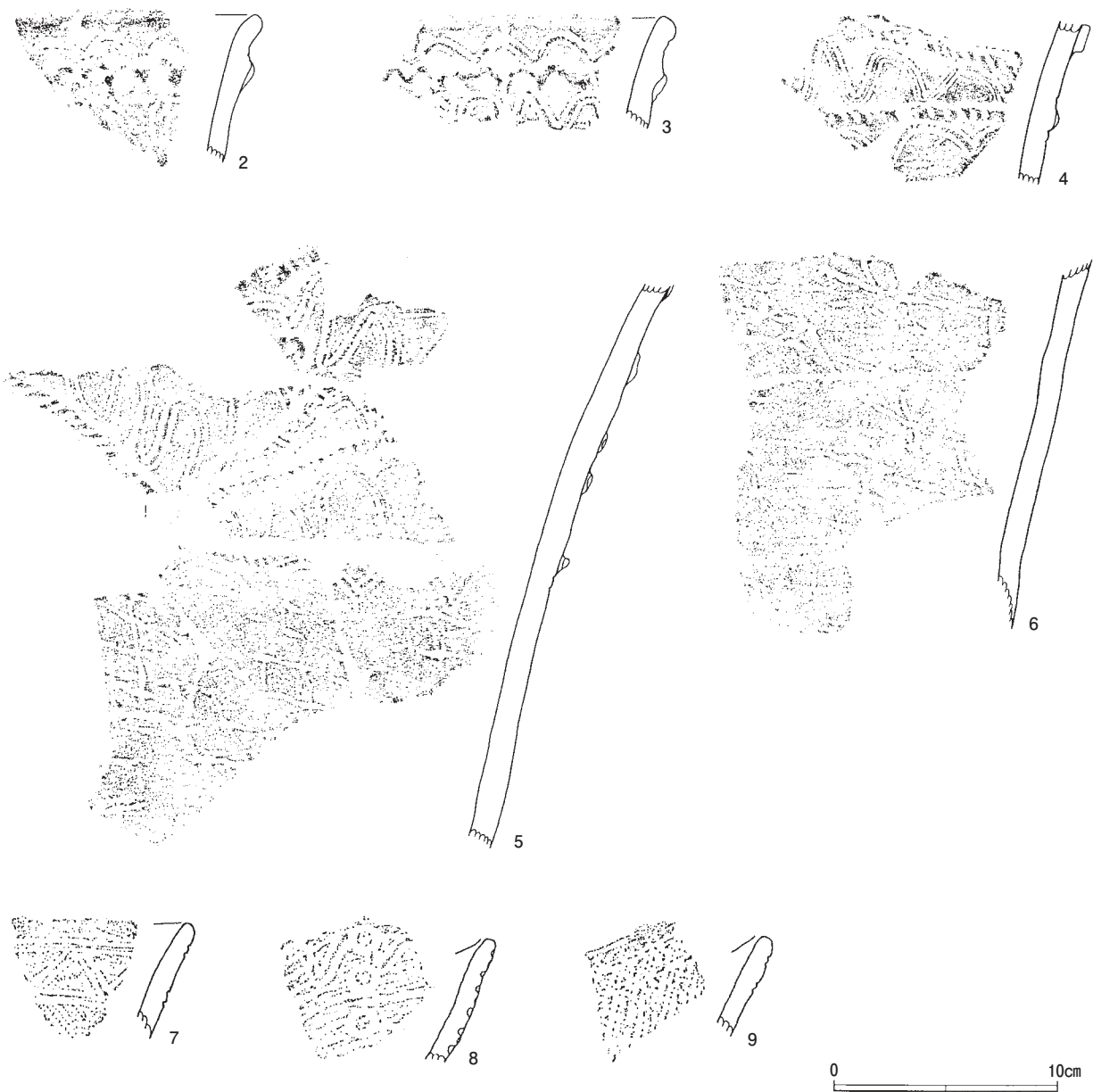


(報告書より転載)



第48図 四街道市木戸先遺跡(1)

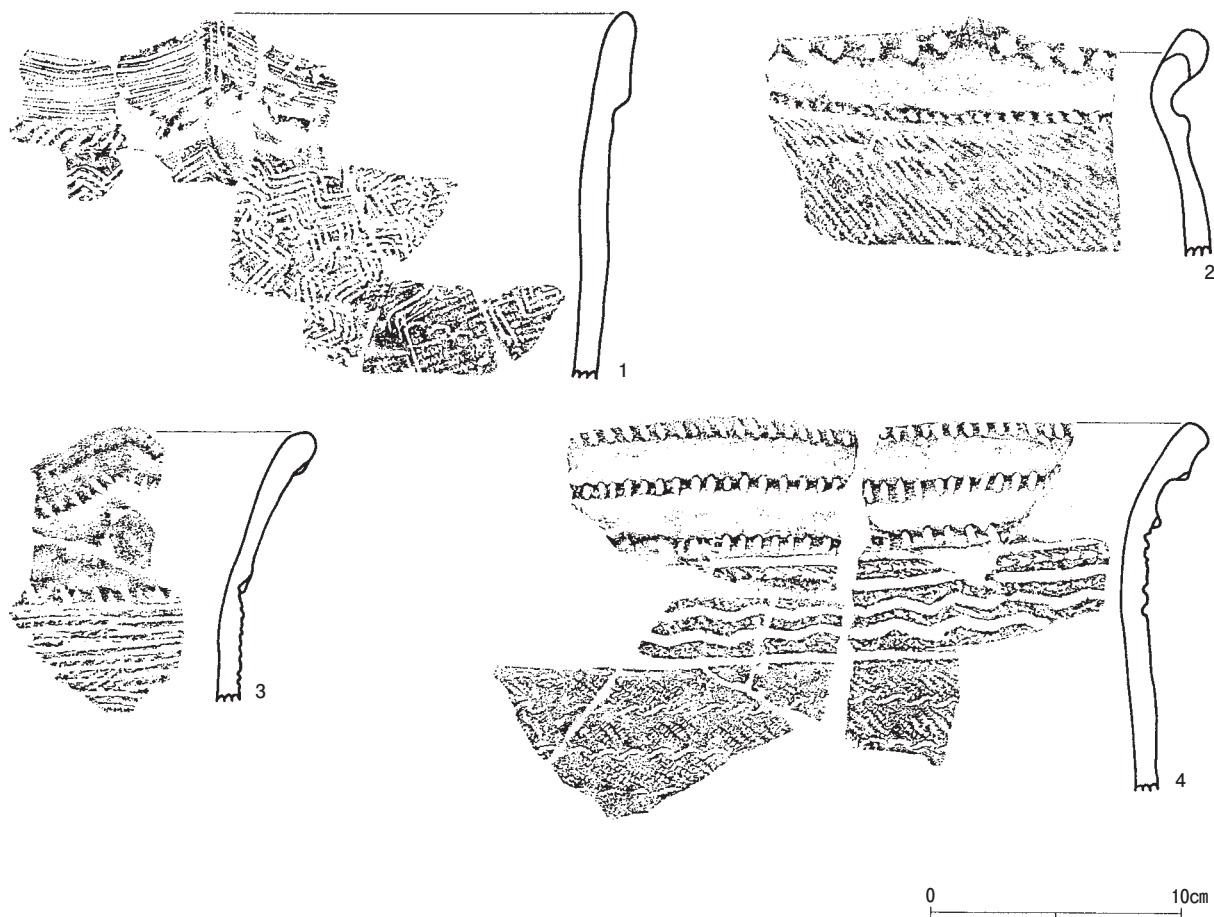




第49図 四街道市木戸先遺跡(2)

よれば「1は山形波状の口縁部破片である。垂直気味の立上がりをもつ資料で、口縁に幅2.5cm余りの折り返しをもち、折り返し部下端に斜めの篋刻みを施している。山形の波頂部外側は柵状に肥厚され、その上に縦位の集合沈線、折り返し部に横走する集合沈線がそれぞれ施される。器面には地文LR撚り結節縄文の上に縦ないし横走する山形文が施文されている。また2は小波状をもつ口縁部破片で、頸部が『くの字状』に強くくびれ、口縁部は肥厚する。肩部に刺突を有する1条の隆帯を廻らし、その下位の胴部にRL撚りの斜縄文を施す資料で、口唇に太めの篋刻みを配しており、頸部に無文帯をもっている。3も山形波状をもつ資料である。口縁は開き気味に立ち上がっており、幅2.0cm余りの折り返しをもち、折り返し部下端と胴上半に篋刻みをもち、胴部器面はL撚り縄文地の上に横走する平行沈線文を施している資料である。なお本資料の折り返し部下位には無文帯がみられる。4は平口縁の深鉢破片である。頸部から外

反気味に立上がる形状をもち、口唇部が肥厚する。口縁部文様帯を胴上半にもっている資料で、口辺に篋刻みをもつ3条の微隆起帯を廻らし、その下位の胴部には、地文RL撚り結節縄文の上に太めの平行沈線に挟まれた竹管背刺突文を周回させ、さらに胴部を廻る1条の太沈線との間に同一施文具を用いて2条の山形文を配したものである。地文縄文の結節はS字状を呈しており、大木式様式の系統を引く真正の資料と考えられるものである」と観察されている（寺門ほか1993）。



第50図 千葉市文六第1遺跡

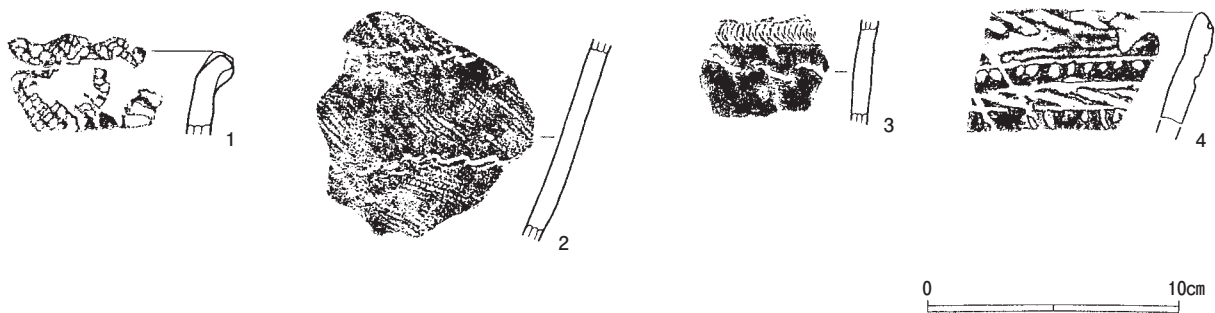
(20) 市原市門脇遺跡（第51図）

市原市磯ヶ谷字門脇8番地13ほか

本遺跡は、東京湾に注ぐ養老川中流右岸の標高70m～72mの台地上に位置する。昭和60年（1985）1月1日から3月31日にかけて高滝導水管建設工事に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積1,130㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期後葉に属する諸磯a式期のものが1軒検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木式系の可能性がある土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「押圧によって小さな波状を呈する口縁部である。口唇部及びその直下に縄文が施文される」と観察されている（小林ほか1985）。

分析資料は大木式系の可能性がある土器（1）、SD-008号跡から出土した前期末葉から中期初頭の土器（2）、遺構外から出土した浮島Ⅱ式土器（3・4）である。



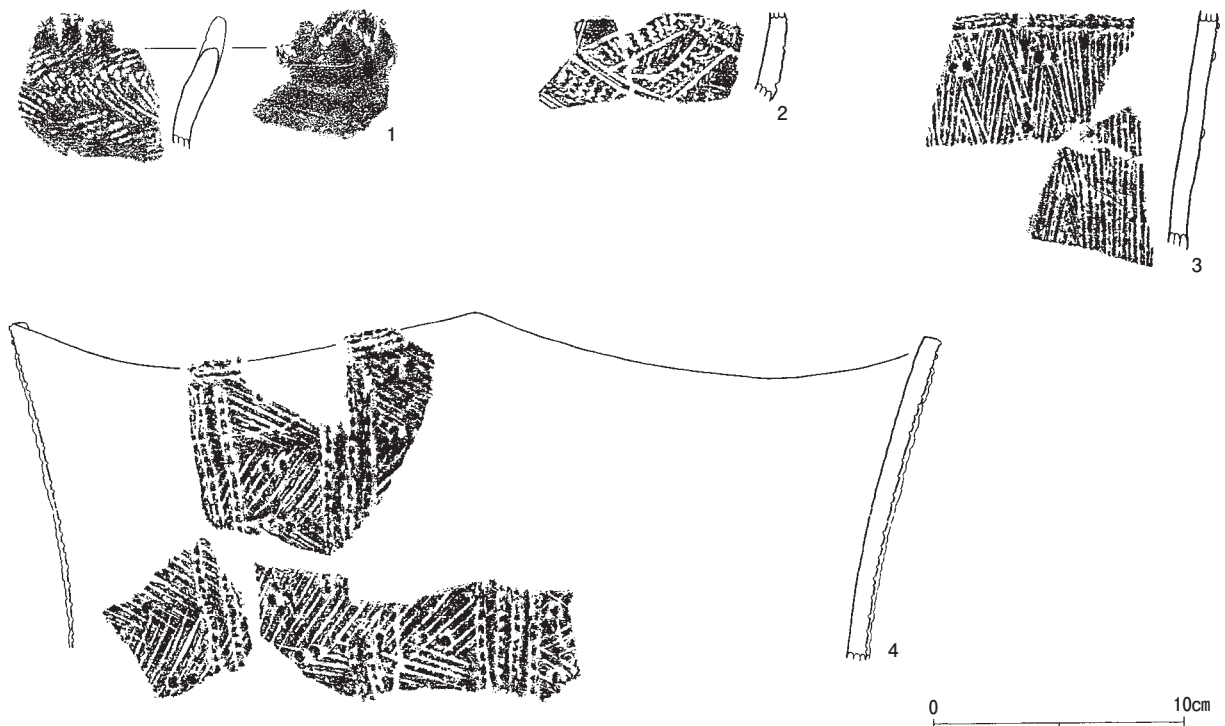
第51図 市原市門脇遺跡

(2) 袖ヶ浦市豆作台遺跡 (第52図)

袖ヶ浦市代宿 8 番地

本遺跡は、東京湾に注ぐ久保田川中流右岸の標高50m～60mの台地上に位置する。平成7年（1995）9月1日から平成9年（1997）3月31日にかけて東京都千葉福祉園整備工事に伴い、(財)君津郡市文化財センターにより発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期後葉に属する鶴ガ島台式期のものが2軒、前期後半のものが18軒、時期不明のものが4軒検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木5式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「口唇上に歯状突起を三個有す。口縁内面には縄文の原体圧痕で鋸歯状のモチーフを施す」と観察されている（井上ほか1999）。



第52図 袖ヶ浦市豆作台遺跡

(22) 香取市（旧佐原市）綱原屋敷跡遺跡（第53図）

香取市（旧佐原市）多田字綱原

本遺跡は、利根川下流で合流する小野川中流右岸の標高約40mの台地上に位置する。昭和57年度から昭和58年度にかけて東関東自動車道建設工事に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積5,610㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は前期後葉に属する浮島Ⅱ式期の土壙1基、前期末葉に属する興津式期の土壙1基、中期初頭に属する五領ヶ台Ⅱ式期の土坑1基、時期不明の土坑6基が検出された。



第53図 香取市（旧佐原市）綱原屋敷跡遺跡

このような遺跡に、遺構外から大木式系の土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「口縁と平行の貼付け隆帯上には半截竹管による刺突が施され、渦巻き文や斜めの貼付け隆帯上には刺突文は認められない。内面に1条の沈線が施文され、胎土に雲母を多く含んでいる」と観察されている（上守ほか1991）。

(23) 香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚<sup>6)</sup>（第54図）

香取市（旧小見川町）白井161ほか

本貝塚は、利根川下流で合流する黒部川中流左岸の標高約40mの台地上に位置する。平成3年（1991）10月1日から31日にかけて県内主要貝塚確認調査の一環として、(財)千葉県文化財センターにより発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は中期後葉に属する加曾利EⅡ式期の小堅穴1軒、中期の土壙1基が検出された。

このような遺跡に、遺構外から大木5式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「折り返し口縁に縄文を有する蛇行隆線を重ねたもの」と観察されている（四柳ほか1992）。

分析資料は大木5式土器（1）と、遺構外から出土した前期末葉から中期初頭の土器（2・3）である。



第54図 香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚

(24) 銚子市栗島台遺跡（第55図）

銚子市南小川町616ほか

本貝塚は、利根川下流で合流する滑川右岸の標高11m～16mの台地上と標高7m前後の低湿地に位置する。古くから知られていた遺跡で、昭和9年（1934）頃、吉田文俊によって最初に発掘調査されたようである。その発掘で、吉田は出土した貝類を分類し、栗島台遺跡周辺の古環境について推察している（伊藤

1994)。その後、今日まで幾度となく発掘調査が実施されているので、古い順から調査歴を記述する。

昭和15年（1940）3月20日から23日にかけて学術調査として、坂詰仲男と和島誠一により発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は検出されなかったが、前期中葉に属する黒浜式土器を主体とする土器片が出土した（坂詰1942）。

昭和24年（1949）6月3日から15日と、昭和25年（1950）10月17日から21日にかけて日本考古学協会における縄文文化編年調査の一環として、大場磐雄を調査隊長とする粟島台遺跡調査会により発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は前期中葉に属する黒浜式期の竪穴住居跡が1軒と、中期後葉の加曾利E式期を主体とする貝塚が検出された。また、琥珀製玉類の未製品を出土したことが注目された（大場ほか1952）。

昭和48年（1973）7月23日から8月3日と、昭和50年（1975）3月17日から4月5日にかけて道路拡幅工事に伴い、銚子市教育委員会により面積168㎡の発掘調査が断続的に実施された。低湿地泥炭層を調査したことから、その結果、縄文時代前期前半～後期前半の遺物が約40,000点出土した。なかでも、漆塗りの木器やヤシの実製容器の出土が注目される。また、琥珀製玉類の製作は中期中葉の阿玉台式期～中期後葉の加曾利E式期であることが明らかになった（寺村・安藤1973、安藤ほか1974、松田ほか2000）。

昭和63年（1988）5月3日から5日にかけて工務店の作業場建設に伴い、銚子市教育委員会により面積500㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代前期～中期の遺物を包含する低湿地泥炭層を確認した（杉山1988）。

平成元年（1989）6月12日から30日にかけてスーパーマーケット建設に伴い、粟島台遺跡発掘調査会により面積3,865㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、低湿地の調査だったため遺構は検出されなかったが、多量の獣骨と縄文中期の木製耳飾が出土した（新井ほか1990）。

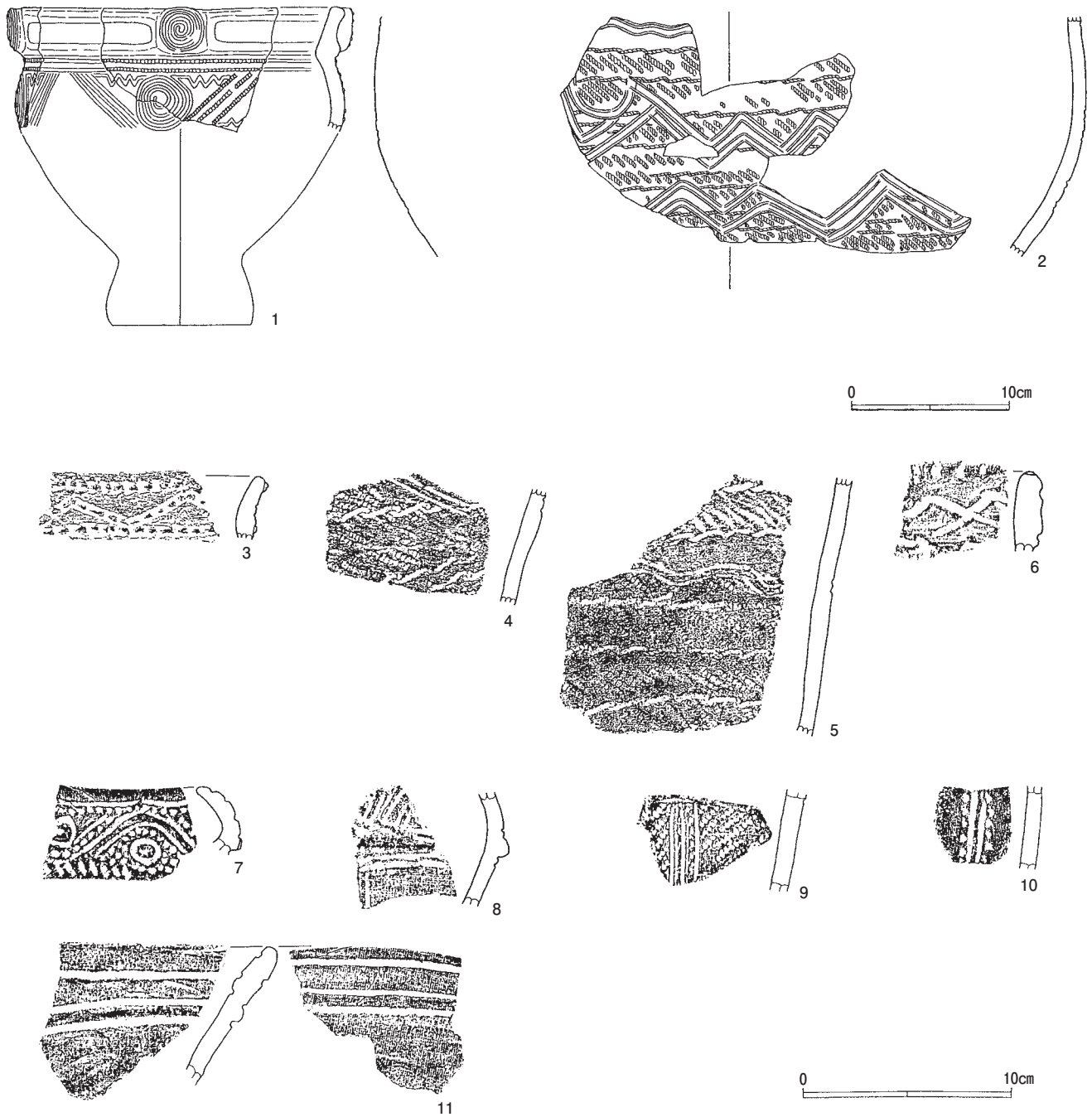
平成2年（1990）1月18日から2月15日と、8月1日から11日にかけて粟島台遺跡保存整備事業として、銚子市教育委員会により発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期中葉に属する黒浜式期のものが4軒、中期中葉に属する阿玉台式期新段階～中期後葉に属する加曾利E式期古段階のものが9軒確認された（小松ほか1991）。

平成3年（1991）11月1日から12月7日と、平成4年（1992）6月1日から7月31日にかけて東京電力送電線鉄塔建設に伴い、(財)東総文化財センターにより約144㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、低湿地泥炭層から前期前半～中期初頭の土器・石器・木製品・獣骨を出土した。特に、木製櫛の出土が注目される（宮内ほか1993）。

平成11年（1999）1月25日から28日にかけて不特定遺跡発掘調査事業として、(財)東総文化財センターにより199.23㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、中期後葉に属する加曾利EⅡ式期の埋甕を出土した（本多2000）。

このような遺跡に、包含層から大木6式土器が出土している。1～5の特徴は、(松田ほか2000)の報文によれば「1は台付鉢と思われる。口縁部を肥厚させ、4単位のソーメン状浮線文による渦巻文と楕円区画文を作る。胴部は4単位の渦巻文を中心とし、それを結節浮線文による斜線文で連結し、空白部にはソーメン状浮線文による鋸歯状文を充填している。3は2条の結節浮線文で挟まれた中に結節沈線文による鋸歯状文を描いている。2・4・5は結節回転文を伴うRL縄文地に、平行沈線文で鋸歯状文を描いている」とし、6～11の特徴は、(新井ほか1990)の報文によれば「6は口縁に刻みを持った平縁の深鉢で

あり、鋸歯状の文様を重ねて施文するが区画のナヅリを欠いている。7はキャリパー型を呈する深鉢で、沈線で区画し、区画内に刺突を施している。8は隆起線で区画し、半截竹管で隆起線の周囲を囲み、区画内にさらに同一工具で沈線を施す。9・10は胴部下半であり、懸垂文を持っている。8は縄文RLを地文にしている。11は結節沈線と沈線を組合せた浅鉢で、口縁部の内側と外側に文様帯を形成する」と観察されている。



第55図 銚子市栗島台遺跡

(25) 芝山町居合台遺跡

山武郡芝山町大台字居合下2681番地ほか

本遺跡は、栗山川中流で合流する高谷川中流右岸の標高約40mの台地上に位置する。平成2年（1990）10月9日から12月6日にかけてゴルフ場造成事業に伴い、(財)山武郡市文化財センターにより面積63㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は整地層と貝層が検出された。

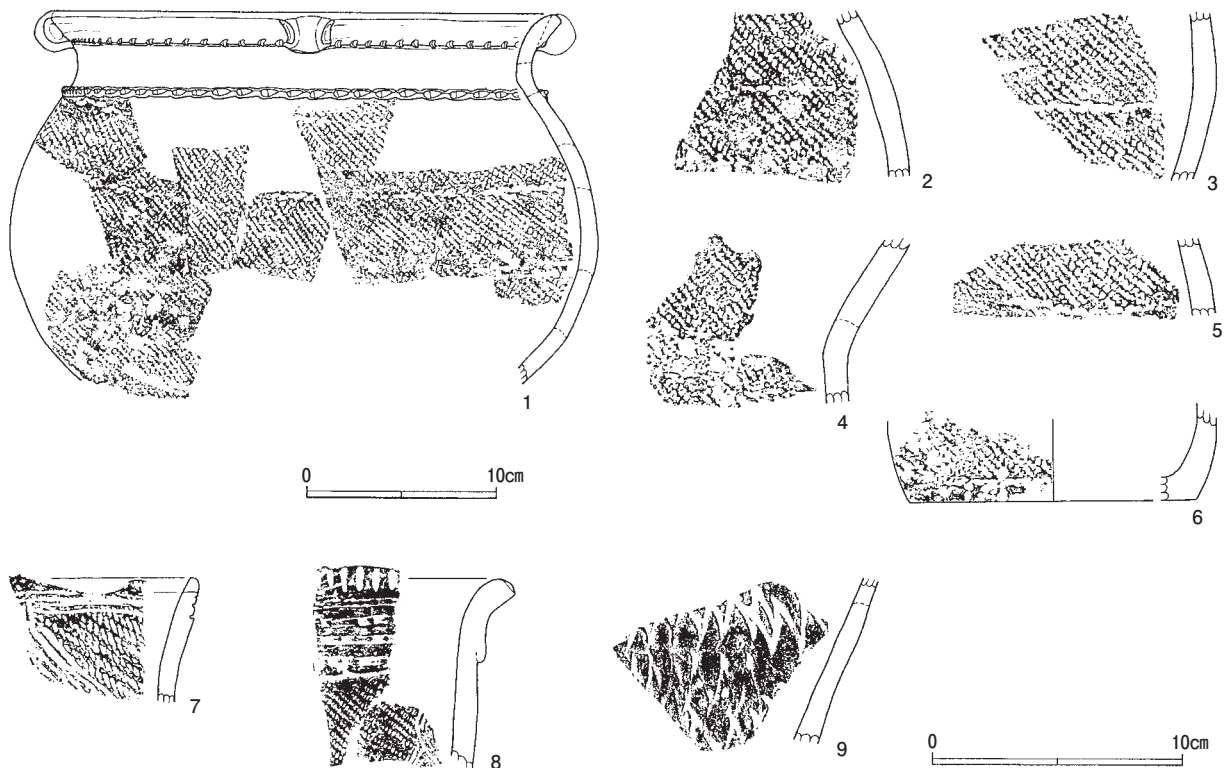
このような遺跡に、遺物包含層から大木6式土器が4点出土している。報文では、写真図版で掲載されている（中野ほか1995）。

(26) 東金市大谷台遺跡（第56図）

東金市滝字大谷台144ほか

本遺跡は、真亀川下流で合流する北幸谷川上流左岸の標高約60mの台地上に位置する。平成7年（1995）9月4日から10月16日にかけて千葉東金道路（二期）建設に伴い、(財)千葉県文化財センターにより面積2,800㎡の発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の遺構は炉穴5基、陥穴1基、土坑数基が検出された。

このような遺跡に、調査区東部の遺物包含層から大木式系の土器が1個体出土している。その特徴は、報文によれば「甕状を呈する深鉢である。口径は約27.0cm、残存器高は19.5cmである。胎土は粒子が粗く、石英、長石粒や黒雲母が多量に混入する。焼成は良好であるが、二次加熱によるとみられる剥落が著しい。口縁部が強く外反し、折り返し口縁状に肥厚する。外側には4対、突起がつけられる。折り返し部分の下側に棒状工具による連続刺突が加えられる。頸部は無文帯となり、その下側に隆起線が貼り付けられ、やはり棒状工具による連続刺突が加えられる。胴部は強く膨らみ、RL縄文と結束文が施される。下



第56図 東金市大谷台遺跡

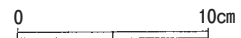
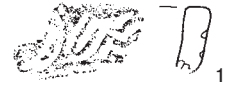
側は強くくびれて円筒状になって底部に達するとみられる。器形から大木系の土器とみられる。2～6は1と同一個体で、2、3、5は胴部の膨らんだ部分、4は下側のくびれた部分、6は底部である」と観察されている（安井ほか1998）。

分析資料は大木式系の土器（3・5・6）と、遺物包含層から出土した諸磯a式土器（7・8）及び浮島式土器（9）である。

#### (27) 東金市鉢ヶ谷遺跡（第57図）

東金市小野字鉢ヶ谷1113番地ほか

本遺跡は、真亀川下流で合流する北幸谷川上流右岸の標高約77mの台地上に位置する。平成5年（1993）9月1日から平成6年（1994）10月5日、平成7年（1995）4月1日から8月11日、平成8年（1996）7月22日から平成9年（1997）2月5日にかけて小野山田土地区画整理事業に伴い、(財)山武郡市文化財センターにより面積83,833㎡の発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期末葉に属する神之木台式期のものが1軒、中期のものが4軒、中期後葉に属する加曾利E式期後半のものが4軒、時期不明のものが1軒検出された。



第57図 東金市針ヶ谷遺跡

このような遺跡に、遺構外から大木6式土器が1点出土している。その特徴は、報文によれば「工具による山形文（三段）を施文。左側一部は円形の貼付が取れたようである。橙褐色で砂粒（石英）を多く含む」と観察されている（青木2000）。

#### (28) 勝浦市上長者台遺跡（第58図）

勝浦市松部上長者台

本遺跡は、太平洋を臨む標高約100mの丘陵突端に位置する。昭和48年（1973）12月20日から28日と、昭和49年（1974）3月14日から31日にかけて埋蔵文化財の保護・保存と郷土史研究の観点から、勝浦市教育委員会により発掘調査が断続的に実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は前期前葉に属する関山式期のものが1軒、前期前葉から中葉のものが1軒、前期中葉に属する黒浜式期のものが1軒、前期後葉に属する諸磯b式期のものが1軒、中期末葉に属する加曾利EIV式期のものが1軒、時期不明のものが1軒検出された（加藤・橋口1974）。



第58図 勝浦市上長者台遺跡

その後、平成2年（1990）5月21日から7月28日にかけてリゾートマンション建設に伴い、勝浦市教育委員会に委託された上長者台遺跡調査会により発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡は早期前葉に属する平坂式期のものが1軒、前期初頭に属する花積下層式期のものが6軒、前期初頭から前葉のものが1軒、前期前葉に属する二ツ木式期のものが4軒、前期前葉に属する関山I式期のものが1軒、前期中葉に属する黒浜式期のものが4軒、前期後葉に属する諸磯b式期又は浮島I式期のものが4軒、前期末葉に属する諸磯c式期又は興津式期のものが1軒、中期前葉に属する阿玉台II式期のものが2軒検出された（新井ほか1992）。

このような遺跡に、諸磯b式期の第4号住居址内から大木5式土器が1点出土している（加藤・橋口1974）。



## 第4節 まとめ

### 1 千葉県内における非在地系土器の分布

#### (1) 木島式土器の分布 (第8図)

千葉県内において、木島式土器を出土した遺跡は7遺跡である。各遺跡を地域別に示すと以下のとおりである。

◎北西部地域…柏市(旧沼南町)石揚遺跡(1)、松戸市二ツ木向台遺跡(2)、同市幸田貝塚(3)、市川市向台貝塚(4)、同市宮久保A遺跡(5)

◎中央部地域…千葉市弥三郎第2遺跡(6)

◎南東部地域…いすみ市(旧大原町)新田野貝塚(7)

7遺跡のうち5遺跡は北西部地域に集中し、江戸川中・下流域に多く分布している。一方、北部から北東部の地域と、南西部から南部の地域は空白地帯になっている。

新田野貝塚から出土した木島式土器は、花積下層式期の新段階に併行するものと考えられ、南東部地域への伝播は後れて入ってきたことになる。この状況から、木島式土器は西方から北西部地域へ最初に伝播されたことが想定される。また当時、江戸川流域は「古奥東京湾」の沿岸部に当たり、二ツ木向台遺跡・幸田貝塚・向台貝塚・宮久保A遺跡が「古奥東京湾」を臨む台地上に立地している。さらに、弥三郎第2遺跡の近くを流れている村田川は東京湾に注いでいる。そのことから、木島式土器の伝播は東京湾と密接な関係があったのだろう。

#### (2) 北白川下層式土器の分布 (第15図)

千葉県内において、北白川下層式土器を出土した遺跡は14遺跡である。各遺跡を地域別に示すと以下のとおりである。

◎北西部地域…野田市北前貝塚(1)、市川市上台貝塚(2)、同市庚塚遺跡(3)、船橋市法蓮寺山遺跡(4)、同市古和田台遺跡(5)、印西市一本桜遺跡(6)

◎中央部地域…四街道市木戸先遺跡(7)、千葉市五味ノ木遺跡(8)、同市有吉北貝塚(9)、同市バクチ穴遺跡(10)、同市文六第1遺跡(11)、袖ヶ浦市豆作台遺跡(12)

◎南東部地域…勝浦市上長者台遺跡(13)

◎南部地域…南房総市(旧丸山町)加茂遺跡(14)

14遺跡のうち12遺跡は北西部地域から中央部地域に集中し、東京湾の沿岸部に多く分布している。一方、北東部地域と南西部地域は空白地帯になっている。

特定された型式別でみると、北白川下層Ⅱc式土器を出土した遺跡が6遺跡と最も多く、中央部地域と南東部地域に分布している。北西部地域は北白川下層Ⅰ式・Ⅱa式・Ⅱb式の土器を出土しており、前者よりも古式である。したがって、木島式土器と同様、北白川下層式土器も西方から北西部地域へ最初に伝播され、その後南下し、交流が北白川下層Ⅱc式期まで続いていたものと想定される。しかも、東京湾へ流入する河川の流域に立地している遺跡が10遺跡とかなり多いことから、東京湾沿いに南下し、河川伝いに広がっていったことが予想される。

#### (3) 前期大木式系土器の分布 (第30図)

千葉県内において、前期大木式系土器を出土した遺跡は28遺跡である。各遺跡を地域別に示すと以下のとおりである。

◎北西部地域…野田市二ツ塚古墳群（1）、同市本郷遺跡（2）、柏市中山新田Ⅰ遺跡（3）、同市（旧沼南町）金山宮後原遺跡（4）、船橋市西の台遺跡（5）、八千代市ライノ作南遺跡（6）、同市芝山遺跡（7）

◎北部地域…栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点（8）、成田市南羽鳥中岫第1遺跡（9）、同市西向野Ⅰ遺跡（10）、酒々井町墨新山遺跡（11）、佐倉市鑄木諏訪尾余遺跡（12）、同市間野台貝塚（13）

◎北東部地域…香取市（旧佐原市）綱原屋敷跡遺跡（22）、香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚（23）、銚子市栗島台遺跡（24）、芝山町居合台遺跡（25）

◎中央部地域…四街道市池花南遺跡（14）、同市和良比遺跡（15）、同市上野遺跡（16）、同市中ノ尾余遺跡（17）、同市木戸先遺跡（18）、千葉市文六第1遺跡（19）、市原市門脇遺跡（20）、袖ヶ浦市豆作台遺跡（21）、東金市大谷台遺跡（26）、同市鉢ヶ谷遺跡（27）

◎南東部地域…勝浦市上長者台遺跡（13）

28遺跡のうち27遺跡は袖ヶ浦市より以北の地域に集中し、利根川流域や印旛沼周辺に多く分布している。一方、南西部から南部の地域は空白地帯になっている。

特定された型式別でみると、大木5式・6式の土器を出土した遺跡が13遺跡と最も多く、大木式土器が出土する地域には遺漏なく分布している。しかし、大木2a式・2b式の土器を出土した遺跡は北西部から北部の地域に限定される。したがって、前期大木式系土器は北方から北西部から北部の地域へ最初に伝播され、その後南へ波及していったものと想定される。また、出土した前期の大木式土器は2a式・2b式のもの、5式・6式のものに限られていることから、伝播が一旦途切れるのかもしれない。

太平洋に注ぐ利根川水系の流域と、手賀沼・印旛沼へ流入する河川の流域に位置する遺跡は20遺跡とかなり多い。利根川流域や手賀沼・印旛沼周辺は当時の「古鬼怒湾」や「旧香取海」の沿岸部に当たり、前期大木式系土器の伝播は「古鬼怒湾」・「旧香取海」と密接な関係があったのだろう。

## 註

- 1 二ツ木第二貝塚は、『千葉県の歴史 資料編 考古Ⅰ（旧石器・縄文時代）』（財団法人千葉県史料研究財団 2000）によると、二ツ木向台貝塚と名称が変更されている。
- 2 領塚正浩は「向台貝塚資料図譜」（堀越ほか 1999）中で、『「堅穴住居跡」という用語は、柱穴のある堅穴状遺構の総称として用いられているが、遺構内の施設や遺物から住居と判断できない場合もあることから、掘立柱建物跡と対になる用語として『堅穴建物跡』という用語を採用することにした』と註釈を入れていることから、原文通りとした。
- 3 本遺跡の名称は、『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』（財団法人千葉県文化財センター 1997）による。ちなみに、「静岡県に於ける細線紋指痕薄手土器と其伴出石器」（加藤・芹澤 1936）では宮久保貝塚、『市川市史』（杉原・戸沢 1971）では宮久保遺跡の名称を使用している。
- 4 以前に、上台貝塚は「旧東練兵場貝塚」（西村 1961）、あるいは「北台遺跡」（杉原・戸沢 1971）と呼ばれていた。
- 5 本遺跡は長者ヶ台高梨遺跡と同一であるので、平成4年に遺跡名が統一された。
- 6 同一台地上に白井大宮台貝塚、白井雷貝塚、白井通路貝塚の3貝塚がある。それらの配置状況を見ると、同一集落の環状貝塚と考えられる。したがって、3貝塚を一つの貝塚として捉えたいところである。しかし、『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)－香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）－』（財団法人千葉県文化財センター 1998）では未だ3貝塚に分離して記載されているので、ここではそれに従うこととする。

## 引用・参考文献

- 青木幸一 2000「小野山田遺跡群Ⅰ－鉢ヶ谷遺跡－」『財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書』第65集（助山武郡市文化財センター）
- 網谷克彦ほか 1979『鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査Ⅰ－』鳥浜貝塚研究グループ
- 網谷克彦 1981「Ⅳ．研究の成果 8．鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」『鳥浜貝塚 1980年度発掘調査概報－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査Ⅰ－』鳥浜貝塚研究グループ
- 1982「5．前期の土器 北白川下層式土器」『縄文文化の研究第3巻 縄文土器Ⅰ』(株)雄山閣出版
- 新井和之ほか 1984『佐倉市鏑木諏訪尾余遺跡』鏑木諏訪尾余遺跡調査会
- 新井和之ほか 1985『西の台（第2次）－船橋市西の台遺跡発掘調査報告書－』船橋市遺跡調査会
- 新井和之ほか 1990『銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書－スーパーマーケット建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』粟島台遺跡発掘調査会
- 新井和之ほか 1992『千葉県勝浦市上長者台遺跡－リゾートマンション建設に伴う遺跡発掘調査報告書－』上長者台遺跡調査会
- 安藤文一ほか 1974『粟島台遺跡－1973年度発掘調査概要－』銚子市教育委員会
- 飯塚博和ほか 1980『野田市本郷遺跡発掘調査報告書』野田市本郷遺跡調査団
- 飯塚博和ほか 1985「千葉県野田市二ツ塚古墳群－終末期古墳及び土師集落址の調査－」『遺跡調査会報告』第3冊 野田市遺跡調査会
- 池田大助ほか 1986「第2章 五味ノ木遺跡」『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書 五味ノ木遺跡・殿山掘込遺跡・廿五里城跡・根崎遺跡・京願台遺跡・柳沢遺跡』(助)千葉県文化財センター
- 池谷信之ほか 1985「平沼吹上遺跡発掘調査報告書」『沼津市文化財調査報告書』第36集 沼津市教育委員会
- 磯部幸男・杉崎 章・久永春男 1965「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』第41号 古代学研究会
- 伊藤睦憲 1994「粟島台遺跡と吉田文俊」『宇奈加美』第2号 宇奈加美考古学研究会
- 井上 賢ほか 1999「豆作台遺跡Ⅰ－東京都千葉福祉園整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)－」『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第150集（助）君津郡市文化財センター
- 今村啓爾 2006「大木6式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学 考古学研究室研究紀要』第20集 東京大学大学院人文系研究科・文学部考古学研究室
- 植月 学ほか 1997「庚塚遺跡第5地点」『平成8年度市川市内遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 宇佐美義春ほか 1994『千葉県東葛飾郡沼南町金山宮後原遺跡－縄文時代前期中葉の集落址－』金山宮後原遺跡調査会
- 江坂輝彌ほか 1952「加茂遺蹟－千葉縣加茂獨木舟出土遺蹟の研究－」『考古学・民族学叢刊』第1冊 三田史學會
- 江坂輝彌 1956「Ⅲ 各地域の縄文式土器 東北」『日本考古学講座第三巻 縄文文化』(株)河出書房
- 江坂輝弥 1959「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」『世界考古学大系第1巻 日本1 先縄文・縄文時代』(株)平凡社
- 1964「《付表3》縄文土器型式の編年比較表」『日本原始美術1 縄文式土器』(株)講談社
- 江森正義 1968「千葉県松戸市二ツ木向台遺跡の土器」『下総考古学3』下総考古学研究会
- 大賀 健ほか 1986『四街道市吉岡遺跡群発掘調査報告書』四街道市吉岡遺跡群調査会
- 大澤 孝ほか 1993「千葉県四街道市上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書－四街道総合公園事業地内埋蔵文化財調査－」『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第67集（助）印旛郡市文化財センター
- 大塚広往 1977「幸田貝塚 第6次（昭和51年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』11 松戸市教育委員会
- 大塚広往ほか 1978「幸田貝塚 第7次（昭和52年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』12 松戸市教育委員会
- 大塚広往ほか 1979「幸田貝塚 第8次（昭和53年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』13 松戸市教育委員会

- 大塚広往ほか 1987「昭和61年度松戸市内遺跡群発掘調査概報」『松戸市文化財調査報告』第13集 松戸市教育委員会
- 大塚広往ほか 1989「昭和63年度松戸市内遺跡群発掘調査概報」『松戸市文化財調査報告』第15集 松戸市教育委員会
- 大塚広往ほか 1991「平成2年度松戸市内遺跡群発掘調査概報」『松戸市文化財調査報告』第17集 松戸市教育委員会
- 大野康男ほか 1983「第2章 バクチ穴遺跡」『千葉東南部ニュータウン14-バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡-』  
(財)千葉県文化財センター
- 大場磐雄ほか 1952「千葉縣銚子市栗島臺石器時代遺跡調査報告」『上代文化』第22輯 國學院大學考古學會
- 大山 柏ほか 1933「東京灣に注ぐ主要溪谷に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究豫報(第1編)」『史前學雜誌』第3卷第6號  
史前學會
- 小笠原永隆ほか 1998「千葉東南部ニュータウン19-千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)-」『千葉県文化財センター調査報告』  
第324集 (財)千葉県文化財センター
- 岡田茂弘 1965「Ⅱ 縄文文化の發展と地域性7 近畿」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』(株)河出書房新社
- 小倉和重ほか 1997「千葉県印旛郡酒々井町墨新山遺跡-ホソヤミート調理食品工場造成地内埋藏文化財調査報告書-」『財団法人印  
旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第130集 (財)印旛郡市文化財センター
- 落合章雄 1989「八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡-東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋藏文化財調査報告書-」『千葉県文化財  
センター調査報告』第176集 (財)千葉県文化財センター
- 柿沼修平ほか 1982『龍角寺ニュータウン遺跡群-龍角寺ニュータウン遺跡調査報告書-』龍角寺ニュータウン遺跡調査会
- 加藤明秀・芹澤長介 1936「静岡縣に於ける細線紋指痕薄手土器と其伴出石器」『考古學』第7卷第9號 東京考古學會
- 加藤晋平・橋口定志 1974「千葉県勝浦市における発掘調査(1)-長者ヶ台高梨遺跡-」『月刊 考古学ジャーナル8月号』No.98  
ニュー・サイエンス社
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956「Ⅲ 各地域の縄文式土器 中国」『日本考古学講座第三卷 縄文文化』(株)河出書房
- 鎌木義昌 1959「広域文化圏 縄文前期文化」『世界考古学大系第1卷 日本1 先縄文・縄文時代』(株)平凡社  
1965「縄文式土器編年表」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』(株)河出書房新社
- 上守秀明ほか 1991「東関東自動車道埋藏文化財調査報告書Ⅵ(佐原地区3) 大稲塚遺跡・棒木台遺跡・毛内遺跡・網原遺跡・網原  
屋敷跡遺跡・多田網原遺跡・出口遺跡」『千葉県文化財センター調査報告』第191集 (財)千葉県文化財センター
- 喜多圭介 1996「千葉県佐倉市間野台貝塚-不特定遺跡(間野台貝塚)発掘調査-」『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告  
書』第120集 (財)印旛郡市文化財センター
- 興野義一 1967「大木式土器理解のために(I)」『月刊 考古学ジャーナル10月号』No.13 ニュー・サイエンス社  
1968a「大木式土器理解のために(Ⅱ)」『月刊 考古学ジャーナル1月号』No.16 ニュー・サイエンス社  
1968b「大木式土器理解のために(Ⅲ)」『月刊 考古学ジャーナル3月号』No.18 ニュー・サイエンス社  
1968c「大木式土器理解のために(Ⅳ)」『月刊 考古学ジャーナル9月号』No.24 ニュー・サイエンス社  
1969「大木式土器理解のために(Ⅴ)」『月刊 考古学ジャーナル5月号』No.32 ニュー・サイエンス社  
1970a「大木5b式土器の提唱-宮城県長者原遺跡出土資料による-」『古代文化』第22卷第4号 財団法人古代學協會  
1970b「大木式土器理解のために(Ⅵ)」『月刊 考古学ジャーナル9月号』No.48 ニュー・サイエンス社
- 紅村 弘 1963「天神山包含地」『東海の先史遺跡 総括編』名古屋鉄道株式会社
- 小島俊次 1956「Ⅲ 各地域の縄文式土器 近畿」『日本考古学講座第三卷 縄文文化』(株)河出書房
- 小林清隆ほか 1985『市原市門脇遺跡-高滝導水管事業に伴う埋藏文化財調査報告書-』(財)千葉県文化財センター
- 小林行雄ほか 1935「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16册 京都府
- 小松 繁ほか 1991『千葉県銚子市栗島台遺跡発掘調査報告書』銚子市教育委員会

- 財団法人千葉県史料研究財団 2000『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』 千葉県
- 財団法人千葉県文化財センター 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区 (改訂版)－』
- 坂詰伸男 1942「下總國小川町貝塚發掘略報」『人類學雜誌』第57卷第11號 日本人類學會
- 篠遠喜彦・ジェラードグロート 1955「千葉県東葛飾郡二ツ木第二貝塚」『日本考古学年報3 昭和25年度』 日本考古学協会
- 澁谷昌彦 1982「木島式土器の研究－木島式土器の型式細分について－」『静岡県考古学研究』11 静岡県考古学会
- 1984「花積下層式土器の研究－側面圧痕文土器を中心として－」『丘陵－甲斐丘陵考古学研究会会報－』 第11号 甲斐丘陵考古学研究会
- 下島健弘 2002「木島系統土器群の研究」『静岡県考古学研究』34 静岡県考古学会
- 庄司 克・堀越正行 1974「松戸市二ツ木向台遺跡における早期縄文式土器の研究」『史館』第3号 市川ジャーナル
- 杉原莊介・戸沢充則 1971「原始・古代 4 貝塚文化－縄文時代」『市川市史』第1巻 市川市史編纂委員会
- 杉山孝則 1988『粟島台遺跡一部確認調査報告書』 銚子市教育委員会
- 関野哲夫ほか 1990「清水柳北遺跡發掘調査報告書 その2－東尾根の先土器・縄文・古墳・奈良時代の調査－ 中央尾根の先土器・縄文・古墳時代の調査－」『沼津市文化財調査報告』第48集 沼津市教育委員会
- 関山純也ほか 1999「平成9年度松戸市内遺跡發掘調査概報」『松戸市文化財調査報告』第30集 松戸市教育委員会
- 関山純也ほか 2004「平成14年度松戸市内遺跡發掘調査概報」『松戸市文化財調査報告』第36集 松戸市教育委員会
- 芹澤長介 1948「静岡市時ヶ谷の縄文土器」『日本考古學』第1巻第2號 日本考古學研究所
- 高橋 誠 1991「千葉県成田市西向野Ⅰ遺跡・西向野Ⅱ遺跡」『財団法人印旛郡市文化財センター發掘調査報告書』第58集 (財印旛郡市文化財センター)
- 高橋 誠ほか 1994「千葉県四街道市木戸先遺跡－御成台団地宅地造成事業地内埋蔵文化財調査－」『財団法人印旛郡市文化財センター發掘調査報告書』第79集 (財印旛郡市文化財センター)
- 武井則道ほか 1975「新田野貝塚－千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚－」『立教大学考古学研究会調査報告』2 立教大学考古学研究会
- 田中英治 1990「庚塚遺跡」『平成元年度市川市内遺跡發掘調査報告』 市川市教育委員会
- 玉井庸弘ほか 2000『千葉県八千代市ライノ作南遺跡發掘調査報告書－宅地造成に先行した埋蔵文化財發掘調査－』 八千代市遺跡調査会
- 角田文衛 1936「陸前船入島貝塚の研究」『考古學論叢』第3輯 考古學研究會
- 寺門義範ほか 1992『土気南遺跡群Ⅱ 弥三郎第2遺跡』 (財千葉市文化財調査協会)
- 寺門義範ほか 1993「第Ⅲ篇 文六第1遺跡」『土気遺跡群Ⅳ 弥三郎第1遺跡・文六第1遺跡・文六第2遺跡・文六第3遺跡』 (財千葉市文化財調査協会)
- 寺村光晴・安藤文一 1973「千葉県粟島台遺跡の調査」『月刊 考古学ジャーナル11月号』No88 ニュー・サイエンス社
- 中野修秀ほか 1995「居合台遺跡發掘調査報告書」『財団法人山武郡市文化財センター發掘調査報告書』第26集 (財山武郡市文化財センター)
- 中山俊之ほか 1991「千葉県四街道市和良比遺跡發掘調査報告書Ⅰ 四街道市和良比地区埋蔵文化財調査」『財団法人印旛郡市文化財センター發掘調査報告書』第43集 (財印旛郡市文化財センター)
- 中山秀吉ほか 1973「一本桜遺跡 (CN401・403)」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 (財千葉県都市公社)
- 西村正衛 1961「千葉県市川市国分田東練兵場貝塚」『學術研究－人文・社会・自然－』第10号 早稲田大学教養学部
- 1963「千葉県市川市国分田東練兵場貝塚」『日本考古学年報10 (昭和32年度)』 日本考古学協会
- 濱田耕作 1918「河内國國府石器時代遺跡發掘報告」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第2冊 京都帝國大學

- 原田昌幸ほか 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－元割・聖人塚・中山新田Ⅰ－』（助千葉県文化財センター）
- 古里節夫ほか 1985「島崎遺跡・幸田貝塚（第10次調査）－昭和59年度北部地区遺跡群調査報告書－」『松戸市文化財調査報告』第10集 松戸市教育委員会
- 古里節夫ほか 1986「幸田貝塚（第11次調査）・東平賀貝塚（第4次調査）－昭和60年度市内遺跡群調査報告書－」『松戸市文化財調査報告』第12集 松戸市教育委員会
- 古里節夫ほか 1988「昭和62年度松戸市内遺跡群発掘調査概報」『松戸市文化財調査報告』第14集 松戸市教育委員会
- 堀越正行 1988「上台貝塚」『市立市川考古博物館研究調査報告』第4冊 市立市川考古博物館
- 堀越正行ほか 1998『千葉県史編さん 松戸市二ツ木上台貝塚資料調査報告書』（助千葉県史料研究財団）
- 堀越正行ほか 1999「向台貝塚資料図譜」『市立市川考古博物館研究調査報告』市川市教育委員会
- 本多昭宏 2000「不特定遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財調査 粟島台遺跡」『東総文化財センター年報5 平成10年度』（助東総文化財センター）
- 増子康眞 1977「いわゆるオセンベ土器の研究」『信濃』第29巻第4号 信濃史学会
- 1997「東海地方西部における縄文前期中葉土器群の成立過程」『縄文時代』第8号 縄文時代文化研究会
- 1999「Ⅱ. 列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望(2) 東海地方 前期」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 松田光太郎ほか 2000『粟島台遺跡－銚子市粟島台遺跡1973・1975年の発掘調査報告書－』銚子市教育委員会
- 松田光太郎 2002「関東・中部地方における十三菩提式土器の変遷」『神奈川考古』第38号 神奈川考古同人会
- 松田富美子ほか 1997「千葉県成田市南羽鳥遺跡群Ⅱ 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)－南羽鳥中岬第1遺跡A・B・C・D・E・G地点」『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第133集（助印旛郡市文化財センター）
- 松本太郎ほか 1994「向台遺跡第2地点」『市川市内遺跡発掘調査報告』第7冊 市立市川考古博物館
- 溝井俊一ほか 1973『古和田台遺跡－縄文前期集落址調査報告書－』船橋市教育委員会
- 南 久和 2002「鳥浜貝塚の前期土器群」『石川考古学研究会々誌』第45号 石川考古学研究会
- 宮入和博ほか 1973「法蓮寺山遺跡」『小金線 小金線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（助千葉県都市公社）
- 宮内勝巳ほか 1993「千葉県銚子市仲有戸遺跡 佐野原北遺跡 荒野台遺跡 粟島台遺跡 東京電力送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『財団法人 東総文化財センター発掘調査報告書』第3集（助東総文化財センター）
- 宮崎 紘・稻生典太郎 1935「下總堀之内貝塚對岸に於ける古式縄文式土器出土の一小貝塚」『史前學雜誌』第7巻第4號 史前學會
- 村田一二ほか 1979「野田市北前貝塚」『野田市文化財報告』第4冊 野田市郷土博物館
- 森川昌和 1963「福井県鳥浜貝塚をめぐる2、3の問題」『物質文化』1 物質文化研究会
- 安井健一ほか 1994「石揚遺跡－手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－」『千葉県文化財センター調査報告』第255集（助千葉県文化財センター）
- 安井健一ほか 1998「千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書2－東金市大谷台遺跡他18遺跡－」『千葉県文化財センター調査報告』第331集（助千葉県文化財センター）
- 矢島清作 1941「千葉県幸田貝塚の堅穴住居遺跡」『古代文化』第20巻第4号 日本古代文化学会
- 八幡一郎ほか 1971「幸田貝塚 第1次（昭和45年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』4 松戸市教育委員会
- 八幡一郎ほか 1972「幸田貝塚 第2次（昭和46年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』5 松戸市教育委員会
- 八幡一郎ほか 1973「幸田貝塚 第3次（昭和47年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』6 松戸市教育委員会
- 八幡一郎ほか 1975a「幸田貝塚の調査(4) 昭和49年度発掘調査概報」『松戸市文化財調査小報』7 松戸市教育委員会
- 八幡一郎ほか 1975b「幸田貝塚 第5次（昭和50年度）調査概報」『松戸市文化財調査小報』8 松戸市教育委員会
- 山下勝年 1988「清水ノ上貝塚で発見されたアカホヤ火山灰層と縄文土器」『知多古文化研究－4－』知多古文化研究会

- 1996「清水ノ上Ⅰ式・同Ⅱ式土器について－清水ノ上貝塚第2次調査出土土器を中心として－」『知多古文化研究－10－杉崎 章先生追悼論文集』 知多古文化研究会
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古學』第1巻第1號 先史考古學會
- 四柳 隆ほか 1992「小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書－千葉県主要貝塚確認調査報告書第4集－」『千葉県文化財センター調査報告』第220集 (財)千葉県文化財センター
- 吉田哲夫 1984「木島系土器群の研究」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会
- 渡辺修一 1991「四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－」『千葉県文化財センター調査報告』第200集 (財)千葉県文化財センター

## 第3章 中期の非在地系土器

### －房総半島におけるいわゆる曾利式系土器について－

#### はじめに

房総半島における縄文時代中期の非在地系土器の代表例として、「曾利式系土器」を取り扱う。当該地域において「曾利式系土器」といえば、いわゆる「斜行文・重弧文土器」がすぐに連想されるのであるが、主にこの土器に焦点を当て、論を進めることとしたい。

この曾利式の系譜を引く「斜行文・重弧文土器」については、従前から、本来の曾利式土器分布圏から離れた遠隔地で出土することが注意されており、房総半島においても、古くから出土例があることが知られていた。しかし、当該地域において本格的な検討はこれまであまり行われたことがなく、その実態については明瞭とは言い難い。

今回、縄文時代の非在地系土器について取り扱う機会を得たことから、中期における代表的な非在地系土器として、「斜行文・重弧文土器」を中心とした曾利式系土器について、房総半島における出土例の集積をおこない、若干の検討を加えることとした。方法については、筆者も参加した下総考古学研究会の房総半島における勝坂式の研究（下総考古学研究会 2004）を参考とした<sup>1)</sup>。

#### 第1節 研究略史

##### 1 非在地的な曾利式系土器に対する関心

曾利式土器は、『井戸尻』報告（藤森 1965）における型式設定の経緯から、八ヶ岳山麓を含むいわゆる「中部高地」が主たる分布域と考えられたのであるが、その後、分布の中心が甲府盆地を中心とした山梨県域にあることが、概ね共通認識となり今日に至る。特に『釈迦堂』の報告（小野 1986）以降の山梨県域における資料の充実は、曾利式の編年等に関する研究の進展を大きく促した。

関東地方における曾利式については、特に関東地方の南西部において、ある時期においては加曾利E式を凌駕するほどの量の曾利式が出土することが知られ、この2者の関係については、比較的早い時期から神奈川考古シンポジウムなどで大きなテーマとして扱われてきた（神奈川考古同人会 1980・1981）。曾利式土器分布圏と直接接する地域においては、このシンポジウム以降、関東の加曾利E式－中部の曾利式という二元論的な理解から、加曾利E式と曾利式の折衷土器の存在が注意され（小林 1983など）、土器組成の複雑な実態の解明により関心が向うようになったと評価できよう。バブル期の爆発的な資料の増加を経た今日においては、曾利式と加曾利E式の関係について、特に細別された編年のすり合わせの部分で、あらためて大きな課題となっており、縄文集落研究の新地平3シンポジウムのテーマともなった（縄文集落研究グループ・セツルメント研究会 2004）。

ただし、武蔵野・多摩地域や相模地域といった曾利式土器の本場と目される地域と隣接した地域より東側の、房総半島を含む関東地方東部においては、曾利式土器がまとまって出土することはまれであり、古くから曾利式（とその類似土器）が少数出土することは知られていたものの、客体的な出土遺物として、大きな関心を引くことはあまりなかったようである。例えば昭和56年（1981）の日本考古学協会シンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」では、関東地方北東部の諸県及び福島県の様相が明らかに



され、その中で遠隔地においても少数の曾利式類似土器が出土することが改めて認識されたが、個別のテーマとして取り上げられることはなかった（日本考古学協会 1981）。また、いわゆる「埼玉編年」と呼ばれる、埼玉県埋蔵文化財事業団による「縄文中期土器の再編」では、東京・埼玉・千葉の資料を集成し、時系列に沿った形で土器様相を概観し、この3県における曾利式系土器の変遷についての見通しも示された（谷井ほか 1982）。ただし後述するように、千葉県に関しては曾利式の影響は限定的であることが示された。

分布の中心から離れた遠隔地で出土する曾利式土器を個別に扱う論考としては、比較的早い時期に、能登健・石坂茂が加曾利E式に伴出する「重弧文土器」についての考察をおこない、「重弧文土器」に複数の系譜が存在することを明らかにした（能登・石坂 1980）。また、谷井彪は埼玉県下出土の曾利式系「籠目文土器」を中心に論考をおこない、その成立について広範囲からの影響を認めた（谷井 1987）。また、千葉県下においては、後に再度触れるが南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）出土土器に関連した論考があり（小川 1989・戸田 1991）、房総半島南部で出土した曾利式土器について注意を向けるものであった。

バブル期を経た各地域における資料の多大な集積は、地域ごとの土器様相をより明瞭に把握することを可能とした。特に、遺構出土資料の増加は、堅穴という単位ではあるものの、土器群のセット関係を把握するための重要な足がかりとなり、地域における異系統土器のあり方も見出しやすくなったと考える。また、時間軸の整備が進み、編年的な検討が一段落した感のある昨今、地域内では主体でなかった土器群にも目配りがされるようになり、非在地的な土器に対する関心が高まっているようである。曾利式土器の本場から離れた、比較的遠隔地で出土する曾利式に関する関心も、近年急速に高まっていると言えよう。

埼玉県においては、近年再び谷井彪・細田勝により加曾利E式編年の再編成が企図されており（谷井・細田 1995）、加曾利E式と曾利式土器との関係についても、埼玉県下出土資料を中心とした曾利式と加曾利E式の対比がなされた（谷井・細田 1997）。

谷口康浩が平成14年（2002）におこなった山梨県考古学協会における発表は、曾利式の情報が関東全域にどのように広がったのかを数量的な裏付けをもって明らかにする試みで、関東地方における曾利式情報の受容がいかになされたかを概観しており、きわめて重要である（谷口 2002）。この中で谷口は、遺跡ごとの曾利式・加曾利E式・連弧文土器の比率と、曾利式のオリジナルに忠実かどうかで分類したA～C群を変数として、関東地方における遺跡ごとの曾利式情報量を数値化した。その結果、曾利式情報量の多寡によって等値線を引くことが可能となり、関東地方を第1～第6地帯に区分した。北関東から房総半島を含む広い範囲は第6地帯とされ、「ほとんどの曾利式が著しく変形して在地化した紐線文系のC群に限定され」、この土器は「曾利式本場の甲府盆地などで紐線文系加曾利E 3式期にむしろ土器がすでに衰退した後にもかかわらず、加曾利E 3式期にむしろ個体数を増やしている」と重要な指摘を行っている。口頭発表用の資料と言うこともあり、遺跡ごとの土器量の比率の取り方など疑問点もあるが、曾利式情報の流れの見取り図を具体的に示したと言え、今後の遠隔地における曾利式系土器の研究について指針となる考察と言えよう。

その他、橋本勉は「加曾利EⅢ式」と「曾利式系列」の土器の遺構出土例を凡東日本的に抽出した（橋本 2004）。福島県における曾利式系の土器については、小暮伸之が集成をおこなっている（小暮 2004）。

## 2 房総半島の曾利式系土器に関する視点

房総半島における曾利式系土器の出土は、きわめて古く記録が確認でき、もちろん「曾利式」という名称ではないものの、昭和3年(1932)に平野元三郎・滝口宏によって写真入りで出土状況の概要が報告された、寒風台遺跡の土器がある(平野・滝口1933)。この土器は、日本考古学研究所刊行の『姥山貝塚』の報告書に再度写真が掲載された(ジェラード・篠遠1952)。今日の目から見れば、いわゆる曾利式系斜行文土器の優品であるが、本書では勝坂式の好例として紹介された。その後の様々な概説書にも「勝坂式」として引用され、勝坂式の型式認識の混乱を招く一因となったとも考えられるが、この著名な報告書に紹介されたことで、この土器そのものは多くの研究者に知られることとなった。

高度成長期以降、千葉県内では多くの埋蔵文化財調査が実施され、それに伴い中期のまとまった資料も増えた。そうした中で、曾利式類似土器の類例も着実に増加した。比較的古い報告例としては、例えば船橋市海老ヶ作貝塚(八幡・岡崎1972)などで曾利式系土器の遺構出土資料が報告された。

昭和55年(1980)に、小川和博は成田市宝田山ノ越貝塚出土資料を紹介し、曾利式系土器について重要な発言をおこなっている(小川1980)。同貝塚出土のいわゆる斜行文・重弧文土器について、「重弧文と呼ばれる曾利系の土器で、…大方において曾利Ⅱ式に比定されている」という理解を示し、具体的な遺跡名を挙げてその分布が全県的に及んでいることを指摘する。さらに、これら土器の口唇部形態に「内側に折り曲げられているタイプ(A型)」と「単に内彎ぎみに外反するタイプ(B型)」の2者があり、この差が「時間差、あるいは地域的な差として捉えられる」とし、時間的にはB型が後出であることを指摘し、地域的には中部地方・西関東でA型が普通でB型は少なく、東関東ではB型が多出する、とした。また、同貝塚出土の土器はB型のみであることから、搬入品ではなく、文様や器形を模倣したものにすぎず、「曾利式土器の地域化された一形態」と評価した。千葉県内出土の斜行文・重弧文土器に関するこうした変遷観と枠組は、その後の県内出土曾利式系土器を見る際に強い影響を与えることとなった。

昭和56年(1981)の日本考古学協会シンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」では、千葉県の様相が田川良・小川和博・新井和之によってまとめられ、曾利式系土器については「Ⅷ期(加曾利EⅡ・連弧文出現期)に若干流入が認められ全県下に及ぶ、と記された(日本考古学協会1981)。ただ、紙幅の関係から記載はごく簡単なものにとどまった。

このシンポジウム資料に基づいて、田川良・小川和博は、改めて千葉県内の資料を再提示し、千葉県における中期編年を概観した(田川・小川1982)。この中で、曾利式系土器については「加曾利EⅡ式段階」の「Ⅷ期」にまとめて位置付けられ、「曾利式系土器の存在も本地域に於いて認められるが、所謂籠目文土器の存在は未だに知られておらず、より後出的土器の出現が認められ、これらの土器も本期後半期には本地域独特の土器へと変遷させているものとして類型の把握が可能である。」という理解を示した。しかしこの「Ⅷ期」には、加曾利E式キャリパー形土器として、口縁部楕円区画が未発達で頸部無文帯を有する土器から、逆に口縁部下端区画が崩れ懸垂文間の磨り消しが幅広く取られた土器まで含み、今日の日で見るとかなり時間幅が広く捉えられているように見える。

一方、同じ年にはいわゆる「埼玉編年」の成果が提出された(谷井ほか1982)。この中で、千葉県の資料としては、「加曾利EⅡ式期」に相当するⅪ期・Ⅻa・b期のうち、Ⅻb期にのみ曾利式系土器の資料が掲載され、この時期にかなり変形された曾利式系土器の土器が進出するとされた。ただし、東関東は不明な点も多く、「曾利式土器や連弧文土器の影響が薄らぎ、それに代わる土器群が存在している」とされ

た（金子 1982）。この「埼玉編年」が千葉県の中期土器理解に与えた影響は大きく、この後多くの報告書において、「埼玉編年」の強い影響のもとに、中期土器の記載が行われることとなった。

1980年代の半ばには、県内の中期に関する重要な報告書の刊行が相次ぐ。昭和61年（1986）には市原市草刈遺跡（F区）の報告書が刊行され、多くの曾利式系土器を含む、きわめて多量で良好な資料が提示された（高田ほか 1986）。昭和62年（1987）には南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）の報告書が刊行され、千葉県南部における曾利式系土器の存在を強く印象づけた（越川ほか 1987）。

この深名遺跡（深名瀬島遺跡）出土資料を中心として、小川和博が考察を行った（小川 1989）。千葉県内における曾利式系土器を大きく取り上げた初めての論考である。同遺跡出土資料を「加曾利E系・曾利系・連弧文系」の3者に弁別し、それぞれ時期的な位置づけを行っている。曾利式系土器については、加曾利E式初頭から存在し変遷が追えるとされ、斜行文・重弧文土器については「曾利Ⅱ式」「曾利Ⅲ式初頭」「曾利Ⅲ式」「曾利Ⅳ式」に振り分けられ、それぞれ埼玉編年のX期～Ⅱb期と対比された。主な斜行文・重弧文土器は「曾利Ⅲ式」に相当する第6群とされ、埼玉編年Ⅱa期に対比されることになり、時期的な位置づけに埼玉編年との若干の齟齬が見出せる。

同じ深名遺跡（深名瀬島遺跡）出土資料を用いて、戸田哲也は深名遺跡と対岸の神奈川県域出土資料の関係を論じた（戸田 1991）。戸田は同遺跡出土の曾利式系土器のうち、主に斜行文・重弧文土器について「曾利Ⅲ式」と位置づけ、在地で製作されたものと判断した。その背後には黒曜石獲得のために安房地域の人間が移動する際、三浦半島などで曾利式の情報を得た、との推測が行われた。

平成6年（1994）には上守秀明が、前出の寒風台遺跡出土土器について、通婚圏を示す可能性のある異系統土器として言及した（上守 1994）。

県内出土の曾利式系土器について、比較的大きく扱う論考は、以上のもので、多くはない。ただし、報告書の中で出土した曾利式系土器について言及しているものが散見される。全てに触れることはできないものの、県内における曾利式系土器の扱い方を見るため、代表的な記載を見てみたい。

横芝光町（旧横芝町）東長山野遺跡の報告書では、道澤明が埼玉編年Ⅱ期に相当させた東長山野Ⅱ期に、曾利式系重弧文土器を置き、「曾利系の土器も顕在化する」とした（道澤 1990）。埼玉編年「Ⅱ期」は、「加曾利EⅡ式」相当であり、埼玉編年に比べやや時間幅を広く取ることになる。

芝山町居合台遺跡の報告書では、中野修秀が「加曾利EⅡ式」に相当するとした第9群b類とほぼ並行するものとして、斜行文・重弧文土器を主とした「曾利系土器」の解説を行った。「口縁内面に突帯を有し、蓋受け状を呈する一群」に対し「口縁内面の突帯が付されず、時間的には新しい部分に相当する」ものが存在することを指摘した（中野ほか 1995）。（小川 1980）の変遷観を踏襲するものであるが、著者の中野は、ここでは明記してはいないものの、「加曾利EⅡ式」を「胴部磨消懸垂文成立」以降に限定して用いることから（中野 2001）、曾利式系斜行文・重弧文土器の新旧の変遷が、加曾利E式キャリパー形土器の胴部懸垂文間の縄文の磨り消しが行われる時期以降に限定されることは注目したい。

県内の中期貝塚の代表例の一つである千葉市有吉北貝塚では、北斜面貝層を中心に多数の曾利式系斜行文・重弧文土器が出土した。報告書では、「磨消懸垂文が成立する以前の加曾利EⅡ式」である第9群（埼玉編年のⅡ期相当）の中で、「いわゆる籠目文土器」とした曾利式系斜行文・重弧文土器を一括して扱う。「曾利Ⅱ式から曾利Ⅲ式」に相当するとされ、後者は第10群（埼玉編年Ⅱ期相当）に伴う可能性もあるとされた。「曾利Ⅱ式段階」の土器は文様施文が比較的丁寧であり、口縁部内面の隆線や口縁部

を肥厚させる例があり、「曾利Ⅲ式段階」では文様施文が粗雑になり、前者のような例がなくなる、との記載がなされた（山田ほか 1989）。

松戸市中峠遺跡第4次調査調査の報告では、2号住居址で覆土第Ⅰ'層中から曾利式系斜行文土器が少量出土した。報告者の大村裕はこれらを「曾利式土器」の影響を受けたものとし、その編年的位置について、埼玉県板東山遺跡第27号住居址の炉体土器・埋設土器の共存状態から、「加曾利E3式に並行するもの」と明確に指摘した（下総考古学研究会 2000）。なお、この報告に合わせて、建石徹により、この曾利式系土器の胎土分析が実施された（建石 2000）。

### 3 問題の所在

分布の中心域から比較的遠隔地で出土する曾利式系土器については、近年の資料の蓄積と相まって、関心が急速に高まっていると言えよう。そうした中、谷口康浩が示した見通し（谷口 2002）は、曾利式情報の伝達に関して大きな見取り図を示したと評価できよう。この見取り図が、各地域において検証されるのか、また、より細かい動態の実証的な研究が、それぞれの地域で検討される必要があると考える。

翻って房総半島における曾利式系土器の研究は、主に出土する斜行文・重弧文土器についての編年的位置づけについて、揺らぎが存在する。大まかな位置づけとしては、加曾利E式の新しい部分（山内 1940）に相当する加曾利E式キャリパー形土器の胴部懸垂文間の縄文が磨り消される階梯以降の比較的短い期間に位置付ける「埼玉編年」、（中野 1995）、（下総考古学研究会 2000など）の立場と、加曾利E式の古い部分から加曾利E式の新しい部分にわたって位置付ける（小川 1989）、（山田ほか 1989）などの立場である。

こうした点には、もちろん房総半島内での小地域差の問題も絡む可能性があり、資料の集成を通じて次節以降検証したい。また、谷口康浩などが示唆するように、房総半島において曾利式系土器の与えた影響が大きくない、と言う点に関して、資料の集成からある程度の検証が可能なのではないかと思う。

## 第2節 千葉県内における曾利式系土器の類例

### 1 集成の方針

#### (1) 地理的な区分（第59図）

千葉県は房総半島を中心とした、三方を海に囲まれた南北に長い県域を有している。特に曾利式の情報が甲府盆地を中心とした西方から伝播したと考えた場合、武蔵野台地を経由して東葛飾地域から情報が流入するルートと、相模方面・三浦半島を経由して南房総地域から情報が流入するルートの大きく二つが考えられよう。地域ごとに曾利式情報の影響度合いの差異が存在することも予想される。こうした点も勘案して、特に多数の資料を集成しえた「曾利式系斜行文・重弧文土器」とその類例については、県内を数ブロックに分けて資料提示をおこなうこととした。

地域ごとの区分は、資料数の多寡などを勘案し、以下の7ブロックに区分した。資料集成に当たって、平成の市町村大合併以前の行政区分にに基づきおこなったため、地域区分に関しても、旧市町村に基づいておこなった。なお、区分された範囲の中には、実際には資料が見出せなかった市町村も表記してある。

- a) 東葛飾地域：野田市（旧関宿町・野田市）、流山市、柏市（柏市・旧沼南町）、我孫子市、松戸市、鎌ヶ谷市、市川市、船橋市、浦安市
- b) 印旛周辺地域：白井市、印西市、栄町、本埜村、印旛村、成田市（旧下総町・大栄町除く）、八千代



第59図 地域区分

- 市、佐倉市、四街道市、酒々井町、富里市、八街市
- c) 香取・東総・山武地域：旧下総町（現成田市）、神崎町、旧大栄町（現成田市）、香取市（旧佐原市・旧小見川町・旧栗源町・旧山田町）、東庄町、銚子市、旭市（旭市・旧干潟町・旧海上町・旧飯岡町）、多古町、匝瑳市（旧八日市場市・旧野栄町）、横芝光町（旧光町・旧横芝町）、芝山町、山武市（旧松尾町・旧蓮沼村・旧山武町・旧成東町）、東金市、九十九里町、大網白里町
- d) 千葉市周辺地域：習志野市、千葉市
- e) 市原市域：市原市
- f) 君津郡域：袖ヶ浦市、木更津市、君津市、富津市

g) 長生・安房地域：茂原市、長柄町、長南町、白子町、長生村、一宮町、陸沢町、いすみ市（旧岬町・旧夷隅町・旧大原町）、大多喜町、御宿町、勝浦市、鴨川市（鴨川市・旧天津小湊町）、鋸南町、南房総市（旧富山町・旧富浦町・旧三芳村・旧丸山町・旧和田町・旧千倉町・旧白浜町）、館山市

## (2) 土器の分類

房総半島で出土する曾利式系土器について分類をおこなう。曾利式そのものの変遷や分類については、近年の甲府盆地における曾利式編年の成果として、主に（櫛原 1999、今福・関間 2004、今福 2005）を参照した<sup>2)</sup>。房総半島で出土する曾利式系土器については、大きく2分し、1類は、当該地域における曾利式系土器の中心である「斜行文・重弧文土器」とその類例とした。2類は、これ以外の曾利式系と判断しうる土器を一括した。

### 1類〈曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例〉

口辺部が開き、頸部でくびれ、胴部が若干張る器形が大きな特徴である。半裁竹管内側を用いた並行沈線や、櫛歯状工具などを用いた条線などを用い、器面全体を地文状に覆うことを特徴とする。甲府盆地において「紐線文類型」（櫛原 1999）と呼ばれることもある土器群の系譜を引くと考える。ただし、房総半島で出土する事例では、粘土紐を用いた装飾をもつものも多いが、これを欠くものも存在する。ここでは仮に「曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例」と呼称し、出土事例を集成することとした。

いくつかの特徴から、a種～e種に分離して集成することとした。a種（斜行文）とb種（重弧文）が主体であり、この2種にはそれぞれ若干のバリエーションが見出せる。

1類とした土器は、県内においては、その地文と隆線の組み合わせがきわめて特徴的であり、かなりの小破片でも同定が可能である。よって、悉皆調査にできるだけ近づけるべく、破片レベルまで資料集成をおこなった。

#### 1類a種. 斜行文土器

松戸市寒風台遺跡出土土器（第60図1）が典型例である。この土器は日本考古学研究所刊行の姥山貝塚の報告書（ジェラード・篠遠 1952）に所収されており、古くから著名な土器である。口縁部断面はいわゆる受け口状に近いものであろう。口辺部は外に開き、頸部でくびれる。口辺部には斜方向の沈線が引かれる。くびれ部には横位の粘土紐が貼り付けられる。頸部以下は若干胴が張り、口辺部の沈線とは方向を違えた、縦位の沈線が地文状に引かれる。頸部の粘土紐から縦位の粘土紐が数条垂下する。粘土紐は、おそらく指頭による捻りが加えられ、小波状を呈する。千葉県内で出土する曾利式系斜行文土器の典型例と言える土器であろう。以後、文中ではこの土器を仮に「寒風台型」と呼称し、曾利式系斜行文土器の一基準としたい。

口辺部に縦位の隆線による装飾を加えるものは少数認められる。b種とした重弧文土器の口辺部に縦位隆線が比較的多く認められるのとは対照的である。また、松戸市子和清水貝塚65号住居跡出土土器（第60図8）や南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）第4号住居出土土器（第69図3）は口辺部に隆線が付くが、いずれも典型例である「寒風台型」と異なり、頸部以下の沈線が斜行する土器である。典型例とやや異なるこうした土器に、典型例では余り見られない口辺部縦位隆線が付くのは、興味深い。

器面に貼り付けられる隆線は、「寒風台型」に見られた指頭による捻りを加えた小波状を呈するもの、交互刺突の手法により小波状を呈するものがある。また、隆線上に刺突やキザミあるいは押捺を加えたものも多い。また、隆線上に装飾を加えないものも存在する。隆線による装飾を欠くものが、銚子市粟島台

遺跡出土土器（第63図7）などごく少数認められる。

その他の装飾として、円形の貼り付けや（第60図8など）、隆線上の小突起（第62図1など）、沈線による渦巻文（第65図7）などが認められるが、いずれも少数である。

全体としては比較的斉一性が強く、装飾の少ないシンプルな土器という印象が強い。

#### 1類b種. 重弧文土器

口辺部に重弧文を配する土器である。頸部以下は縦位の沈線・条線が地文的に配されるのが常である。基本的には上向きの弧線文を重ねた重弧文で口辺部を埋めるものが多く、千葉市有吉北貝塚北斜面貝層出土土器（第64図11）などが好例であろう。

少数だが、重弧文間に多条の縦位沈線を充填する横芝光町（旧横芝町）東長山野遺跡51号住出土土器（第63図15）・千葉市蔵立遺跡第29号址出土土器（第64図7）などがあり、また上向きの重弧文間に下向きの重弧文を充填する千葉市有吉北貝塚SB052出土土器（第64図8）などがある。

a種と同様の隆線による装飾が施されるものが多いが、前述のように口辺部に縦位の隆線を貼り付けるものはやや多く認められる（第61図15・第63図14・15・17など）。中には、蛇行する細い粘土紐を貼り付けた木更津市伊豆山台遺跡SI027出土土器（第68図4）のように装飾性の高いものもある。また、隆線による装飾を欠くものも認められる（第66図19・第69図8）。

その他の装飾としては、隆線上の突起が多く目に付き（第62図7・第64図10・11・15・第69図9）、ボタン状の貼り付けも少数存在する（第68図5）。

a種に比べると、若干装飾性が高く、バリエーションの幅が広い印象である。

#### 1類c種. 矢羽根状沈線の土器

器形等の特徴が、a種・b種と共通し、矢羽根状の沈線を器面に配する土器である。松戸市子和清水貝塚387号土（壙）出土土器（第61図17）が代表例で、少数の類例がある。曾利Ⅳ式以降の土器の地文に見られる矢羽根状の文様の影響が窺えよう。

#### 1類d種. 縦位沈線の土器

口辺部から頸部以下まで縦位沈線を連続させる土器である。a種・b種では、口辺部と頸部以下の文様帯を、頸部のくびれ部で明瞭に画していることが大きな特徴であるが、この頸部のくびれ部での区画がほとんど意識されず、縦位沈線が連続して引かれることが特徴である。四街道市中ノ尾余遺跡3号住居址出土土器（第62図12）や銚子市粟島台遺跡出土土器（第63図18）など、頸部の横位区画文を欠くものについては、縦位沈線の連続性が明らかである。頸部の横位区画文が存在するものでも、市原市草刈遺跡479c出土土器（第67図20）のように、縦位沈線の連続性が認められるものは、この種と判断した。

#### 1類e種. 格子目状文の土器

口辺部の斜行線文上に、斜位の隆線を多条に貼り付けることで、格子目状の文様を描くものである。木更津市伊豆山台遺跡SI020（第68図8）はいわゆる「籠目文」と呼ばれる典型例であるが、県内においてはごく少数の類例に留まる。県内では、香取郡神崎町原山遺跡SI20出土土器（第63図8）のように、口辺部の斜行文上にやや太い縦位隆線を連続させるものがあり、こうしたものも類例に含めた。

#### 1類f種. 折衷土器

a種・b種と器形等で共通するが、加曾利E式に見られる懸垂文を持つなど、明らかに曾利式以外の要素と折衷する土器群を一括した。結果的には様々な土器を含むこととなったが、特に頸部以下の文様に加

曾利E式の文様を配する土器が目立つ（第61図22・23・第67図23・第68図10など）。

## 2類〈その他の曾利式系土器〉

上記の曾利式系斜行文・重弧文土器以外の土器で、曾利式系土器と判断されるものである。ただし、ある文様要素だけを取り出して、曾利式系土器と正確に判断することは困難であるため、土器全体の様相から見て明らかに曾利式の要素が強いと総合的に判断できるものを対象とした。よって、集成した資料は、ある程度土器の全形が窺える資料に限られており、上記の1類とは集成の方針が異なることを明記しておきたい。

### 2類a種. 古手の曾利式系土器

曾利I式・II式のいわゆる長胴甕や条線小甕に見られる特徴をもつ土器である。市原市草刈遺跡（千葉急行線内）グリッド出土土器（第70図5）などが代表例である。無文の広い口縁部で、頸部以下に条線・沈線地文をもつか、曾利式特有の隆線装飾をもつものについて、曾利式系土器と判断した。県内では少数ながら若干出土している。曾利式の編年を参照すると、概ね1類とした曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例より時期的に先行する可能性が考えられるものである。

土器の認定にあたっては、無文の口縁の土器は加曾利E式の中にも見られることから、地文が条線であることなどと組み合わせられているなど、複合的な特徴から曾利式系土器と判断できるものに限った。また、頸部の蛇行隆線についても、中期大木式にも見られる文様要素であることから、これのみで曾利式系土器と判断することは避けた。

### 2類b種. 1類以外の矢羽根状沈線土器

曾利IV式以降のいわゆるつなぎ弧文土器などに見られる地文と関連すると考えられる、矢羽根状の沈線をもつ土器である。木更津市台木A遺跡015号住出土土器が代表例であろう（第70図10）。加曾利E式のキャリパー形土器と器形が共通し、体部の懸垂文間に矢羽根状の沈線を充填するものがやや認められる。口縁部文様帯を欠き、体部全体に矢羽根状沈線を配すものがごく少数存在する。

### 2類c種. X把手土器

南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）で唯一確認した（第70図9）。県内ではほとんど出土しないと判断できる。

## 2 集成した事例

資料の集成については、平成17年（2005年）度までに確認できた県内の報告書等に基づき、当財団図書室に所蔵している図書を中心におこなった。第60図～第69図には、曾利式系土器1類とした曾利式系斜行文・重弧文土器の類例について、上述の地域区分に基づき図示した。図示した資料については、集成した資料の中から、器形が概ね想定できるものを基準として資料を抽出した。ただし、種類や地域によってこうした資料が少ない場合については、破片資料も補足的に用いた。第70図には曾利式系土器第2類としたその他の曾利式系土器を集成した。各図の番号の後ろの括弧内の番号は、第4・5表の遺跡番号を示す。図示した各土器の縮尺は、1/5と1/8を併用した。各図のキャプションに縮尺は記した。

集成した資料については、第4表として出土遺跡地名表を作成した。この地名表に、資料の出典文献名を記した。また、第5表として出土遺構別の資料一覧表を作成し、上述した曾利式系土器の分類別の出土



状況がわかるようにした。

第5表中には、同一遺構内で出土した代表的な土器の概略についても記載した。この記載は、完形に近い土器や大破片を中心とした代表的な土器を記したもので、すべての出土土器破片を網羅したものではない。加曽利E式の区分については後述するように、体部懸垂文間の縄文の磨り消しが明確化する階段を加曽利E式古・新の最大のメルクマールとし、加曽利E 1・E 2式を古い部分、加曽利E 3・E 4式を新しい部分と考えた。表中に加曽利E 3式と記した場合は、後述する加曽利E 3式前半に相当するものである。加曽利E 3式後半については、「加曽利EⅢ式」の指標である「横位連携弧線文土器」(加納 1989 a・b)が存在した場合に、この名称を記載した。その他、勝坂式については下総考古学研究会の細分に従った(下総考古学研究会 1985)。「条線文土器」は加曽利E式に伴う、曾利式系とは確定できない条線地文の土器を指した。

### 〈1類 曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例〉(第60～69図)

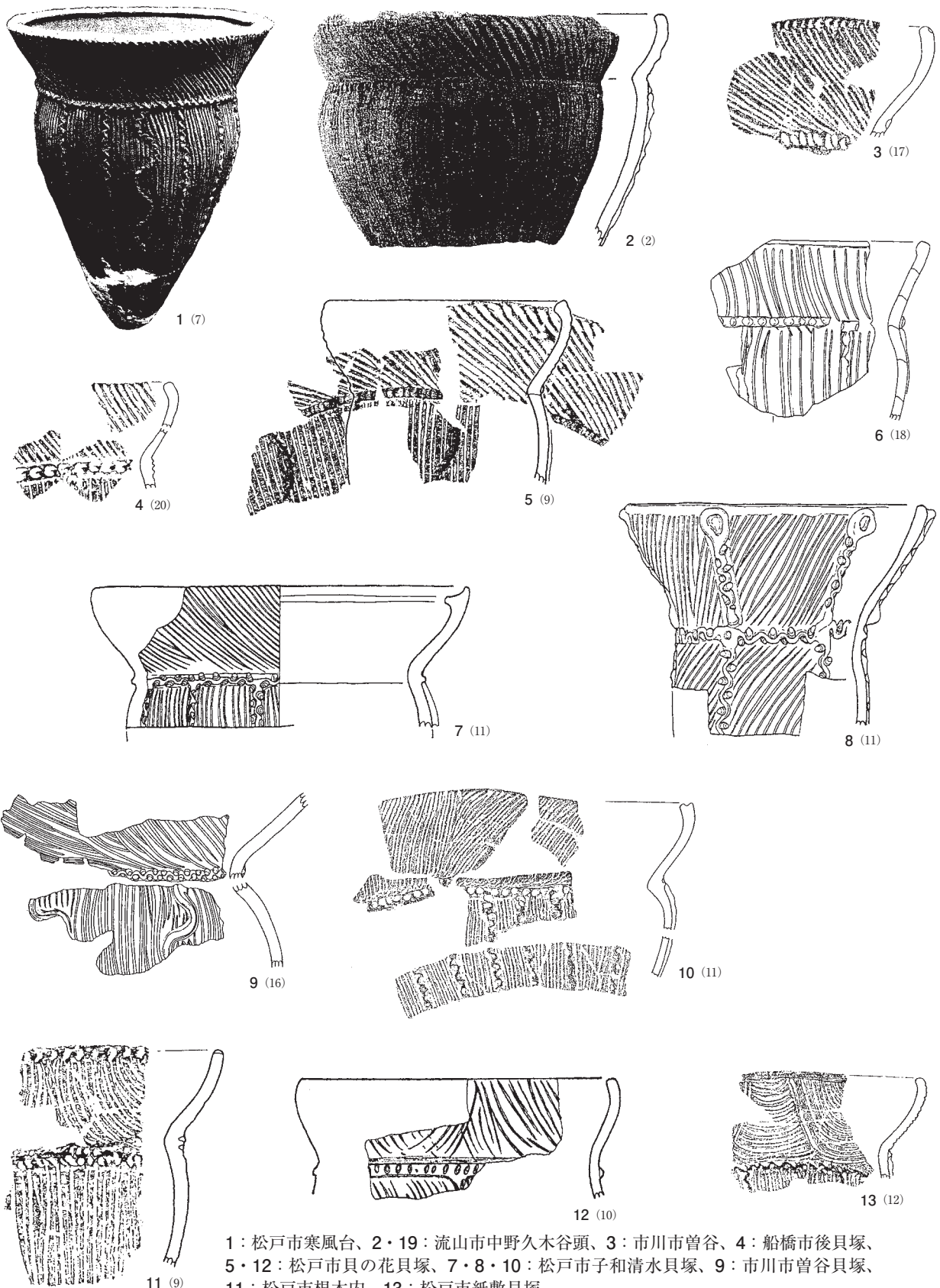
#### (1) 東葛飾地域(第60・61図)

第60図1～10はa種(斜行文土器)である。1は松戸市寒風台遺跡出土土器である。「寒風台型」とした標式資料で、県内で見られる曾利式系斜行文土器の典型例としたものである。2は流山市中野久木谷頭遺跡SI82出土である。3は市川市曾谷南遺跡(報告書では向台東遺跡)6号住居跡出土で、4は船橋市後貝塚グリッド出土である。いずれも頸部のくびれ部の隆線がはっきりせず、連続刺突のみに見える資料である。3は口唇端部にキザミを有する。5は松戸市貝の花貝塚出土、6は市川市向台遺跡3号土坑、7は松戸市子和清水貝塚679号土(壙)出土である。8は同遺跡65号住居跡出土で、「寒風台型」では通常縦位沈線となる頸部以下にも、斜行文を配する。口縁部から頸部のくびれ以下まで、縦位隆線が垂下する。口縁部に位置する隆線の端部は、ボタン状の円形の貼り付けとなっている。口辺部にまで隆線が及ぶのは、斜行文土器の中では例外的であろう。類似した資料として旧富浦町深名遺跡(深名瀬島遺跡)第4号住居出土土器(第69図3)がある。9は市川市曾谷遺跡(報告書では曾谷1丁目259番地所在遺跡)遺構外出土、10は松戸市子和清水貝塚203号住居跡出土である。口縁部断面の形状としては、1・7が受け口状を呈するが、2～6は丸頭形か、若干肥厚するものである。

第60図11～第61図16はb種(重弧文土器)である。11は松戸市根木内遺跡第6地点2号土坑出土で、口唇上にキザミを有する。12は松戸市貝の花貝塚グリッド出土、13は松戸市紙敷貝塚B4区出土である。14～16は船橋市海老ヶ作貝塚出土で、14が第43号址、15・16が第16号址出土である。15は頸部の隆線を欠く資料で、縦位の隆線が口縁から体部まで垂下する。口縁部断面の形状は11～14が丸頭状、15・16が受け口状である。

第61図17・18はc種(矢羽根状沈線の土器)である。17は松戸市子和清水貝塚387号土(壙)出土で、完形に近い資料である。受け口状の口縁部で、口縁部から数条の縦位隆線が底部付近まで垂下し、その間に細かい矢羽根状の沈線を連続する。くびれた頸部にはキザミを持つ低い隆線を配し、円形の貼り付けをおこなう。18は船橋市後貝塚出土で、破片のため詳細は不明だが、17より大ぶりの矢羽根状の沈線をもつ資料である。

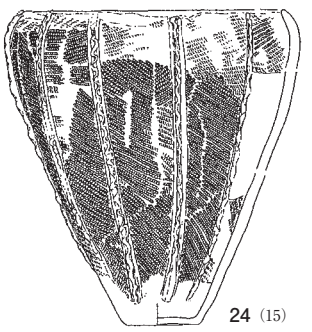
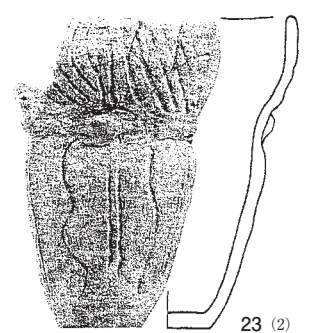
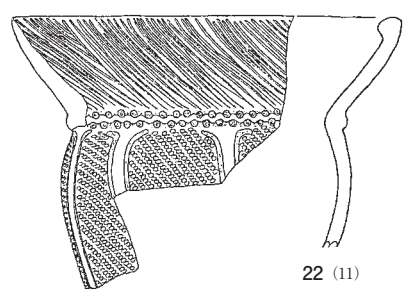
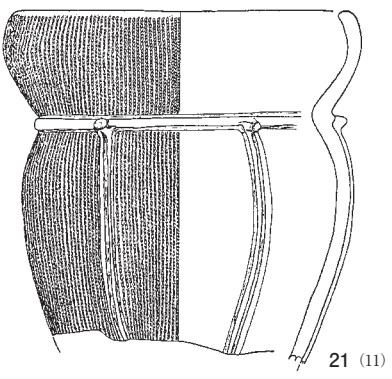
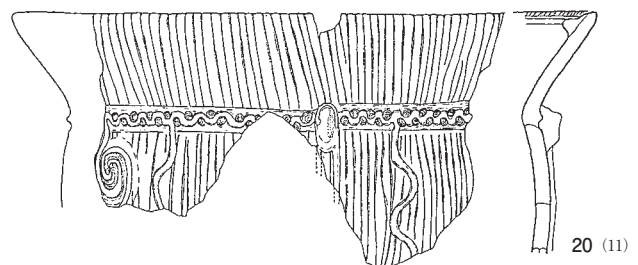
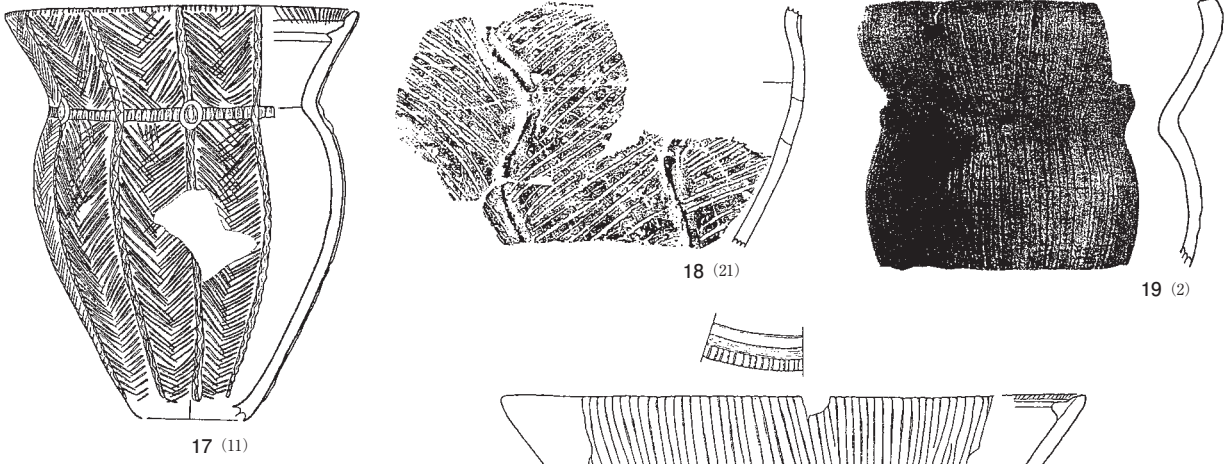
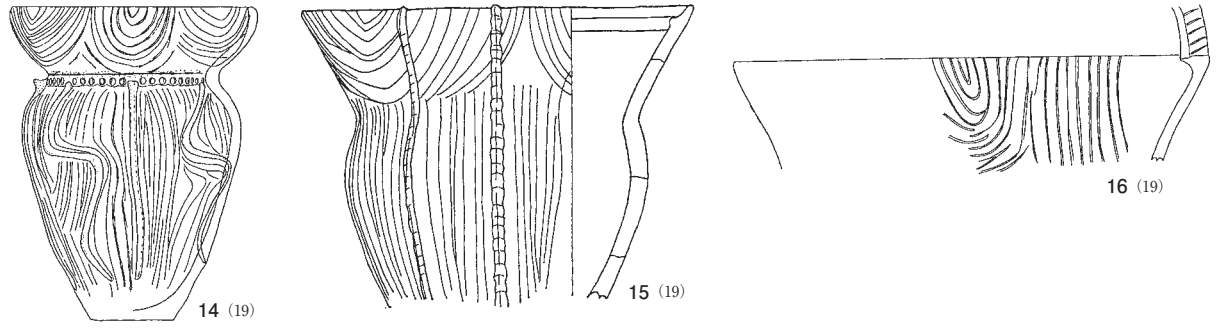
第61図19・20はd種(縦位沈線の土器)である。19は流山市中野久木谷頭遺跡SI96出土土器である。口縁部は断面丸頭状で、頸部の隆線を欠き、口縁部から体部にかけて、縦位の沈線が連続して引かれてい



1：松戸市寒風台、2・19：流山市中野久木谷頭、3：市川市曾谷、4：船橋市後貝塚、  
 5・12：松戸市貝の花貝塚、7・8・10：松戸市子和清水貝塚、9：市川市曾谷貝塚、  
 11：松戸市根木内、13：松戸市紙敷貝塚

(縮尺：1：不明、2~9・11~13：1/5、10：1/8)

第60図 東葛飾地域(1)



14~16：船橋市海老ヶ作貝塚、17・20~22：松戸市子和清水貝塚、  
18：船橋市後貝塚、19・23：流山市中野久木谷頭、24：鎌ヶ谷市大堀込

(縮尺：15・17~20・22・23：1/5、14・16・10・24：1/8)

第61図 東葛飾地域(2)

るのがよくわかる。20は子和清水貝塚283号住居跡出土土器で、受け口状の口縁部断面で、頸部以下に細い隆線で、渦巻文と蛇行隆線でやや装飾的な文様を描く。

第61図21～24はf種（折衷土器）と考えられる。21は子和清水貝塚152号土（壙）出土土器である。器形は曾利式系斜行文・重弧文土器と共通するが、地文に縄文あるいは撚糸文のみを施すものである。隆線上に加飾しないが、体部の縦位隆線は2本一組のようである。22は同遺跡213号住居跡出土で、口辺部に斜行文、頸部以下には加曾利E式の懸垂文を描く。懸垂文間の縄文の磨り消しが明瞭である。23は流山市中野久木谷頭遺跡SK344出土で、頸部以下に加曾利E式の懸垂文を描く。写真のため、懸垂文間の磨り消しは判然としない。24は鎌ヶ谷市大堀込遺跡4次調査土坑16出土土器である。曾利式系斜行文・重弧文土器の口辺部を欠いたような器形で、地文縄文上に縦位の小波状隆線を垂下させる。やや例外的な土器であるが、隆線の様相の共通性から、類例に加えた。

## (2) 印旛周辺地域（第62図）

第62図1～5はa種（斜行文土器）である。1は成田市宝田山ノ越貝塚出土である。2は成田市十余三四本木Ⅱ遺跡（稲荷峰No.6遺跡）グリッド出土である。3は成田市西和泉御領台遺跡出土である。1～3はいずれも口縁部断面が丸頭状のものである。1は頸部の横位隆線上に小突起をもつ。2は若干頸部のくびれが弱い。4は四街道市上野遺跡008号住居跡出土で、口縁部断面は受け口状に近く、口辺部には縦位の隆線が配される。5は四街道市堀込遺跡（和良比堀込遺跡）011小竪穴出土で、口唇部に沈線を有する。

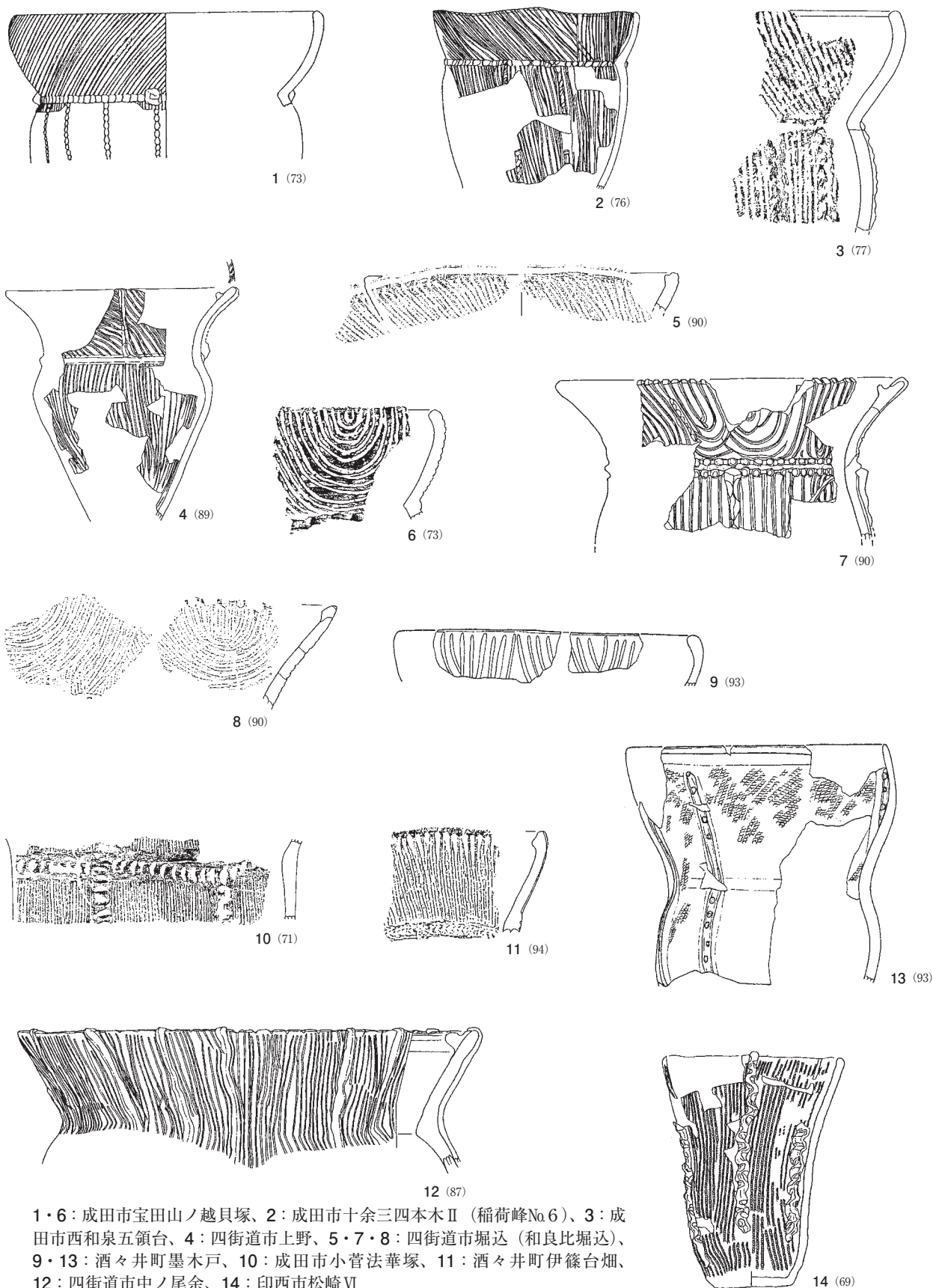
6から9はb種（重弧文土器）である。6は宝田山ノ越貝塚出土で、口縁部断面は丸頭状である。7は堀込遺跡（和良比堀込遺跡）009小竪穴出土で、受け口状に近い口縁部断面を持つ。口辺部の重弧文は、やや乱れ、U字状の屈曲が強い。8は同遺跡010小竪穴出土である。口縁部断面はやや肥厚し、キザミを有する。9は酒々井町墨木戸遺跡J-9号住居跡出土である。口辺部の重弧文の屈曲が弱い、一応類例に含めた。

10～12はd種（縦位沈線の土器）である。10は成田市小菅法華塚Ⅰ遺跡遺構外出土で、頸部の屈曲が弱く、爪形の連続刺突を本来隆線があるべき位置に配する。11は酒々井町伊篠台畑遺跡グリッド出土で若干肥厚した口縁部断面をもち、頸部には竹管による連続刺突を施す。12は四街道市中ノ尾余遺跡出土で、頸部のくびれ部の横位隆線を欠く。受け口状の口縁断面で、口縁部から縦位の隆線を垂下させる。

13・14はf種（折衷土器）と判断したものである。13は墨木戸遺跡J-42号住居跡出土で、器形と隆線の組み合わせから、類例と判断した。地文縄文上に、口縁付近から刺突を施した縦位の隆線を垂下させる。14は印西市松崎Ⅵ遺跡SX001出土で、隆線の様相から類例と判断した。器形はくびれを持たず開く器形で、撚糸地文上に口縁部から小波状を呈する隆線を垂下させる。

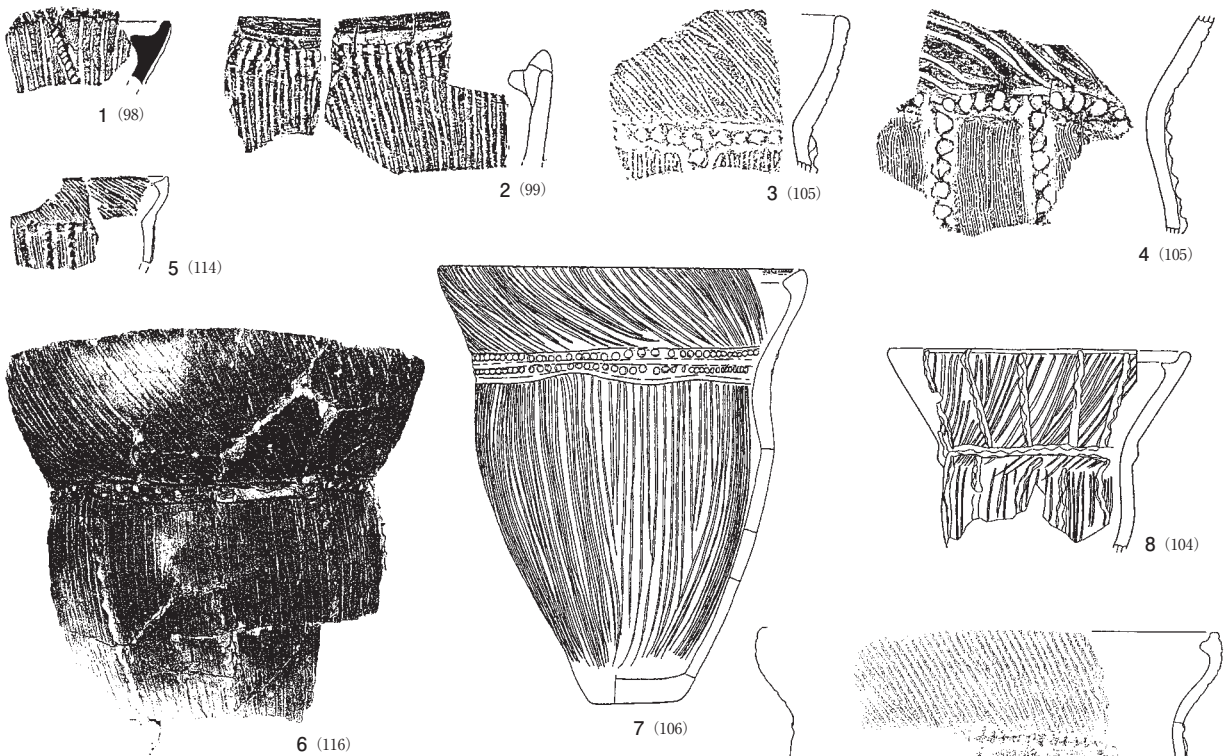
## (3) 香取・東総・山武地域（第63図）

第63図1～7・9はa種（斜行文土器）である。1は成田市（旧大栄町）奈土貝塚出土である。受け口状の口縁部断面をもち、口辺部には隆線を配する。2は成田市（旧大栄町）馬洗城址遺跡出土で、受け口状の口縁部断面をもつものである。3・4は香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚出土である。3の口縁部断面は丸頭状である。4は口辺部が雑な単沈線による斜行文で、頸部以下はおそらく櫛歯状工具による条線である。5は横芝光町（旧横芝町）東長山野遺跡出土で、小型の資料である。口縁部断面は明瞭な受け口状ではなく、内側に張り出すような形態である。6は東金市鉢ヶ谷遺跡第18号土壙出土である。7は銚子市粟島台遺跡出土である。頸部の隆線を欠き、くびれ部には2条の刺突列を配する。口縁部断面は5

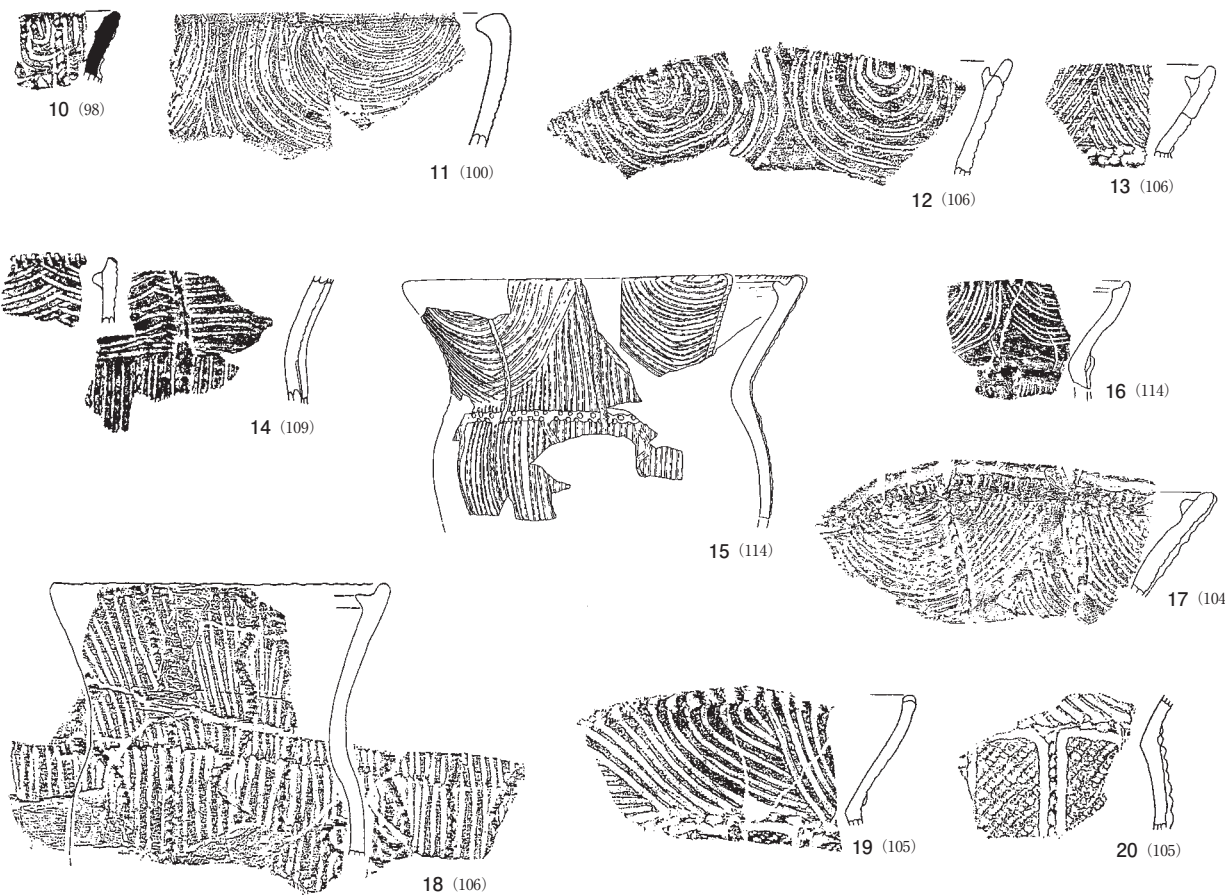


1・6：成田市宝田山ノ越貝塚、2：成田市十余三四本木Ⅱ（稲荷峰No.6）、3：成田市西和泉五領台、4：四街道市上野、5・7・8：四街道市堀込（和良比堀込）、9・13：酒々井町墨木戸、10：成田市小菅法華塚、11：酒々井町伊篠台畑、12：四街道市中ノ尾余、14：印西市松崎Ⅵ  
 (縮尺：3・6~11・13・14：1/5、1・2・4・12：1/8)

第62図 印旛周辺地域



1・10：成田市（旧大栄町）奈土貝塚、2：成田市（旧大栄町）馬洗城址、  
 3・4・19・20：香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚、  
 5・15・16：横芝光町（旧横芝町）東長山野



6：東金市鉢ヶ谷、7・12・13・18：銚子市粟島台、8・9・17：神崎町原山、  
 11：成田市（旧大栄町）稲荷山、14：香取市（旧栗源町）岩部

（縮尺：1～5・7・8・10～14・16～20：1/5、9・15：1/8、6：不明）

第63図 香取・東総・山武地域

に似る。9は神崎町原山遺跡SI18出土で、肥厚した口唇部に沈線を引くものである。

10～17はb種（重弧文土器）である。10は奈土貝塚出土で、狭い口辺部に縦位の隆線を配する。口縁部断面は丸頭状である。11は成田市（旧大栄町）稲荷山遺跡第16号住居跡出土で、内折する口縁部断面をもつ。12・13は銚子市栗島台遺跡出土で、いずれも受け口状の口縁部断面をもつものである。14は香取市（旧栗源町）岩部遺跡出土で、口辺部の重弧文は間延びし、横位並行線文に近づいている。くびれ部の頸部隆線を欠き、口縁部から縦位の隆線が垂下する。口縁部断面は受け口状に近い。15は東長山野遺跡51号住居跡出土である。受け口状の口縁部断面で、口縁部から縦位隆線が垂下し、頸部以下まで連続する。口辺部の重弧文の下には、縦位の沈線が充填される。16は同遺跡206号土壙出土で、口縁部断面は受け口状に近い。17は神崎町原山遺跡SI14出土で、受け口状の口縁部断面に、口辺部の縦位隆線をもつ。

18はd種（縦位沈線の土器）である。栗島台遺跡出土で、頸部隆線を欠き、口縁部から蛇行する隆線が垂下する。口縁部断面は受け口状である。

8は口辺部の縦位隆線の密度が高いため、e種（格子目状文の土器）と判断した。ただし、典型例とはいえない。神崎町原山遺跡SI20出土で、口辺部に数条の縦位隆線を配する。口縁部断面は受け口状である。

19・20はf種（折衷土器）である。おそらく同一個体で、白井大宮台貝塚出土である。丸頭状の口縁部断面で、口唇上にキザミを有する。口辺部に斜行文を配し、頸部以下は刺突をもつ縦位隆線間に縄文を施す。

#### (4) 千葉市周辺地域（第64図）

第64図1～5はa種（斜行文土器）である。1は千葉市坊屋敷遺跡3号住居跡出土である。丸頭状の口縁部断面で、口辺部がやや強く内湾する。2は千葉市加曾利北貝塚グリッド出土で、明瞭な受け口状でなく内側に張り出すような口縁部断面を持つ。3は千葉市有吉北貝塚SK145出土、4は同遺跡SK479出土である。両者とも受け口状に近いが余り明瞭でない口縁部断面をもつ。頸部以下の縦位隆線が、3は加飾のない直線的なもので、4は蛇行隆線である。5は同遺跡北斜面貝層出土で、丸頭状の口縁部断面で、頸部横位隆線上に小突起をもつ。

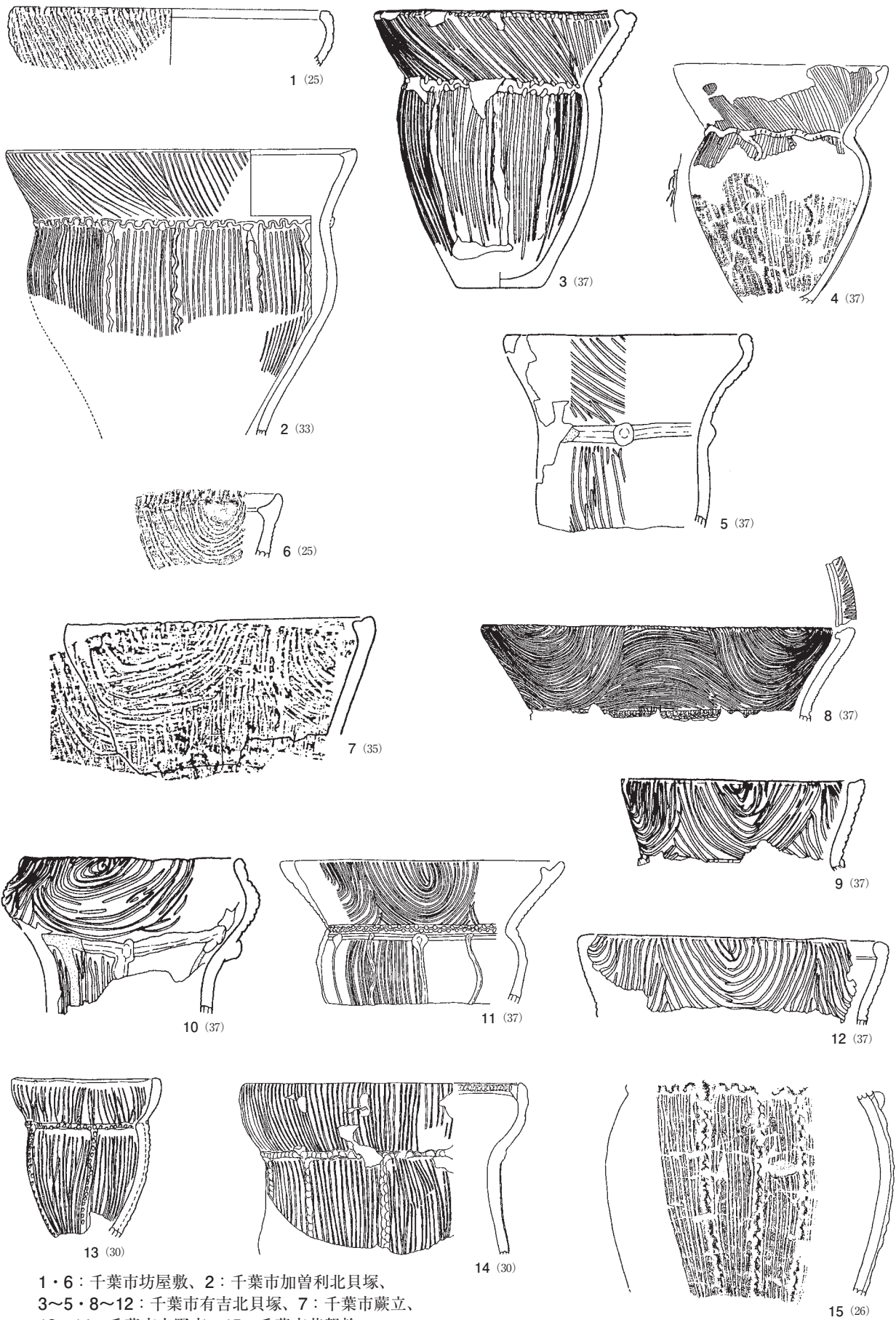
6～12はb種（重弧文土器）である。6は1と同じ坊屋敷遺跡3号住居跡出土である。受け口状の口縁部断面である。7は千葉市蕨立遺跡第29号址出土。口唇上には沈線を引くようで、口辺部の重弧文下には縦位の沈線を配する。8は有吉北貝塚SB052出土で、明瞭な受け口状の口縁部断面をもつ。口辺部の重弧文は上向きと下向きの重弧文を交互に配する。9は同遺跡SK291A出土で、肥厚した角頭状の口縁部断面である。10・11は同遺跡北斜面貝層出土である。10は丸頭状の口縁部断面で、口辺部の内湾が強く、重弧文も乱れた感じである。11は受け口状の口縁部断面で、頸部の横位隆線と頸部以下の縦位隆線が接する位置に小突起をもつ。12は同遺跡SK270出土で、肥厚した口縁部断面である。

13・14はd種（縦位沈線の土器）である。いずれも千葉市大野南遺跡出土で、13が16号住出土、14が19号住出土である。13は丸頭状の口縁部断面、14は受け口状に近いが、口縁内側に張り出した端部にキザミをもつ、やや変わった形態である。

15は参考資料で、千葉市芳賀輪遺跡第152号竪穴住居跡出土である。

#### (5) 市原市域（第65～67図）

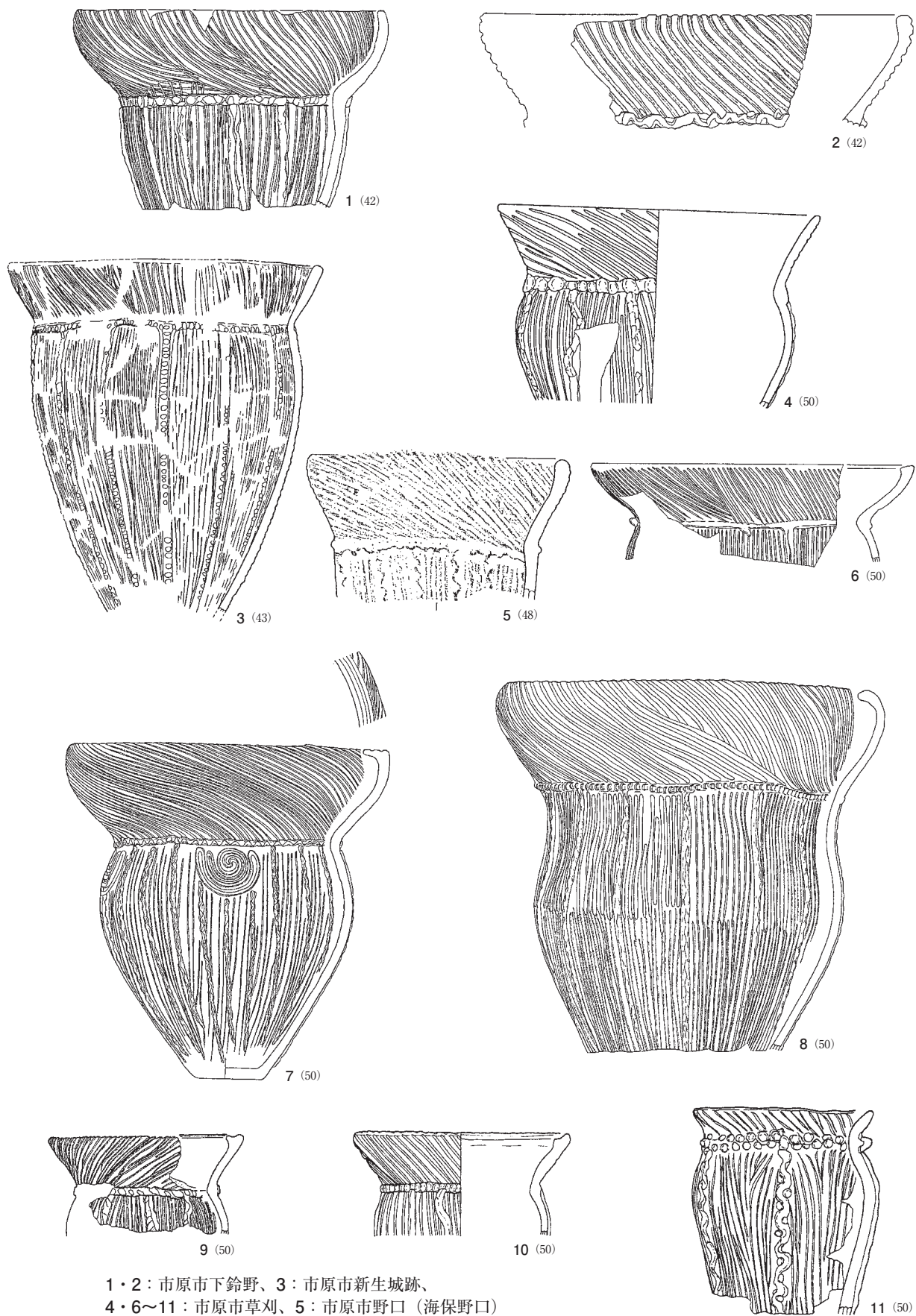
第65図1～第66図16はa種（斜行文土器）である。1・2は市原市下鈴野遺跡で、1は17号住居跡出土、2は02小竪穴出土である。両者とも丸頭状の口縁部断面を呈する。3は市原市新生城跡遺跡（新生



1・6：千葉市坊屋敷、2：千葉市加曾利北貝塚、  
 3～5・8～12：千葉市有吉北貝塚、7：千葉市蕨立、  
 13・14：千葉市大野南、15：千葉市芳賀輪  
 (縮尺：1・3・5～7・9・10・12・13：1/5、2・4・8・11・14・15：1/8)

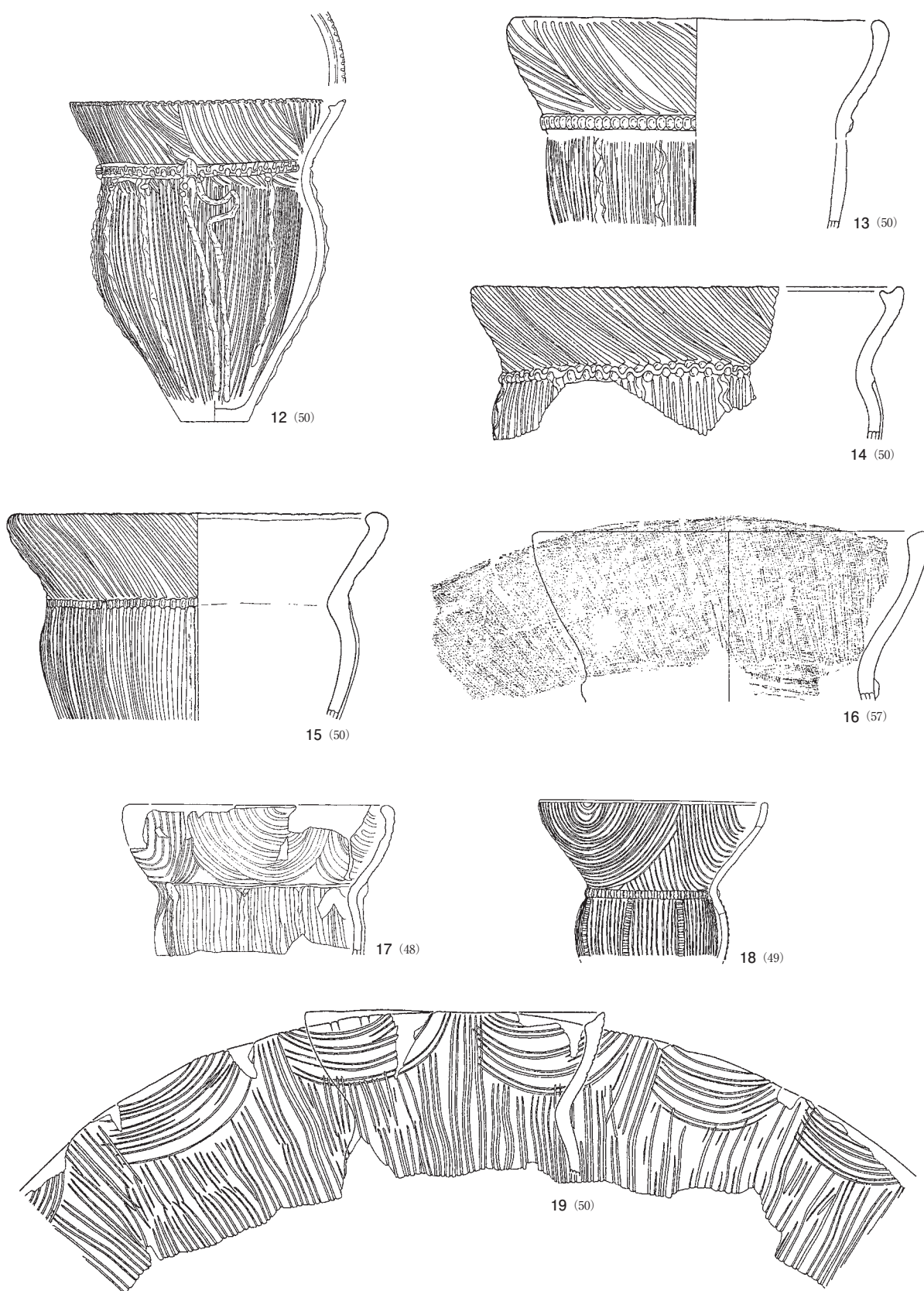
第64図 千葉市周辺地域





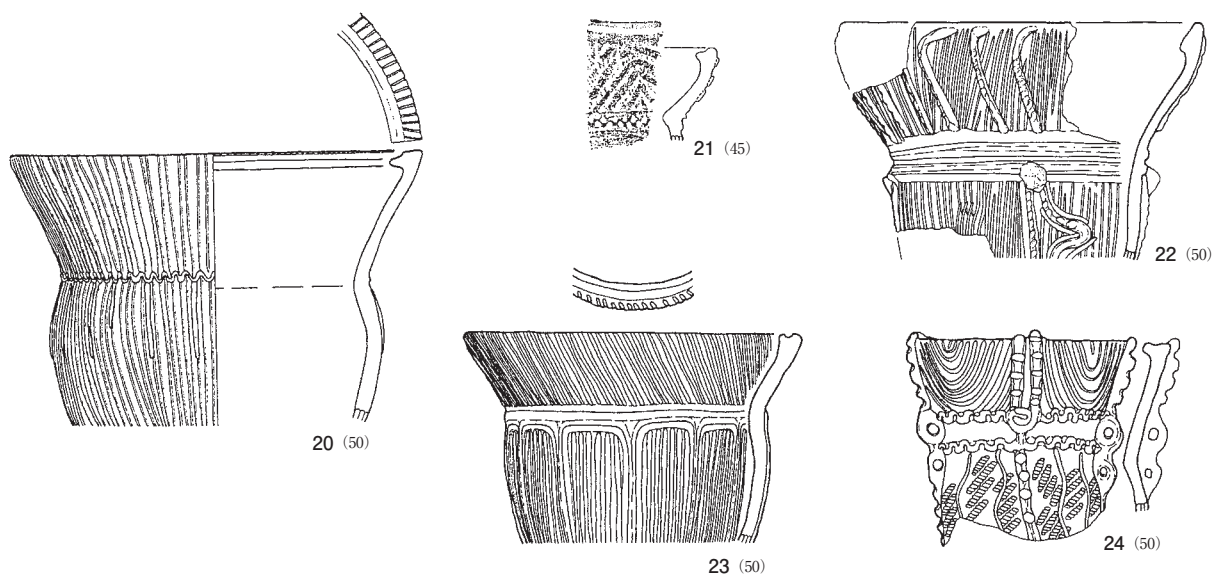
1・2：市原市下鈴野、3：市原市新城跡、  
 4・6～11：市原市草刈、5：市原市野口（海保野口）  
 （縮尺：1・2・4・5・9～11：1/5、3・6～8：1/8）

第65図 市原市域(1)



12~15・19：市原市草刈、16：市原市中潤ヶ広、17：市原市野口（海保野口）、18：市原市馬立塚ノ台（土宇）  
（縮尺：13~15・19：1/5、12・16~18：1/8）

第66図 市原市域(2)



20・22～24：市原市草刈、21：市原市市原条里制

(縮尺：1/5)

第67図 市原市域(3)

荻野原遺跡) A1-14号住居跡出土で、丸頭状の口縁部断面のやや狭い口辺部をもつ。口辺部の沈線は縦行する部分が多いが、一部斜行する部分もあり、概種土器と判断した。4は市原市草刈遺跡(B区)298A(住)出土で、丸頭状の口縁部断面である。5は市原市野口遺跡(海保野口遺跡)149貯蔵穴出土で、やはり丸頭状の口縁部断面である。6は草刈遺跡(B区)177F(住)出土で、大きく開く口辺部に、やや内側に張り出した口縁部断面である。7は同遺跡310(土坑)出土で、明瞭な受け口状の口縁部断面をもつ。頸部下に渦巻き文を単位文的に配する。8は同遺跡305(土坑)出土で、強く内湾する口辺部で、丸頭状の口縁部断面である。9は草刈遺跡(東部地区)P150出土、10は草刈遺跡(B区)619(土坑)出土である。両者とも余り明瞭でない受け口状の口縁部断面である。11は同遺跡(B区)675(土坑)出土で、ごく狭い口辺部のやや変わった器形である。口縁部断面は丸頭状である。第66図12は草刈遺跡(B区)165(土坑)、13は同遺跡559(土坑)、14は同遺跡756(土坑)、15は同遺跡810(土坑)である。12・14は比較的明瞭な受け口状の口縁部断面で、13は丸頭状、15は肥厚し内側に張り出す口縁部断面である。16は市原市中潤ヶ広遺跡C037号住居跡出土である。櫛歯状工具による条線で斜行文を描く。若干肥厚する口縁部断面で、頸部の隆線はタガ状のものである。

第66図17～19はb種(重弧文土器)である。17は野口遺跡(海保野口遺跡)150土坑出土、18は市原市馬立塚ノ台遺跡(土宇遺跡)第45号住居跡出土である。両者とも丸頭状の口縁部断面である。18は頸部のくびれが強く、口辺部が大きく開く器形である。19は草刈遺跡(東部地区)P001出土である。あまり明瞭でない受け口状の口縁部断面で、頸部の隆線を欠く。

第67図20はd種(縦位沈線の土器)である。草刈遺跡(B区)479C(土坑)出土である。明瞭な受け口状の口縁部断面をもつ土器である。

21・22はe種(格子目状文の土器)である。21は市原市市原条里制遺跡市原地区出土土器である。小破片であるが、多条の細い隆線を口辺部に密に配する。口縁部断面はあまり明瞭でない受け口状である。22は市原市草刈遺跡(B区)178B(住)出土である。口辺部に斜行する隆線を配するため概種の類例と判

断した。ただし、隆線の間隔は疎で、典型例とは言い難いものである。口縁部断面は内削ぎ状に肥厚し、張り出す形態である。

23・24はf種（折衷土器）としたものである。23は市原市草刈遺跡（B区）209F（住）出土である。斜行文と同様の構成を取るが、頸部以下に加曾利E式に見られる縦位の区画文を配する。縄文はなく沈線ないし条線を配する。口縁部断面は比較的明瞭な受け口状である。24は同遺跡205A（住）出土である。やや装飾的な隆線をもつ土器で、口辺部に重弧文、ややくびれた頸部には横位の隆線を2条配しその間を無文帯とする。頸部以下には地文に縄文を施し、若干蛇行する縦位沈線を引く。口縁部断面は受け口状のようである。

#### (6) 君津地域（第68図）

第68図1～3はa種（斜行文土器）である。1は木更津市伊豆山台遺跡SI023出土、2は同遺跡SI013出土である。両者とも受け口状の口縁部断面をもつもので、2は頸部のくびれがやや強い。3は木更津市台木A遺跡050号住出土である。角頭状の口縁部断面をもつものである。

4・5はb種（重弧文土器）である。4は伊豆山台遺跡SI027出土である。全体にやや装飾過多な様相を呈する。口縁部断面は受け口状で、口辺部には端部が渦巻き状になる縦位蛇行隆線を配する。渦巻き部分の先端は小突起状に口縁部上にせり出す。くびれた頸部には横位の蛇行隆線を2条配し、隆線間は横位沈線と2本一単位の短い縦位隆線を配する。頸部以下は条線地文で、蛇行する縦位隆線と横S字状の隆線を配す。5は君津市三直貝塚10トレンチ出土である。口辺部には蛇行隆線を配し、頸部には2条の蛇行隆線をもつ。頸部隆線上に、刺突を施したボタン状の貼り付けをおこなう。

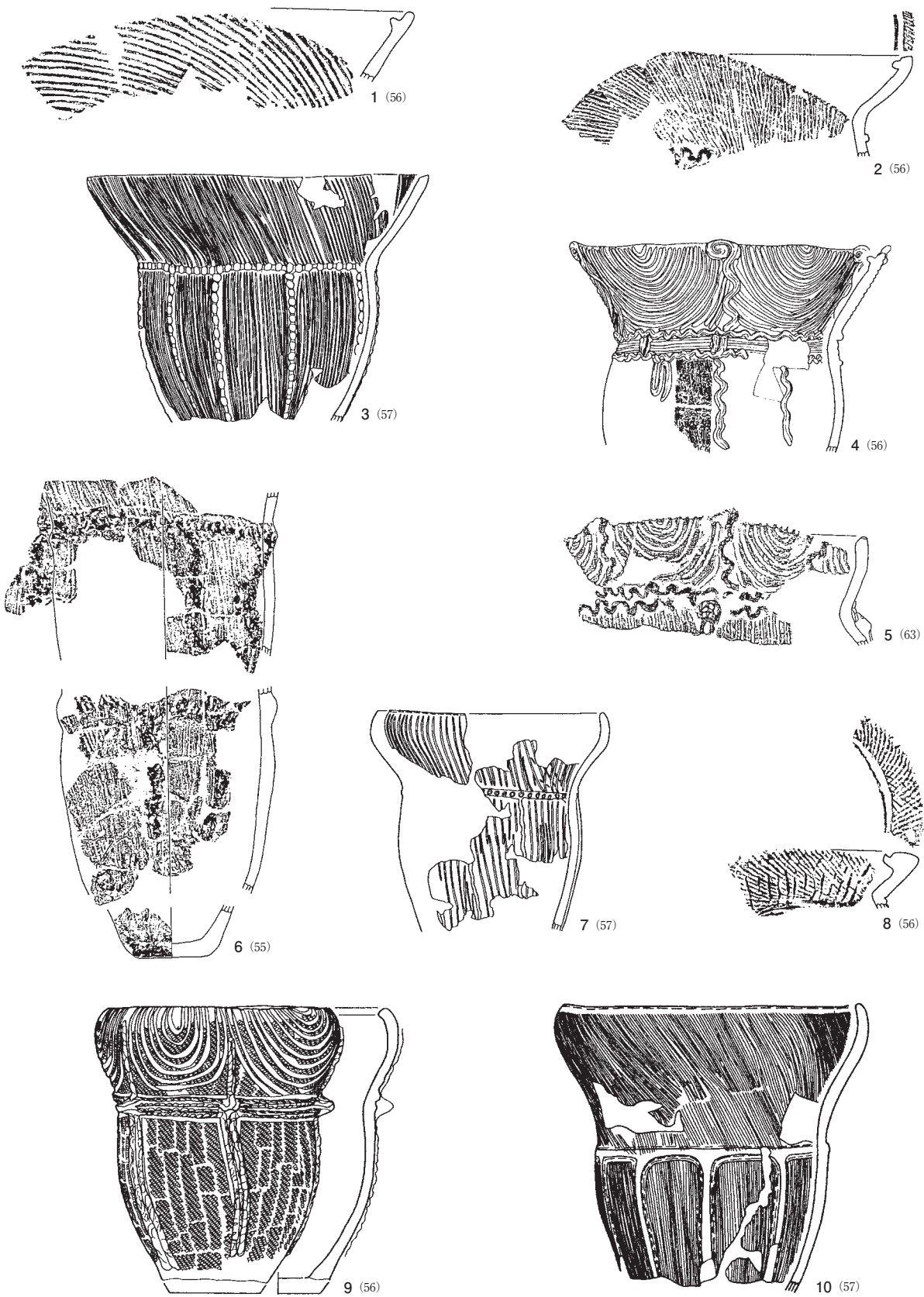
6・7はd種（縦位沈線の土器）である。6は木更津市久野遺跡SK142出土である。口縁部を欠くため全体の様相は不明だが、くびれの弱いやや細身の器形のようである。7は台木A遺跡グリッド出土で、丸頭状の口縁部断面をもつ。

8はe種（格子目状文の土器）である。木更津市伊豆山台遺跡SI020出土で、厚みのある受け口状の口縁部断面で、やや狭い口辺部に細い隆線を密に配す。

9・10はf種（折衷土器）と判断したものである。9は伊豆山台遺跡SI009出土で、地文に縄文をもち、口辺部に重弧文を持つ土器である。口辺部に縦位隆線を配し、頸部および頸部以下は2本一組の隆線である。頸部の隆線上には小突起が存在する。口縁部断面は丸頭状である。10は木更津市台木A遺跡007号住出土である。市原市草刈遺跡（B区）209F（住）出土土器（第67図23）とよく似た構成である。くびれはやや弱く、口辺部を大きく取る器形で、口縁部断面は丸頭状である。口辺部には斜行する条線を引き、頸部以下には加曾利E式に見られる縦位の区画文をもつ。区画内は縦位の条線である。

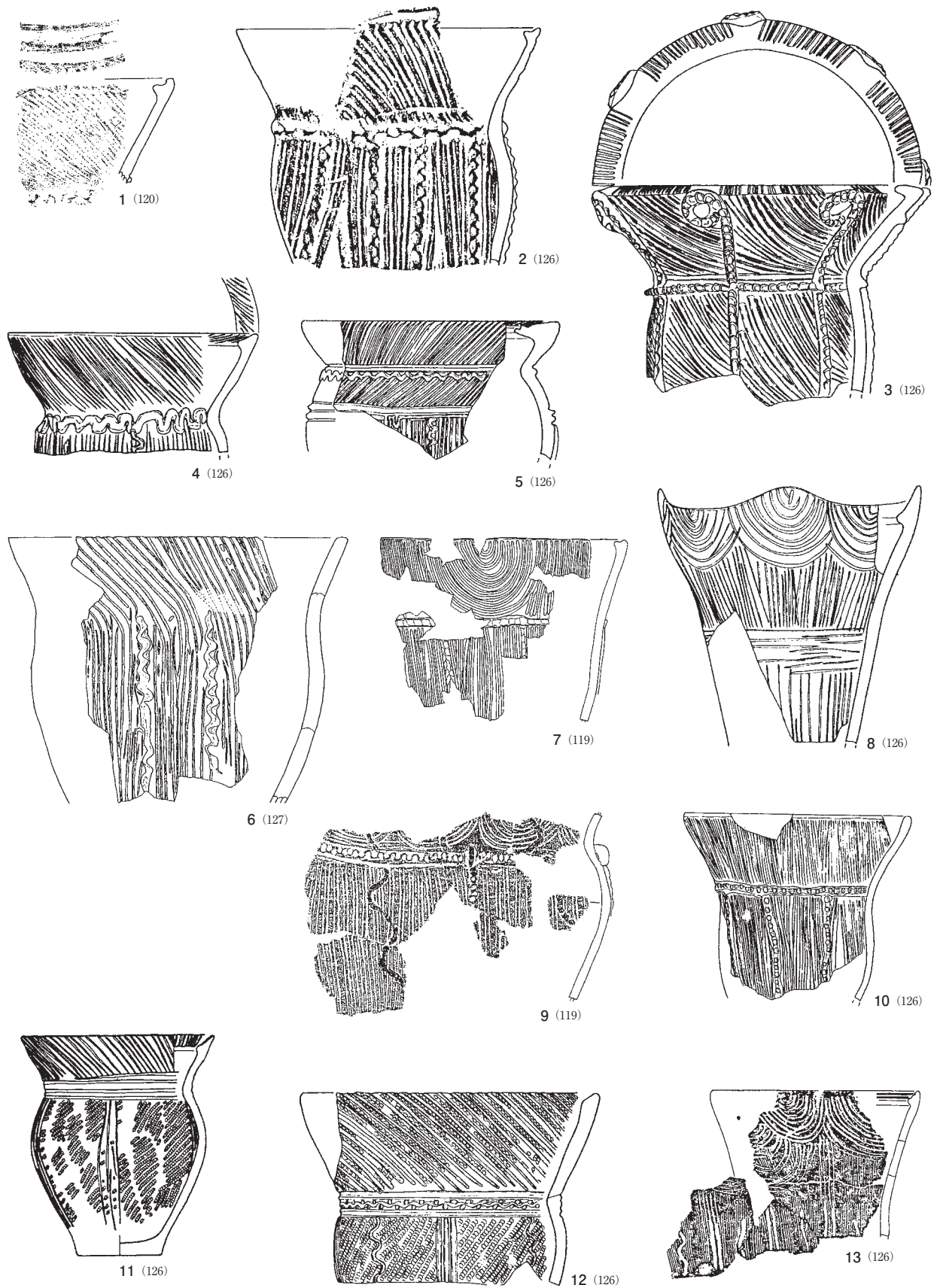
#### (7) 長生・安房地域（第69図）

第69図1～6はa種（斜行文土器）である。1は長南町今泉遺跡出土で、受け口状の口縁部断面をもつものである。2～5は南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）出土で、2は第1号住出土、3は第4号住出土、4はグリッド出土、5は第7号住出土である。2・4は「寒風台型」に近い、比較的明瞭な受け口状の口縁部断面をもつものである。3は松戸市子和清水貝塚65号住出土土器（第60図8）と類似する資料で、頸部以下にも斜行する沈線をもつ土器である。受け口状というより、内折する口縁部をもち、口縁部で蕨手状をなす縦位の隆線が、頸部のくびれ部を越えて、直線的に垂下する。5はやや様相が異なる資料で、広い受け口状の口縁部断面をもつ。狭い口辺部で、頸部のくびれ以下に横位の隆線で画



1・2・4・8・9：木更津市伊豆山台、3・7・10：木更津市台木A、5：君津市三直貝塚、6：木更津市久野  
 (縮尺：1~3・5・6・8~10：1/5、4・7：1/8)

第68図 君津地域



1: 長南町今泉、2~5・8・10~13: 南房総市 (旧富浦町) 深名 (深名瀬畠)、  
 6: 南房総市 (旧千倉町) 谷 (密造院)、7・9: 茂原市下太田  
 (縮尺: 1~6・8・11・12: 1/5、7・9・10・13: 1/8)

第69図 長生・安房地域

された頸部文様帯が存在し、ここにも斜行沈線が配される。6は南房総市（旧千倉町）谷遺跡（密造院遺跡）出土である。頸部の隆線を欠き、頸部のくびれ以下にだけ縦位の隆線を配する。角頭状の口縁部断面である。

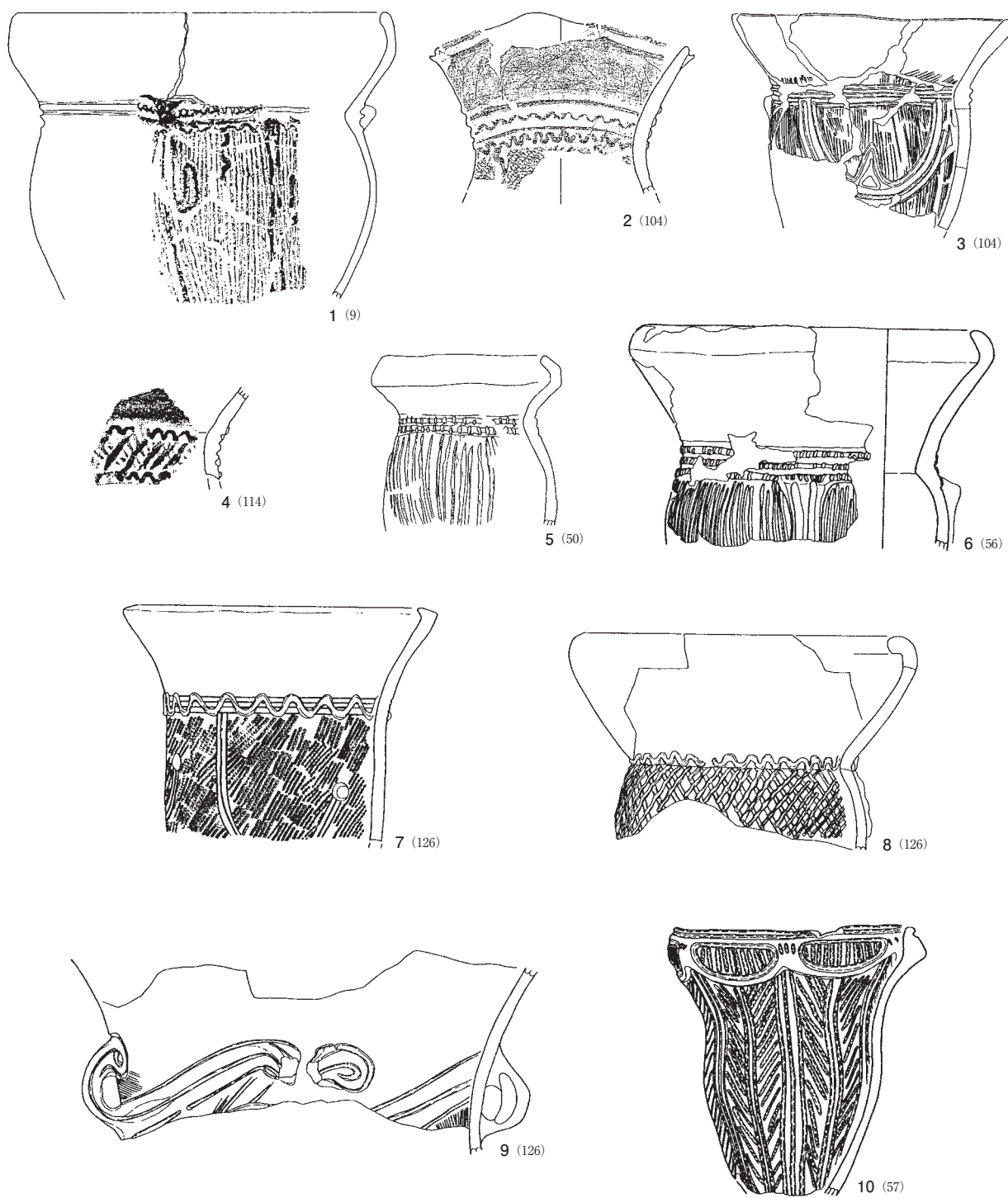
7～9はb種（重弧文土器）である。7は茂原市下太田貝塚第1地点包含層出土で、破片のためはつきりしないが、口辺部は重弧文と縦位沈線を組み合わせているようにも見える。口唇上には沈線を引くようである。8は南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）第8号住出土である。波状口縁で、頸部のくびれが弱い器形である。頸部の隆線を欠き、弱いくびれから若干下がった位置に横位の沈線を数条引く。この横位沈線から上を口辺部文様帯と見れば、重弧文の下に縦位沈線を配していることになる。口縁部断面は肥厚し、内側に張り出し、間延びした受け口状の口縁部断面といった趣である。9は下太田貝塚第2包含層出土である。破片資料ではつきりしないが、口辺部にも蛇行隆線をもつようである。

10はd種（縦位沈線の土器）である。深名遺跡（深名瀬島遺跡）グリッド出土で、丸頭状の口縁部断面である。

11～13はf種（折衷土器）としたものである。すべて深名遺跡（深名瀬島遺跡）出土で、11はグリッド出土、12は第8号住、13は第37号住出土である。11は弱い受け口状の口辺部に斜行文を配し、くびれた頸部には数条の横位沈線を引く。頸部以下には地文縄文上に3本一組の縦位沈線を配する。沈線間の縄文は磨り消されていない。12は、11と似た資料であるが、口辺部にも地文縄文が及ぶ。くびれた頸部は交互刺突文のようである。頸部以下に3本一組の縦位沈線と蛇行沈線を配する。縦位沈線間は狭く、おそらく縄文の磨り消しは意識されていないであろう。口縁部断面は内削ぎ状である。13は頸部のくびれがほとんど認められず、口辺部文様帯をを画する隆線や沈線は存在しない。条線地文のようで、口辺部に乱れた重弧文を配し、重弧文に接して2本一組の縦位沈線と蛇行沈線が垂下する。口縁部断面は受け口状に近い。

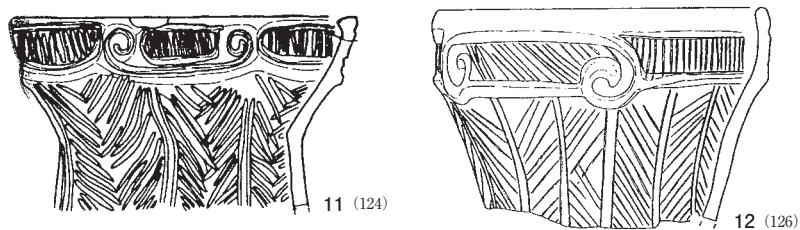
## 〈2類 その他の曾利式系土器〉（第70図）

第70図1～8は、2類a種とした古手の曾利式系土器である。1は松戸市根木内遺跡第7地点第3号住居跡出土である。内湾する広い口辺部を無文とし、くびれた頸部には横位の直線的な横位隆線と蛇行隆線が配され、隆線上に小突起をもつ。頸部以下は沈線ない条線地文で、細い隆線を貼り付けて文様を構成する。2・3は神崎町原山遺跡出土である。2はSK204出土で、外に開く無文の口辺部で、くびれた頸部に横位の直線的な隆線と蛇行隆線を複数配す。頸部以下は地文縄文上に縦位隆線を貼り付けている。3は同遺跡SK95出土で、大きく外に開く無文の口辺部で、くびれた頸部には直線的な横位隆線を2条配する。頸部以下は条線地文上にU字状の文様をもつものである。4は横芝光町（旧横芝町）東長山野遺跡24号住出土で、小破片であるが、頸部に隆線による格子目文をもつ土器である。5は市原市草刈遺跡（千葉急行線内）グリッド出土である。内折する無文の口辺部で、くびれた頸部には、横位沈線間に刺突を施すものが2段配される。頸部以下は縦位沈線である。6は木更津市伊豆山台遺跡SI056出土で、5と様相が似る。無文の開く口辺部で、口縁部付近で内接する。くびれた頸部には横位沈線間に刺突を施すものを3段に配する。頸部以下は縦位沈線で、縦位の隆線を配する。7・8は南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）出土である。7は第22号住出土で無文の開く口辺部、頸部に横位の波状隆線をもつ。頸部以下は地文縄文上にJ字状の文様をもつ。8は第19号住出土で、無文の広い口辺部で、口縁部が内接し、頸部には上端を横位蛇行隆線で画された隆線による格子目状の文様が存在する。



1: 松戸市根木内、2・3: 神崎町原山、4: 横芝光町 (旧横芝町) 東長山野、5: 市原市草刈、6: 木更津市伊豆山台、7~9・12: 南房総市 (旧富浦町) 深名 (深名瀬島)、10: 木更津市台木A、11: 南房総市 (旧富山町) 京田

(縮尺: 1: 1/8、2~6・11: 1/5、7~10・12: 1/6)



第70図 その他の曾利式系土器



9は2類c種のX把手土器で、深名遺跡（深名瀬島遺跡）グリッド出土である。X把手の部分しか残存しておらず断片的な資料であるが、現在のところ県内で確認できた唯一の資料である。

10～12は2類b種とした1類以外の矢羽根状沈線の土器である。10は木更津市台木A遺跡015号住出土、11は南房総市（旧富山町）京田遺跡出土、12は深名遺跡（深名瀬島遺跡）第2号住出土である。いずれも加曽利E式のキャリパー形の器形と共通し、口縁部文様帯の区画内は縦位沈線を充填する。11・12は口縁部文様帯に渦巻き文を配する。口縁部より下は、2本一組ないし3本一組の縦位沈線を引き、その間に矢羽根状の沈線を配するものである。

### 3 分布とその特徴

第71図は、第4表の地名表に基づいた分布図である。平成17年（2005年）度までの時点で確認できた、県内で曾利式系土器を出土した遺跡を示した。分類ごとの分布状況については、第72・73図に示した。第72図には曾利式系土器1類a・b・d種、第73図にはそれ以外の特徴的な分布状況を見出しうる土器について、分布図を作成した。分類別出土状況を示した第5表を参照しつつ、見ていきたい。

#### (1) 1類・曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例の分布

曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例の中核をなす、1類a種（斜行文土器）・1類b種（重弧文土器）の分布については、第72図に示した。第5表は遺構別に各土器の有無を示しているが、破片数などで数量を示しているわけではなく量的に正確ではないが、出土した遺構・グリッド数を見ると、斜行文土器は217か所、76遺跡で出土している。一方、重弧文土器は若干少なく、102か所45遺跡で出土している。曾利式系土器を出土した遺跡の総数は127遺跡であり、そのほとんどが斜行文か重弧文土器、あるいはその両者を出土すると解釈できる。第72図を見る限り、両者とも県内全域にくまなく出土しており、大きな地域的偏りは無いように見える。ただ、遺跡の分布の希薄な地域もあり、台地上で遺跡のドットが希薄に見えるのは、九十九里沿岸を分かつ成田市の成田空港付近から千葉市土気付近に至る分水界上と、上総丘陵から安房地域の山間部であろう。前者に関しては、県内においては、縄文時代中期の遺跡が少ない地域として認識されており（大内ほか1997）、後者については開発行為が少なく、発掘調査事例が少ない地域であることと関係しよう。よって、こうした出土遺跡分布の希薄さは、曾利式系土器の出土状況と言うよりは、縄文時代中期遺跡そのものの分布上の問題と、考古学的な調査の多寡に関わっているのであろう。ここで見出すべきは、曾利式系斜行文・重弧文土器が千葉県内でかなり均一に出土するという点であろう。

次に、1類d種（縦位沈線の土器）については、41か所、28遺跡で出土した。第14図右に分布を示したが、これも県内全域で出土しており、顕著な分布の特徴を見出すことができなかった。

分布の特徴を見出しうるものとして、第73図左に、1類c種（矢羽根状沈線の土器）・1類e種（格子目状文の土器）・1類f種（折衷土器）の分布を示した。1類c種（矢羽根状沈線の土器）はかなり限定された範囲の6か所、5遺跡で出土しており、東葛飾地域から千葉市周辺地域の東京湾側にのみ分布する。千葉県北西部の東京湾側に分布すると考えられよう。この地域より東側・南側には分布しておらず、きわめて限定された分布域である。おそらくこの分布は、共通する文様を持つ、2類b種とした1類以外の矢羽根状沈線の土器の分布と対称をなすと考えられよう。

1類e種（格子目状文の土器）は、千葉市周辺地域から安房地域の東京湾側を中心とした6か所、6遺跡で出土した。千葉県南西部の東京湾側に集中する。この地域より北側・東側には、1例を除いて分布し



第71图 曾利式系土器出土遺跡分布图

ていない。この1例は、神崎町原山遺跡出土の、典型例からかなりはずれた土器であり（第63図8）、これを差し引くとこの土器の分布域もかなり限られていると言えそうである。

この1類c種（矢羽根状沈線の土器）と1類e種（格子目状文の土器）は、分布が狭い地域に限定され、県内全域に影響は及ぼさなかったことが窺える。1類a種・b種の斜行文・重弧文土器ほど、県内全域には浸透しなかった、と判断できよう。

1類f種（折衷土器）は、17か所、12遺跡で出土したが、あまり特徴的な分布を示さない。県内においては地域的な偏りが無く、折衷土器が製作されたことを示している。

## (2) 2類・その他の曾利式系土器の分布

2類a種とした古手の曾利式系土器は、19か所、8遺跡で確認した。第73図右に示したように、分布は県内全域の広い範囲にわたる。こうした古手の曾利式系土器が、少数ながらも県内全域にわたって出土するのは、断片的ながらも曾利式情報が比較的早い時期から県内全域に浸透していたことを示すように思える。断片的な曾利式文化圏の情報の県内での浸透という点では、曾利式文化圏に故地があると考えうる「鉤状石器」が県内の広い範囲で少数出土する事例も挙げられる（大内 2004）。こうした曾利式文化圏の情報は、おそらく多摩・武蔵野地域や相模地域といった曾利式の本場に隣接した地域をクッションとしたものであろうが、そうした地域を通じた細々とした曾利式文化圏との交流が、その後の県内における曾利式系斜行文・重弧文土器の大流行のベースとなったと考えられよう。

2類b種とした、1類以外の矢羽根状沈線の土器の分布は、きわめて限定的である。確認できた数は、7か所、4遺跡と少数であるが、すべて君津地域の南側から安房地域の東京湾側に偏っている。東京湾の対岸に位置する三浦半島を介した相模方面との交流が強く疑われる分布である。器形が異なるものの、矢羽根状沈線という文様要素が共通する1類c種とは、きれいに分布域を分けているように見える。文様要素の共通性から、時期的にはそれほどかけ離れるとは考えがたく、おそらくこの両者は地域的に排他的な関係を有していた可能性がある。

## (3) 分布の特徴・まとめ

県内出土の曾利式系土器の分布状況について簡単にまとめておく。

1類とした曾利式系斜行文・重弧文土器とその類例については、1類a種（斜行文土器）、1類b種（重弧文土器）が県内全域にわたって広く分布する。遺跡立地や調査事例の多少による分布上の制約を除けば、ほぼ均一に分布するように見える。1類d種（縦位沈線の土器）も、分布上に顕著な偏りはなく、県内の広い範囲にわたって分布する。

1類とした土器の中で、分布上顕著な偏りを示すのは、1類c種（矢羽根状沈線の土器）と1類e種（格子目文の土器）である。前者は県北西部の東京湾側に偏って分布し、後者は県南西部の東京湾側に偏って分布する。

1類f種（折衷土器）は、県内の広い範囲に分布し、分布上の顕著な偏りは示さない。

2類とした、その他の曾利式系土器については、1類より時期的に先行すると考える、2類a種とした古手の曾利式系土器が、少数ながら、県内全域の広い範囲にわたって出土する。一方、2類b種とした1類以外の矢羽根状沈線の土器については、県南西部の東京湾側のごく狭い範囲で出土し、きわめて限られた分布範囲を示し、1類c種（矢羽根状沈線の土器）と分布上の対照をなす。

以上のような状況であるが、分布状況を概観すると、県内全域にわたって広く分布する広域型（1類



第72図 分類別分布(1)



第73図 分類別分布(2)

a・b・e・f種・2類a種）と、きわめて限定された範囲にのみ分布する局所型（1類c・e種・2類b種）が存在することがわかる。このことから、一口に曾利式系土器といっても、県内で広く受け入れられた土器と、受容が限定的であった土器の両者が存在したことが想像できよう。いわゆる異系統土器の情報の取捨選択が、小地域ごとにおこなわれた可能性を示していると考えられよう。

さらに、局所型の分布から読みとれることは、曾利式情報という点において、房総半島の北西部からもたらされた情報と南西部からもたらされた情報の2者があることを示しているであろう。特に北西部の東京湾側に分布する1類c種と南西部の東京湾側に分布する2類b種は、分布上明瞭に対峙しているように見え、房総半島の南北2方向から来た情報が、限られた範囲に受け入れられたことを暗示している。

また、分布図上からは明瞭に読みとれないが、第5表を見ると遺跡ごとの土器の量的な偏りもある程度見出せる。南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬島遺跡）では、2類a種とした古手の曾利式系土器が、1遺跡から大量に出土していることが判る。県内全域から見ると突出した量であり、1類に先行する時期において、この遺跡が存在する房総半島南端部付近が、曾利式情報に強く影響されうる地域であったことを示している。こうした状況は房総半島の他の地域の遺跡ではあまり見出せず、この地域が曾利式情報という点で房総半島内においてやや特異な地域であったことが窺える。

### 第3節 層位的出土例からみた曾利式系土器の時期

#### 1 時期設定の大枠について

千葉県内における中期後葉・加曾利E式の細別に関わる問題については、簡単に触れたことがある（大内2006）。細別呼称の問題も含めて、厚い研究史の中で様々な問題をはらむが、基本的にはよって立つ編年観を明確にし、相互に変換可能な形で記載する以外、明瞭な解決策はないように思われる。

千葉県内においては、加曾利E式の細別呼称は、例えば千葉県史資料編で示された編年表のように（千葉県史料研究財団2000）、ローマ数字による呼称法が用いられる場合が多い。これは概ね「埼玉編年」（谷井ほか1982）に準拠した形での使用である。ただし、例えば小川和博（1989）などはアラビア数字の呼称を用いている。下総考古学研究会は一貫してアラビア数字での呼称法を用いる（例えば下総考古学研究会2006）。また、アラビア数字を用いた加曾利E式の細別と広域編年を進める柳澤清一は、近年改めて、自身の広域編年との整合性をもった細別を県内の資料に適用している（柳澤2006）。

もちろん、単純にローマ数字・アラビア数字を用いるかどうかの問題ではなく、例えば中野修秀は、ローマ数字を用いた細別呼称を用いるが、加曾利EⅠ式とEⅡ式の区分に懸垂文間の縄文の磨り消しを重視する立場で（中野2001）、埼玉編年との齟齬は大きい。県内で広く受け入れられている加納実による編年（加納1994など）における加曾利EⅢ式／EⅣ式の区分線も、埼玉編年との食い違いが存在する。また、アラビア数字を用いる立場でも、小川和博と下総考古学研究会では、細別の根拠が全く異なる。柳澤清一の進める細別は、おそらく加曾利E式後半では比類なき細かい区分と言えようが、個々の土器に適用するためには柳澤と同じ鑑定眼が必要であり、少なくとも現在の筆者の及ぶところではない。

筆者自身は下総考古学研究会での研究活動を通じて、基本的には山内清男の細別に準じた形でのアラビア数字による呼称法を用いるべきと考えつつあるが、一方で房総半島においては加納実が示した横位連携弧線文土器の成立を指標として加曾利EⅢ式の成立と見なす区分（加納1989a・b）が、時期区分の指標としてだけでなく、遺跡群研究の指標としてかなりの有効性を持つことも体感している。加納の示し

た編年観（加納 1994）が千葉県内において加曽利E式後半の最も体系的な編年と考えられることから、この区分の有効性も捨てがたく考えていることも事実である。

本論では、加曽利E式の細別に踏み込むことが目的ではないので、仮に、筆者が市原市中潤ヶ広遺跡の分析の際に示した枠組（大内 2006）を借用し論を進めていきたい。すなわち、加曽利E式キャリパー形土器の胴部懸垂文間の縄文の磨り消しの成立が、加曽利E式古・新を区分する最大のメルクマールと捉え、この方針に準拠する黒尾和久の示した編年案（黒尾 1995）と、いわゆる新地平編年（黒尾ほか 1995・2004）に概ね準拠する。ただし、武蔵野・多摩地域を中心とした上記の編年と、房総半島では地域的な差異があり、ストレートに適用することは出来ないため、その大枠としての加曽利E 1～E 4式の区分を採用したい。この区分は山内清男の示した加曽利E式の細別（山内 1940）とも概ね一致するとの理解である。さらに本論では資料の中心となる加曽利E 3式に関しては、加納の言う横位連携弧線文土器の成立が一つの大きな画期と考え、前半と後半に区分して考えたい。

すなわち、模式化すると以下のようになる。

加曽利E 1式	≡	新地平編年10 a～c期	
加曽利E 2式	≡	新地平編年11 a～c期	
加曽利E 3式前半	≡	新地平編年12 a・b期	
加曽利E 3式後半	≡	新地平編年12 c期	≡ 加納・加曽利E III式古段階
加曽利E 4式	≡	新地平編年13 a期	≡ 加納・加曽利E III式新段階・E IV式

もちろんこの概念化は、房総半島の曾利式土器を扱うに当たって仮に設定する区分である。房総半島における加曽利E式の細別に関しては、今後別の機会に稿を改めることを期したいと思う。

さて、一方で、曾利式土器の時間的な枠組については、前述のように近年の甲府盆地を中心とした編年の成果を主に参照した。曾利式の編年については、八ヶ岳山麓周辺の資料を中心とした、いわゆる井戸尻編年（藤森 1965）が基礎であるが、甲府盆地における資料の増加、特に釈迦堂遺跡の調査以降、近年盛んに編年の再編成と細別が試みられてきた（山形 1996・1997、櫛原 1999、今福 1999など）。最近では、今福利恵が甲府盆地の資料を駆使して編年を再構成している（今福・関間 2004・今福 2005）。

今福の最新の編年（今福 2005）を参照し、大雑把に加曽利E式との対比を図るとすると、概ね曾利I式古段階・新段階が加曽利E 1式、曾利II式古段階・新段階が加曽利E 2式、曾利III式・IV式古段階・新段階が加曽利E 3式前半、曾利V式古段階が加曽利E 3式後半、曾利V式新段階以降が加曽利E 4式に相当すると考える。

## 2 型式学的に想定される土器群の時期

第2節で集成した事例のなかで、型式学的な要素から時期を推定できるものがある。既存の編年に照らして、房総半島における時期的な位置づけを簡単に見てみたい。

曾利式土器1類とした斜行文・重弧文土器と系譜を同じくすると考える土器については、甲府盆地における曾利I式の中にすでに重弧文土器が存在する。ただし、房総半島で出土する事例と近い資料については、曾利II式～III式の中に見出せるように思う。また、新地平編年を参照すると、多摩・武蔵野地域においては加曽利E 2式から加曽利E 3式後半期にわたって存在している。房総半島で出土する曾利式土器1類の大多数は、装飾が少ないものが多く、新地平編年11c期（すなわち加曽利E 2式後葉）以

降12b期（加曾利E 3式中葉）に相当する資料と考える。

曾利式系土器1類のうち、型式学的特徴からある程度の時間的位置づけが可能な土器が少数ではあるがいくつか存在する。特にf種とした折衷土器は、加曾利E式の型式学的特徴を持ち合わせることから、位置づけが可能である。いずれも胴部の懸垂文が、地文縄文上に沈線を引くという特徴から、加曾利E 2式以前に位置付けうるものとして、第67図24・第69図11・12がある。一方、胴部懸垂文間の地文の磨り消しが明瞭であり加曾利E 3式前半に位置付けうるものとして、第61図22・第68図10があり、第67図23や第69図13も胴部文様の構成上これらに準ずるであろう。

先に挙げた加曾利E 2式以前に位置付けうる事例にも見出せる特徴であるが、頸部文様帯を広く取るものについては、既存の編年の成果と照らしてみても相対的に古く位置づけが可能であろう。明瞭なものとしては、第69図5で、この土器は加曾利E 2式以前の可能性があるであろう。第68図4は装飾過多という特徴からも相対的にやや古く遡る可能性があるが、この土器の頸部文様帯もやや幅広い。また第68図5も隆線が2条あり、やや古くなる可能性がある。ただし、この特徴は、曾利式系土器1類の中で相対的に古くなることはわかるが、加曾利E式の細別に明瞭に対応させることはできない。

1類c種とした矢羽根状沈線の土器はその文様が、明らかに曾利IV式期以降の土器の影響と考えられ、加曾利E 3式以降に相当しよう。

1類e種とした格子目状文の土器のうち第68図8の土器は、いわゆる「籠目文」と呼ばれるものの典型に近く、おそらく加曾利E 2式期に相当するものではないかと思う。しかしこれ以外のe種土器はより崩れたものであり、より時期が下る可能性が高い。

上記以外の曾利式系土器1類の大多数は、型式学的特徴が少なく、個々の土器の特徴のみで加曾利E式の細別時期に対応させることは困難なようである。これまでの研究成果で、特に曾利式系土器1類に共通して見られる口縁部断面の受け口状の形状は、時期が下るに従い丸頭状へと変化することが想定されているが、型式学的な変化の方向性としては首肯できるものの、少なくとも房総半島においては、この変化が加曾利E式細別時期にそれほど明瞭に対応するようには見えない。出土事例から検証可能かどうか次項で見てみたい。

曾利式系土器2類では、2類a種が分類そのものとして曾利I・II式に類似したものを想定しており、概ね加曾利E 2式以前の土器と考える。2類b種の矢羽根状沈線をもつ土器は、やはり曾利IV式期以降の土器の影響と考えられ、キャリパー形土器である例がほとんどであることから考えると加曾利E 3式前半に位置付けうる可能性が高い。

### 3 遺構伴出例からみた土器群の時期（第5表）

第5表には、曾利式系土器と同一の遺構から出土した土器の概略がわかるよう、「遺構内伴出土器」欄を設けた。これは遺構内で出土した全ての土器片を網羅したものではなく、復元個体・大破片を中心に筆者が抽出したものであるから、厳密なものとは言い難い。また、多くのものが、単に同一遺構中で出土した、という以上の情報は持たず、層位的に同時期である証明をするものではない。こうした前提を踏まえた上での限界はあるが、この欄を見てみるとある程度の傾向が見出せる。

まず第一に、加曾利E 3式と一緒に出土する事例がきわめて多いことに気づく。特に曾利式系土器1類とした斜行文・重弧文土器とその類例との強い関係が窺える。ただし、1類の中の特定の土器との相関



は見出せない。また、同時に連弧文系土器との伴出が目立つ。一方、2類a種とした古手の曾利式系土器は、例数は少ないものの、加曾利E 3式は伴わない例が多い。2類b種の1類以外の矢羽根状沈線をもつ土器は加曾利E 3式との相関が窺える。

加曾利E 3式よりも遡る加曾利E 2式は、曾利式系土器1類が出土する遺構で若干出土するものの、数は少ない。一方、例数は少ないが、前述の2類a種の古手の曾利式系土器との関係が窺える。松戸市根木内遺跡第7地点3号住居跡、木更津市伊豆山台遺跡SI056、神崎町原山遺跡SK204、南房総市（旧富浦町）深名遺跡（深名瀬畠遺跡）第10・19・22号住居跡で同一住居から出土している。

また、加曾利E 3式後半の指標とした「横位連携弧線文土器」は、疑問符が付くものを含めても2例認められただけである。柏市林台遺跡第1・2号住居跡と酒々井町墨木戸遺跡J-5号住居跡で、曾利式系土器1類の胴部破片とともに出土した。少なくとも、曾利式系土器は「横位連携弧線文土器」との相関関係はきわめて薄いと予想されよう。

加曾利E 3式後半以降の、加曾利E 4式はごく例外で、疑問符の付くものが千葉市大野南遺跡16号住居で、曾利式系土器1類d種?との伴出が認められるのみである。

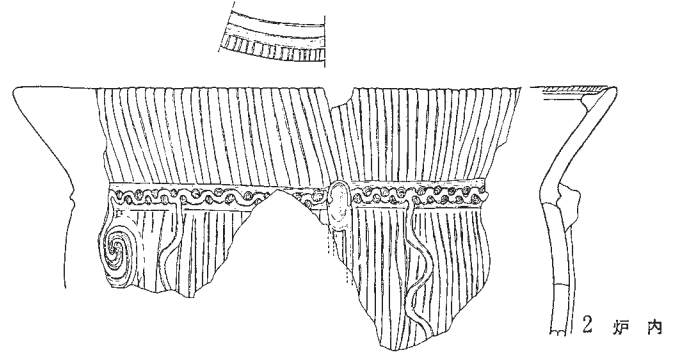
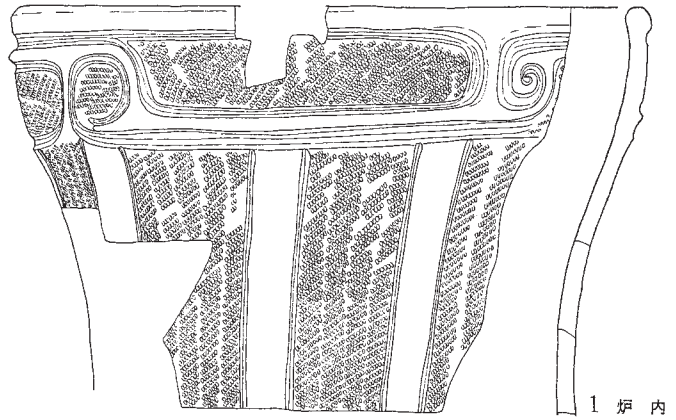
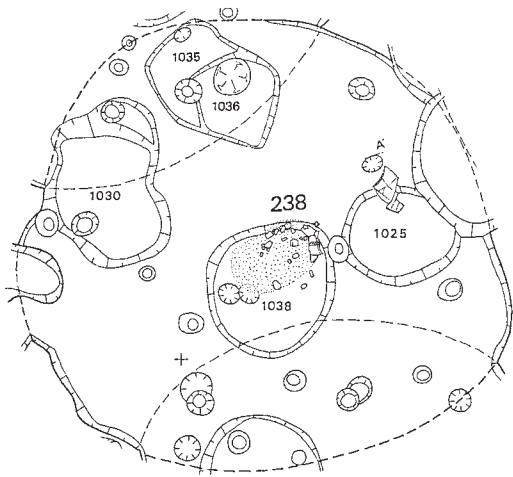
以上から、房総半島において、曾利式系土器1類については、胴部の磨消縄文成立以前の加曾利E 2式に伴うものが少数あり、磨消縄文成立以降の加曾利E 3式に伴うものが大多数を占める。ただし、加曾利E 3式後半に相当する「横位連携弧線文土器」出現以降の「加曾利E III式」との伴出はほとんど認められず、加曾利E 3式前半に収まる、という時間的な枠組が見通しうる。また、2類a種とした古手の曾利式系土器については、概ね加曾利E 2式以前に伴う可能性があり、2類b種とした1類以外の矢羽根状沈線の土器は、概ね1類と同じ加曾利E 3式前半という時間幅に位置付けられそうである。

#### 4 層位的出土例からみた土器群の時期（第74～79図）

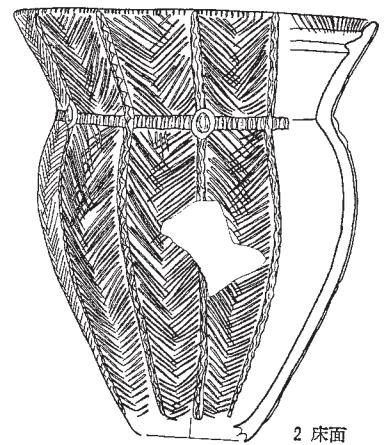
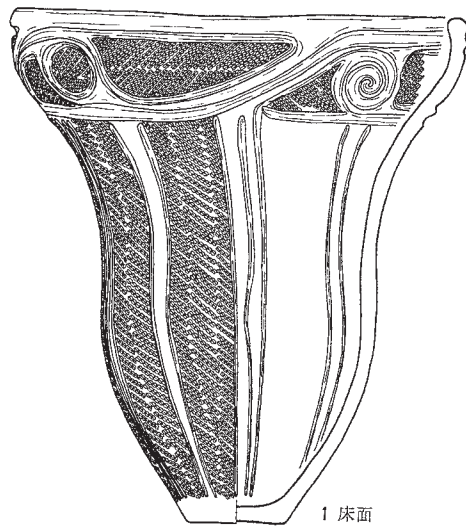
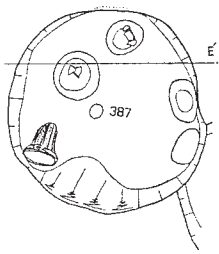
第5表からは、県内出土の曾利式系土器についての時間的な大枠を見通すことができた。しかし、曾利式系土器に伴出したと考えられる土器の多くは、単に同一遺構から出土したと言う以上の層位的な証明は持っていない。ここでは層位的出土状況がより明確な事例から、土器群の時期を検討してみたい。

第74～79図は、層位的に時間的な同時性あるいは新旧を窺うことが出来る事例を集成したものである。結果的には曾利式系土器1類に関わる事例ばかりであったが、同一遺構内で出土したという以上の層位的情報を持つ事例を集めた。その多くは、住居跡の土器片囲い炉に複数の土器を用いた事例で、曾利式系土器を含む事例である。県内の中期後葉の住居跡では、複数の土器片を炉の外壁付近に設置する土器片囲い炉が比較的多く検出される。住居使用時における土器片の使用の同時性が確実な事例であり、住居跡の床面で土器が検出される事例や、遺構覆土中で出土する事例よりも、比較的同時性を担保する可能性が高いと考える。もちろん、土器片囲い炉が作られた当初から時期の異なる土器片が用いられた可能性もあり、こうした事例が土器の確実な同時性を示すとは言い難い部分もある。ただし、逆に全く時期的にかけ離れた時期の土器片が用いられた事例が少ないことから敷衍すると、ある程度の幅での同時性をもつ可能性も高いように思う<sup>3)</sup>。他に、補足的にいわゆる「三上方式」（三上 1965）に従い、時間的關係が窺える出土事例を示した。

第74図上は、松戸市子和清水貝塚238号住居跡の炉内出土土器の事例である。住居平面図との照らし合わせから、土器片囲い炉と判断した。細かい出土状況の記載がなく、どのような形で組まれていたのか、



松戸市 子和清水貝塚 238号住居跡



松戸市 子和清水貝塚 387号土坑

第74図 出土状況(1)

他に土器片が用いられていたかなどは不明であるが、2個体の土器が「炉内」として図示されている。1は加曽利E 3式前半の土器で、2は曾利式系土器1類d種とした縦位沈線の土器である。この2者が組み合わされ、土器片囲い炉を形成したようである。1の懸垂文間の縄文の磨り消し部分は明瞭で幅広く、加曽利E 3式前半の中でもそれほど古くはないことを示す。一方、2の1類d種は明瞭な受け口状の口縁部をもち、頸部以下に配される隆線は一部渦巻き状で、装飾性が比較的高い。型式学的にはそれほど新相を示していない。

第74図下は、子和清水貝塚387号土（壙）出土土器である。両者とも、細かい出土状況の記載を欠くが、土器番号の脇に「床面」の記載があり、土坑底面で出土したことがわかる。1は加曽利E 3式前半の土器で、2は曾利式系土器1類c種とした矢羽根状沈線の土器である。1の胴部懸垂文は一部、3本一組である。2は比較的明瞭な受け口状の口縁部断面で、口辺部まで縦位隆線が及ぶものである。

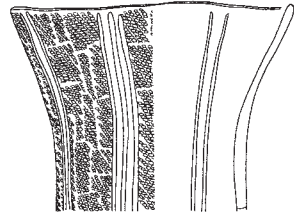
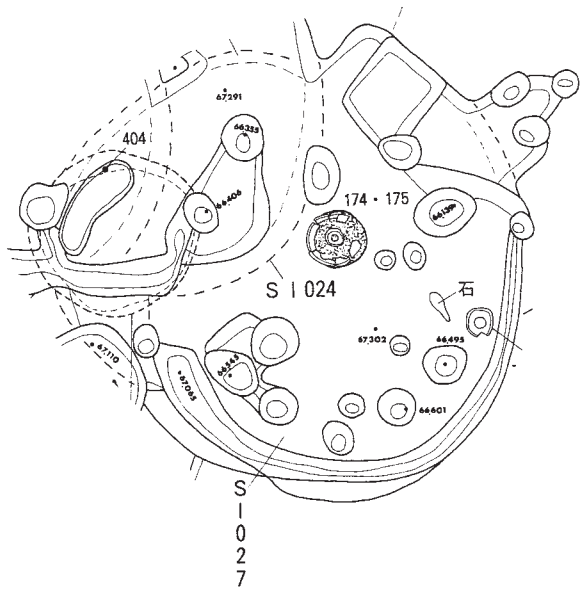
第75図上は木更津市伊豆山台遺跡SI027炉内出土土器である。細かい出土状況の記載は欠くが、平面図と土器番号脇の記載から推測すると、175の口縁部文様帯を欠く加曽利E式が炉の中央付近に埋設され、174の曾利式系土器1類b種が、破片の状態で炉の外壁付近に設置されたようである。175の懸垂文間の縄文の磨り消しは、図では明瞭ではないが、写真図版で見ると磨り消しが施されている。ただし、懸垂文間の一部3本一組で、幅は狭く、加曽利E 3式前半の中で比較的古相を示すものと思う。174は装飾的な蛇行隆線文様をもち、頸部のくびれ部分は2条の横位蛇行隆線を上下に配し、頸部文様帯的な区画を形成している。こうした要素は1類とした曾利式系土器の中では、古相を示す要素と判断できる。

第75図下は、市原市馬立塚ノ台遺跡（土宇遺跡）第35号住居跡炉内出土土器である。1～3・5・6の土器が土器片囲い炉として用いられた。1が曾利式系土器1類の体部である。2は連弧文系土器で、口縁部に円形刺突列を配し、口辺部以下には連弧文が変化したと考える2本一組の横位沈線が2段配され、体下半には、懸垂文が配される。沈線文間の縄文は磨り消されるようである。3・5・6は加曽利E 3式前半の土器で、口縁部文様帯の様相は若干差異が認められるが、懸垂文間の縄文の磨り消しは明瞭である。

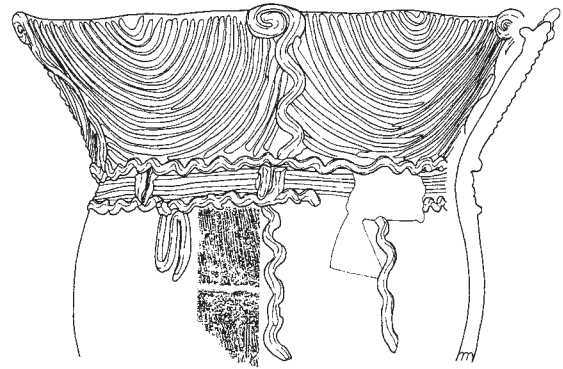
第76図上段は千葉市坊屋敷3号住居跡炉内出土土器である。3・4が土器片囲い炉に用いられた土器である。3は曾利式系土器1類b種で、やや明瞭な受け口状の口縁部断面をもつである。4は橋状把手をもつ加曽利E式土器キャリパー形土器である。把手の存在はやや異質であるが、口縁部の乱れた楕円形区画と懸垂文間の縄文が磨り消されていることから、加曽利E 3式前半に位置付けうるであろう。加曽利E 3式前半の中でも古相を示す土器であろうか。

第76図中段は、市原市下鈴野遺跡17号住居跡炉内出土土器である。曾利式系土器である4を炉中央に埋設し、炉の外壁付近に3・4・7・9・10の土器片を配する。2は把手であり、報告書では炉に使用された他の土器より古いと判断できない、とされた。3は加曽利E式キャリパー形土器であるが、口縁部文様帯に円形刺突を充填する変わった土器である。胴部の懸垂文間の縄文の磨り消しは明瞭であり、加曽利E 3式前半と判断できるが、やや古相を示すものであろうか。4は曾利式系土器1類a種であるが、口縁部断面は丸頭状で、型式学的にはそれほど古相を示すものではない。7・9は加曽利E式キャリパー形土器の口縁部付近の破片であろう。沈線による楕円区画が明瞭な土器である。10は体部に条線をもつ浅鉢形土器か。

第76図下段は、市原市草刈遺跡（千葉急行線調査区）108竪穴住居跡炉内出土土器である。1・3・4の土器を、炉の外壁付近に設置して、土器片囲い炉としている。1は加曽利E 3式前半の土器である。

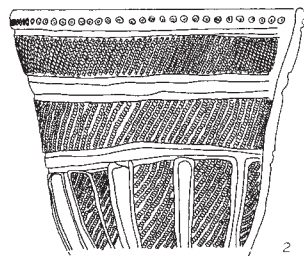
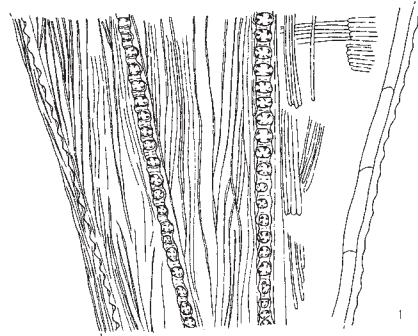
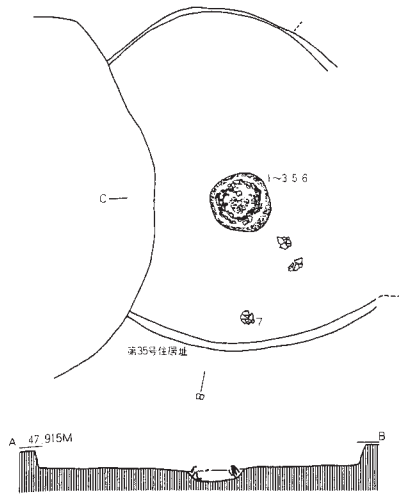


176. 炉体土器内側

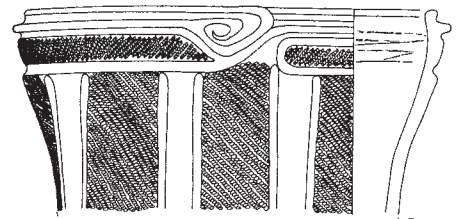


174. 炉体土器外側 (0003・0005)

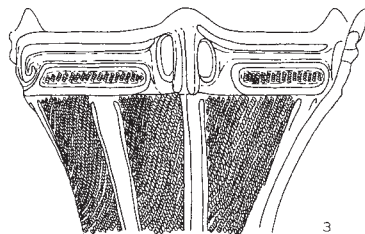
木更津市伊豆山台 SI027



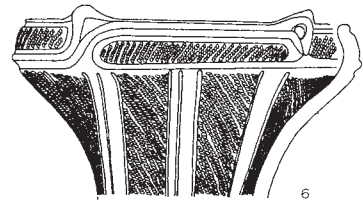
2



5



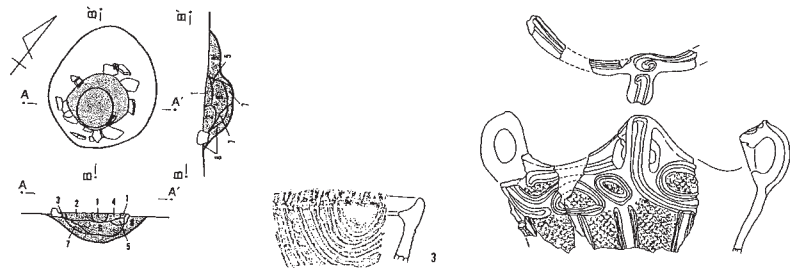
3



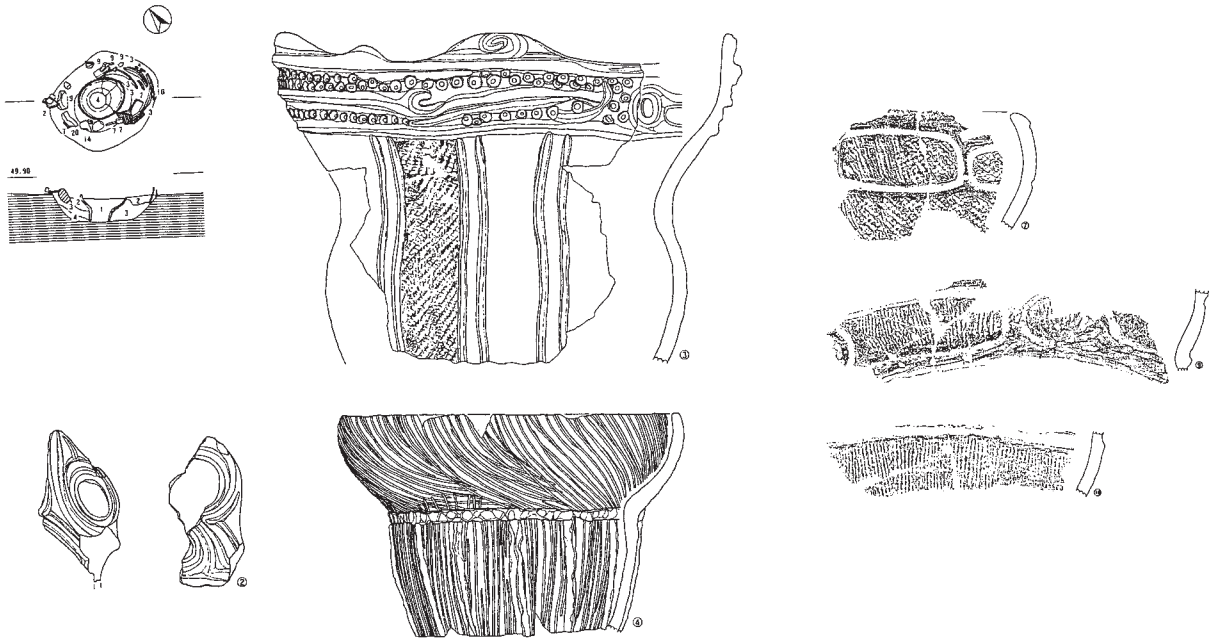
6

市原市 馬立塚ノ台 (土宇) 第35号住居址

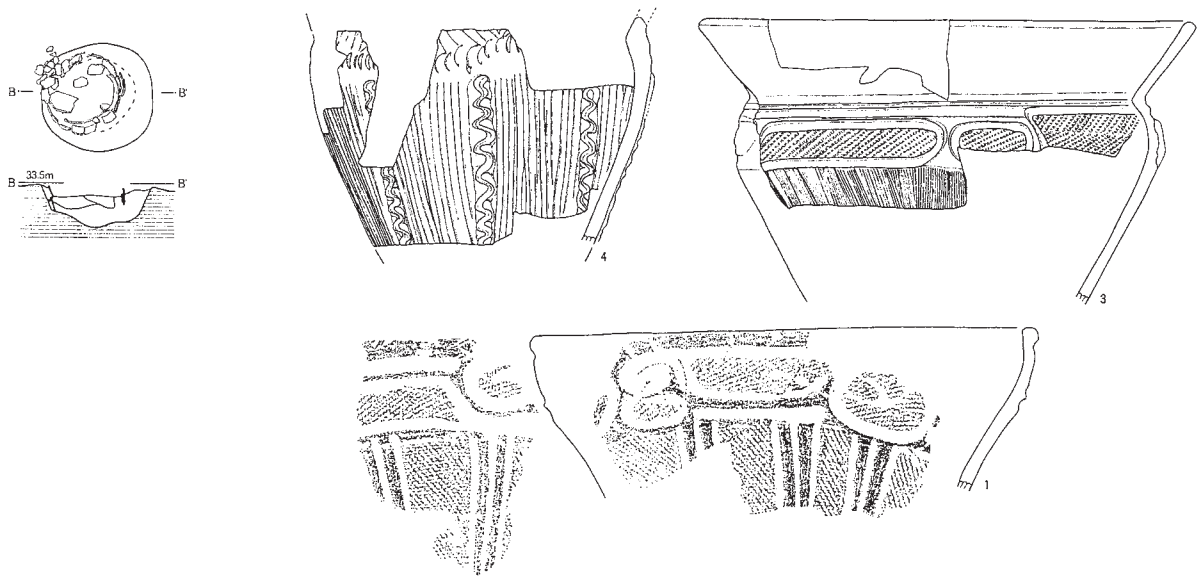
第75図 出土状況(2)



千葉市 坊屋敷 3号住居跡



市原市 下鈴野 17号住居跡

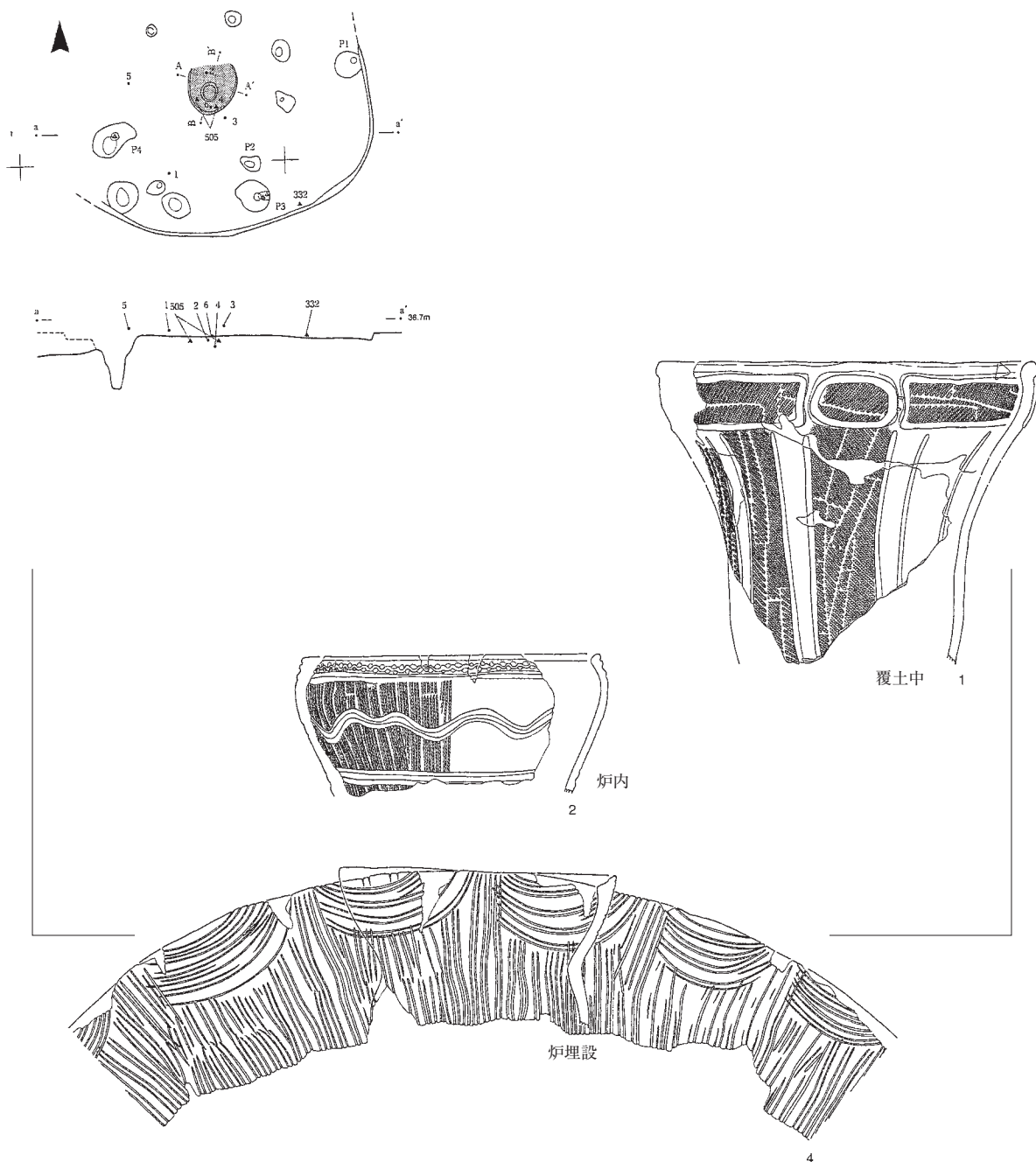


市原市 草刈 (千葉急行線調査区) 108竪穴住居跡

第76図 出土状況(3)

胴部の懸垂文は3本一組で、懸垂文間の縄文の磨り消しは明瞭である。3は加曾利E式の浅鉢形土器である。4が曾利式系土器1類a種で、口辺部の大部分を欠いている。頸部の隆線を欠き、爪形の連続刺突を施しているようである。

第77図は市原市草刈遺跡（東部地区）P001の出土状況である。4は「炉体土器」と報告書に記載された土器で、曾利式系土器1類b種である。隆線などによる頸部の横位区画を欠いた土器である。2は炉内で出土した土器で、報告書の記載では「炉囲いに使われたものであろうか」とされた連弧文系土器である。1は覆土中出土で、加曾利E3式前半の土器である。懸垂文間の縄文の磨り消しは明瞭で、幅広い。



市原市 草刈（東部地区） P001  
第77図 出土状況(4)

口縁部の区画文は単位文的であるが、下端区画は明瞭である。2と4は使用時の同時性を示し、覆土中出土の1より時間的に遡る可能性をもつ。ただし、曾利式系の4は型式学的にはおそらく1類の中でも新相を示すものであるが、1の加曾利E 3式はそれほど古相を示すものではないものの、きわめて新しいとも判断できないであろう。

第78図上は市原市草刈遺跡（B区）260号址炉内出土土器である。出土状況の細かい記載を欠くが247と248が組み合わされ、土器片囲い炉を形成したものであろう。247は曾利式系土器1類の体部の破片である。縦位の隆線は縦行するものと蛇行するものがある。248は加曾利E 3式前半の土器で、懸垂文間の縄文の磨り消しは明瞭で、幅広い。

第78図下は市原市中潤ヶ広遺跡C037号住居跡炉内出土土器である。1・2・4の土器が土器片囲い炉を形成し、3はおそらく炉内に埋設されたものである。5は住居覆土中出土である。1は連弧文系土器であるが、他の土坑との接合関係があり、報告書では3・4よりも若干古い時期の所産であることを想定した（大内 2006）。2は、赤彩の浅鉢形土器である。3は加曾利E 3式前半の土器で、口縁部の下端区画が乱れる例である。4は曾利式系土器1類a種で、受け口状の口縁部断面ではなく、口辺部には条線による斜線文を配し、頸部の隆線は非装飾的なタガ状である。

第79図は印西市松崎VI遺跡SX001出土土器である。1～6の土器片が、組み合わされ、土器片囲い炉を形成している。1は曾利式系土器1類f種の折衷土器である。2は特異な土器であるが、加曾利E式の口縁部文様帯を欠く類型か。3は加曾利E 3式前半の土器で、懸垂文間の幅は広く、口縁部下端区画もやや乱れる。4も加曾利E 3式前半の体部破片である。5は不明で、6は浅鉢形土器である。

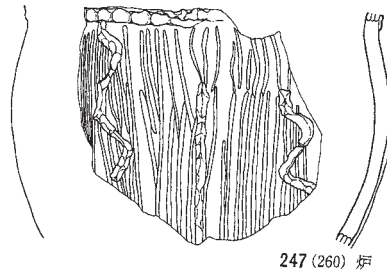
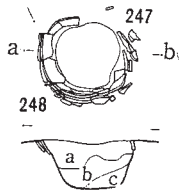
以上の出土事例を簡単にまとめると、前節で見通した枠組と一致する、曾利式系土器1類と加曾利E 3式前半と強い関連性が窺えよう。ただし、型式学的に想定できる細かい時間差については、土器片囲い炉を中心とした出土事例を見る限り、想定された型式学的な時間差を反映するような組み合わせばかりとは言えないようである。概ね古相を示す土器同士の組み合わせと思われる伊豆山台遺跡SI027にしても、型式学的にはより古相を示す可能性のある曾利式系土器1類b種が、加曾利E 3式前半の土器と組み合わされている。また古相を示すものと新相を示すものが組み合わされる事例も散見され、型式学的な時間の序列の想定を裏打ちするとは言えないようである。

## 5 曾利式系土器の時期的な所見

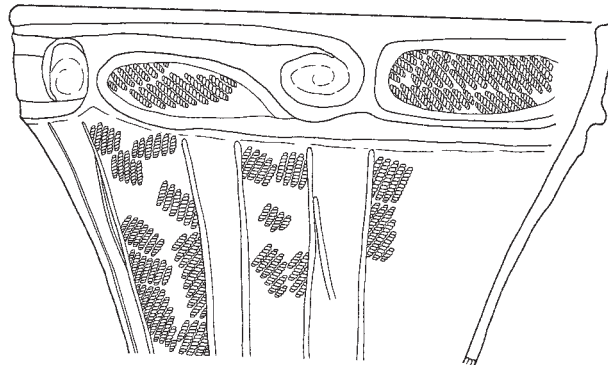
出土状況の追認における限界性も考慮した上で、県内出土の曾利式系土器の時期に関する所見をまとめておく。

曾利式系土器1類とした斜行文・重弧文とその類例という大枠に於いては、以下のようにまとめられる。

- ・出土事例から時期的な見通しが得られるのは曾利式系土器1類のみであった。
- ・房総半島における曾利式系土器1類は、既存の編年に照らすと、型式学的には加曾利E 2式～E 3式期に位置付けうる様相の土器が多いが、明らかに加曾利E 2式に伴うものは少ない。
- ・出土状況から見ると、懸垂文間の縄文の磨り消しが明瞭化する加曾利E 3式前半との結びつきがきわめて強い。出土状況から、加曾利E 3式前半以外の、より古い加曾利E 2式や、より新しい加曾利E 3式後半すなわち「横位連携弧線文」成立後の「加曾利E III式」との組み合わせは窺えなかった。
- ・曾利式系土器1類のうち、型式学的特徴として、明瞭な頸部文様帯をもつものは古相を示すと考え得

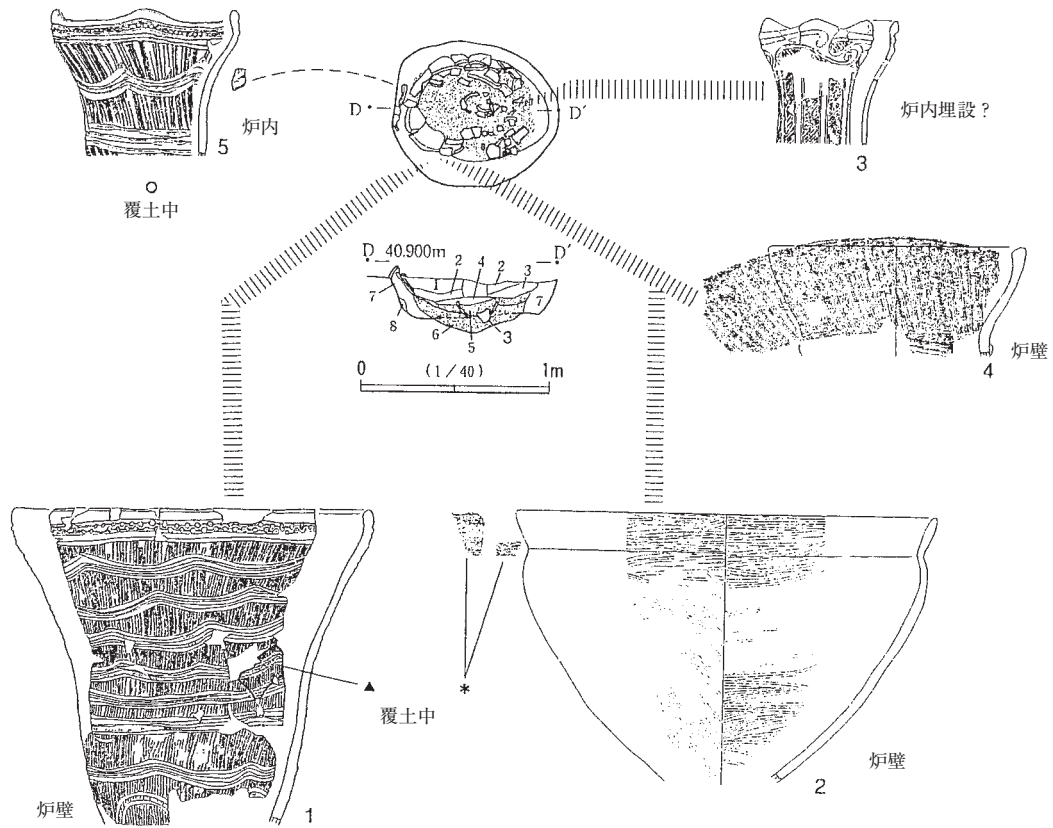


247 (260) 炉



248 (260) 炉

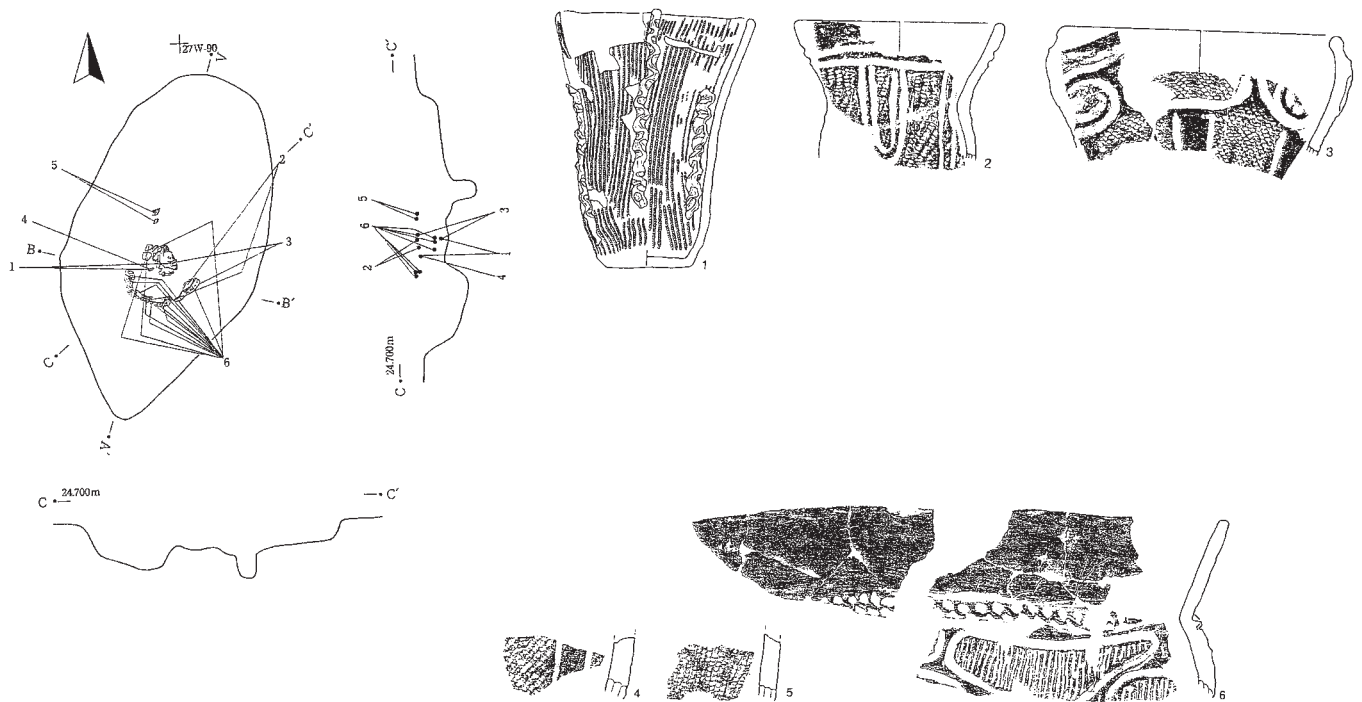
市原市 草刈 (B区) 260号址



市原市 中潤ヶ広 C037号住居跡

第78図 出土状況(5)





印西市 松崎VI SX001

第79図 出土状況(6)

る。ただし、型式学的に想定しうる口縁部断面形状の受け口状から丸頭状への変化については、少なくとも房総半島においては、出土状況からは明瞭に追認することはできなかった。

曽利式系土器1類の分類ごとの所見は以下のようになる。

- ・ 1類a種（斜行文土器）は、型式学的に明瞭に加曾利E 2式以前に位置付けられるものとしては、深名遺跡（深名瀬島遺跡）第7号住例（第69図5）があるが、その他は加曾利E 3式前半以外に積極的に位置付けうるものはない。
- ・ 1類b種（重弧文土器）では、深名遺跡（深名瀬島遺跡）第8号住例（第69図8）は、文様は粗略であるが、頸部文様帯が広く、加曾利E 2式が同一住居から出土していることから加曾利E 2式期に位置づけられる可能性がある。木更津市伊豆山台遺跡SI027例（第68図4）は、文様の繁辱な点や頸部文様帯の存在など型式学的に見てやや古相を示すが、加曾利E 3式前半の古手の土器と共伴しており、積極的に加曾利E 2式に位置付けられるかどうか判断が難しい。他の多くの土器はこの土器よりも型式学的には明らかに新相であり、加曾利E 3式前半に位置付けうるものが多いであろう。
- ・ 1類c種（矢羽根状沈線の土器）は文様要素から、加曾利E 3式前半以降に位置付けられる。
- ・ 1類d種（縦位沈線の土器）は特に加曾利E 3式前半から逸脱するような事例は見あたらない。
- ・ 1類e種（格子目文の土器）では、いわゆる「籠目文」である木更津市伊豆山台遺跡SI020例（第68図8）などが型式学的に加曾利E 2式以前に位置付けられよう。ただ、その他のより崩れた格子目文の土器は、積極的に古く見なす要素はなく、概ね加曾利E 3式前半に位置付けうる。
- ・ 1類f種（折衷土器）には、加曾利E 2式との折衷土器として、市原市草刈遺跡F区205A住例（第67図24）や深名遺跡（深名瀬島遺跡）例（第69図11）があるが、いずれも頸部文様帯が認められるもので、事例としては少ない。その他、加曾利E 3式前半との折衷土器が少数ある。

地域的な偏在という点に関しては、数量的に明確に示すことはできないものの、加曽利E 2式以前に遡る曾利式系土器1類の存在は、房総半島南部にやや目立つ。特に房総半島最南端に近い深名遺跡（深名瀬島遺跡）においては1遺跡で多数認められ、前節で述べたように2類a種とした古手の曾利式系土器の多量の存在と合わせて、この遺跡周辺の房総半島最南端付近では、加曽利E式の古い部分に相当する時期から曾利式情報の影響を強く受けていた様子が窺える。ただし、こうした影響が房総半島全域に波及することはなかったようである。

#### 第4節 房総半島における曾利式系土器の位置付け（素描）

##### 1 房総半島における曾利式系土器のあり方

前節までの資料集成を受けて、ここではまず、房総半島で出土する曾利式系土器について、時系列に沿って概観してみたい。

加曽利E 1・E 2式期に相当する前半期においては、型式学的に見て曾利式系土器2類とした斜行文・重弧文以外の曾利式系土器のうち、2類a種とした古手の土器群が少数存在すると考えられる。資料的な制約があるため、量的な検討は今後の課題であるが、復元個体のレベルでは県内全域で出土例があるが少数にとどまる。続く時期に事例が増える曾利式系土器1類とした斜行文・垂弧文土器とその類例のうち、型式学的に見て加曽利E 2式まで遡る可能性があるものが房総半島南部を中心に若干存在するが、出土事例から確実に加曽利E 2式期に位置づけうるものは見られなかった。例外的に、房総半島南端付近の深名遺跡（深名瀬島遺跡）でこの時期の曾利式系土器が多量に出土し、曾利式情報を強く受けていたことが窺えるが、安房地域における小地域的な現象であり、こうした状況が県内全域に波及することはなかった。曾利式土器の本場に隣接する関東地方のより西側の地域とは異なり、房総半島におけるこの時期の曾利式の影響は、限定的と考えられる。ただし、曾利式系土器2類a種は少数ながら房総半島全域に分布しており、細々ではあるが曾利式情報が広がるベースはすでにこの時期に存在していると考えうる。

房総半島において曾利式系土器が増えるのは、加曽利E式の後半期で、その中心は曾利式系土器1類とした斜行文・重弧文土器とその類例である。これらは、特に、胴部磨消縄文の成立以降で「横位連携弧線文土器」成立以前に相当する加曽利E 3式前半に、房総半島全域で爆発的とも言えるような流行を見る。もちろん土器の特徴から、小破片までを含めた悉皆調査が可能であったため、確認した事例が増えたとも言えるが、それを差し引いたとしても、印象的には加曽利E 3式前半の土器が出土する遺跡のほとんどで事例が認められる、と言う状況に近い。曾利式系土器1類は、該期において決して少数派ではなく、房総半島における加曽利E 3式前半期の土器組成に確実に組み込まれていたことが窺える。この時期には、ほかに2類b種としたキャリパー形を主とする矢羽根状沈線をもつ土器が、君津地域・安房地域で少数認められる以外は、曾利式系土器として目立ったものは見あたらない。

次の加曽利E 3式後半期において、曾利式系土器1類が確実に存在すると判断できた事例は、ほとんどなかった。少なくとも、前時期にあれほど流行した曾利式系土器1類は、該期においてほとんど姿を消したと考えられよう。この動きは、おそらく連弧文系土器が見られなくなることも軌を一にしており、加曽利E式そのものの変化、すなわち「横位連携弧線文土器」に象徴される、加曽利E式の伝統的器形であるキャリパー形土器の衰退＝口縁部文様帯の消失という、大きな型式学的変化とも関連するのかもしれない。

房総半島における曾利式系土器の動態を簡単にまとめると、加曾利E式前半期には、房総半島全域では少数の出土事例が認められるだけで、その影響は限定される。ただし、安房地域では出土事例の多い遺跡があり、小地域的な特徴を見出せる。加曾利E式後半期になると、加曾利E 3式前半期に曾利式系土器1類とした斜行文・重弧文土器が房総半島全域で大流行する。ただ、他の曾利系土器としてはキャリパー形を主とする2類b種の矢羽根状沈線の土器が君津・安房地域で少数認められるのみである。加曾利E 3式後半期になると、曾利式系土器1類を含め、曾利式系土器は認められなくなる。

## 2 曾利式系土器1類について

前項でも見たように、房総半島で認められる曾利式系土器の中心は、1類とした斜行文・重弧文土器といえる。当該地域においては、型式学的に見て加曾利E 2式期に遡ると考える事例が少数あるものの、層位的な出土事例を参照すると、加曾利E 3式前半という限られた期間に、きわめて多数の事例が認められることが判明した。

他地域の分析をおこなっていないので量的な比較はできないが、谷口康浩が指摘するとおり（谷口2002）、房総半島における曾利式系土器1類土器の流行は、曾利式の本場である甲府盆地や、本場に隣接する関東西側の地域より遅れ、時期的により限定される。流行時期には確実にズレが認められる。

曾利式系土器1類土器の大きな特徴は、くびれた頸部により口辺部と胴部を明瞭に分ける器形、沈線・条線による地文に隆線を貼り付ける文様構成という、器形・文様の均一性にあると言える。幅はあるものの、典型例である「寒風台型」からイメージ的には大きくかけ離れない土器群と言うことができよう。1類f種とした加曾利E式土器との折衷土器が少数認められるものの、基本的には「曾利式系」として本来持っていた土器の雰囲気保持していると判断できる。むしろ、他の系統の土器との融合を拒み、その系統を保持するベクトルが存在するように見受けられる。この点は、同時期の土器群である加曾利E式や連弧文土器と折衷した土器が、それほど多くないという点からも支持されるであろう。

そうした均一性を保持しつつも、文様から見たバリエーションが少数ある。このバリエーションには、分布に地域的な偏差が見られない「広域型」の1類a種（斜行文）・1類b種（重弧文）・1類d種（縦位沈線）と、分布に偏りの認められる「局所型」の1類c種（矢羽根状沈線）、1類e種（格子目文）の2者がある。この分布状況の差異からは、土器情報の流れに関するいくつかの可能性が想定できよう。

前者に関しては、地域ごとに土器群の様相を比べても、特に大きな違いが認められず、量的な偏りもあまり見出せなかった。このことは、前述した「均一性」の中でこれらの土器群が扱われ、受け入れる側が大きな違いを見出さなかった可能性を想定できるのではなかろうか。少なくとも地域的な隔てなく短期間にスムーズに土器情報が広がったように見える。

一方、後者に関しては、地域的に土器情報の受容に差異が存在することを示すものであろう。特に1類c種の斜行文・重弧文土器と器形が共通する矢羽根状沈線の土器は、房総半島においては北西部の東京湾岸の一带にしか分布しない。おそらく2類b種の加曾利E式キャリパー形土器の器形を持つ矢羽根状沈線の土器が、房総半島南西部の東京湾岸の一带にしか分布しないのと対になるもので、土器情報の受容に地域的な偏りがあったことを端的に示しているように見える。また、このことは曾利式情報の流れが、北西（東葛飾方面）から来るものと南西（君津・安房方面）から来るものの2者があることを示しているであろう。

曾利式系土器という点では、より古い時期に遡る曾利式系土器 2 類 a 種が房総半島全域に存在することから、房総半島において西からの情報を受け入れるルートは細々と存在し、これがその後の曾利式系土器 1 類の大流行のベースとなったことが想像される。ただし、情報の受容に関しては、1 類 a・b 種に見られるような、房総半島内での地域的偏差のない普遍的・積極的な受容と、1 類 c 種に見られるような地域的に限定されるものがあり、受容する情報に関して取捨選択がおこなわれた可能性を見出しうる。

土器情報という点においては、1 類土器の口縁部断面形状が受け口状であるか否かは、房総半島においてはあまり重要視されなかった可能性がある。もちろん甲府盆地やその隣接地域における同種土器は、より長期的な時間変化の中で、断面受け口状から断面丸頭状と変遷することは大枠では支持できる。ただし、房総半島で出土する曾利式系土器 1 類では、その変遷を裏付ける明瞭な証拠は見い出せなかった。むしろ短期的に 1 類土器の情報が広がる中で、よりオリジナルに忠実な断面受け口状の口縁部と、そうでないものが、混在して広まった可能性があるのではなかろうか。これは谷口の言う、隣接地域の「きわめて限られた情報にしか接してなかったのではなかろうか」(谷口 2002) という指摘とも通じ、本場の隣接地域において、オリジナルに忠実な土器と在地化し変化した土器の両者がすでに存在し、その情報が圧縮され房総半島にもたらされた結果ではないかと思う。

以上のように、房総半島における曾利式系土器 1 類の受容は、ここで想定しうる点だけ見ても、相反する部分を併せ持った錯綜した様相を示す。これは、谷口の言うとおりの「土器型式情報の価値の不均等さ」(谷口 2002) を示す好例ではあるものの、その受容の実態はかなり複雑であることが想像できる。その実態の解明にはいまだ及ぶところではないが、今回の資料集成を通じて一つの基礎資料を提示することができたと考える。今後、連弧文系土器など同時期の他の土器群についての検討も重ねることで、加曾利 E 式期における土器情報の流れの解明にアプローチできる可能性があるだろう。

## おわりに

房総半島における曾利式系土器の集成を通じて、特に曾利式系土器 1 類とした斜行文・重弧文土器を中心に、若干の考察をおこなった。曾利式系土器 1 類に関しては、破片資料を含めた悉皆調査を実施したため、予想以上の資料数となったが、房総半島の加曾利 E 3 式前半期において、かなりの存在感がある土器であることは示しえたと思う。

曾利式系土器 1 類は、房総半島においては明らかに「非在地系土器」と判断できるが、その姿がある種の「均一性」を保ち他の土器とあまり融合しない点は特徴的であろう。これは、房総半島においてはその存在が時間的に限定されるという点とも関わる可能性があるが、地域の伝統的土器である加曾利 E 式とは「異質」な点を残しながら、資料数から見ると確実に土器組成に加えられているように見える。今回分析に加えることが出来なかったが、連弧文系土器もほぼ同じ時期に、同様な特徴をもって加曾利 E 3 式の組成に加わるようであり、そうした土器組成の在り方は一考に値しよう。

市原市中潤ヶ広遺跡の報告でも指摘し(大内 2006)、今回の出土事例の分析にいくつか用いたが、房総半島の加曾利 E 3 式期の土器片囲い炉では、異質な土器(例えば加曾利 E 3 式キャリパー形土器・加曾利 E 3 式の口縁部文様帯を欠く土器・曾利式系土器・連弧文系土器・浅鉢など)の土器片を複数、あえて組み合わせているような事例が散見される。こうした土器の扱い方と、非在地系土器が本来の系譜を保持しつつ土器組成に加わるあり方と、何らかの関連を持つように思われる。

ただ、こうした出土状況や土器組成の特徴が、「集団のアイデンティティー」といった概念と直接結びつくのかどうか、筆者には判断できない。こうした点については、土器のみでなく様々な文化要素との関わりを視野に入れつつ、多くの段階を踏んで論ずる必要を感じる。

最後に、房総半島における曾利式系土器1類の影響について若干触れておきたい。この土器群は、たびたび論じたように、加曾利E式土器の伝統である、キャリパー形の器形で口縁部文様帯+胴部文様帯という構成とは、全く異質な土器群と言える。広い口辺部をもち頸部で強くくびれ、胴部で再び張ると言う器形で基本的には頸部で上下に分割される文様の2帯構成は、加曾利E3式後半期の「横位連携弧線文土器」と共通する部分を持ち、この土器の成立におそらく何らかの影響を与えたのではないかと考える。

変化という点では、房総半島においては加曾利E式の後半期に環状集落の崩壊・集落立地の変動が起こり、これは一般的には加曾利E3式後半である「横位連携弧線文土器」成立後の「加曾利EⅢ式」期以降だと言われている。ただ、市原市中潤ヶ丘遺跡の例など見ると、むしろ曾利式系土器1類が広がる、加曾利E3式前半期にすでにその萌芽が認められるのではないかと思う。そうした集落論的な変化と、曾利式系土器1類や連弧文系土器の存在による土器の組成の変化が関わりがあるのか否か、興味深い問題である<sup>4)</sup>。

土器編年の問題をはじめ、房総半島における中期後葉・加曾利E式期は、いまだ多くの課題が残されている。今回の作業がこうした問題の解明に関して、多少なりとも基礎的なデータを提示することができ、今後の研究に資するところがあるならば、目的の一端を果たしたものとする。

(2006年8月)

(謝辞)

大村裕先生をはじめとした下総考古学研究会の皆様には、研究会活動を通じて多くのご指導をいただいた。また、小林謙一氏・黒尾和久氏をはじめとする、セツルメント研究会・縄文集落研究グループの皆様にも多くのご助言・ご指導を賜った。その他様々な方から貴重なご意見を頂いた。お名前を記すことで感謝の意を表したい。敬称は略させていただいた。

今福利恵・閏間俊明・大村 裕・奥住 純・小倉和重・加納 実・上守秀明・櫛原功一・黒尾和久・小林謙一・小林弘美・小松 繁・佐野 隆・高橋大地・武川夏樹・建石 徹・中山真治・西野雅人・福間 元

註

- 1 下総考古学研究会の共同研究への参加を通じて、多くのことを学んでいる。本論も下総考古学研究会での研究なくしては結実しなかったものであり、下総考古学研究会の方法論を元にしたことを改めて明記しておきたい。
- 2 曾利式土器については、新地平3シンポジウム準備会において、今福利恵氏・櫛原功一氏を始め、多くの方々から貴重なご意見を賜った。
- 3 もちろん、あくまで炉の使用時の同時性が高いために、土器制作時の同時性を証明するものではない。また、土器片囲い炉を設営する際に、新旧の土器片を組み合わせて設営するケースも実際には存在する。そうした限界をもってしても、いわゆる「遺構一括出土」と呼ばれる、出土状況が検討し得ない多くの遺構覆土中出土事例が持つ時間幅よりも、同時性と言いうる幅が狭いと考える。
- 4 西関東においては、すでに江原英が、加曾利EⅡ～EⅢ式期に集落その他が大きく変化しないにもかかわらず、土器組成が大きく変化している点に注意を促している(江原2000)。

## 引用・参考文献

- 今福利恵 1999 「中期後半（曾利式土器）」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 山梨県
- 今福利恵 1999 「中部地方 中期（曾利式）」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 今福利恵 2005 「曾利式土器編年再考－甲府盆地地域を中心に－」『山梨県考古学協会誌』第15号 山梨県考古学協会
- 今福利恵・関間俊明 2004 「山梨県における縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3 －勝坂から曾利へ－  
発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 江原 英 2000 「川崎市南平遺跡出土の縄紋土器－西関東縄紋中期後半における異系統土器の存在状態－」
- 大内千年 1997 『辻遺跡』 山武町教育委員会
- 大内千年 2004 「研究ノート・房総半島出土の縄紋時代「鉤状石器」について」『東邦考古』第28号 東邦大学付属東邦高校東邦考  
古学研究会
- 大内千年 2006 「第6章第1節縄文時代」『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－市原市中潤ヶ広遺跡（上層）－』（助千葉県教育振  
興財団
- 岡本 勇ほか 1965 「3. 関東」『日本の考古学Ⅱ・縄文時代』 河出書房新社
- 小川和博 1980 「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究素描」『奈和』第18号 奈和同人会
- 小川和博 1989 「南房総における加曾利E式土器－千葉県富浦町深名瀬島遺跡の研究Ⅰ－」『集報』XI 日本考古学研究所
- 小野正文 1987 『釈迦堂Ⅱ』 山梨県教育委員会
- 加納 実 1989a 『小中台(2) 遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』（助千葉県文化財センター  
1989b 「千葉県における加曾利E式後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所  
1994 「加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析－配列・編年の前提作業として－」『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立加曾利  
貝塚博物館  
1995 「下総台地における加曾利EⅢ式期の諸問題－集落の成立に関する予察を中心に－」『研究紀要』16（助千葉県文化  
財センター
- 神奈川考古同人会 1980・1981 「シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題－とくに加曾利E式と曾利式との関係について－」『神奈  
川考古』第10・11号
- 金子直行 1982 「第6節 XI期、XII期」『研究紀要1982』（助埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上守秀明 1994 「東関東中期拠点集落における異系統土器の在り方について(1)」『史館』第25号 史館同人
- 桐生直彦 1981 「連弧文土器」『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
- 櫛原功一 1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨県考古学論集』Ⅳ 山梨県考古学協会
- 黒尾和久 1995 「縄文時代中期集落遺跡の基礎的検討(Ⅰ)－時間軸の設定とその考え方について－」『論集宇津木台』第1集 宇津木  
台地区考古学研究会
- 黒尾和久ほか 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 [発表要  
旨・資料]』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久ほか 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3  
－勝坂から曾利へ－発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 小暮伸之 2004 「福島県出土の曾利系土器について」『福島考古』第45号 福島考古学会
- 越川敏夫・藤原 均 1987 『深名瀬島遺跡調査報告書』 富浦町教育委員会
- 小林謙一 1983 「遺跡出土の土器の量的把握に関する試論」『異貌』拾 共同体研究会
- 小林謙一 2004 『縄紋社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用－』 六一書房
- 下総考古学研究会 1985 「〈特集〉勝坂式土器の研究」『下総考古学』8

- 下総考古学研究会 2000 「〈特集〉中峠遺跡第4次調査（中峠式土器の大量出土）の成果」『下総考古学』16
- 下総考古学研究会 2004 「〈特集〉房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18
- 下総考古学研究会 2006 「〈特集〉千葉県松戸市中峠遺跡第5次調査の成果」『下総考古学』19
- ジェラード・グロード・篠遠喜彦1952 『姥山貝塚』 日本考古学研究所
- 縄文集落研究グループ・セツルメント研究会 2004 『シンポジウム縄文集落研究の新地平3－勝坂から曾利へ－発表要旨・資料集』
- セツルメント研究会編 2005 『縄文研究の新地平－勝坂から曾利へ－』 六一書房
- 高田 博ほか 1986 『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡（B区）』（助千葉県文化財センター）
- 田川 良・小川和博 1982 「千葉県における縄文時代中期土器の変遷(1)」『日本考古学研究所集報Ⅳ』 日本考古学研究所
- 建石 徹 2000 「中峠遺跡（第4次調査）出土縄文土器の胎土分析」『下総考古学』16 下総考古学研究会
- 谷井 彪ほか 1982 「縄文中期土器の再編」『研究紀要1982』（助埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
- 谷口康浩 2002 「縄文土器型式情報の伝達と変形－関東地方に分布する曾利式土器を例に－」『土器から探る縄文社会』 山梨県考古学協会
- 谷井 彪 1987 「塚原遺跡出土の曾利式土器について－中部高地における文様の系譜－」『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史史料館 研究紀要
- 谷井 彪・細田 勝 1997 「水窪遺跡の研究－加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性－」『研究紀要』第13号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪・細田 勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利E式」『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史 資料編考古1（旧石器・縄文）』 千葉県
- 戸田哲也 1991 「東京湾を渡った縄文人」『東邦考古』15 東邦大学附属東邦高等学校東邦考古学研究会
- 戸田哲也 1999 「関東地方 中期（加曾利E式）」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 中野修秀 2001 『上引切遺跡－金谷郷遺跡群Ⅴ－』（助山武郡市文化財センター）
- 中野修秀ほか 1995 『居合台遺跡発掘調査報告書』（助山武郡市文化財センター）
- 日本考古学協会 1981 『北関東を中心とする縄文中期の諸問題〈資料〉』
- 能登 健・石坂 茂 1980 「重弧文土器の系譜」『信濃』第32巻第4号 信濃史学会
- 橋本 勉 2004 「加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック（前）」『研究紀要』第19号（助埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
- 平野元三郎・滝口 宏 1933 「下総国高木村寒風発見の人骨」『ドルメン』第2巻第7号 岡書院
- 藤森栄一 1965 『井戸尻』 中央公論美術出版
- 三上嘉徳 1965 「資料 埼玉県吹上貝塚の縄文中期土器－報告書記載の土器再考－」『考古学手帳』25
- 道澤 明 1990 『東・北長山野遺跡』 北長山野遺跡調査会
- 柳澤清一 1997 「千葉県における加曾利E（新）式編年の検討－下総利根川下流域の遺跡変動－」『東邦考古』21 東邦大学附属東邦高等学校東邦考古学研究会
- 柳澤清一 2006 「千葉県における縄文中期末葉後期初頭編年の再検討－『縄文セミナー』千葉県編年案の標本資料から(1)－」『東邦考古』30 東邦大学附属東邦高等学校東邦考古学研究会
- 山形真理子 1996・1997 「曾利式土器の研究－内的展開と外的交渉の歴史－（上）（下）」『東京大学考古学研究室研究紀要』第14・15号 東京大学考古学研究室
- 山田貴久ほか 1998 『千葉東南部ニュータウン19 有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）』（助千葉県文化財センター）
- 山内清男 1940 「第Ⅸ輯 加曾利E式」『日本先史土器図譜』（再版・合冊） 先史考古学会（1997再刊 示人社）
- 八幡一郎・岡崎文喜 1972 『海老ヶ作貝塚』 船橋市教育委員会
- 米田明訓 1978 「曾利式土器の基礎的把握」『長野県考古学会誌』30 長野県考古学会

(付記)

本稿で集成した資料は平成17年(2005年)度までに確認できた報告書に基づくものであり、脱稿から刊行までの間にかなりの時間が経過してしまった。脱稿後に本稿の内容に関わる重要な文献が刊行されたので、ここで簡単に触れておきたい。ひとつは、以下の文献である。

戸田哲也2006「曾利Ⅲ式土器の伝播と変容」『ムラと地域の考古学』 同成社

この文献では、本稿でも扱った曾利式系土器について、「曾利東北型土器」という概念を用意し、その伝播について「飛び火的現象」が認められることを論じている。千葉県域の曾利式系土器については、土器群の時間的位置づけも含め「遺跡毎の様相の差は今後の検討課題」とされており、こうした点に関しては今回の資料集成が寄与する部分もあろう。

資料集成後に刊行された新たな資料としては、以下の2冊がある。

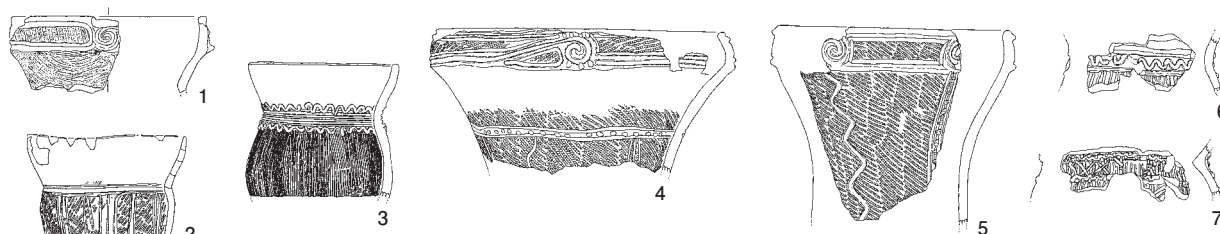
小倉和重 2006 『千葉県佐倉市吉見稲荷山遺跡(第7次・8次)発掘調査報告書』(助印旛郡市文化財センター)

安井健一ほか 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書5-君津市鹿島台遺跡(A区・D区)-』(助千葉県教育振興財団)

小倉(2006)では、「1号炉跡」出土土器が重要な資料である。1号炉跡には、口縁部の広い無文帯が開く土器(付記図2)が埋設され、その脇から(付記図1)が出土している。付記図1は、加曾利E式のキャリパー形土器の器形をもち、口縁部文様帯には整った渦巻き文と楕円区画を配し、楕円区画内には縦位沈線を充填する。頸部には、口縁部の沈線と同じ工具を用いて、上向きの重弧文を描く。以下の胴部には欠損するが、磨り消し懸垂文の一部が残っている(筆者実見)。土器の様相及び出土状況から、本稿で「加曾利E3式前半」とした時期の好例である。加曾利E式と曾利式系土器1類の折衷土器と考えられるが、特殊な折衷で、県内では唯一の事例となる。両者の折衷に関して、新たな知見を加えるもので、きわめて重要な資料であろう。

安井ほか(2006)では、曾利式系土器が多数出土している。君津地域における土器組成を窺う上で重要である。「SI-061」では、本稿で曾利式系土器2類a種とした古手の曾利式系土器の良好な資料が出土している(付記図3)。「SI-036」では加曾利E2式のキャリパー形土器(付記図4・5)と共に、本稿で言う曾利式系土器1類で幅広の頸部文様帯をもつ土器2点(付記図6・7)が出土している。4は炉体土器、5~7の出土状況は不明であるが、本稿で想定した幅広の頸部文様帯をもつ曾利式系土器1類が相対的に古く位置づけられるという想定を検証する上で重要な資料と考える。

(2007年3月)



(1・2: 佐倉市吉見稲荷山、3~7: 君津市鹿島台、縮尺1/10)

付記図 補足資料



第4表(1) 曾利式系土器出土遺跡地名表

地域区分	遺跡番号	市町村No.	遺跡名	(報告書遺跡名)	所在地	文 献			
						著者	年	題名	発行所
東 葛 飾 地 域	1	3	富士見台第Ⅱ		流山市富士見台	津田芳男ほか	1983	富士見台第Ⅱ遺跡	流山市遺跡調査会
	2	3	中野久木谷頭		流山市中野久木谷頭	高柳正春ほか	1997	中野久木谷頭C地点	流山市教育委員会
	3	3	小谷貝塚		流山市江戸川台西	増崎勝仁	1997	「流山市小谷貝塚周辺の採集資料」	流山市史研究第14号 流山市立博物館
	4	4	林台		柏市藤心字林	井上文男	1990	林台遺跡(藤心近隣センター建設用地)	柏市教育委員会・柏市遺跡調査会
	5	6	石揚		沼南町泉字石揚	太田文雄・宇井健一	1994	石場遺跡-手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	千葉県文化財センター
	6	6	埋田		東葛飾郡沼南町手賀字埋田	桑原 護	1971	埋田遺跡	沼南町教育委員会
	7	7	寒風台		松戸市郊外高木村	平野元三郎・滝口 宏	1933	「下総国高木村寒風発見の骨」	ドルメン第2巻第7号 岡書院
						ジェラート・グロート・篠達喜彦	1952	姥山貝塚	日本考古学研究所
	8	7	東平賀貝塚		松戸市東平賀字大門前	大森隆志	1995	東平賀貝塚(10次)	松戸市教育委員会
	9	7	根木内	第4地点	松戸市根木内字宿畑	峰村 篤	1997	根木内遺跡第4地点発掘調査報告書	松戸市教育委員会・松戸市遺跡調査会
				第6地点・第7地点		関山純也	1998	「根木内遺跡の調査」	平成8年度 松戸市内遺跡発掘調査報告書 松戸市教育委員会
	10	7	貝の花貝塚		松戸市八ヶ崎字栗カ沢	八幡一郎ほか	1973	貝の花貝塚	松戸市教育委員会
	11	7	子和清水貝塚		松戸市日暮子和清水	松戸市教育委員会	1978	子和清水貝塚 置物図版編1	松戸市教育委員会
						松戸市教育委員会	1985	子和清水貝塚 置物図版編2	松戸市教育委員会
	12	7	紙敷貝塚		松戸市紙敷字花輪	関山純也・植月 学	2003	千葉県松戸市紙敷遺跡	松戸市教育委員会
						川上 聡ほか	1950	「千葉県松戸市紙敷貝塚」	浄蓮 白菊郷土會
	13	7	上本郷		松戸市上本郷字北台	峰村 篤ほか	2003	「Ⅱ. 上本郷遺跡」	平成13年度 松戸市内遺跡発掘調査報告 松戸市教育委員会
	14	7	中峠		松戸市紙敷字中峠	下総考古学研究会	2000	「千葉県松戸市中峠遺跡第4次調査報告」	下総考古学16 下総考古学研究会
	15	8	大掘込		鎌ヶ谷市中沢1018	犬塚俊雄・三石 宏	2004	鎌ヶ谷市大掘込遺跡発掘調査報告書	鎌ヶ谷市教育委員会
	16	9	曾谷	曾谷1丁目259番地所在	市川市曾谷1丁目	石田 勝・荒 直樹	1988	「1. 曾谷1丁目259番地所在遺跡」	昭和62年度 市川東部遺跡群発掘調査報告 市川市教育委員会
	17	9	曾谷南	向台東	市川市曾谷	斉藤忠昭	1989	「1. 向台東遺跡(曾谷1丁目248番地所在遺跡)」	昭和63年度 市川東部遺跡群発掘調査報告 市川市教育委員会
18	9	向台		市川市曾谷1丁目	松本太郎	1994	「1. 向台遺跡」	平成5年度 市川市内遺跡発掘調査報告 市川市教育委員会	
19	10	海老ヶ作貝塚		船橋市大穴町	八幡一郎・岡崎文喜	1972	海老ヶ作貝塚	船橋市教育委員会	
20	10	西の台		船橋市二和町	新井和之	1985	西の台(第2)	船橋市教育委員会	
21	10	後貝塚		船橋市旭町	小西ゆみ	1981	船橋市後貝塚発見の土器	史館 第13号 史館同人	
千葉市周辺地域	22	12	藤崎堀込貝塚		習志野市藤崎1丁目	大塚孝司ほか	1977	習志野市藤崎堀込貝塚-貝塚周辺の遺構及び遺物の限界調査-	習志野市教育委員会
	23	13	谷津台		千葉市小中台町	伊庭彰一ほか	1988	谷津台遺跡-千葉県千葉市小仲台谷津台遺跡調査報告書-	山武考古学研究所
	24	13	へたの台貝塚		千葉市仁戸名町	寺門義範ほか	1991	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書-平成2年度-	千葉市教育委員会
	25	13	坊屋敷		千葉市若葉区大宮町	中山貴正	2000	坊屋敷遺跡	千葉市文化財調査協会

第4表(2) 曾利式系土器出土遺跡地名表

地域区分	遺跡番号	市町村No.	遺跡名	(報告書遺跡名)	所在地	文 献			
						著者	年	題名	発行機関
千葉市	26	13	芳賀輪		千葉市若葉区野呂町	青沼道文ほか	1984	千葉市芳賀輪遺跡－第2・7次発掘調査概報－	千葉市教育委員会
						鶴岡英一	1996	千葉市芳賀輪遺跡 平成6年度調査報告書	千葉市文化財調査協会
						青沼道文	1976	千葉市文化財調査報告第1集	千葉市教育委員会
	27	13	京願台		千葉市桜木町	古内 茂ほか	1986	千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書	千葉県文化財センター
	28	13	台畑		千葉市若葉区原町	白根儀久	1996	台畑遺跡	千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 千葉市文化財調査協会
	29	13	大野第1		千葉市大木戸町	西口 徹	1994	「第11章 大野第1遺跡」	土気緑の森工業団地内発掘調査報告書 千葉県文化財センター
	30	13	大野南		千葉市大木戸町	西口 徹	1994	「第15章 大野南遺跡」	土気緑の森工業団地内発掘調査報告書 千葉県文化財センター
	31	13	南二重堀		千葉市生実町	古内 茂ほか	1983	千葉市東南部ニュータウン12 南二重堀遺跡	千葉県文化財センター
	32	13	地藏作		千葉市花見川区長作町	荒井英樹	1997	地藏作遺跡発掘調査報告書	地藏作遺跡発掘調査団
	33	13	加曾利北貝塚		千葉市桜木町京願台	堀越正行・庄司 克	1970	加曾利貝塚Ⅲ 昭和40・41・42年度加曾利北貝塚調査報告	千葉市加曾利貝塚博物館
堀越正行・庄司 克						1971	加曾利貝塚Ⅳ 昭和43年度加曾利北貝塚調査報告	千葉市加曾利貝塚博物館	
34	13	一枚田		千葉市三角町	佐藤順一ほか	1987	千葉市子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡	千葉市文化財調査協会	
35	13	蕨立		千葉市坂月町字蕨立	石井 穂ほか	1982	遺跡研究論集Ⅱ 蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究	遺跡研究会	
36	13	荒屋敷貝塚		千葉市貝塚町	西山太郎	1974	千葉市荒屋敷貝塚－遺構確認調査報告書－	千葉県都市公社	
					中村恵次ほか	1976	千葉市荒屋敷貝塚－貝塚外縁部遺構確認調査報告書－	千葉県文化財センター	
37	13	有吉北貝塚		千葉市緑区有吉町	山田貴久ほか	1998	千葉東南部ニュータウン19 有吉北貝塚1 (旧石器・縄文時代)	千葉県文化財センター	
市原市	38	14	萩ノ原		市原市上高根字萩の原	田口 崇ほか	1977	千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告書	日本文化財研究所
	39	14	棒ヶ谷		市原市高坂字棒ヶ谷	田中清美ほか	1989	「(1)棒ヶ谷遺跡」	市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海土有木遺跡・北旭台遺跡・姉崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡－不特定遺跡発掘調査報告(1)－ 市原市教育委員会 市原市文化財センター
	40	14	西国吉	待戸	市原市西国吉字待戸	高橋康男	1994	市原市待戸遺跡・待戸供養塚	市原市文化財センター
	41	14	喜多遺跡群	喜多仲台	市原市喜多	北見一弘	2001	市原市喜多仲台遺跡	市原市文化財センター
	42	14	下鈴野		市原市潤井戸字上清水ノ谷	大村 直	1987	下鈴野遺跡	市原市文化財センター
	43	14	新生城跡	新生萩原野	市原市新生字西萩原野	田中清美ほか	1998	市原市新生萩原野遺跡	市原市文化財センター
	44	14	川野	川在南障子遺跡B地点	市原市川在南障子	高橋康男	1992	「第3章 川在南障子遺跡B地点」	平成3年度 市原市内遺跡発掘調査報告書 市原市教育委員会

第4表(3) 曾利式系土器出土遺跡地名表

地域区分	遺跡番号	市町村No.	遺跡名	(報告書遺跡名)	所在地	文 献				
						著者	年	書名	備考	
市	45	14	市原条理制		市原市菊間	小久貫隆史ほか	1999	市原市市原条理制遺跡		千葉県文化財センター
				蛇崎八石地区	西野雅人	2004	市原条里制遺跡(蛇崎八石地区)・仲山遺跡		市原市文化財センター	
	46	14	上高根大作		市原市上高根字大作	櫻井敦史	1996	「Ⅲ上高根大作遺跡」	平成7年度 市原市内遺跡発掘調査報告書	市原市教育委員会
	47	14	上大堀		市原市能満字上大堀	米田耕之助	1987	上大堀遺跡		市原市文化財センター
	48	14	野口	海保野口	市原市海保野口	森本和男ほか	1998	東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-市原市海保野口遺跡-		千葉県文化財センター
	49	14	馬立塚ノ台	土宇	市原市土宇	柿沼修平ほか	1979	土宇		日本文化財研究所
	50	14	草刈		市原市草刈	小林清隆	1990	市原市草刈貝塚-千葉急行線内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-		千葉県文化財センター
				草刈貝塚	市原市草刈字扇谷	高橋康男	1985	草刈貝塚		市原市文化財センター
				草刈(B区)	市原市草刈字下切付	高田 博ほか	1986	千原台ニュータウンⅢ草刈遺跡(B区)		千葉県文化財センター
				東部地区	市原市草刈字上切付	伊藤智樹ほか	2003	千原台ニュータウンⅧ-市原市草刈遺跡(東部地区縄文時代)-		千葉県文化財センター
51	14	中潤ヶ広		市原市潤井戸	大内千年ほか	2006	中潤ヶ広		千葉県教育振興財団	
郡	52	15	滝ノ口向台		袖ヶ浦市吉野田字寺原	加納 実	1993	滝ノ口向台遺跡・大作古墳群		千葉県文化財センター
	53	16	内屋敷		木更津市真里谷字船目台・字西之崎	浅野雅則・諸墨知義	2000	山王台遺跡・内屋敷遺跡		君津郡市文化財センター
	54	16	祇園貝塚		木更津市上深作	平野元三郎・柿沢 広	1970	祇園貝塚発掘調査概報		千葉県教育委員会
	55	16	久野		木更津市下郡錯綜地字西久野ヶ原	小林清隆ほか	1999	矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2-木更津市久野遺跡-		千葉県文化財センター
	56	16	伊豆山台		木更津市矢那字内山	今坂公一	1993	木更津市内遺跡発掘調査報告書 伊豆山台遺跡		木更津市教育委員会
					木更津市矢那字内山	上守秀明ほか	2000	木更津市文化財調査集報4 伊豆山台遺跡・金鈴塚古墳		木更津市教育委員会
	57	16	台木A		木更津市矢那字台木	安道道由	1995	台木A遺跡		君津郡市文化財センター
	58	16	小谷		木更津市請西字南ノ谷	諸墨知義	2003	大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅶ		君津郡市文化財センター
	59	17	豊田		君津市豊田旧菅間田字上ノ台	能城秀喜	1991	「Ⅳ. 豊田遺跡」	平成2年度 君津市内遺跡発掘調査報告書	君津市教育委員会
	60	17	戸崎城山		君津市戸崎字城山	矢野淳一	1993	「Ⅱ 戸崎城山遺跡」	平成4年度 君津市内遺跡発掘調査報告書	君津市教育委員会
61	17	岩出		君津市岩出字念佛塚	池田大助・澤野 弘	1986	君津市岩出遺跡・岩出城跡		千葉県文化財センター	
62	17	海老山		君津市加名盛字海老山	光江 章	1986	「第10章 海老山遺跡」	上総鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書	君津郡市文化財センター	
63	17	三直貝塚		君津市三直字新関	豊巻幸正	2004	平成15年度-千葉県君津市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ-		君津郡市文化財センター	
64	18	富士見台		富津市湊字富士見台	平野雅之・諸墨知義	1987	富士見台遺跡		君津郡市文化財センター	
65	18	岩井		富津市数馬	酒巻忠史	1992	岩井遺跡		君津郡市文化財センター	

第4表(4) 曾利式系土器出土遺跡地名表

地域区分	遺跡番号	市町村No.	遺跡名	(報告書遺跡名)	所在地		文	献		
印	66	19	神々廻宮前遺跡B地点		白井町神々廻宮前	末武直則	1988	「第4篇 神々廻宮前遺跡B地点」	神々廻遺跡群	印旛郡市文化財センター
	67	20	備中崎	備中崎A・B貝塚	印旛郡印西町浦部字備中崎	滝口 宏	1961	印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査		早稲田大学考古学研究室
	68	20	松崎Ⅱ		印西市松崎漣	古内 茂ほか	2003	松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書1		千葉県文化財センター
	69	20	松崎Ⅵ		印西市松崎字高野前	小笠原永隆・矢本節朗	2004	松崎地区内陸工業用地造成事業埋蔵文化財調査報告3-松崎Ⅵ遺跡・松崎Ⅶ遺跡-		千葉県文化財センター
	70	20	松崎Ⅲ		印西市松崎字堀木戸	岡田誠造ほか	2006	松崎地区内陸工業用地造成事業埋蔵文化財調査報告4-松崎Ⅲ遺跡-		千葉県教育振興財団
	71	24	小菅法華塚Ⅰ		成田市小菅字	鈴木圭一	1995	小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡		印旛郡市文化財センター
	72	24	大袋腰巻		成田市大袋字腰巻	高花宏行・宮 文子	1998	公津東遺跡群Ⅲ-大袋腰巻遺跡-		印旛郡市文化財センター
旛	73	24	宝田山ノ越貝塚		成田市宝田字山ノ越	小川和博	1980a	「貝塚測量調査報告4. 宝田山ノ越貝塚」	成田市の文化財第11集	成田市教育委員会
						小川和博	1980b	「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究素描」	奈和 第18号	奈和同人会
周	74	24	南三里塚宮園(空港No.4)		成田市南三里塚字宮園	三浦和信ほか	1993	新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ		千葉県文化財センター
	75	24	松崎烏内	烏内	成田市松崎烏内	小林清隆	1985	主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ		千葉県文化財センター
	76	24	十余三四本木Ⅱ	稲荷峯(Na.6)	成田市十余三三四本木	斉木 勝	1985	東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-		千葉県文化財センター
辺	77	24	西和泉御領台		成田市西和泉	小川和博	1987	「千葉県成田市西和泉御領台遺跡出土の縄文時代遺物」	日本考古学研究所集報X	日本考古学研究所
	78	25	ライノ作南		八千代市大和田新田ライノ作	森 竜哉・玉井庸弘	2000	ライノ作南遺跡発掘調査報告書		八千代市遺跡調査会
	79	25	桑納前畑	睦小学校北方	八千代市桑納	道沢 明ほか	1981	睦小学校遺跡		八千代市遺跡調査会
地	80	25	長兵衛野南		八千代市大和田新田字長兵衛野	藤岡孝司	1985	「八千代市長兵衛野出土の土器について」	研究連絡誌 第14号	千葉県文化財センター
	81	26	飯郷作	飯合作	佐倉市下志津飯合作	沼沢 豊ほか	1978	佐倉市飯合作遺跡		千葉県文化財センター
	82	26	池向		佐倉市大作2丁目	四柳 隆ほか	1995	佐倉市池向遺跡		千葉県文化財センター
域	83	26	白井田小笹台		佐倉市白井田小笹台	中山俊之	1991	白井田小笹台遺跡		印旛郡市文化財センター
						野村優子	1994	白井田小笹台遺跡		印旛郡市文化財センター
	84	26	太田用替		佐倉市太田字宿	大槻恵理香・宮 文子	1999	太田用替遺跡		印旛郡市文化財センター
85	26	下勝田殿台東		佐倉市下勝田字殿台	高橋 誠	2001	「第2章 下勝田殿台東遺跡の調査」	平成11年度 佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 天辺松向遺跡(第3次)・下勝田殿台東遺跡	印旛郡市文化財センター	
86	26	岩富漆谷津		佐倉市岩富町字漆谷津	有澤 要ほか	1983	岩富漆谷津 太田宿		佐倉市教育委員会	
87	27	中ノ尾余		四街道市吉岡字中ノ尾余	大賀 健ほか	1986	「3. 中ノ尾余遺跡」	吉岡遺跡群	四街道市吉岡遺跡群調査会	

第4表(5) 曾利式系土器出土遺跡地名表

地域区分	遺跡番号	市町村No.	遺跡名	(報告書遺跡名)	所在地	文	献
印旛 周 辺 地 域	88	27	木戸先		四街道市鷹の台	林田利之ほか 1994	木戸先遺跡 印旛郡市文化財センター
	89	27	上野		四街道市上野字上	大澤 孝 1993	「第2篇 上野遺跡」 上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書 印旛郡市文化財センター
	90	27	堀込	和良比	四街道市和良比字本山	斉藤 毅・高橋 誠 1991	和良比遺跡 発掘調査報告書Ⅱ 印旛郡市文化財センター
	90	27	堀込	和良比堀込	四街道市美しが丘	阿部寿彦 2004	「第4章 和良比堀込遺跡Ⅳ地区」 平成15年度四街道市内遺跡発掘調査報告書 小名木椎ノ木遺跡 栗山馬洗No-1遺跡 和良比堀込遺跡Ⅳ地区 鹿渡遺跡(第3次) 四街道市教育委員会
	91	27	中山		四街道市和良比中山	西山太郎ほか 1986	財団法人印旛郡市文化財センター年報2-昭和60年度- 印旛郡市文化財センター
	92	27	権現堂		四街道市成山字権現堂	高橋 誠 2004	権現堂遺跡 四街道市成台中土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告(Ⅱ) 印旛郡市文化財センター
	93	28	墨木戸		印旛郡酒々井町墨字木戸	中山俊之 1995	墨木戸 印旛郡市文化財センター
	94	28	伊篠台畑		酒々井町伊篠字台畑	印旛郡市文化財センター 1994	「2 伊篠台畑遺跡」 宗吾南地区確認調査報告書 酒々井町
	95	29	小溜袋		富里町七栄字小溜袋	篠原 正ほか 1979	小溜袋遺跡発掘調査報告 富里村教育委員会
	96	29	寺沢		富里町新橋	矢吹俊男 1977	寺沢遺跡-千葉県印旛郡富里村新橋埋蔵文化財調査報告- 日本文化財研究所
香 取 ・ 東 山 武 地 域	97	30	嶋山	榎戸第Ⅰ	八街市榎戸嶋山	岡崎文喜 1978	榎戸第Ⅰ遺跡-千葉県印旛郡八街町榎戸における遺跡確認調査- 榎戸遺跡調査団
	98	33	奈土貝塚		香取郡大栄町奈土字稲荷前	黒沢哲郎・石橋宏克 1998	大栄町内遺跡発掘調査報告書(奈土貝塚遺跡・久井崎Ⅱ遺跡) 香取郡市文化財センター
	99	33	馬洗城址		大栄町松子字中台	青木幸一 1989	馬洗城址発掘調査報告書 大栄町教育委員会
	100	33	稲荷山		香取郡大栄町稲荷山字内野391番地	福田礼子ほか 2004	稲荷山 大栄町教育委員会
	101	33	かのへ塚		香取郡大栄町堀籠字野中	戸村勝司郎・黒沢哲郎 2004	かのへ塚遺跡 香取郡市文化財センター
	102	33	堀籠野中		香取郡大栄町堀籠字野中	戸村勝司郎・黒沢哲郎 2004	かのへ塚遺跡 香取郡市文化財センター
	103	34	磯花		佐原市大根字磯花	岡崎文喜ほか 1981	佐原市磯花遺跡 磯花遺跡調査会
				岡崎文喜ほか 1984		佐原市磯花遺跡Ⅲ 磯花遺跡調査会	
			大根磯花	青木 司 1989		「第1章 大根磯花遺跡」 佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅲ 佐原市教育委員会	
	104	34	原山		香取郡神崎町武田字原	矢戸三男・大村 裕 1976	遺跡分布調査報告Ⅰ~千葉県香取郡・大須賀川流域及びその周辺 矢戸三男・大村 裕
					越川敏夫・小川和博 1995	神崎カントリークラブ埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 香取郡市文化財センター	
105	35	白井大宮台貝塚		小見川町白井	四柳 隆 1991	小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書 千葉県文化財センター	
106	37	粟島台		銚子市南小川町	大場磐雄ほか 1952	「千葉県銚子市粟島臺石器時代遺跡調査報告」 上代文化第二十二輯 國學院大學考古学会	
			新井和之 1990		銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書 粟島台遺跡発掘調査会		
			寺村光晴ほか 2000		粟島台遺跡-銚子市粟島台遺跡1973・1975年の発掘調査報告書- 銚子市教育委員会		

第4表(6) 曾利式系土器出土遺跡地名表

地域区分	遺跡番号	市町村No.	遺跡名	(報告書遺跡名)	所在地	文 献				
						著者	年	書名		
香取 ・ 東 総 山 武 地 域	107	41	仲島		旭市二文字ノ神後	東総文化財センター	1998	「5. 東総サンライズシティあさひ宅地造成事業に伴う埋蔵文化財調査(旭市) 仲島遺跡」	財団法人東総文化財センター年報3	東総文化財センター
	108	42	向油田貝塚		香取郡山田町向井字たらの木	上守秀明	2005	「山田町向油田貝塚工事立会に伴う出土遺物について」	事業報告Ⅴ-平成15年度-	香取郡市文化財センター
	109	43	岩部		栗源町	平岡和夫	1978	岩部遺跡		岩部遺跡調査会・栗源町教育委員会
	110	44	鳥ノ間		多古町鳥字鳥ノ間	村上好文	1999	栗山川流域遺跡群 鳥ノ間遺跡		香取郡市文化財センター
	111	44 45	境貝塚		多古町千田地先、芝山町境地先	柿沼修平ほか	1987	千葉県多古町境遺跡発掘調査報告書		多古町遺跡調査会
	112	45	居合台		山武郡芝山町大台字居合下	中野修秀ほか	1995	居合台遺跡		山武郡市文化財センター
	113	45	宝永作		山武郡芝山町大台字宝永作	落合章雄	1992	山武郡芝山町宝永作遺跡-芝山第2工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書-		千葉県文化財センター
	114	49	東長山野		山武郡横芝町長倉字東長山野	道澤 明	1990	東・北長山野遺跡		北長山野遺跡調査会
	115	54	羽戸		東金市小野字西ノ上	青木幸一	2001	小野山田遺跡群Ⅱ-羽戸遺跡-		山武郡市文化財センター
	116	54	鉢ヶ谷		東金市小野字鉢ヶ谷	青木幸一	2000	小野山田遺跡群Ⅰ-鉢ヶ谷遺跡-		山武郡市文化財センター
	117	56	宮台		山武郡大網白里町萱野	高田 博・山口直人	1989	宮台遺跡		山武郡南部地区文化財センター
	118	56	一本松	大網山田台遺跡群No.6地点(一本松)	山武郡大網白里町小西字一本松	青木幸一ほか	1994	大網山田台遺跡群Ⅰ-縄文時代篇-		山武郡市文化財センター
	119	59	下太田貝塚		茂原市下太田	菅谷通保ほか	2003	茂原市下太田貝塚		総南文化財センター
	120	61	今泉		長南町今泉字堀之内外	三浦和信・風間俊人	1990	「Ⅳ. 今泉遺跡」	岩川・今泉遺跡	長生郡市文化財センター
	121	69	市場台		大多喜町横山字市場台	土屋治雄	1996	大多喜町市場台遺跡		千葉県文化財センター
	122	69	土島田		大多喜町部田字台原	津田芳男・菅谷通保	1997	土島田遺跡		長生郡市文化財センター
					大多喜町部田字上山下	大淵淳志・小川和博	1995	土島田遺跡		大多喜町教育委員会
	123	71	根方上ノ芝条理跡		鴨川市和泉字山王	野中 徹ほか	2000	千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書		鴨川市遺跡調査委員会・鴨川市教育委員会
124	73	京田	(国保病院)	富山町平久里下	阪本宏児	1988	「千葉県安房郡富山町・富浦町三芳村内の考古遺物」	東邦考古13	東邦考古学研究会	
125	73	吉井		安房郡富山町吉沢字吉井甲	神野 信	2003	千葉県安房郡富山町 吉井遺跡		総南文化財センター	
126	74	深名	深名瀬島	富浦町深名	越川敏夫・藤原 均	1987	深名瀬島遺跡調査報告書		富浦町教育委員会	
127	79	谷		千倉町北朝夷	玉口時雄	1978	健田遺跡発掘調査報告書-第3次調査-		朝夷地区教育委員会	
			密蔵院		千倉町埋蔵文化財調査報告書-健田遺跡関連第8次調査-	林原利明・後藤宏樹	1984		朝夷地区教育委員会	

第5表(1) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	la・斜行文	lb・重弧文	lc・矢羽根状文	ld・縦位沈線	le・格子目文	l類胴部	lf・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献				
東	1	3	富士見台第Ⅱ			○				○						津田ほか1983				
	2	3	中野久木谷頭		SI54						○						高柳ほか1997			
					SI82	○										加曾利E3				
					SI96				○							加曾利E3				
					SI117							○				加曾利E3				
					SK344								○							
	3	3	小谷貝塚							○						増崎1997				
	4	4	林台		第1・2号住居跡						○					横位連携弧線文？	井上1990			
	5	6	石揚								○						太田・宇井1994			
	6	6	埋田								○						桑原1971			
	7	7	寒風台			○											ジェラート・篠遠1952			
8	7	東平賀貝塚		グリッド	○					○						大森1995				
葛	9	7	根木内	第4地点	14号土坑	○										加曾利E3	峰村1997			
					38b号土坑				?											
					38c号土坑	○														
					60a号土坑		○	○										加曾利E3		
					63a号土坑								○							
					74号土坑							?								
					77b号土坑		○													
				第6地点	1号土坑		○	○										加曾利E3	関山1998	
					2号土坑		○						○					加曾利E3		
					7号土坑	○												加曾利E3		
第7地点	3号住居跡											○		中峠0・加曾利E2						
飾	10	7	貝の花貝塚		1号住居址		○				○				加曾利E3・連弧文	八幡ほか1973				
					8号住居址						○									
					10号住居址	○											加曾利E3・連弧文			
					13号住居址		○						○					加曾利E3？		
					34号住居址								○							
					グリッド		○						○							
地	11	7	子和清水貝塚		65号住居跡	○									加曾利E3・連弧文	松戸市教委1978				
					78号住居跡							○						加曾利E3・連弧文		
					201号住居跡								○					加曾利E3		
					203号住居跡	○												加曾利E3		
					204号住居跡								○					連弧文		
					206号住居跡								○					加曾利E3		
					211号住居跡		○						○					加曾利E3		
					213号住居跡									○					加曾利E3・連弧文	
					215号住居跡								○						加曾利E3・連弧文	
					223号住居跡								○						加曾利E3	
					238号住居跡							○							加曾利E3	
					241号住居跡								○					加曾利E2・E3		
					152号土(壙)									○						
					349土(壙)	○													加曾利E3	松戸市教委1985
					387土(壙)			○											加曾利E3	
					389土(壙)								○							
					390土(壙)	○														
					679土(壙)	○														

第5表(2) 曾利式系土器出土遺構一覧表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	1a	1b	1c	1d	1e	1	1f	2a	2b	遺構内伴出土器	文献
						斜 行 文	重 弧 文	矢 羽 根 状 文	縦 位 沈 線	格 子 目 文	類 胴 部	折 衷	古 手	矢 羽 根 状 沈 線		
東 葛 飾 地 域	12	7	紙敷貝塚		B4区	○	○				○				関山・植月2003	
					B5区	○					○					
											○				川上ほか1950	
	13	7	上本郷		第12地点	○			?		○				峰村ほか2003	
	14	7	中峠		4次2号住居址	○					○				下総考古学研究会2000	
	15	8	大掘込		土坑5						○				加曾利E3	犬塚・三石2004
					土坑16						○				加曾利E3	
	16	9	曾谷	曾谷1丁目 259番地所 在			○									石田・荒1988
	17	9	曾谷南	向台東	6号住居跡	○					○				連弧文	斉藤1989
					遺構外	○					○					
	18	9	向台		3号土坑	○					○				加曾利E3	松本1994
18号土坑					○	○				○				加曾利E3		
遺構外					○	○				○						
19	10	海老ヶ作貝塚		第16号址		○								八幡・岡崎1972		
				第43号址		○										
20	10	西の台		グリッド	○									新井1985		
21	10	後貝塚					○							小西1981		
22	12	藤崎堀込貝塚								○				大塚ほか1977		
23	13	谷津台		117号土坑		○							加曾利E3	伊庭ほか1988		
24	13	へたの台貝塚									○			寺門1991		
25	13	坊屋敷		3号住居跡	○	○		?						加曾利E3	中山2000	
				遺構外	○					○					青沼ほか1984	
26	13	芳賀輪		第147号竪穴住居跡	○	○								加曾利E3・器台形土器	鶴岡1996	
				第152号竪穴住居跡						○				加曾利E3		
				遺構外	○					○						青沼1976
27	13	京願台		004号住居跡				?		○				古内ほか1986		
28	13	台畑		1号住居跡	?									白根1996		
29	13	大野第1		197(A)住居跡	○					○				加曾利E3	西口1994	
				197(B)住居跡	○									加曾利E3・連弧文		
				包含層						○						
30	13	大野南		16号住				?					連弧文・加曾利E4?	西口1994		
				19号住				○								
31	13	南二重堀		グリッド	○					○				古内ほか1983		
32	13	地藏作		3号住居跡						○			加曾利E3・連弧文	荒井1997		
33	13	加曾利北貝塚				○				○					堀越・庄司1970	
				グリッド	○	○				○				堀越・庄司1971		
34	13	一枚田								○				佐藤ほか1987		
35	13	蕨立		第24号址	○									阿玉台II	石井ほか1982	
				第29号址		○										
36	13	荒屋敷貝塚		Eトレンチ	○					○					西山1974	
				A地点	○	○				○					中村ほか1976	
37	13	有吉北貝塚		SB017		○									山田ほか1998	
				SB019	?	○				○				加曾利E3		
				SB052		○										加曾利E3・条線文土器
				SB060								○				
				SB063	○						○					加曾利E3・条線文土器



第5表(3) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	1a・斜行文	1b・重弧文	1c・矢羽根状文	1d・縦位沈線	1e・格子目文	1類胴部	1f・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献			
千葉県 市 周 辺 地 域	37	13	有吉北貝塚		SB073		○								加曾利E3	山田ほか1998			
					SB194	○												加曾利E3・(船元4)	
					SK145	○													
					SK185												○		
					SK206												?		
					SK222A・B	○								○					
					SK236									○					
					SK268	○								○					
					SK248A・B	○	○												
					SK249									○					
					SK250							○							
					SK269A									○					
					SK270						○								加曾利E3・連弧文
					SK291A						○								
					SK301F						?								
					SK312									○					加曾利E3
					SK329・330・339									○					
					SK352							○							
					SK359									○					
					SK400						○								
					SK412							○							
					SK479						○								
					SK483							○							加曾利E3
					SK509						○								
					SK512									○					加曾利E3
					SK519							○							
					SK577							?			○				
					SK687						○				○				
SK759						○													
SK773A・B						○													
SK775							○												
SK832									○										
2号埋設土器						○													
北斜面貝層						○	○												
市 原 市 域	38	14	萩ノ原		グリッド	○				○					田口ほか1977				
	39	14	棒ヶ谷		グリッド					○					田中ほか1989				
	40	14	西国吉	待戸	2号住	○	○								高橋1994				
	41	14	喜多遺跡群	喜多仲台	005号遺構	○									連弧文	北見2001			
					006号遺構					○									
					グリッド	○					○								
	42	14	下鈴野		17号住居跡	○									加曾利E3	大村1987			
					02号小竪穴	○					○								
43	14	新城跡	新生荻原野	A1-14号住居跡	○									田中ほか1998					
44	14	川野	川在南障子遺跡B地点	B地点	○									高橋1992					
45	14	市原条理制		徳石地区SP10						○					小久貫ほか1999				
				市原地区(旧河道5c)					○										

第5表(4) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	la・斜行文	lb・重弧文	lc・矢羽根状文	ld・縦位沈線	le・格子目文	l類胴部	lf・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献		
市	45	14	市原条理制	蛇崎八石地区	実信貝塚				?		○					小久貫ほか1999		
					蛇崎八石地区						○							西野2004
	46	14	上高根大作		トレンチ	○					○					櫻井1996		
	47	14	上大堀		第1号住居跡				?						加曾利E3	米田1987		
					グリッド	○					○							
	48	14	野口	海保野口	122住居跡											加曾利E3	森本ほか1998	
					121貯蔵穴						○							加曾利E3・称名寺?
					149貯蔵穴	○					○							加曾利E3・連弧文
					150(土坑)		○											
	49	14	馬立塚ノ台	土宇	第35号住居跡						○					加曾利E3・連弧文	柿沼ほか1979	
					第44号住居跡					?								加曾利E3・連弧文
					第45号住居跡		○											
					第68・71・76・102号住居跡								○					
					第91号住居跡						?		○					
第101号住居跡												○						
第1号竪穴状遺構					○													
グリッド					○							○						
原	50	14	草刈	草刈貝塚	108竪穴住居跡	○									加曾利E3	小林1990		
					109竪穴住居跡			?										
					127竪穴住居跡						○							
					137竪穴住居跡	○				?		○						
					グリッド	○				?		○		○				
				草刈貝塚	9号住居址(非遺構伴出)	○						?						高橋1985
					125・143・162A号址(住)								○					
				草刈(B区)	170号址(住)	○												加曾利E3
					170A号址(住)	○												加曾利E3
					171A号址(住)	○	○	○										加曾利E3・連弧文
					173号址(住)								○					
					177E号址(住)		○											
					177F号址(住)	○												加曾利E3
					177I号址(住)	○	○											
					178B号址(住)								?					加曾利E3?
					178C号址(住)	○								○				
184号址(住)	○									○								
187I号址(住)		○								○								
205A号址(住)											○							
209C号址(住)	○																	
209F号址(住)										○			加曾利E3・条線文土器					
218A号址(住)	○																	
226号址(住)	○																	
229B号址(住)	○																	
235A号址(住)	○								○									
245A号址(住)		○																
260号址(住)									○				加曾利E3					

第5表(5) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	la・斜行文	lb・重弧文	lc・矢羽根状文	ld・縦位沈線	le・格子目文	l類胴部	lf・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献					
市原市地域	50	14	草刈	草刈(B区)	273A号址(住)	○															
					289A号址(住)	○															
					322A号址(住)	○															
					347B号址(住)									○							
					477B号址(住)									○							
					505B号址(住)					○											
					507A号址(住)					○											
					518号址(住)										○						
					164号址(土)					?											
					165号址(土)						○										
					196号址(土)								?		○						
					221号址(土)						○										
					223号址(土)						?	○									
					224号址(土)						○										
					238号址(土)								?		○						
					250号址(土)										○						
					251号址(土)						○										
					262B号址(土)						○				○						
					262C号址(土)						○										
					266号址(土)										○						
					273号址(土)							?									
					281・282号址(土)										○						
					292号址(土)							○									
					303号址(土)						○										高田ほか1986
					304号址(土)						○										
					305号址(土)						○										
					309号址(土)						○				○						
					310号址(土)						○										
					312号址(土)						○										
					320号址(土)										○						
					323A号址(土)						○										
					341号址(土)							○									
					374号址(土)							○									
					378号址(土)						○										
					381号址(土)						○										
					393号址(土)							○									
					415号址(土)						?										
					461号址(土)						○										
					473号址(土)							○									
					479C								○						加曾利E3		
					495号址(土)						○										
					503・519号址(土)										○						
526号址(土)						○															
527号址(土)						○															
548号址(土)										○											
552号址(土)						○															
559号址(土)						○															

第5表(6) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	la・斜行文	lb・重弧文	lc・矢羽根状文	ld・縦位沈線	le・格子目文	l類胴部	lf・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献			
市原市域	50	14	草刈	草刈(B区)	573号址(土)	○										高田ほか1986			
					619号址(土)	○													
					621号址(土)	○													
					642号址(土)	○													
					646号址(土)	○													
					648・649・650・651号址(土)								○						
					656号址(土)	○													
					663号址(土)								○						
					675号址(土)	○													
					706号址(土)								○						
					714号址(土)	○													
					756号址(土)	○													
					759号址(土)	○													
					765号址(土)								○						
					796号址(土)	○													
					807号址(土)					○									
	809号址(土)					○													
	810号址(土)	○																	
	51	14	中潤ヶ広		東部地区	P001(住)		○								加曾利E3・連弧文	伊藤ほか2003		
						P037(住)					○								
P031(土)						○													
P150(土)						○													
P159(土)							○												
P162(土)												○							
遺構外	○	○			?	○													
52	15	滝ノ口向台							○					加曾利E3・連弧文	大内ほか2006				
53	16	内屋敷			○	○			○						加納1993				
54	16	祇園貝塚			○	○			○						浅野・諸墨2000				
55	16	久野			SK142				?						加曾利E3	小林ほか1999			
					グリッド	○				○									
君津郡域	56	16	伊豆山台		トレンチ内	○	?									今坂1993			
					SI001		○												
					SI002	○													
					SI003	○	○					○					加曾利E2・E3		
					SI006	○											加曾利E3		
					SI009	○	○						○				加曾利E3・連弧文		
					SI010	○								○					
					SI012							○							
					SI013	○											曾利縄文系?		
					SI016								○						
					SI020								○				加曾利E3		
					SI023	○											加曾利E1・狐塚タイプ?		
					SI025								○	○					
SI027					○						加曾利E3								
SI030	○							○											

第5表(7) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	1a・斜行文	1b・重弧文	1c・矢羽根状文	1d・縦位沈線	1e・格子目文	1類胴部	1f・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献			
君津	56	16	伊豆山台		SI032				?						加曾利E3・連弧文	上守ほか2000			
					SI034	○												勝坂V・加曾利E3	
					SI035		○												加曾利E2・E3
					SI038	○	○												連弧文
					SI039								○						加曾利E3
					SI043	○													
					SI053								○						
					SI055	○													
					SI056												○		加曾利E2・E3
					SI072	○													
					SI079	○													
					SI080	○													
郡	57	16	台木A		004号住居跡						○		○	加曾利E3・連弧文	安藤1995				
					007号住居跡						○					加曾利E3			
					015号住居跡						○		○	加曾利E3					
					050号住居跡	○										加曾利E3			
					グリッド	○			?										
	58	16	小谷		遺構外					○				諸墨2003					
	59	17	豊田		土器捨て場		○							能城1991					
	60	17	戸崎城山				?							矢野1993					
	61	17	岩出		グリッド					○				池田・澤野1986					
	62	17	海老山			○	○			○				光江1986					
域	63	17	三直貝塚		2トレンチ	○				○					豊巻2004				
					10トレンチ		○							○					
					表採	○													
64	18	富士見台		003号住居跡	○									平野・諸墨1987					
				グリッド	○														
65	18	岩井		A区	○	○				○				酒巻1992					
印旛	66	19	神々廻宮前遺跡B地点		グリッド					○					末武1988				
	67	20	備中崎	備中崎A・B貝塚	A貝塚					○				滝口1961					
	68	20	松崎Ⅱ		遺構外	○								古内ほか2003					
	69	20	松崎Ⅵ		SX001						○			加曾利E3	小笠原・矢本2004				
					グリッド					○									
	70	20	松崎Ⅲ						?					岡田ほか2006					
	71	24	小菅法華塚Ⅰ		遺構外	○								鈴木1995					
	72	24	大袋腰巻		J1号住居跡						○			高花・宮1998					
	73	24	宝田山ノ越貝塚			○	○				○			小川1980a・b					
74	24	南三里塚宮園(空港No.4)						?	○				三浦ほか1993						
75	24	松崎烏内	烏内							○			小林1985						
地	76	24	十余三四本木Ⅱ	稲荷峯(Na.6)	グリッド	○									斉木1985				
						○													
						○													
						○													
						○													
77	24	西和泉御領台			○				○				小川1987						
78	25	ライノ作南		遺構外					○				森・玉井2000						
79	25	桑納前畑	陸小学校北方						○				道沢ほか1981						
80	25	長兵衛野南							○				藤岡1985						

第5表(8) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	la・斜行文	lb・重弧文	lc・矢羽根状文	ld・縦位沈線	le・格子目文	l類胴部	lf・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献	
印旛	81	26	飯郷作	飯合作		○	○									沼沢ほか1978	
	82	26	池向			○										四柳ほか1995	
	83	26	白井田小笹台								○						中山1991
							○									野村1994	
	84	26	太田用替							○						大槻・宮1999	
	85	26	下勝田殿台東		第4号住居跡						○				加曾利E2?	高橋2001	
					グリッド	○				○							
	86	26	岩富漆谷津			遺構外				?							有澤1983
	87	27	中ノ尾余		3号住居跡				○						加曾利E3	大賀ほか1986	
グリッド										○							
88	27	木戸先			包含層					○						林田ほか1994	
89	27	上野			008号住居跡	○										大澤1993	
周辺	90	27	堀込	和良比堀込	009小竪穴		○								加曾利E2・E3	斉藤・高橋1991	
					010小竪穴	○	○			○					加曾利E3		
				011小竪穴	○										加曾利E3・大木系		
				グリッド	○				○								
			和良比	IV区竪穴住居跡						○				加曾利E3	阿部2004		
91	27	中山						?						加曾利E3	西山ほか1986		
92	27	権現堂					○									高橋2004	
地域	93	28	墨木戸		J-5号住居跡						○				横位連携弧線文	中山1995	
					J-9号住居跡			?							加曾利E3		
					J-20号住居跡						○				加曾利E3		
					J-42号住居跡							○			加曾利E3		
94	28	伊篠台畑						?							印旛郡セ1994		
95	29	小溜袋				○									篠原ほか1979		
96	29	寺沢								○					矢吹1977		
97	30	嶋山	榎戸第I	第1号住居址		○				○					岡崎1978		
				第2号住居址		○			○					加曾利E2・E3			
98	33	奈土貝塚					○		?	○					黒沢・石橋1998		
香取・東総	99	33	馬洗城址		第10号住居址	○					○					青木1989	
					第15号住居址						○				加曾利E3		
					第19号住居址	○					○				加曾利E3		
					第24号住居址						○				加曾利E2・E3		
					第26号住居址							○			加曾利E3・大木系		
					P1091						?	○			加曾利E3		
ピット・トレンチ・グリッド	○			?		○											
100	33	稲荷山		第6号住居跡	○									加曾利E3	福田ほか2004		
				第9号住居跡	○												
				第16号住居跡		○											
武地域	101	33	かのへ塚		SI2						○				戸村・黒沢2004		
					SI7							○					
					SI8							○				加曾利E3・連弧文	
					SI9							○				加曾利E3	
					SI11							○					
					SK21							○					
					SK71							○					

第5表(9) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	1a	1b	1c	1d	1e	1	1f	2a	2b	遺構内伴出土器	文献				
						斜 行 文	重 弧 文	矢 羽 根 状 文	縦 位 沈 線	格 子 目 文	類 胴 部	折 衷	古 手	矢 羽 根 状 沈 線						
香 取 東 総 山 武	102	33	堀籠野中		SI1						○				加曾利E3	戸村・黒沢2004				
	103	34	磯花		S08							○				連弧文	岡崎ほか1981			
					0205・0215・0901・ S1701・S1902・S3304									○						
					0801・S0101・S2102・ S2401・S3502・ S4603・S4604										○					岡崎ほか1984
					S3601	?														
					S4608		○													
					大根磯花	1号竪穴状遺構	○												加曾利E3・条線文土器	青木1989
	104	34	原山			○										矢戸・大村1976				
	104	34	原山		SI5							○								
					SI14		○							○						
					SI18	○			?					○				加曾利E3		
					SI19									○						
					SI20	○								○						
SI22													○							
SI23													○							
SI30													○							
SI34											?									
SI37														○						
SK95															○					
SK114						○					?									
SK119・122・126・ 132・135															○				越川・小川1995	
SK156																				
SK165					○										○					
SK175・206															○					
SK204																○		加曾利E2		
SK207	○																			
SK215	○																			
SK231・241・ 243・245											○									
SK261	○										○									
SK264・281											○									
SK285		○																		
SK301											○									
105	35	白井大宮台貝塚				○					○				四柳1991					
106	37	栗島台		第7・11グリッド	○	○					○					大場1952				
					○	○		○							新井1990					
					○	○		○							寺村2000					
					○											東総文セ1998				
					○											上守2005				
						○										平岡1978				
						○										村上1999				
107	41	仲島			○										東総文セ1998					
108	42	向油田貝塚			○						○				上守2005					
109	43	岩部				○									平岡1978					
110	44	島ノ間				○									村上1999					
111	44 45	境貝塚		7区第3貝層	○										柿沼ほか1987					
112	45	居合台			○	○					○				中野ほか1995					
113	45	宝永作		グリッド		○									落合1992					

第5表(10) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	la・斜行文	lb・重弧文	lc・矢羽根状文	ld・縦位沈線	le・格子目文	l類胴部	lf・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献			
香取・東	114	49	東長山野		24号住								○		勝坂V・加曾利E1	道澤1990			
					25号住	○													
					41号住	○													加曾利E3・連弧文
					47号住	○													
					51号住		○												
					55号土壙												?		
					125号土壙	○													
					174号土壙	○													
					206号土壙		○												
					包含層	○	○		?		○								
総	115	54	羽戸		第119号住居跡					○						青木2001			
					第125号住居跡					○									
山武	115	54	羽戸		第127号住居跡	○										青木2001			
					第137号住居跡		?												
					JD-109					○					加曾利E3				
					JD-181	○	?												
					グリッド					○									
地	116	54	鉢ヶ谷		第8号土坑					○					加曾利E2・E3	青木2000			
					第18号土坑	○									加曾利E3				
					第19号土坑	○									加曾利E3・連弧文				
					グリッド					○									
域	117	56	宮台		包含層					○					高田・山口1989				
					118	56	一本松	大綱山田台遺跡群No.6地点(一本松)	第174号住居跡						○			加曾利E3	青木1994
長	119	59	下太田貝塚		第1地点6B・C層		○									菅谷ほか2003			
					第1地点8層	○					○	○							
					第2地点	○	○				○								
					旧河道	○	○		?	○									
生	120	61	今泉			○					○					三浦・風間1990			
					121	69	市場台		11号竪穴状遺構	○					○			加曾利E3	土屋1996
									6号遺構?	○									
									7号土坑		○								
					9号性格不明遺構					○									
					遺構外		○												
房	122	69	土島田		021		○									津田・菅谷1997			
					024						?			加曾利E2					
					遺構外					○									
												?			大淵・小川1995				
地	123	71	根方上ノ芝条跡		B地点					○						野中ほか2000			
					124	73	京田	(国保病院)							○			阪本1988	
					125	73	吉井		SI25						○				
SI28	○																		
域	126	74	深名	深名瀬畠	第1号住居跡	○									加曾利E3	越川・藤原1987			
					第2号住居跡									○			加曾利E3・連弧文		
					第4号住居跡	○											連弧文		



第5表(11) 曾利式系土器出土遺構一覽表

地域区分	遺跡番号	市町村No	遺跡名	(報告書遺跡名)	遺構・地点名	1a・斜行文	1b・重弧文	1c・矢羽根状文	1d・縦位沈線	1e・格子目文	1・類胴部	1f・折衷	2a・古手	2b・矢羽根状沈線	遺構内伴出土器	文献				
長生・安房地域	126	74	深名	深名瀬島	第7号住居跡	○									加曾利E2?	越川・藤原1987				
					第8号住居跡		○					○	○					加曾利E2・連弧文		
					第9号住居跡	○														
					第10号住居跡								○		?				勝坂V・加曾利E2	
					第11号住居跡												○			
					第15号住居跡	?													加曾利E3	
					第16号住居跡													○	加曾利E3	
					第17号住居跡									○					加曾利E3	
					第18号住居跡		○							○					連弧文	
					第19号住居跡													○	加曾利E2・曾利縄文系?	
					第20号住居跡													○	連弧文	
					第22号住居跡													○	加曾利E2	
					第28号住居跡													○	勝坂V	
					第29号住居跡													○	加曾利E1・条線文土器	
					第25~31号住居跡	○	○							○						
					第36号住居跡														○	
					第37号住居跡														○	連弧文
グリッド	○	○			○	○					○									
											○				玉口1978					
127	79	谷	密蔵院	第1号竪穴状遺構	○											林原・後藤1984				
				遺構外	○			?		○										

## 第4章 胎土分析

### 第1節 分析資料

#### 1 早期の分析資料

今回は押型紋土器関連を主体として、早期後半土器についても分析を行った。以下にこれら資料と分析目的の概要を記載する。

##### (1) 押型紋土器関連

押型紋土器については、それ自体が搬入的要素の強い資料であることは、異論がないものと思われる。しかし、先に見てきたように、出現期の資料は他地域と比しても独自性の強いものが多く、胎土の分析は興味深いものがある。また、三戸式以降についても、資料が増加する中、在地での製作が行われているかどうか、解明が期待される課題である。本県の押型紋土器について、胎土分析が行われる例はおそらく初めてであり、その意義は大きいものと思われる。

千葉市東寺山石神遺跡（第80図1～6） 押型紋土器（1・2）と撚糸紋土器※稲荷台式（3～6）の関係を把握するため分析を行った。

木更津市下根田A・B遺跡（第80図7～12） 押型紋土器（7～10）と三戸式土器（11・12）の関係を把握するため分析を行った。

千葉市緑区辺田山谷遺跡（第80図13～20） 押型紋土器（19・20）と撚糸紋土器（13）及び三戸式土器（14～28）の関係を把握するため分析を行った。

成田市東峰御幸畑西遺跡（第80図21～29） 押型紋土器（26～29）と撚糸紋土器（21～25）の関係を把握するため分析を行った。

東庄町今郡カチ内遺跡（第80図30～38） 押型紋土器（38）と三戸式土器（30～37）の関係を把握するため分析を行った。

四街道市和良比長作No.2遺跡（第81図39～44） 押型紋土器（44）と撚糸紋土器※稲荷台式（39～43）の関係を把握するため分析を行った。

東金市久我台遺跡（第81図45～53） 押型紋土器（53）及び類似資料（52）と撚糸紋土器（45～51）の関係を把握するため分析を行った。

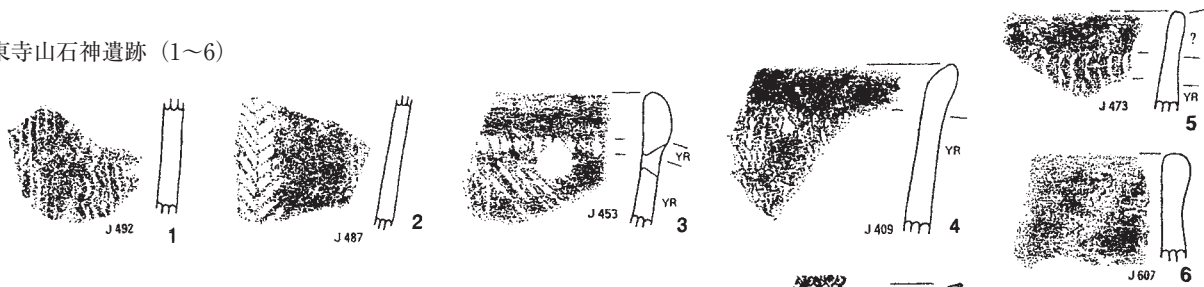
##### (2) 早期後半土器関連

本時期においては、末葉に近づくにつれ、関東地方西部の影響が強くなっていくことが指摘され、特に茅山上層式以降は、在地資料は条痕のみのものが主体を占めるものと推測される。また、上総地方は、直接的に三浦半島～東海地方の資料が搬入する様子が看取される。これらの様相は、あくまでも型式研究の視点からの推測であり、胎土の分析はほぼ皆無であり、今回の分析によるデータの収集は意義が大きいと思われる。

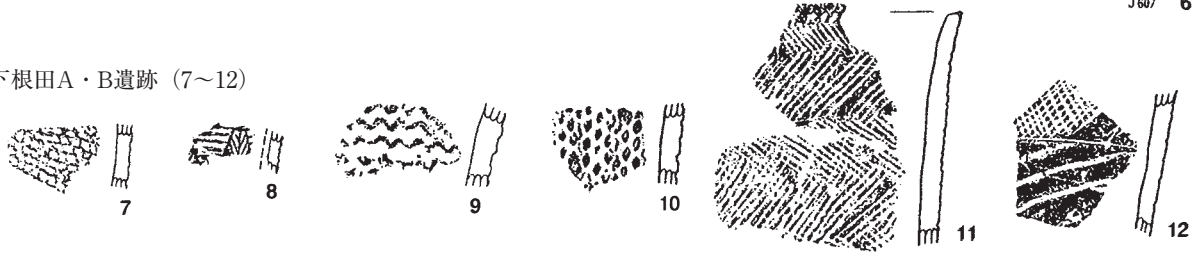
千葉市緑区南河原坂第2遺跡（第81図54～57） 早期末葉に位置づけられ、搬入的要素が強い曲線状の沈線紋の土器（54・55）と紋様が希薄で在地と思われる資料（56・57）の関係を把握するため分析を行った。

印西市船尾白幡遺跡（第81図58～63） 早期末葉に位置づけられ、搬入的要素が強い隆帯紋の土器（60・

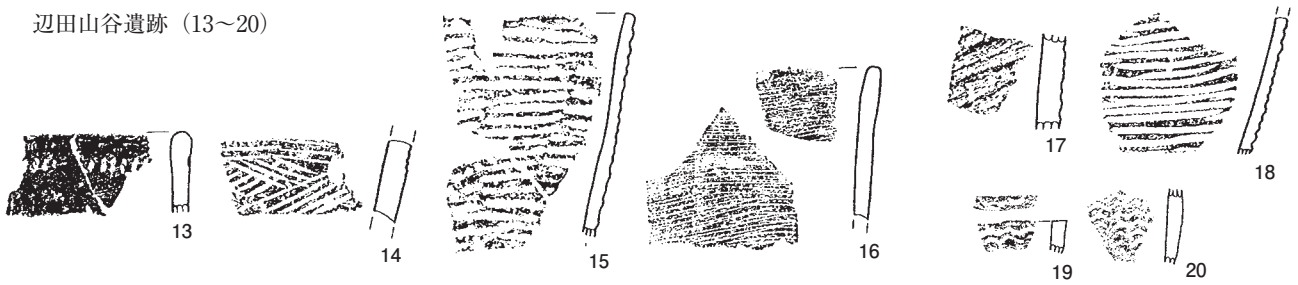
東寺山石神遺跡 (1~6)



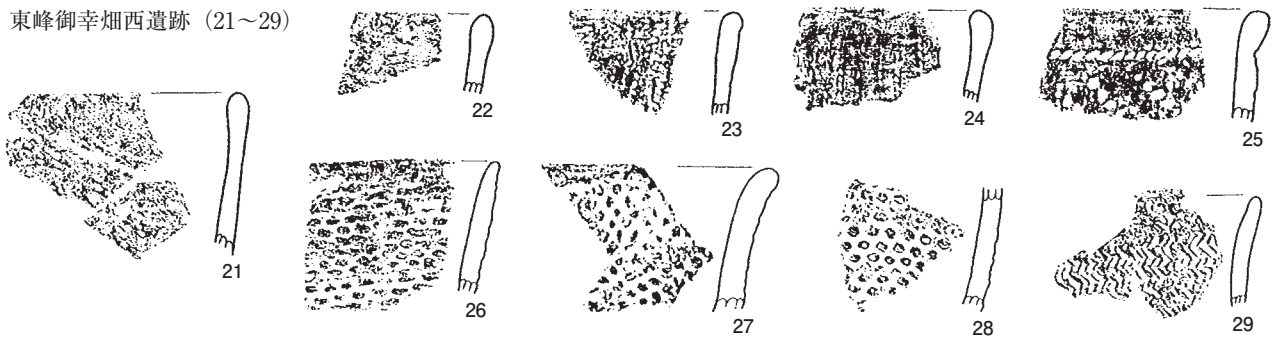
下根田A・B遺跡 (7~12)



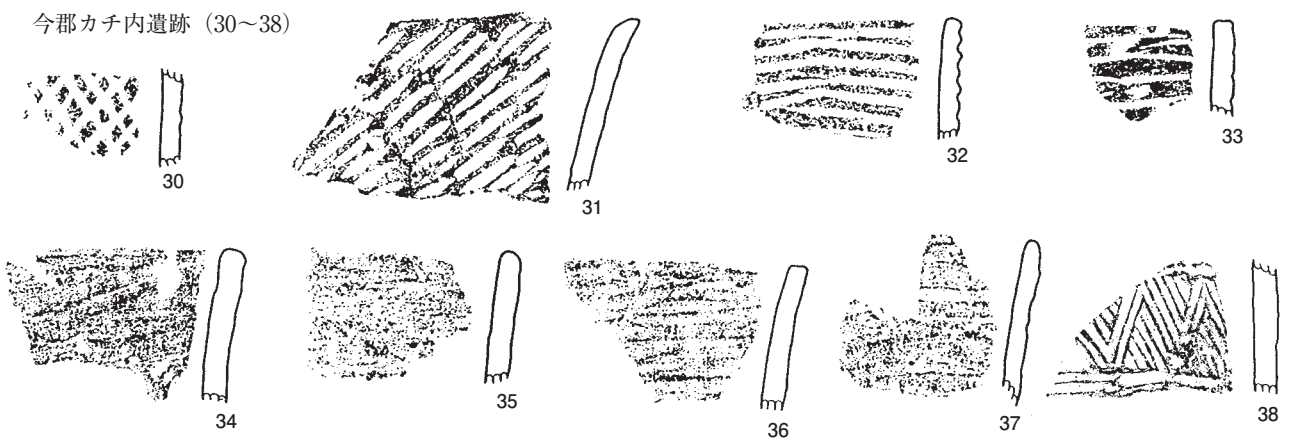
辺田山谷遺跡 (13~20)



東峰御幸畑西遺跡 (21~29)



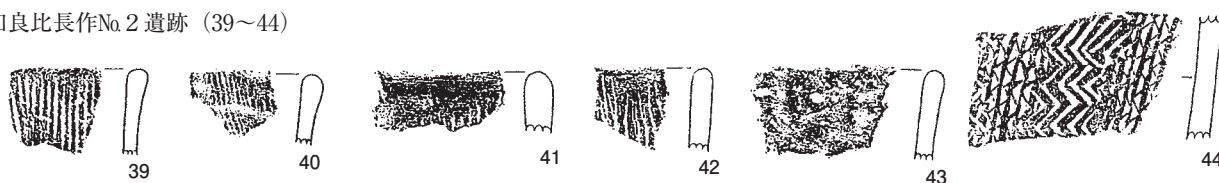
今郡カチ内遺跡 (30~38)



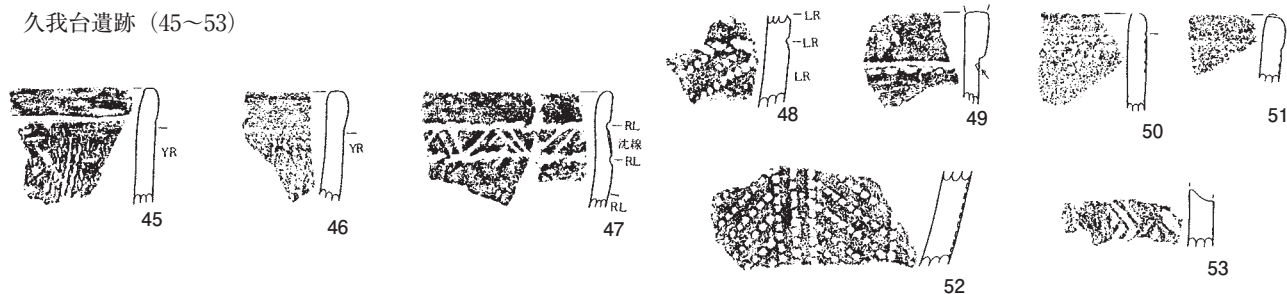
※縮尺1/3

第80図 早期・胎土分析資料(1)

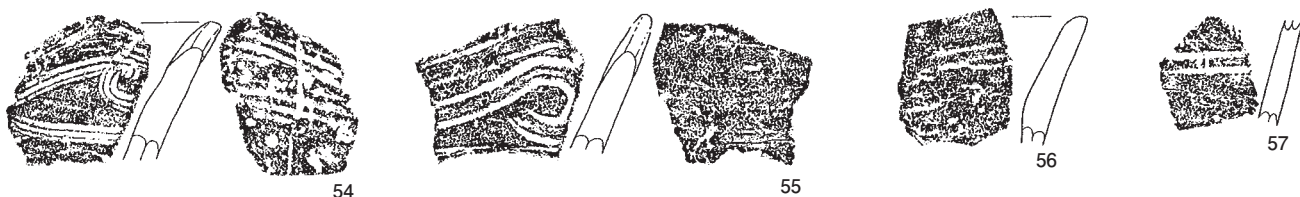
和良比長作No.2 遺跡 (39~44)



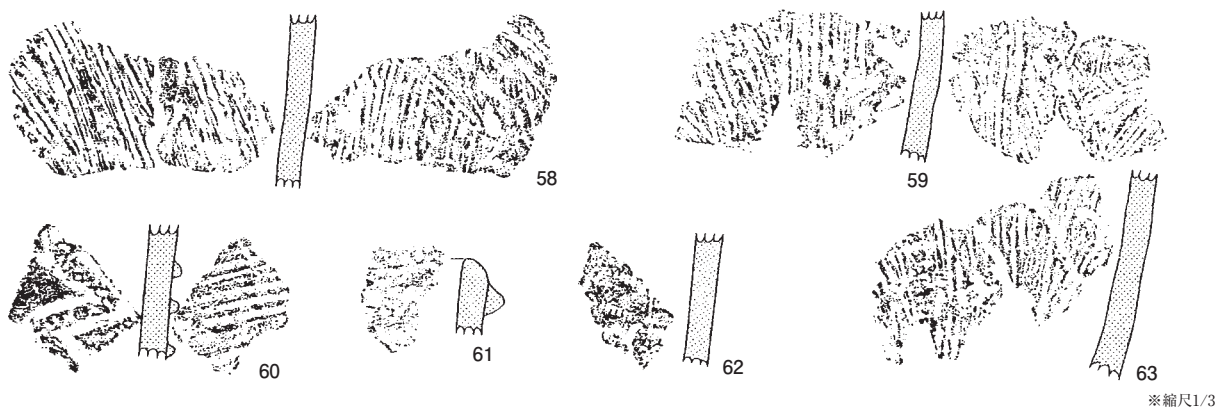
久我台遺跡 (45~53)



南河原坂第2 遺跡 (54~57)



船尾白幡遺跡 (58~63)



※縮尺1/3

第81図 早期・胎土分析資料(2)

61) 及び打越式類似資料 (62) と在地に多く見られる条痕紋のみ施紋の土器 (58・59・63) の関係を把握するため分析を行った。

2 前期の分析資料

前期の分析資料については、図を再掲はせず、2章で掲載した図を参照願うこととしたい。県内で出土した木島式、北白川下層式、前期大木式と、比較資料としてこれらの非在地系土器と同じ遺跡出土の、時的にはほぼ並行すると考えうる在地的な土器を分析対象とした。

#### (木島式に係る分析資料)

木島式に関する資料として、3遺跡、12点の資料を分析した。

柏市(旧沼南町)石揚遺跡出土土器については、いずれも遺物包含層中で出土した5点を分析した。木島式として第9図3・8である。いずれも口縁部破片で、3は縦位沈線をもつ土器、8は斜方向の沈線をもち口縁部下に連続押圧が残る土器である。これらに時期的に概ね併行すると考える花積下層式として第9図41~43である。41は折り返し口縁で口縁部に平行する捺糸側面圧痕文をもつ土器、42は捺糸側面圧痕文間に円形竹管による刺突を施す土器、43は口縁部に円形の貼り付けをもつ縄文地文の土器である。

松戸市幸田貝塚出土土器については4点分析した。すべて6次調査の第113号住居跡の貝層出土土器である。木島式として第11図6~8である。これらは、調査報告書の記載ではすべて同一固体と判断されたもので、斜位の条線が方向を違えて施される土器である。いずれも体部破片で、6のみ連続押圧の部分が残る。花積下層式として第11図9で、波状口縁の頂部から背の高い隆線が垂下し、波頂部と一体で突起状をなす土器である。

市川市向台貝塚出土土器として、3点分析した。いずれも遺構外で出土した。第13図1は木島式で、斜方向の沈線をもつ小破片である。第13図2~3は花積下層式で、2は精緻な捺糸側面圧痕文をもつ土器、3は折り返し口縁で縄文のみ施す土器である。

#### (北白川下層式に係る分析資料)

北白川下層式に関する資料として、5遺跡、20点の資料を分析した。

市川市庚塚遺跡出土土器について、5点を分析した。いずれも貝層B中で出土した資料である。第18図1・2は北白川下層Ⅱb式とされたものである。1・2とも器厚が薄く、胎土、色調とも在地の土器の特徴とは明らかに異なるものである。また、1には異質な爪形文が認められる。これらと時期的にはほぼ並行すると考える諸磯a式として、第18図3~5である。3は肋骨文の土器、4・5は木葉文の土器である。

船橋市法蓮寺山遺跡出土土器については、第2号住居址出土の4点を分析した。北白川下層Ⅰ式とされた第19図1であり、非常に薄手で、内外に条痕を施す土器である。時期的に概ね並行すると考えられる黒浜式として第19図2・3で、いずれも繊維を含む縄文のみの土器である。また、浮島式として第19図4で、貝殻による変形爪形文を施す土器である。出土状況は、1・2が住居の床面付近から出土しており、3・4は貝層中出土である。

千葉市五味ノ木遺跡出土土器については3点分析した。いずれも遺構外から出土したものである。北白川下層式に類する土器として第23図1で、細かい爪形文を施す土器である。諸磯b式として第23図2・3で、いずれも浮線文の土器である。

千葉市有吉北貝塚出土土器については4点分析した。いずれも遺構外出土である。第24図1・4は北白川下層Ⅱc式とされたものである。薄手で、刻み目を施す扁平な隆線をもつ土器である。報告書の記載によれば、同一固体の可能性はある。1が口縁部破片、4は体部破片である。連続爪形文をもつ諸磯a式として第24図8、浮線文をもつ諸磯b式として第24図9である。

千葉市バクチ穴遺跡出土土器については4点分析した。いずれも遺構外出土である。第25図1・4は北白川下層Ⅱc式とされたものである。両者とも浮線文をもつ薄手の土器の体部破片である。木葉文を有する諸磯a式として第25図5、浮線文を有する諸磯b式として第25図6である。

### (前期大木式に係る分析資料)

前期大木式に関する資料として、6遺跡、29点の資料を分析した。

柏市中山新田Ⅰ遺跡出土土器については6点分析した。いずれも遺構外から出土した。大木2式とされた第33図1で、胎土中に繊維を含まず、網目状撚糸文が施された土器である。繊維土器として、関山Ⅱ式の第33図2、黒浜式の第33図3、やや時期的に離れるが諸磯b式として第33図4・5、前期末～中期初頭の土器として第33図6である。

栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点出土土器については、4点分析した。いずれも遺構外から出土した。大木6式として第38図1で、波状口縁に沿ってキザミのある隆線がめぐり、以下に菱形状の文様が施される土器である。比較資料としては、浮線文をもつ諸磯b式として第38図2、興津式である第38図3・4で、3が凹凸文のある口縁部、4が平行沈線間に貝殻復縁文を連続させる土器である。

四街道市木戸先遺跡出土土器については6点分析した。いずれも遺物包含層から出土している。大木2b式土器とされた第49図2～4で、調査報告書の記載ではすべて同一固体と判断されたものである。おそらく土器の上半部は、隆線と波状沈線によって文様が構成され、体部の縄文は粗い特徴的なものである。2・3が口縁部で、4が体部の破片である。これに時期的に概ね並行すると考える黒浜式として第49図7～9で、いずれも縄文地に沈線文を有する土器の口縁部である。

市原市門脇遺跡出土土器については4点分析した。大木系土器の可能性があるとされた第51図1で、押圧による小波状をなす口縁で、縄文が施される。比較資料としては浮島式として第51図3・4で、3は細かい変形爪形文をもつ土器、4は斜位の短沈線を連続させる口縁部破片である。また、前期末～中期初頭の縄文地文の土器として第51図2である。1、3・4は遺構外出土、2はSD-008号跡出土である。

香取市(旧小見川町)白井大宮台貝塚出土土器については3点分析した。いずれも遺構外出土である。大木5式として第54図1で、小さな折り返し口縁に、蛇行する隆線が配され、隆線上には縄文が施される。第54図2・3は、比較資料としての前期末葉から中期初頭の土器で、2は小さな折り返し口縁に縄文の結節による綾線文が配されるもので、3は体部破片で縦位の綾線文が配される土器である。

東金市大谷台遺跡出土土器については6点分析した。いずれも遺物包含層中の出土である。大木式系の土器とされた第56図3・5・6で、調査報告書の記載ではすべて同一固体と判断されたものである。第56図1の金魚鉢状の器形をもつ土器の体部及び底部の破片と判断されたものである。3・5が体部破片で、6が底部破片である。縄文地に沈線文をもつ諸磯a式として第56図7・8、波状貝殻文をもつ浮島式として第56図9である。

### 3 中期の分析資料

中期の資料については、第3章ですでに示したものを含め、再度ここで資料を掲示する。基本的には曾利式系土器を中心に、これを出土した遺構と同一遺構中出土土器を分析に供する方針で望んだ。ただし、遺構が検出されていない遺跡では、分析資料を任意に選んだ。曾利式系土器とともに、これに伴うと考える加曾利E式と連弧文系土器を中心に分析したが、これ以外の異系統土器と目される土器に関しても、できるだけ分析を試みた。土器群の時期的な位置づけについては、第3章での記載に従った。図の出版も第3章を参照頂きたい。

胎土分析を実施した遺跡は、第83図に1～11として示した、11遺跡の資料である。12として示した松戸

市中峠遺跡は、中峠遺跡第4次調査報告の際に、胎土分析を実施している<sup>1)</sup>。

第83図1は、第3章遺跡番号97、香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚で、分析資料は第84図1～5である。すべて3Tトレンチ出土である。1は加曽利E3式キャリパー形土器である。2・3は連弧文系土器であろう。4は曾利式系土器1類でf種とした折衷土器である。5も曾利式系土器1類でおそらくa種とした斜行文土器である。

第83図2は、第3章遺跡番号106、銚子市粟島台遺跡で、分析資料は第84図6～13である。すべて遺構に伴わず出土した土器である。6～8が曾利式系土器1類で、6・7はb種（重弧文土器）、8はa種（斜行文土器）である。9～11は連弧文系土器。12はおそらく大木式の影響の強い加曽利E式の胴部破片。加曽利E2式か。13は加曽利E3式キャリパー形土器である。

第83図3は、第3章遺跡番号112、芝山町居合台遺跡で、分析資料は第84図14～20である。すべて遺構に伴わず出土した土器である。14はおそらく加曽利E3式キャリパー形土器、15は連弧文系土器である。16～18は曾利式系土器1類で、16・18がa種（斜行文土器）、17はb種（重弧文土器）である。19は加曽利E式キャリパー形土器の胴部に条線を配する土器である。20はおそらく曾利式系土器1類で、頸部に2条の交互利突列をもち、1類の中でもやや古いものか。

第83図4は、第3章遺跡番号106、四街道市堀込（和良比）遺跡で、分析資料は第85図1～9である。1～4は009小竪穴出土土器である。1・3は加曽利E式キャリパー形土器で、1は加曽利E2式である。2は曾利式系土器1類b種の重弧文土器である。4はおそらく連弧文系土器の口縁部破片である。5～9は011小竪穴出土土器である。5は大木9式の影響がきわめて強い土器であろう。6・8は曾利式系土器1類で、6はa種の斜行文土器である。7は細別は不明だが加曽利E式の口縁部である。9は加曽利E3式キャリパー形土器である。

第83図5は、第3章遺跡番号33、千葉市有吉北貝塚で、分析資料は第85図10～16である。10～13はSB019竪穴住居跡出土土器である。加曽利E2式の炉体土器をもつ住居跡で、これらの土器はおそらく覆土中で出土したものである。10は細別時期が判然としないが、加曽利E2式からE3式前半の加曽利E式キャリパー形土器の口縁部である。11・12は曾利式系土器1類b種（重弧文土器）である。13は連弧文系土器である。14～16はSB194竪穴住居跡出土土器である。14は加納実により、瀬戸内から東海地方にかけて広く分布する、船元式に比定された土器である<sup>2)</sup>。15は加曽利E2式キャリパー形土器の口縁部である。16は曾利式系土器1類で、a種（斜行文土器）である。

第83図6は、第3章遺跡番号48、市原市野口（海保野口）遺跡で、分析資料は第85図17～24である。すべて149貯蔵穴とされた遺構の覆土中出土である。149貯蔵穴は径約3mのいわゆる小竪穴で、底面中央に柱穴1基を有し、覆土中には貝層を形成する。17・24は曾利式系土器1類で、17はa種（斜行文土器）である。18～21は加曽利E3式前半のキャリパー形土器の口縁部である。22・23は連弧文系土器で、沈線間の地文の磨り消しが明瞭である。

第83図7は、第3章遺跡番号55、木更津市久野遺跡で、分析資料は第86図1～6である。すべて遺構に伴わずグリッド中で出土した土器である。1は口縁部付近に斜行文をもつ土器で、小片で特徴が少ないが曾利式系土器と判断した。2・3は曾利式系土器1類a種（斜行文土器）である。4・5は加曽利E3式である。6は口縁部に交互利突文をもつ連弧文系土器である。

第83図8は、第3章遺跡番号56、木更津市伊豆山台遺跡で、分析資料は第86図7～16である。7～10は



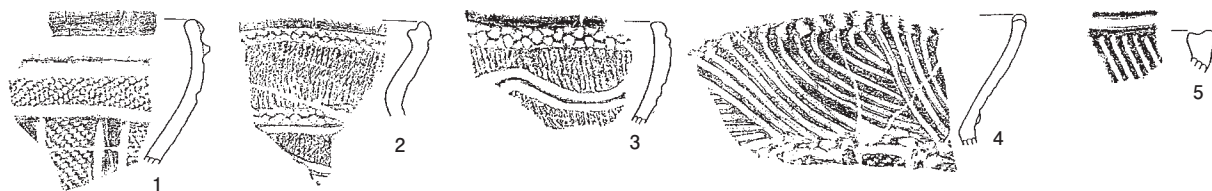
1. 白井大宮台貝塚 2. 栗島台 3. 居合台 4. 堀込 (和良比) 5. 有吉北貝塚  
 6. 野口 (海保野口) 7. 久野 8. 伊豆山台 9. 市場台 10. 土島田  
 11. 深名 (深名瀬島) 12. 中峠

第83図 中期・胎土分析実施遺跡

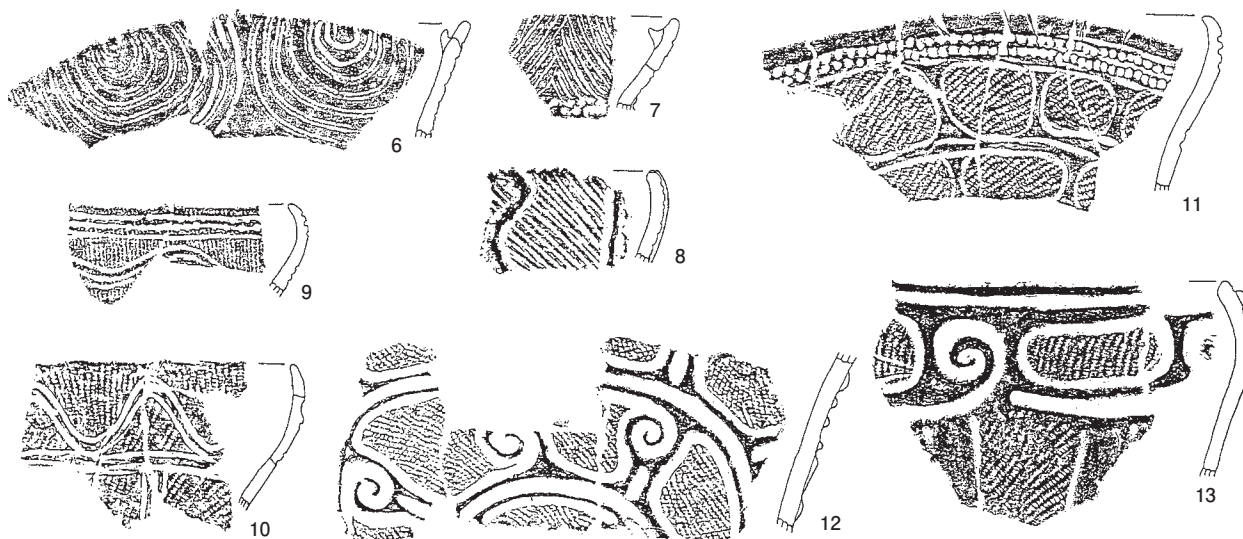
SI002出土土器である。7は加曾利E 3式、8は連弧文系土器である。9は報告書の記載で、「東海系の咲畑式に類似する」とされた土器である<sup>3)</sup>。10は曾利式系土器1類a種 (斜行文土器) である。11~13はSI020出土土器である。11・12は加曾利E 3式、13は曾利式系土器1類のうちe種の格子目文土器で、いわゆる



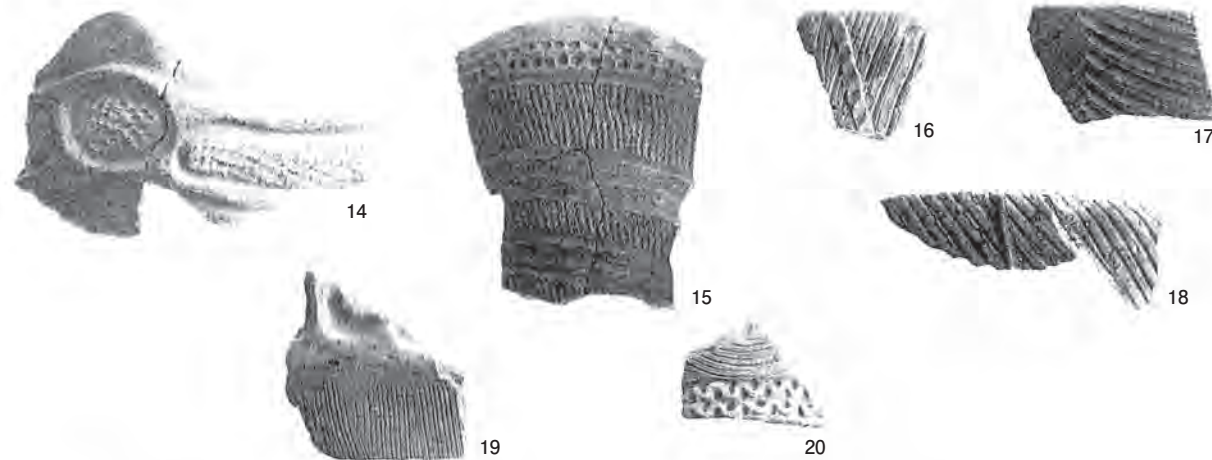
香取市（旧小見川町）白井大宮台貝塚（1～5）



銚子市粟島台遺跡（6～13）

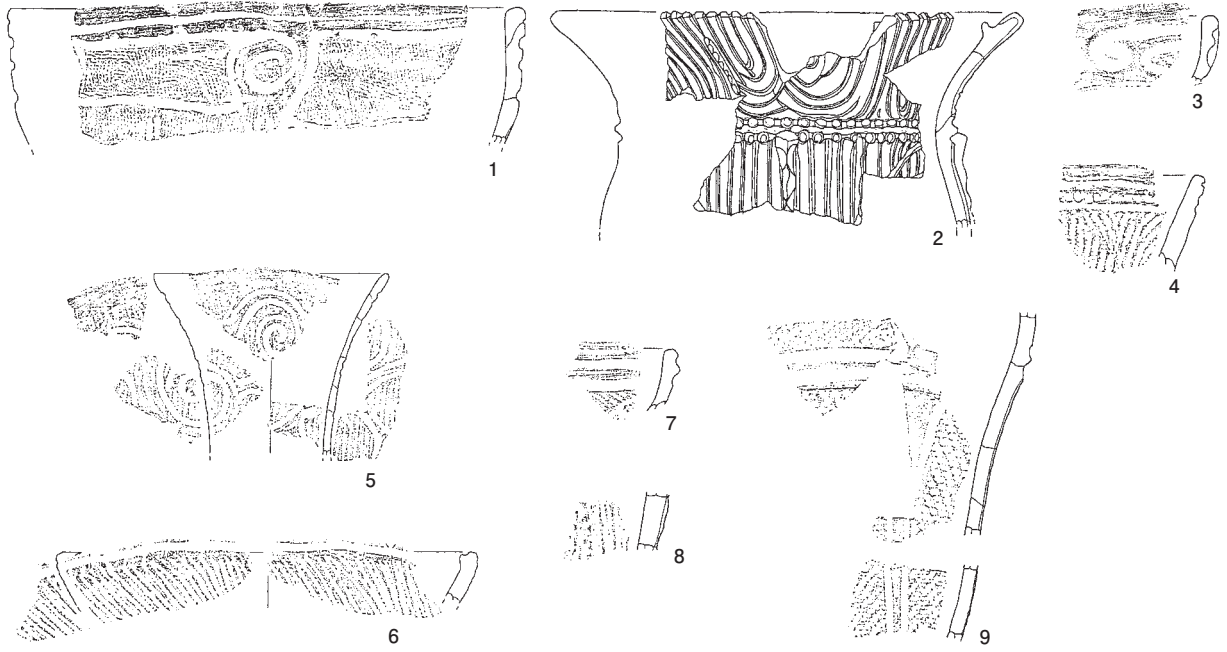


芝山町居合台遺跡（14～20）

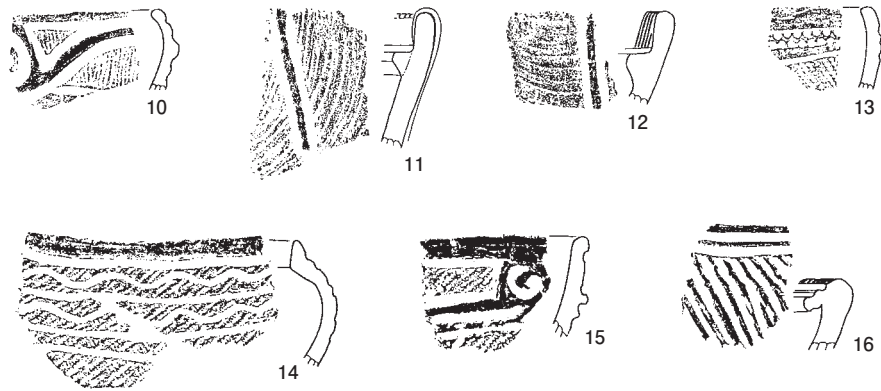


第84図 中期・胎土分析資料(1)

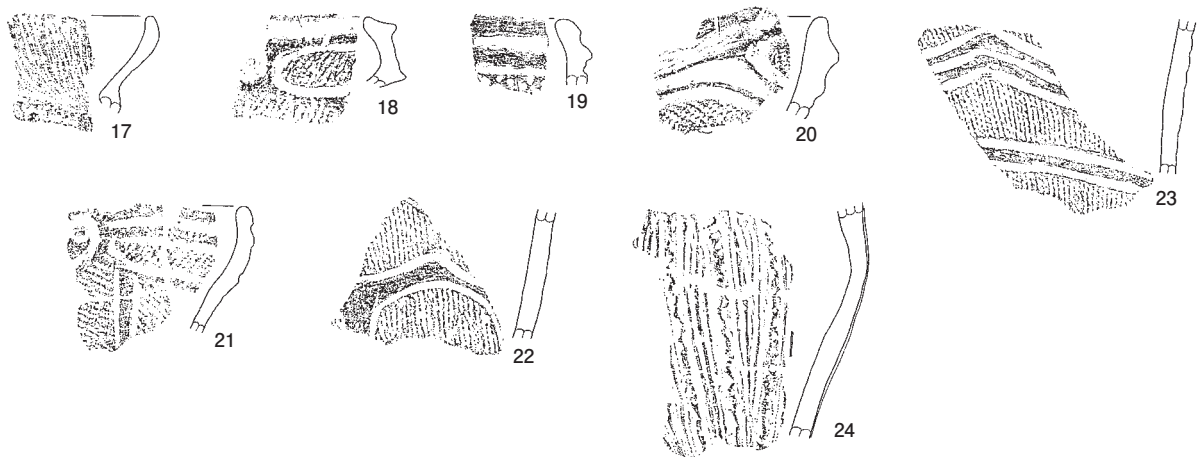
四街道市堀込（和良比）遺跡（1～9）



千葉市有吉北貝塚（10～16）



市原市野口（海保野口）遺跡（17～24）

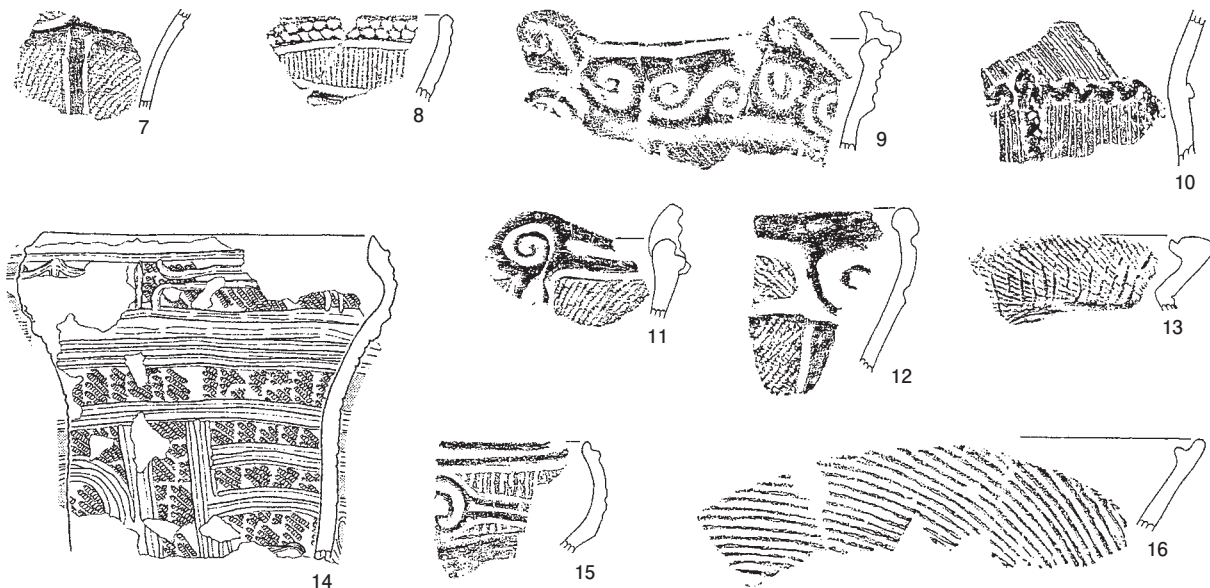


第85図 中期・胎土分析資料(2)

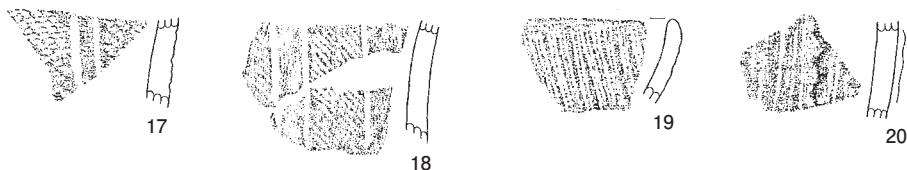
木更津市久野遺跡（1～6）



木更津市伊豆山台遺跡（7～16）



大多喜町市場台遺跡（17～20）



大多喜町土島田遺跡（21～23）



第86図 中期・胎土分析資料(3)

「籠目文」と呼ばれる土器である。県内出土の曾利式系土器1類の中ではやや古く位置付けられる可能性がある。14～16はSI023出土土器である。14は東北地方の大木式の影響が強い土器で、加曾利E式古い部分に相当する。15は加曾利E式古い部分の口縁部である。16は曾利式系土器1類a種（斜行文土器）である。

第83図9は、第3章遺跡番号121、大多喜町市場台遺跡で、分析資料は第86図17～20である。すべて11号竪穴状遺構出土である。17・18は加曾利E 3式の胴部破片である。19・20は曾利式系土器1類で、19

はa種（斜行文土器）である。

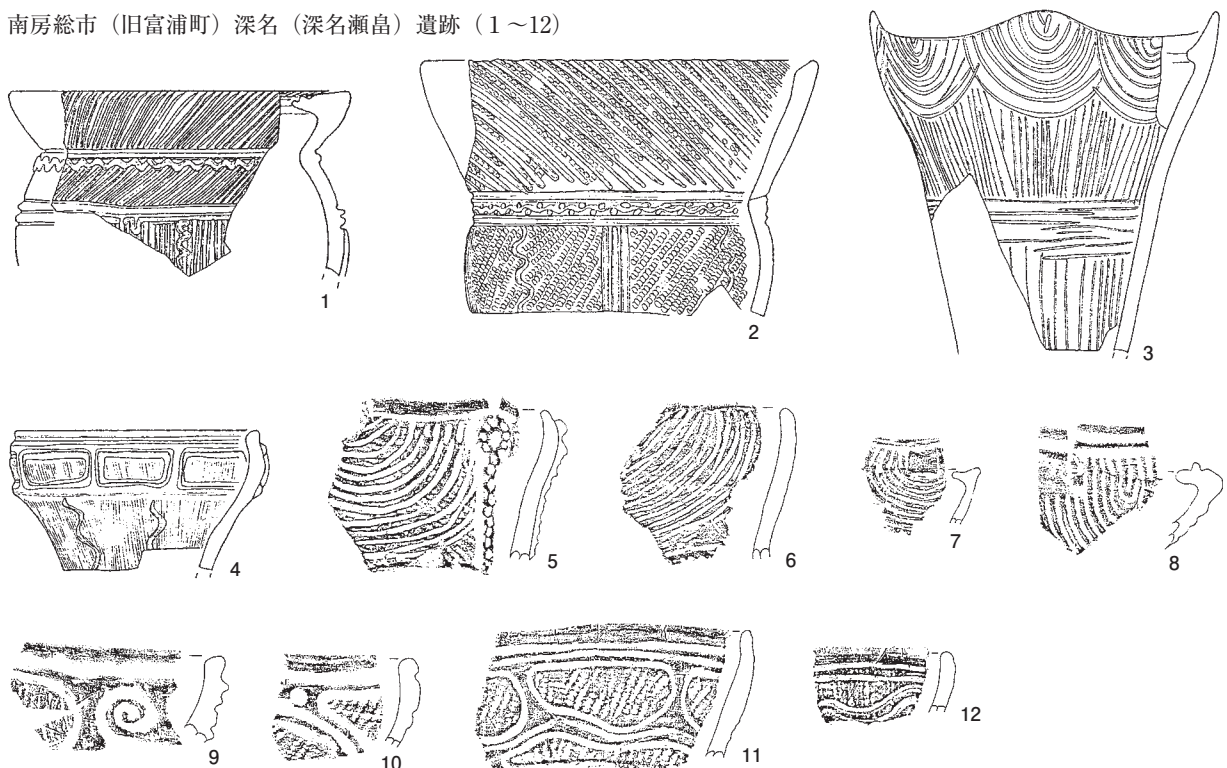
第83図10は、第3章遺跡番号122、大多喜町土島田遺跡で、分析資料は第86図21～23である。すべて024土坑出土土器である。21は加曽利E式キャリパー形土器の口縁部、22は曾利式系土器1類の胴部で、地文に縄文を施す。23は地文状に縦位の沈線を施す土器である。

第83図11は、第3章遺跡番号117、南房総市（旧富浦町）深名（深名瀬島）遺跡で、分析資料は第87図1～12である。1は第7号住居址出土土器である。曾利式系土器1類a種（斜行文土器）であるが、肉厚の口縁部断面や、頸部文様帯が幅広く取られている点からすると、加曽利E式の古い部分に並行する可能性がある土器である。同じ住居跡から加曽利E 2式の復元土器が出土している。2～12は第8号住居址出土土器である。連弧文系土器と加曽利E 2式を用いた土器片囲い埋甕炉をもつ住居跡である。2と3も炉内から出土したとされるが出土状況の詳細は不明である。2は曾利式系土器1類f種とした折衷土器で、胴部文様から加曽利E 2式併行の土器であろう。3は曾利式系土器1類b種の重弧文土器であるが、頸部文様帯が広く取られている点と、前述の出土状況からすると、加曽利E 2式併行と考えるのが妥当であろう。4はおそらく加曽利E 2式で、地文は条線である。5～8は曾利式系土器1類で、5は地文に縄文をもつf種の折衷土器、ほかはb種の重弧文土器である。9・10は加曽利E式キャリパー形土器の口縁部である。11・12は連弧文系土器である。

註

- 1 建石 徹 2000「中峠遺跡（第4次調査）出土縄文土器の胎土分析」『下総考古学』16 下総考古学研究会
- 2 加納 実 2004「第2節2(1)運ばれてきた土器」『千葉県の歴史 資料編考古4』千葉県史料研究財団
- 3 上守秀明ほか 2000『木更津市文化財調査集報4－伊豆山台遺跡・金鈴塚古墳－』木更津市教育委員会

南房総市（旧富浦町）深名（深名瀬島）遺跡（1～12）



第87図 中期・胎土分析資料(4)

## 第2節 千葉県内出土縄文土器の胎土分析 – 早期から中期の土器を中心として –

### 1 はじめに – 胎土分析の目的 –

平成13年度から平成18年度まで行なわれた千葉県文化財センターの共同研究「房総における縄文時代の非在地系土器について–早期から中期を中心として–」の一環として、千葉県内における縄文時代早期から中期の非在地系土器群の製作地や材料の故地に関する基礎情報を得ることを主な目的とした胎土分析を実施した。

現在、縄文土器研究の中で産地推定を目的とした胎土分析が実施されることは決して珍しいことではない。この点については、当該分野における記念碑的な研究として学史上に輝く千葉県文化財センターによるかつての共同研究（千葉県文化財センター 1981・1984）の頃とは隔世の感がある。

縄文土器研究において「胎土分析で何が分かるか」と網羅的な模索をする時代はすでに終焉をむかえており、現在は、従来以上に考古学的な目的を先鋭化させた上で最適の対象資料を選定して分析を実施する時代に移行しているといえる。そのような意味で、今回の共同研究における胎土分析の目的は比較的明確である。すなわち、千葉県内の縄文時代遺跡において、型式学的に「非在地系」とされる土器群の製作地や材料の故地を推定・復原し、さらにその個体、型式、遺跡や地域等の在り様や成り立ちを検討するための基礎情報を得ることが、この胎土分析の第一の目的である。

筆者は今回の共同研究が開始された初期の段階から、当センターの担当研究員諸氏と数度にわたる公式・非公式の会合を持ち、現在の縄文土器研究における非在地系土器群の扱われ方や、それを胎土分析する場合の手法や課題等について、様々な議論を重ねた。その結果、今回の胎土分析を実施するにあたり、次の6つの方針を決定した。

- i) 十分な型式学的検討が行える資料（試料）を選定すること。
- ii) 縄文早期から中期にわたる多様な「非在地系土器」を網羅するのではなく、いくつかの細別時期や型式に焦点を当てて資料を選定すること。
- iii) 特定の遺跡、地域のみを分析対象とするのではなく、県内各地の遺跡を分析対象とすること。
- iv) 「非在地系土器」を検討する前提として、「在地系土器」と考えられる資料群の分析データをあわせて充実させること。
- v) 近年の土器製作技法に関する研究の進展に鑑み、胎土のマトリックス（粘土等）と混和材の両者に関して検討する視点を持ち合わせた分析を実施すること。
- vi) 上記(i)、(iii)、(iv)等を実現するため、そして何よりも文化財保護の観点から、非破壊分析法を採用すること。

### 2 資料（試料）

本研究の目的に従い、また実際の時間的制約等も鑑み、千葉県内諸遺跡より分析資料を抽出した。分析資料の選定は、主に千葉県文化財センター（当時）の小笠原永隆（早期）、横山仁（前期）、大内千年（中期）の各氏により、筆者との協議の後、31遺跡より計203点（早期63点、前期61点、中期79点）の分析資料を選定した<sup>1)</sup>。第6表に分析資料を示した。

早期は、四街道市和良比長作No.2遺跡（分析No.1～6）、木更津市下根田遺跡（分析No.7～12）、千葉市南河原坂遺跡（分析No.13～16）、千葉市辺田山谷遺跡（分析No.17～24）、成田市東峰御幸畑西遺跡（分

析No.25～33)、東庄町今郡カチ内遺跡(分析No.34～42)、東金市久我台遺跡(分析No.43～51)、印西市船尾白幡遺跡(分析No.52～57)、千葉市東寺山石神遺跡(分析No.58～63)を対象とし、主に撚糸文系・沈線文系・条痕文系(以上、在地系)と押型文系・隆帯文系(以上、非在地系)の比較等に焦点を絞り、選定した<sup>2)</sup>。

前期は、柏市石揚遺跡(分析No.64～68)、松戸市幸田貝塚(分析No.69～72)、市川市向台貝塚(分析No.73～75)、市川市庚塚遺跡(分析No.76～80)、法蓮寺山遺跡(分析No.81～84)、千葉市五味ノ木遺跡(分析No.85～87)、千葉市有吉北貝塚(分析No.88～91)、千葉市バクチ穴遺跡(分析No.92～95)、柏市中山新田I遺跡(分析No.96～101)、栄町龍角寺ニュータウン遺跡群No.4(分析No.102～105)、四街道市木戸先遺跡(分析No.106～111)、市原市門脇遺跡(分析No.112～115)、香取市白井大宮台貝塚(分析No.116～118)、東金市大谷台遺跡(分析No.119～124)を対象とし、主に関山式・黒浜式・諸磯式・浮島式(以上、在地系)と木島式・北白川下層式・前期大木式(以上、非在地系)の比較等に特に焦点を絞り、選定した<sup>3)</sup>。

中期は、香取市白井大宮台貝塚(分析No.125～129)、銚子市粟島台遺跡(分析No.130～137)、芝山町居合台遺跡(分析No.138～144)、四街道市堀込(和良比)遺跡(分析No.145～153)、千葉市有吉北貝塚(分析No.154～160)、市原市野口(海保野口)遺跡(分析No.161～168)、木更津市久野遺跡(分析No.169～174)、木更津市伊豆山台遺跡(分析No.175～184)、大多喜町市場台遺跡(分析No.185～188)、大多喜町土島田遺跡(分析No.189～191)、南房総市深名(深名瀬島)遺跡(分析No.192～203)を対象とし、主に加曾利E式(在地系)と曾利式系・連弧文系・中期大木式(以上、非在地系)の比較等に特に焦点を絞り、選定した。

### 3 胎土分析の方法

#### 3-1. 胎土分析の方法

胎土分析の方法は、近年の筆者らによる方法を踏襲した(建石2002、大村・建石2003他)。すなわち、土器胎土をマトリックスである「粘土」部分と、大粒粒子を中心とした「混和材」部分に便宜的に分離し、それぞれの地球化学的・地質学的な特性について検討した。

本研究では、主に粘土部分の分析としてエネルギー分散型蛍光X線分析を実施し、また、主に混和材部分の分析として肉眼及び実体顕微鏡により器面・破断面にみられる鉱物・岩片等の大粒粒子( $\phi 100\mu\text{m}$ 程度以上)の観察を実施した(いずれも非破壊法)。土器胎土中のマトリックス(粘土等)と混和材を明瞭に識別することは困難であるし、また、実際の自然露頭では、粘土層に砂粒等の大粒粒子が混在し、それだけで土器を製作できる事例も知られている。蛍光X線分析では、大粒粒子を混和材に由来する可能性が高いものと仮定し、X線照射範囲から極力外すことで対応した。

エネルギー分散型蛍光X線分析法は、X線を資料に照射するときに発生する特性X線(蛍光X線)をエネルギー分散型の分光器で分光する方法で、多元素を比較的高精度に同時定量(半定量)できる点、非破壊分析が可能な点等から、文化財資料の化学組成分析を行なう際、多用される基幹分析法のひとつである。本研究で用いた分析装置は、東京学芸大学文化財科学研究室所有のセイコー電子工業製卓上型蛍光X線分析装置SEA-2001である。分析条件は以下の通りである。X線発生部のターゲット:Rh管球、加速電圧:15kV、X線照射径:3mm以下(大粒粒子の影響を強く受けると考えた資料については、X線照射径が1mm程度までのマスクをして対応した)、検出器:Si(Li)半導体検出器、資料室雰囲気:真空、測定時間:300秒。定量分析はファンダメンタルパラメーター法によった。

蛍光X線分析で対象とした元素はSi、Ti、Al、Fe、Mg、Ca、K、Mnの8元素である。土器胎土の主成分元素組成は岩石学の慣例に従い酸化物として表記した。Naについては本条件での定量が困難なため測定しなかった。

過去の筆者の研究と同様に本研究でも同一個体内の胎土の不均一性を考慮し、蛍光X線分析では、各個体について分析位置を変えて5回ずつ分析を行なった。各個体につき5回ずつ分析した後、個体ごとの結果のまとまりをみるため、基本的には遺跡ごと（6点の資料を分析した遺跡であれば、5回×6点で、計30回）の分析結果についてクラスター分析を実施した。5回の分析結果がまとまる場合はその平均値を個体の主成分元素組成とした。5回の分析結果がまとまらなかった場合は、6回目、7回目分析を行ない、5つ以上の分析結果がまとまりを示した段階でその5つの平均値を個体の主成分元素組成とした。この結果、8回を超える分析が必要な個体はなかった。

### 3-2. 資料間における類似性の検討 - クラスター分析 -

#### 3-2-1. クラスター分析の方法

同一個体内の胎土の不均一性を考慮した上で個体の主成分元素組成を求めるための筆者の従来の用法とは別に、土器胎土（マトリックス部分）の資料間における地球化学的類似性を検討するため、蛍光X線分析で得られた主成分8元素（酸化物）の含有量（濃度比）についてクラスター分析を実施した。

クラスター分析には多変量解析ソフトSPSS社製SPSS14.0Jを用い、8元素の含有量を変数として、Z得点で標準化した値に変換し、平方ユークリッド距離を用い、Ward法によりクラスター化した。

#### 3-2-2. クラスター分析の利点と注意点

クラスター分析を実施することで、大量のデータを客観的な視点で解析することが可能となり、当該8元素の含有量からみた資料間の総合的な類似性を検討することができる点は、この方法を採用する大きな利点であり、この方法を採用した最大の理由である。

今回のクラスター分析では当該8元素に軽重を付けず、元素ごとに含有量（数値）の標準化を行なった。元素ごとに軽重を付けて分類を行うことも手法としては可能であるが、分析対象遺跡が各地にわたり、各遺跡の背景にある地球化学的特性も多様であることから、ここではあえて8元素に軽重を付けない方法を採用した。

各元素に軽重を付けず、総合的にその類似性を検討するということは、地域や遺跡、あるいは特定の資料（群）に固有の地球化学的特性に基づく検討、すなわち、限られたいくつかの元素の挙動に注目した資料群の分類には適さないということでもある。このような視点に基づく分類が必要な際には、クラスター分析の結果とは別に個別の検討を加えることで補完したい。

また、分析対象遺跡が広範にわたり、それぞれの背景となる地球化学的特性が多様であることは、「他人のそら似」で偶然にも類似性が高く分類される資料群ができる可能性を内包する。本研究では千葉県外各地（千葉県からの方角すら多様な地域）に型式学的故地をもつ多様な非在地系土器群を多く取り扱うため、「他人のそら似」の可能性はさらに高まる。地球化学的な特性や類似性の検討と、土器やその材料の故地推定の間は決して直結はせず、その間に様々な検討を介在させる必要があることは産地推定を目的とする胎土分析を行なう際の前提であるが、特に本研究ではこの点に配慮する必要がある。

筆者を含む多くの研究者が黒曜石資料の地球化学的データに基づく産地推定を行なうために資料間の類

似性（各産地原石と遺跡出土資料の類似性）を検討する際、対象とする元素こそ多少違えども、クラスター分析を多用していることは周知であろう。その結果、産地推定を行なう前提となる分類としては、概ね良好な結果が得られていると考えているが、材料の産地が多様で、粘土（＝岩石の風化物）や混和材の複雑な調合がありうる縄文土器の分析と、産地が限定され、材料の風化の影響が比較的少ない火山ガラスである黒曜石資料の分析では、おのずとクラスター分析の用法も異なることを充分認識しながら、この方法を用いたい。

#### 4 胎土分析の結果と若干の考察

第6表に蛍光X線分析によるマトリックス部分の主成分元素組成分析の結果と、肉眼及び実体顕微鏡観察による大粒粒子の観察結果を示した。

蛍光X線分析結果に基づくクラスター分析の結果をデンドログラムとして第88図に示した。この際、主成分元素組成値の類似性が最も高い（非類似度1.5で階層を評価した際の第1階層）とされた29の資料群（クラスター）について通し番号を付け、第88図に(1)～(29)と示した。これらは本文中では「第1群」～「第29群」の語を用いて記載した。また、本文中では、同じ群に含まれる資料同士を「とてもよく似る」、また、それに準ずる類似性（非類似度2.5で階層を評価した際の第1階層）を示す資料（群）同士を「比較的似る」と、資料間の類似性を表現し、記載した。

以下、基本的には大別時期ごと、遺跡ごとに胎土分析の結果と若干の考察をまとめる。

##### 4-1. 早期

###### ・和良比長作No.2遺跡（四街道市・分析No.1～6）

No.1～5は撚糸文系（稲荷台式）、No.6は押型文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.1、2、5（いずれも撚糸文系（稲荷台式））はとてもよく似る（第16群）。これらとNo.3（撚糸文系（稲荷台式））は比較的似る（第15群）。

また、No.4（撚糸文系（稲荷台式））とNo.6（押型文系）はとてもよく似る（第19群）。

###### ・下根田遺跡（木更津市・分析No.7～12）

No.7～9、12は押型文系、No.10、11は三戸式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.10、11（いずれも三戸式）は比較的似る（第16群、第15群）。No.7～9、12（いずれも押型文系）はこれらとは異なるが、ばらばらでまとまらない（第19群、第27群、第22群、第29群）。

大粒粒子の観察では、No.8（押型文系）は表面風化した雲母類が目立ち、特徴的であった。

###### ・南河原坂遺跡（千葉市・分析No.13～16）

No.13～16いずれも早期末の土器である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果No.14、16（いずれも早期末）はとてもよく似る（第28群）。これらとNo.13（早期末）は比較的似る（第27群）。No.15（早期末）は他の3点とは大きく異なる（第19群）。

大粒粒子の観察では、No.13（早期末）は骨針状物質が認められた。



・ 辺田山谷遺跡（千葉市・分析No.17～24）

No.17は捺糸文系（花輪台式）、No.18～20は三戸式、No.21、22は無文系（三戸式並行）、No.23、24は押型文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.17（捺糸文系（花輪台式））とNo.22（無文系（三戸式並行））はととてもよく似る（第15群）。これらとNo.24（押型文系）は比較的よく似る（第17群）。

No.18（三戸式）は $K_2O$ 含有量が極端に高く（3.4wt%）、異質である。主成分元素組成値のクラスター分析の結果をみても他と大きく異なることが理解できる。

・ 東峰御幸畑西遺跡（成田市・分析No.25～33）

No.25～28は捺糸文系（稲荷台式）、No.29は捺糸文系（花輪台式）、No.30～33は押型文系である。

No.25、27（いずれも捺糸文系（稲荷台式））とNo.29（捺糸文系（花輪台式））はととてもよく似る（第15群）。これらとNo.28（捺糸文系（稲荷台式））は比較的似る（第17群）。また、No.26（捺糸文系（稲荷台式））とNo.32（押型文系）はととてもよく似る。

大粒粒子の観察によれば、本遺跡出土の押型文系にはNo.30、32をはじめ、大粒の雲母類が目立つものが散見される。No.32は雲母類とともに花崗岩片も認められた。雲母類（黒雲母や白雲母）は花崗岩をはじめとする酸性岩の主要な造岩鉱物であることから、単純に考えれば、No.32には酸性岩由来の大粒粒子が材料として用いられたことが推察される。一方、蛍光X線分析の結果、No.32の $SiO_2$ 含有量は比較的low（48.2wt%）、酸性岩由来の粘土をマトリックスとしている可能性は低い（酸性岩に多く含まれることが知られる $K_2O$ が比較的高い（1.3wt%）ことは注意を要する）。これらを統合すれば、No.32は、塩基性より（mafic）の粘土に酸性より（felsic）の混和材を混ぜた材料が用いられたことが予測される。これは同様に大粒の雲母類が多く認められたNo.30（酸性岩由来の粘土が用いられた可能性が高い）等とは異なる傾向といえる。ひとつの土器の胎土について、マトリックス（粘土等）と混和材の地球化学的な特性が大きく異なる縄文土器の事例について、筆者はかつていくつかの報告をしたことがある（建石・北田・小林・二宮2002他）。

・ 今郡カチ内遺跡（東庄町・分析No.34～42）

No.34～37は三戸式、No.38～41は無文系（三戸式並行）、No.42は押型文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.35、37（いずれも三戸式）はととてもよく似る（第8群）。また、No.34（三戸式）とNo.41（無文系（三戸式並行））はととてもよく似る（第9群）。これら二つのクラスターは比較的似る（第8群、第9群）。また、No.42（押型文系）とNo.38（無文系（三戸式並行））は比較的似る（第16群、第17群）。

・ 久我台遺跡（東金市・分析No.43～51）

No.43、44は捺糸文系（稲荷台式）、No.45、46は捺糸文系（花輪台式）、No.47～50は花輪台式並行の土器群、No.51は押型文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.43（捺糸文系（稲荷台式））、No.49、50（いずれも花輪台式並行）、No.51（押型文系）はととてもよく似る（第16群）。これらとNo.44（捺糸文系（稲荷台式））

は比較的似る（第15群）。また、No.45（撚糸文系（花輪台式））とNo.47（花輪台式並行）は比較的似る（第21群、第20群）。

・船尾白幡遺跡（印西市・分析No.52～57）

No.52～57はいずれも早期末の土器である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.54、55（いずれも早期末）はとてもよく似る（第17群）。また、No.52、53（いずれも早期末）はとてもよく似る（第19群）。

・東寺山石神遺跡（千葉市・No.58～63）

No.58、63は撚糸文系（花輪台式）、No.59、60は撚糸文系（稲荷台式）、No.61、62は押型文と撚糸文が組み合わさる土器である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.58（撚糸文系（花輪台式））、No.59、60（いずれも撚糸文系（稲荷台式））はとてもよく似る（第19群）。No.62（押型文+撚糸文）とNo.63（撚糸文系（花輪台式））は比較的似る（第16群、第15群）。

#### 4-2. 前期

・石揚遺跡（柏市・分析No.64～68）

No.64、65は木島式、No.66～68は花積下層式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.65（木島式）、No.66、67（いずれも花積下層式）はとてもよく似る（第20群）。No.64（木島式）は、今回の分析に供した他の本遺跡出土資料とは大きく異なる（第17群）。大粒粒子の観察ではこの資料のみ花崗岩片が認められた。

・幸田貝塚（松戸市・分析No.69～72）

No.69～71は木島式、No.72は花積下層式である。No.69～71は報告者により同一個体の可能性が指摘されている。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.69～71（木島式）はとてもよく似る（第6群）。これらとNo.72（花積下層式）は大きく異なる（第29群）。

本遺跡の比較的近隣（市川市）に所在する向台貝塚出土の木島式（No.73）は、本遺跡出土の木島式（No.69～72）ととてもよく似る（第6群）。

・向台貝塚（市川市・分析No.73～75）

No.73は木島式、No.74、75は花積下層式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.73（木島式）とNo.75（花積下層式）は比較的似るとされるが、個々の元素毎にさらに詳しい検討を加えれば、この二つの資料の間の地球化学的な類似性は決して高くないことが理解できる。No.73（木島式）とNo.75（花積下層式）について、 $\text{SiO}_2$ と $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の含有量比（ $\text{SiO}_2/\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）を検討すると、それぞれ地球化学的特性を異にする粘土が用いられた可能性が高い。すなわち、No.73は62.6wt%/4.4wt%、No.75は55.4wt%/9.2wt%と、No.73の方が明らかに酸性より（felsic）

の母岩に由来する粘土が用いられていることが理解できる。No.73のK<sub>2</sub>O含有量が比較的高い(1.5wt%)こともこの傾向とよく調和する。

本遺跡の比較的近隣(松戸市)に所在する幸田貝塚出土の木島式(No.69~72)が、本遺跡出土の木島式(No.73)ととてもよく似る(第6群)こともあわせて考えれば、No.73(木島式)とNo.75(花積下層式)の類似性に言及するより、むしろNo.73を含む第6群のまとまりに注目する方が数段合理的であり、重要であるといえる。

・**庚塚遺跡**(市川市・分析No.76~80)

No.76、77は北白川下層Ⅱb式、No.78~80は諸磯a式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.76、77(いずれも北白川下層Ⅱb式)はとてもよく似る(第8群)。また、No.79、80(いずれも諸磯a式)はとてもよく似る(第22群)。No.78(諸磯a式)は、今回分析に供した他の同遺跡出土資料とは大きく異なる(第2群)。

・**法華寺山遺跡**(船橋市・分析No.81~84)

No.81は北白川下層Ⅰ式、No.82、83は黒浜式、No.84は浮島式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.82(黒浜式)とNo.84(浮島式)はとてもよく似る(第7群)。この2点は繊維の有無を含め、胎土の肉眼観察による印象は随分と異なり、興味深い。これらとNo.81(北白川下層Ⅰ式)はこの分析結果では比較的似る(第6群)とされるが、先の向台貝塚における検討と同様、第6群と第7群の地球化学的な類似性については熟慮が必要である。向台貝塚例ほどではないが、第6群に含まれるNo.81(北白川下層Ⅰ式)は、第7群に含まれるNo.82、84と比べ、酸性岩に多く含有するK<sub>2</sub>Oが多い点は注意される。

・**五味ノ木遺跡**(千葉市・分析No.85~87)

No.85、86は諸磯b式、No.87は北白川下層式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.85、86(いずれも諸磯b式)、No.87(北白川下層式)は全体にばらばらでまとまらない傾向がみてとれる(第29群、第13群、第7群)。

・**有吉北貝塚**(千葉市・分析No.88~91)

No.88、89は北白川下層Ⅱc式、No.90は諸磯a式、No.91は諸磯b式である。No.88・89は、報告者により同一個体の可能性が指摘されている。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、全体にばらばらでまとまらない傾向がみてとれる(第6群、第8群、第4群、第5群)。No.88、89(いずれも北白川下層Ⅱc式)もまとまらないが、それぞれ他遺跡出土の非在地系土器(北白川下層式、木島式等)と同一のクラスターを形成する。No.88は、幸田貝塚出土の木島式(No.69~71)、向台貝塚出土の木島式(No.73)、法華寺山遺跡出土の北白川下層Ⅰ式(No.81)ととてもよく似る(第6群)。No.89は、庚塚遺跡出土の北白川下層Ⅱb式(No.76、77)、バクチ穴遺跡出土の北白川下層Ⅱc式(No.92)等ととてもよく似る(第8群)。大木式(No.102、107、108)等もこれと同一のクラスターに含まれるが、型式学的特性等を鑑みれば、これらとは「他人のそら似」である可能性

も考慮する必要がある。ここではこれ以上の考察はひかえたい。

なお、本遺跡出土資料としては中期土器群も分析を実施した。No.91（諸磯b式）とNo.159（加曾利E2式）はととてもよく似るが、それ以外の前期資料と中期資料の間には類似性の高い資料は見当たらなかった。

・バクチ穴遺跡（千葉市・分析No.92～95）

No.92、93は北白川下層Ⅱc式、No.94は諸磯a式、No.95は諸磯b式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、全体にばらばらでまとまらない傾向がみてとれる（第8群、第2群、第4群、第14群）。No.92（北白川下層Ⅱc式）は、他遺跡出土の北白川下層式（No.76、77、89）等ととてもよく似る（第8群）。

・中山新田Ⅰ遺跡（柏市・分析No.96～101）

No.96は大木2式、No.97は関山Ⅱ式、No.98は黒浜式、No.99、100は諸磯b式、No.101は前期末～中期初頭の土器である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.96（大木2式）、No.97（関山Ⅱ式）、No.99、100（いずれも諸磯b式）はととてもよく似る（第17群）。また、No.98（黒浜式）とNo.101（前期末～中期初頭）はととてもよく似る（第14群）。

・龍角寺ニュータウン遺跡群No.4（栄町・分析No.102～105）

No.102は大木6式、No.103は諸磯b式、No.104、105は興津式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、全体にばらばらでまとまらない傾向がみてとれる（第8群、第25群、第14群、第15群）。ただし、No.104、105（いずれも興津式）は、CaOの含有量が異なる（0.1wt%と0.3wt%）こと等に起因し、大きく異なるクラスターに分類されるが、これ以外の元素の含有傾向はよく似ており、一定程度の資料間における類似性を指摘してよいものとする。Caは今回検討した元素の中では水との親和性が比較的高く、堆積環境の中で溶脱しやすいことが知られている。

No.102（大木6式）は木戸先遺跡出土の大木2式（No.107、108）等ととてもよく似る（第8群）。

・木戸先遺跡（四街道市・分析No.106～111）

No.106～108は大木2式、No.109～111は黒浜式である。No.106～108は報告者により同一個体の可能性が指摘されている。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.107、108（いずれも大木2式）はととてもよく似る（第8群）。また、No.106（大木2式）とNo.111（黒浜式）はととてもよく似る（第17群）。また、No.109、110（いずれも黒浜式）はととてもよく似る（第13群）。

No.107、108（いずれも大木2式）は龍角寺ニュータウン遺跡群No.4出土の大木6式（No.102）等ととてもよく似る（第8群）。

・門脇遺跡（市原市・分析No.112～115）

No.112は前期大木式系、No.113は前期末～中期初頭の土器、No.114、115は浮島Ⅱ式である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.112（大木式）とNo.114（浮島Ⅱ式）はとてもよく似る（第15群）。また、No.113（前期末）とNo.115（浮島Ⅱ式）は比較的似る（第1群、第2群）。

・白井大宮台貝塚（香取市・分析No.116～118）

No.116は大木5式、No.117、118は前期末～中期初頭の土器である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、全体にばらばらでまとまらない傾向がみてとれる（第2群、第4群、第9群）。

なお、本遺跡出土資料としては中期土器群も分析を実施した。No.118（前期末～中期初頭）、No.126、127（いずれも連弧文系）、No.129（曾利式系）はとてもよく似る（第4群）。

・大谷台遺跡（東金市・分析No.119～124）

No.119～121は前期大木式系、No.122、123は諸磯a式、No.124は浮島式である。No.119～121は報告者により同一個体の可能性が指摘されている。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.120（前期大木式系）、No.123（諸磯a式）、No.124（浮島式）はとてもよく似る（第13群）。また、No.121（前期大木式系）とNo.122（諸磯a式）は比較的似る（第26群、第25群）。

#### 4.3. 中期

・白井大宮台貝塚（香取市・分析No.125～129）

No.125は加曾利E 3式、No.126、127は連弧文系、No.128、129は曾利式系である。

主成分元素のクラスター分析結果によれば、No.126、127（いずれも連弧文系）、No.129（曾利式系）はとてもよく似る（第4群）。

なお、本遺跡出土資料としては前期土器群も分析を実施した。No.126、127（いずれも連弧文系）、No.129（曾利式系）とNo.118（前期末～中期初頭）はとてもよく似る（第4群）。

・粟島台遺跡（銚子市・分析No.130～137）

No.130～132は曾利式系、No.133、135は連弧文系、No.134は連弧文系と加曾利E式（古）の折衷、No.136は加曾利E 2式、No.137は加曾利E 3式である。

主成分元素のクラスター分析結果によれば、No.131、132（いずれも曾利式系）、135（連弧文系）、No.136（加曾利E 2式）はとてもよく似る（第4群）。また、No.130（曾利式系）とNo.133（連弧文系）はとてもよく似る（第21群）。

・居合台遺跡（芝山町・分析No.138～144）

No.138、143は加曾利E 3式（No.143は条線地文）、No.139は連弧文系、No.140～142、144は曾利式系である。

主成分元素のクラスター分析結果によれば、No.140、141（いずれも曾利式系）はとてもよく似る（第21群）。これとNo.138（加曾利式E 3式）は比較的似る（第20群）。

・堀込（和良比）遺跡（四街道市・分析No.145～153）

No.145、153は加曾利E 2式、No.147、151は加曾利E 2～3式、No.146、150、152は曾利式系、No.148は連弧文系、No.149は中期大木式系である。

主成分元素のクラスター分析結果によれば、No.149（中期大木式系）、No.152（曾利式系）はとてもよく似る（第16群）。また、No.145（加曾利E 2式）、No.146（曾利式系）、No.148（連弧文系）、No.153（加曾利E 式）はとてもよく似る（第19群）。

・有吉北貝塚（千葉市・分析No.154～160）

No.154は加曾利E 2～3式、No.159は加曾利E 2式、No.155、156、160は曾利式系、No.157は連弧文系、No.158は「船元式」である。

主成分元素のクラスター分析結果によれば、全体にばらばらでまとまらない傾向がみてとれる（第18群、第20群、第27群、第26群、第11群、第5群、第23群）。

K<sub>2</sub>Oの含有量に注目すると、No.158（「船元式」）は1.7wt%と大変多く、他と比べ異質であるといえる。この傾向は、主成分元素組成値のクラスター分析の結果、この資料と最も類似性が高い（第11群）とされたNo.139（居合台遺跡出土・連弧文系）と共通するが、両者はSiO<sub>2</sub>含有量等が異なり、No.158の胎土は今回分析に供した203点の中では「孤高の存在」ということができる。

なお、本遺跡出土資料としては前期土器群も分析を実施した。No.159（加曾利E 2式）とNo.91（諸磯b式）はとてもよく似る（第5群）が、それ以外の中期資料と前期資料の間には類似性の高い資料は見当たらなかった。

・野口（海保野口）遺跡（市原市・分析No.161～168）

No.161、168は曾利式系、No.162、163は加曾利E 2～3式、No.164、165は加曾利E 3式、No.166、167は連弧文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.162、163（いずれも加曾利E 2～3式）はとてもよく似る（第19群）。また、No.166（連弧文系）、No.168（曾利式系）はとてもよく似る（第13群）。これとNo.164（加曾利E 3式）は比較的似る（第14群）。

・久野遺跡（木更津市・分析No.169～174）

No.169～171は曾利式系、No.172、173は加曾利E 3式、No.174は連弧文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.170、171（いずれも曾利式系）、No.172（加曾利E 3）はとてもよく似る（第19群）。No.173（加曾利E 3式）は今回分析に供した他の本遺跡出土資料とは大きく異なる（第29群）。この資料の大粒粒子には骨針状物質が認められる。

・伊豆山台遺跡（木更津市・分析No.175～184）

No.175、180は加曽利E 3式、179は加曽利E 2～3式、No.182は加曽利E1式、183は加曽利E式古、No.176は連弧文系、No.177は「咲畑式類似」、No.178、181、184は曾利式系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.176（連弧文系）、No.178（曾利式系）、No.180（加曽利E 3式）、No.182（加曽利E式古）はととてもよく似る（第19群）。これらとNo.181（曾利式系）は比較的似る（第18群）。また、No.183（加曽利E式古）とNo.184（曾利式系）はととてもよく似る（第20群）。また、No.175（加曽利E 3式）とNo.179（加曽利E 2～3式）は比較的似る（第17群、第16群）。No.177（「咲畑式類似」）は今回分析に供した他の本遺跡出土資料とは大きく異なる（第27群）。

No.179（加曽利E 2～3式）の大粒粒子には骨針状物質が認められる。

・市場台遺跡（大多喜町・分析No.185～188）

No.185、186は加曽利E 3式、No.187、188は曾利式系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.185、186（いずれも加曽利E 3式）、No.187（曾利式系）はととてもよく似る（第1群）。No.188（曾利式系）はこれらとは大きく異なる（第21群）。

・土島田遺跡（大多喜町・分析No.189～191）

No.189は加曽利E 2式、No.190、191は曾利式系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、全体にばらばらでまとまらない傾向がみとれる（第14群、第27群、第28群）。

・深名（深名瀬畠）遺跡（南房総市・分析No.192～203）

No.192、194、196～199は曾利式系、No.193は曾利式系（加曽利E式との折衷）、No.195は加曽利E 2式、No.200は加曽利E 2～3式、201は加曽利E 2式、No.202、203は連弧文系である。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.200（加曽利E 2～3式）とNo.203（連弧文系）はととてもよく似る（第1群）。また、No.193（曾利式系（折衷））、No.194（曾利式系）、No.195（加曽利E 2式）はととてもよく似る（第3群）。また、No.196、198（いずれも曾利式系）はととてもよく似る（第4群）。第3群と第4群は比較的似る。また、No.197（曾利式系）とNo.201（加曽利E 2式）はととてもよく似る（第5群）。

本遺跡では今回分析を行なった遺跡の中で最も多く胎土中の大粒粒子に骨針状物質が認められた（No.196、197（いずれも曾利式系）、No.202（連弧文系））。主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、これら3点はばらばらでまとまらない（第4群、第5群、第14群）。先に述べたとおり、むしろ、No.196（曾利式系）は同様の特徴が認められないNo.198（曾利式系）と、No.197（曾利式系）は同様の特徴が認められないNo.201（加曽利E 2式）ととてもよく似る（第4群、第5群）。

第6表(1) 千葉県内出土縄文土器の胎土分析結果 (wt%)

分析No	遺跡名	所在地	大別時期	型式	図版No	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	大粒粒子
1	和良比長作No.2	四街道市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図39	2.3	29.2	60.0	0.8	0.6	1.7	0.0	5.5	wg、Q、bg
2	和良比長作No.2	四街道市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図40	2.7	29.1	57.3	0.9	0.4	1.5	0.1	8.0	wg、Q
3	和良比長作No.2	四街道市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図41	1.8	27.6	63.3	0.6	0.3	1.3	0.0	5.1	wg、rg、Q
4	和良比長作No.2	四街道市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図42	2.6	30.9	56.2	0.5	0.6	1.7	0.1	7.3	wg、Q
5	和良比長作No.2	四街道市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図43	2.3	28.3	61.5	0.9	0.4	1.7	0.0	4.8	wg、Q
6	和良比長作No.2	四街道市	早期	押型紋	81図44	2.4	31.1	57.0	0.6	0.5	2.0	0.0	6.4	wg、rg、Q
7	下根田	木更津市	早期	押型紋	80図7	2.2	31.3	55.9	0.4	0.6	1.6	0.1	7.9	wg、Q、rg
8	下根田	木更津市	早期	押型紋	80図8	2.2	34.2	40.5	0.7	2.2	1.6	0.1	18.4	Mi-w、wg、Q
9	下根田	木更津市	早期	押型紋	80図9	2.7	32.2	56.2	1.3	0.3	0.9	0.4	6.0	wg
10	下根田	木更津市	早期	三戸式	80図10	2.3	27.3	59.3	1.0	0.5	1.6	0.1	7.9	wg、Q、bg
11	下根田	木更津市	早期	三戸式	80図11	2.3	28.0	62.5	0.6	0.5	1.6	0.0	4.4	wg、Q
12	下根田	木更津市	早期	押型紋	80図12	2.5	27.6	52.2	1.2	0.3	1.7	0.2	14.4	wg、Q
13	南河原坂	千葉市	早期	早期末葉	81図54	1.1	30.7	45.1	0.4	1.0	1.5	0.1	20.0	骨針、wg、bg
14	南河原坂	千葉市	早期	早期末葉	81図55	0.8	29.2	46.8	0.1	1.0	1.8	0.3	20.0	wg、Q、bg
15	南河原坂	千葉市	早期	早期末葉	81図56	2.5	31.2	55.4	0.7	0.5	2.1	0.2	7.4	wg、bg、rg
16	南河原坂	千葉市	早期	早期末葉	81図57	1.0	30.5	48.2	0.7	0.2	1.5	0.4	17.5	wg、bg、rg
17	辺田山谷	千葉市	早期	撚糸紋(花輪台式)	80図13	2.4	29.1	60.6	0.4	0.9	1.5	0.1	4.9	wg、Q、Mi-f
18	辺田山谷	千葉市	早期	三戸式	80図14	2.8	27.9	59.6	3.4	0.5	1.0	0.0	4.7	wg、Gr、bg
19	辺田山谷	千葉市	早期	三戸式	80図15	3.3	27.9	58.7	1.9	0.7	1.1	0.0	6.4	wg、Q、bg
20	辺田山谷	千葉市	早期	三戸式	80図16	1.8	28.0	61.0	0.5	0.6	1.3	0.1	6.7	wg、Q、bg
21	辺田山谷	千葉市	早期	無紋(三戸式併行)	80図17	0.1	31.5	54.9	0.6	0.1	1.8	0.1	10.8	wg、bg、Q
22	辺田山谷	千葉市	早期	無紋(三戸式併行)	80図18	2.0	27.4	63.8	0.7	0.5	1.6	0.0	4.0	wg、bg
23	辺田山谷	千葉市	早期	押型紋	80図19	3.1	23.8	63.4	1.1	1.4	1.0	0.1	6.1	wg、Q、Mi-w
24	辺田山谷	千葉市	早期	押型紋	80図20	3.2	26.2	60.0	0.8	1.2	1.2	0.0	7.3	wg、bg
25	東峰御幸畑西	成田市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	80図21	2.4	25.1	65.3	0.5	0.4	1.3	0.0	5.0	wg、bg、rg、Q
26	東峰御幸畑西	成田市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	80図22	0.6	28.5	58.9	1.0	0.2	1.5	0.3	9.1	wg、bg
27	東峰御幸畑西	成田市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	80図23	1.7	29.2	63.5	0.6	0.3	1.8	0.1	2.8	wg、Q、bg
28	東峰御幸畑西	成田市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	80図24	2.1	28.1	60.9	0.7	0.5	1.8	0.0	5.9	wg、bg、rg、Q
29	東峰御幸畑西	成田市	早期	撚糸紋(花輪台式)	80図25	1.8	28.4	63.3	1.0	0.3	2.0	0.0	3.2	wg、Q、bg
30	東峰御幸畑西	成田市	早期	押型紋	80図26	0.8	21.1	60.7	1.0	2.1	1.2	0.1	13.0	Mi-f&w、wg、bg、Q
31	東峰御幸畑西	成田市	早期	押型紋	80図27	0.4	28.9	61.1	1.0	0.3	0.9	0.0	7.4	wg、rg、Q、bg
32	東峰御幸畑西	成田市	早期	押型紋	80図28	2.9	29.0	48.2	1.3	0.6	1.3	0.2	16.3	Mi-f&w、wg、Gr、bg
33	東峰御幸畑西	成田市	早期	押型紋	80図29	4.6	27.2	49.3	0.3	1.2	1.1	0.1	16.2	wg、Mi-w、bg、rg、wg
34	今郡カチ内	東庄町	早期	三戸式	80図30	0.4	23.3	65.8	1.2	0.5	1.2	0.0	7.6	wg、Q
35	今郡カチ内	東庄町	早期	三戸式	80図31	1.8	24.4	65.6	1.2	0.4	1.4	0.0	5.1	wg、rg、Q
36	今郡カチ内	東庄町	早期	三戸式	80図32	2.3	27.5	60.1	0.8	0.4	1.2	0.2	7.6	wg、Q、rg、bg
37	今郡カチ内	東庄町	早期	三戸式	80図33	2.2	27.5	62.3	1.3	0.4	1.4	0.0	4.9	wg、Q、bg、rg
38	今郡カチ内	東庄町	早期	無紋(三戸式併行)	80図34	2.8	28.0	59.4	1.2	0.6	1.0	0.0	7.0	wg、rg、Q、bg
39	今郡カチ内	東庄町	早期	無紋(三戸式併行)	80図35	2.6	32.4	56.5	0.5	0.3	1.5	0.0	6.1	wg、Q、bg
40	今郡カチ内	東庄町	早期	無紋(三戸式併行)	80図36	0.0	25.1	62.3	0.7	0.2	1.6	0.1	10.1	wg、Q、bg
41	今郡カチ内	東庄町	早期	無紋(三戸式併行)	80図37	1.9	30.1	57.9	1.5	0.3	1.1	0.0	7.1	wg、bg
42	今郡カチ内	東庄町	早期	押型紋	80図38	2.2	28.5	60.2	1.1	0.5	1.8	0.0	5.6	wg、Gr、Q
43	久我台	東金市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図45	2.2	29.2	58.5	0.6	0.6	1.7	0.0	7.2	wg、bg、Q
44	久我台	東金市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	81図46	2.3	26.9	64.0	0.5	0.9	1.5	0.1	3.8	wg、Q、bg
45	久我台	東金市	早期	撚糸紋(花輪台式)	81図47	1.8	25.8	60.4	0.7	0.7	2.2	0.1	8.3	wg、Q、bg
46	久我台	東金市	早期	撚糸紋(花輪台式)	81図48	2.1	30.0	57.5	0.6	0.9	2.1	0.0	6.7	wg、Q、bg
47	久我台	東金市	早期	撚糸紋(花輪台式併行)	81図49	1.9	27.6	56.5	0.4	0.9	2.0	0.0	10.7	wg、Q、bg
48	久我台	東金市	早期	撚糸紋(花輪台式併行)	81図50	1.2	26.4	60.0	0.5	0.7	1.3	0.1	9.8	wg、Q、bg
49	久我台	東金市	早期	撚糸紋(花輪台式併行)	81図51	2.4	29.3	57.7	0.8	0.7	1.4	0.0	7.8	wg、bg
50	久我台	東金市	早期	撚糸紋(花輪台式併行)	81図52	2.1	27.4	58.2	1.0	0.9	2.2	0.0	8.2	wg、Q、bg
51	久我台	東金市	早期	押型紋	81図53	2.2	28.1	59.8	1.2	0.8	2.0	0.0	6.0	wg、Q、bg



第6表(2) 千葉県内出土縄文土器の胎土分析結果 (wt%)

分析 No	遺跡名	所在地	大別 時期	型式	図版 No	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	大粒粒子
52	船尾白幡	印西市	早期	早期末葉	81図58	1.7	28.3	57.9	0.8	0.4	1.9	0.1	8.9	wg、rg、bg
53	船尾白幡	印西市	早期	早期末葉	81図59	2.8	31.0	53.0	1.0	0.7	1.8	0.1	9.6	wg、bg
54	船尾白幡	印西市	早期	早期末葉	81図60	2.8	30.6	58.1	1.0	0.7	1.2	0.0	5.5	wg、Q、bg
55	船尾白幡	印西市	早期	早期末葉	81図61	2.2	29.1	59.5	1.0	0.6	1.3	0.0	6.4	wg、Q、bg
56	船尾白幡	印西市	早期	早期末葉	81図62	1.6	29.5	60.9	1.1	0.8	1.2	0.0	4.9	wg、bg、rg、Q
57	船尾白幡	印西市	早期	早期末葉	81図63	0.5	27.1	52.8	0.6	0.5	1.8	0.2	16.7	wg、bg
58	東寺山石神	千葉市	早期	撚糸紋(花輪台式)	80図3	2.0	31.1	58.4	0.6	1.1	1.5	0.0	5.4	wg、bg
59	東寺山石神	千葉市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	80図5	2.0	31.9	56.1	0.3	1.0	2.5	0.1	6.1	wg、Q、bg
60	東寺山石神	千葉市	早期	撚糸紋(稲荷台式)	80図4	2.4	31.2	58.9	0.4	1.0	1.8	0.1	4.2	bg、rg
61	東寺山石神	千葉市	早期	押型紋+撚糸紋	80図2	2.3	28.1	61.3	0.8	0.7	1.1	0.1	5.6	Q、bg、wg
62	東寺山石神	千葉市	早期	押型紋+撚糸紋	80図1	2.0	29.1	59.2	0.7	0.6	1.6	0.0	6.8	wg、bg
63	東寺山石神	千葉市	早期	撚糸紋(花輪台式)	80図6	2.1	26.8	64.0	0.5	1.1	1.7	0.0	3.8	Q、bg、rg
64	石揚	柏市	前期	木島式	9図3	3.0	28.1	62.0	1.1	0.5	1.5	0.0	3.7	wg、Gr、Q
65	石揚	柏市	前期	木島式	9図8	0.6	29.6	55.3	1.3	1.5	2.2	0.0	9.4	wg、Q
66	石揚	柏市	前期	花積下層式	9図41	0.3	29.4	58.4	0.9	0.5	1.7	0.0	8.9	wg、Q、bg
67	石揚	柏市	前期	花積下層式	9図42	1.5	27.6	57.5	1.0	0.3	1.7	0.0	10.4	wg、bg
68	石揚	柏市	前期	花積下層式	9図43	2.2	28.3	60.7	0.5	0.5	1.0	0.0	6.7	wg、Q、bg
69	幸田	松戸市	前期	木島式	11図6	1.7	26.5	62.9	1.2	2.3	1.3	0.0	4.1	wg、Q、Mi-w、bg
70	幸田	松戸市	前期	木島式	11図7	1.6	28.0	61.3	1.2	2.6	1.2	0.0	4.1	wg、bg、Q、rg
71	幸田	松戸市	前期	木島式	11図8	2.1	30.0	59.9	1.1	2.1	1.2	0.0	3.6	wg、bg、Mi-w、rg
72	幸田	松戸市	前期	花積下層式	11図9	2.2	30.8	56.5	0.7	0.9	1.1	0.1	7.7	wg、rg、bg
73	向台	市川市	前期	木島式	13図1	2.2	25.8	62.6	1.5	2.0	1.3	0.1	4.4	wg、Q
74	向台	市川市	前期	花積下層式	13図2	2.4	25.7	60.7	0.3	2.0	1.1	0.1	7.2	wg、Q
75	向台	市川市	前期	花積下層式	13図3	1.9	28.1	55.4	0.5	3.2	1.6	0.0	9.2	wg、Q
76	庚塚	市川市	前期	北白川下層Ⅱb式	18図1	3.4	25.0	65.1	1.3	1.2	0.6	0.0	3.3	wg、Q
77	庚塚	市川市	前期	北白川下層Ⅱb式	18図2	2.0	24.2	67.1	1.3	1.6	0.8	0.0	3.1	gg、rg、Q
78	庚塚	市川市	前期	諸磯a式	18図3	2.7	24.8	59.7	1.1	1.8	1.2	0.2	8.6	wg、Q
79	庚塚	市川市	前期	諸磯a式	18図4	2.1	28.0	52.7	1.2	2.2	1.1	0.5	11.4	wg、gg
80	庚塚	市川市	前期	諸磯a式	18図5	2.3	28.1	56.8	1.1	0.9	1.2	0.6	8.8	wg、Q
81	法蓮寺山	船橋市	前期	北白川下層Ⅰ式	19図1	1.8	29.0	58.6	1.1	2.5	1.4	0.0	5.6	wg、Q、bg
82	法蓮寺山	船橋市	前期	黒浜式	19図2	2.5	30.8	56.9	0.4	2.4	1.7	0.1	5.2	wg、bg、rg
83	法蓮寺山	船橋市	前期	黒浜式	19図3	2.1	31.6	48.3	0.2	3.6	1.2	0.5	12.5	rg、bg、wg
84	法蓮寺山	船橋市	前期	浮島式	19図4	2.3	28.8	57.6	0.7	1.8	1.2	0.1	7.6	wg、Q、bg
85	五味ノ木	千葉市	前期	諸磯b式	23図2	0.9	31.4	53.4	0.7	0.7	1.1	0.2	11.6	wg、Q、rg、bg
86	五味ノ木	千葉市	前期	諸磯b式	23図3	3.1	29.5	54.1	0.9	0.7	1.1	0.1	10.6	wg、bg、Q
87	五味ノ木	千葉市	前期	北白川下層式	23図1	2.6	28.5	50.8	0.9	2.1	1.2	0.1	13.8	wg、Mi-w、Gr
88	有吉北	千葉市	前期	北白川下層Ⅱc式	24図1	2.5	28.2	60.7	1.1	2.4	1.1	0.1	3.8	Gr、wg、bg
89	有吉北	千葉市	前期	北白川下層Ⅱc式	24図4	2.5	27.5	63.8	1.1	0.8	1.1	0.0	3.3	bg、Mi-w
90	有吉北	千葉市	前期	諸磯a式	24図8	1.4	23.1	66.0	0.8	2.0	0.8	0.1	5.8	bg、wg
91	有吉北	千葉市	前期	諸磯b式	24図9	2.7	21.4	59.4	0.4	3.9	1.0	0.1	11.1	wg、bg、rg
92	バクチ穴	千葉市	前期	北白川下層Ⅱc式	25図1	2.2	25.4	64.8	1.2	1.0	1.0	0.0	4.3	Gr、wg、Q
93	バクチ穴	千葉市	前期	北白川下層Ⅱc式	25図4	2.3	25.6	64.0	1.0	1.3	1.0	0.1	4.6	Gr、Q、bg、Mi-w
94	バクチ穴	千葉市	前期	諸磯a式	25図5	2.0	22.4	67.0	0.6	1.1	1.4	0.0	5.4	wg、Q、bg
95	バクチ穴	千葉市	前期	諸磯b式	25図6	1.7	24.2	60.2	0.3	0.8	1.2	0.2	11.3	wg、bg
96	中山新田Ⅰ	柏市	前期	大木2式	33図1	2.2	31.6	58.4	0.8	0.3	1.2	0.0	5.6	rg、wg、bg
97	中山新田Ⅰ	柏市	前期	関山Ⅱ式	33図2	2.8	28.7	60.1	0.6	0.4	1.3	0.0	6.0	wg、bg
98	中山新田Ⅰ	柏市	前期	黒浜式	33図3	2.5	28.5	59.8	0.6	0.2	1.2	0.1	7.1	wg、rg、Q
99	中山新田Ⅰ	柏市	前期	諸磯b式	33図4	3.0	26.1	58.1	0.8	0.6	1.2	0.1	10.1	wg、Q、bg、rg
100	中山新田Ⅰ	柏市	前期	諸磯b式	33図5	2.0	31.1	59.5	1.1	0.4	1.6	0.0	4.2	wg、Mi-f、Q
101	中山新田Ⅰ	柏市	前期	前期末葉～中期初頭	33図6	2.6	27.8	61.4	0.7	0.2	1.0	0.2	6.2	wg、bg、Q
102	龍角寺NTNo.4	栄町	前期	大木6式	38図1	1.8	26.7	63.4	1.8	0.3	1.2	0.0	4.8	wg、bg、Q

第6表(3) 千葉県内出土縄文土器の胎土分析結果 (wt%)

分析No	遺跡名	所在地	大別時期	型式	図版No	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	大粒粒子
103	龍角寺NTNo.4	栄町	前期	諸磯b式	38図2	4.2	26.1	51.9	0.3	1.7	1.6	0.1	14.1	wg、bg
104	龍角寺NTNo.4	栄町	前期	興津式	38図3	2.3	27.9	61.2	0.6	0.1	1.4	0.1	6.2	wg、rg、Q、bg
105	龍角寺NTNo.4	栄町	前期	興津式	38図4	2.2	26.0	62.2	0.5	0.3	1.3	0.0	7.6	wg、bg、rg、Q
106	木戸先	四街道市	前期	大木2b式	49図2	2.6	33.6	57.2	1.0	0.2	1.2	0.0	4.2	wg、Q
107	木戸先	四街道市	前期	大木2b式	49図3	2.0	27.0	64.7	1.5	0.4	1.2	0.0	3.1	wg、Q
108	木戸先	四街道市	前期	大木2b式	49図4	2.2	27.9	64.2	1.3	0.3	1.2	0.0	2.9	wg、Q
109	木戸先	四街道市	前期	黒浜式	49図7	2.2	28.9	59.0	0.7	0.5	0.8	0.0	8.0	wg、Q
110	木戸先	四街道市	前期	黒浜式	49図8	2.4	25.8	56.8	0.5	0.3	1.2	0.1	12.9	wg、Q
111	木戸先	四街道市	前期	黒浜式	49図9	2.6	28.5	59.5	0.8	0.5	1.2	0.0	6.9	wg、Q
112	門脇	市原市	前期	前期大木式系	51図1	2.3	28.1	62.2	0.7	0.4	1.4	0.0	4.9	wg、Q、bg
113	門脇	市原市	前期	前期末葉～中期初頭	51図2	1.8	24.0	62.0	1.2	0.1	1.4	0.1	9.3	wg、rg、Gr、br
114	門脇	市原市	前期	浮島Ⅱ式	51図3	1.7	24.6	63.5	0.6	0.6	1.3	0.0	7.7	wg、Q
115	門脇	市原市	前期	浮島Ⅱ式	51図4	2.8	24.9	63.2	0.8	0.8	1.5	0.1	5.9	wg、bg、Q
116	白井大宮台	香取市	前期	大木5式	54図1	2.1	24.2	63.8	0.9	1.5	1.4	0.2	5.8	wg、rg、Q、bg
117	白井大宮台	香取市	前期	前期末葉～中期初頭	54図2	1.3	26.9	62.7	1.2	0.5	0.9	0.0	6.5	wg、Q、bg、rg
118	白井大宮台	香取市	前期	前期末葉～中期初頭	54図3	2.1	21.9	65.2	1.0	2.1	1.1	0.0	6.5	wg、Q
119	大谷台	東金市	前期	前期大木式系	56図3	1.6	28.7	58.6	0.6	1.4	0.7	0.3	8.1	wg、bg、Q、rg
120	大谷台	東金市	前期	前期大木式系	56図5	1.5	29.7	56.7	0.5	1.0	0.7	0.1	9.7	wg、bg、Q、bg
121	大谷台	東金市	前期	前期大木式系	56図6	4.3	31.2	50.1	0.9	0.4	1.3	0.4	11.4	wg、Gr、bg、Q、rg
122	大谷台	東金市	前期	諸磯a式	56図7	5.6	25.5	51.5	0.3	1.2	1.6	0.1	14.3	wg、bg、rg
123	大谷台	東金市	前期	諸磯a式	56図8	2.5	27.7	56.5	0.3	0.1	1.1	0.0	11.7	rg、wg、骨針、bg
124	大谷台	東金市	前期	浮島式	56図9	2.5	29.7	55.4	0.7	0.5	1.0	0.1	10.1	wg、Q、bg、rg
125	白井大宮台	香取市	中期	加曾利E 3	84図1	0.0	26.9	60.0	0.5	2.8	1.3	0.5	7.9	wg、rg、Q
126	白井大宮台	香取市	中期	連弧文系	84図2	1.4	25.3	63.8	0.8	2.3	1.3	0.0	5.1	wg、Q、rg、bg
127	白井大宮台	香取市	中期	連弧文系	84図3	1.8	23.9	63.2	0.8	1.9	1.2	0.0	7.1	wg、rg、bg
128	白井大宮台	香取市	中期	曾利式系	84図4	2.0	29.1	54.4	0.7	2.1	1.3	0.0	10.4	wg、Q、bg、rg
129	白井大宮台	香取市	中期	曾利式系	84図5	1.1	23.6	65.1	0.8	1.7	1.5	0.0	6.0	wg、rg、bg
130	栗島台	銚子市	中期	曾利式系	84図6	0.1	24.9	59.4	0.6	1.1	1.8	0.0	12.1	wg、rg
131	栗島台	銚子市	中期	曾利式系	84図7	0.7	23.2	68.4	0.7	1.6	1.6	0.0	3.7	wg、Q
132	栗島台	銚子市	中期	曾利式系	84図8	1.3	24.4	64.9	0.7	1.5	1.6	0.0	5.5	wg、Q
133	栗島台	銚子市	中期	連弧文系	84図9	0.0	22.6	65.4	0.4	1.5	1.6	0.0	8.4	wg、Q
134	栗島台	銚子市	中期	連弧文系+加曾利E(古)	84図10	1.7	26.6	63.7	0.4	0.6	1.3	0.0	5.7	wg、Q
135	栗島台	銚子市	中期	連弧文系	84図11	1.2	24.2	68.3	0.8	1.6	1.1	0.0	2.9	wg、Q
136	栗島台	銚子市	中期	加曾利E 2	84図12	1.6	23.5	65.4	0.8	1.0	1.4	0.0	6.2	wg、Q
137	栗島台	銚子市	中期	加曾利E 3	84図13	1.4	26.6	60.5	0.6	1.4	0.8	0.0	7.6	wg、gg、Q
138	居合台	芝山町	中期	加曾利E 3	84図14	1.6	29.1	55.1	0.5	1.4	1.9	0.1	10.3	wg、Q
139	居合台	芝山町	中期	連弧文系	84図15	0.0	14.3	62.2	1.2	3.8	2.7	0.0	15.7	wg、Q
140	居合台	芝山町	中期	曾利式系	84図16	1.3	24.0	61.2	0.5	1.5	1.6	0.0	9.9	wg
141	居合台	芝山町	中期	曾利式系	84図17	1.7	25.0	62.0	0.4	1.2	1.8	0.0	7.8	wg、Q
142	居合台	芝山町	中期	曾利式系	84図18	1.3	25.0	63.3	0.7	1.5	1.5	0.0	6.8	wg、Q
143	居合台	芝山町	中期	加曾利E	84図19	1.7	28.4	57.2	1.5	1.2	1.3	0.1	8.5	wg、Q
144	居合台	芝山町	中期	曾利式系	84図20	1.4	27.9	57.0	1.2	1.9	1.3	0.0	9.2	wg、Q
145	堀込(和良比)	四街道市	中期	加曾利E 2	85図1	2.6	30.7	57.8	0.4	0.4	1.6	0.1	6.5	wg
146	堀込(和良比)	四街道市	中期	曾利式系	85図2	2.9	31.6	52.4	0.7	0.6	1.7	0.0	10.0	wg、rg
147	堀込(和良比)	四街道市	中期	加曾利E 2～3	85図3	0.0	25.8	58.5	0.4	0.4	1.7	0.0	13.2	wg、rg、Q
148	堀込(和良比)	四街道市	中期	連弧文系	85図4	1.9	33.8	53.9	0.4	0.4	1.5	0.1	8.0	wg
149	堀込(和良比)	四街道市	中期	大木式系	85図5	1.7	28.2	58.8	0.6	0.8	1.8	0.0	8.0	wg、Q
150	堀込(和良比)	四街道市	中期	曾利式系	85図6	1.9	24.8	60.3	0.7	1.0	1.3	0.0	10.0	wg、Q
151	堀込(和良比)	四街道市	中期	加曾利E 2～3	85図7	3.2	27.9	59.1	0.4	1.0	1.4	0.2	6.8	wg、Q
152	堀込(和良比)	四街道市	中期	曾利式系	85図8	2.1	30.2	56.4	0.9	0.7	1.6	0.0	8.0	wg、Q
153	堀込(和良比)	四街道市	中期	加曾利E	85図9	2.6	30.8	56.0	0.6	0.9	1.6	0.0	7.4	wg、Q

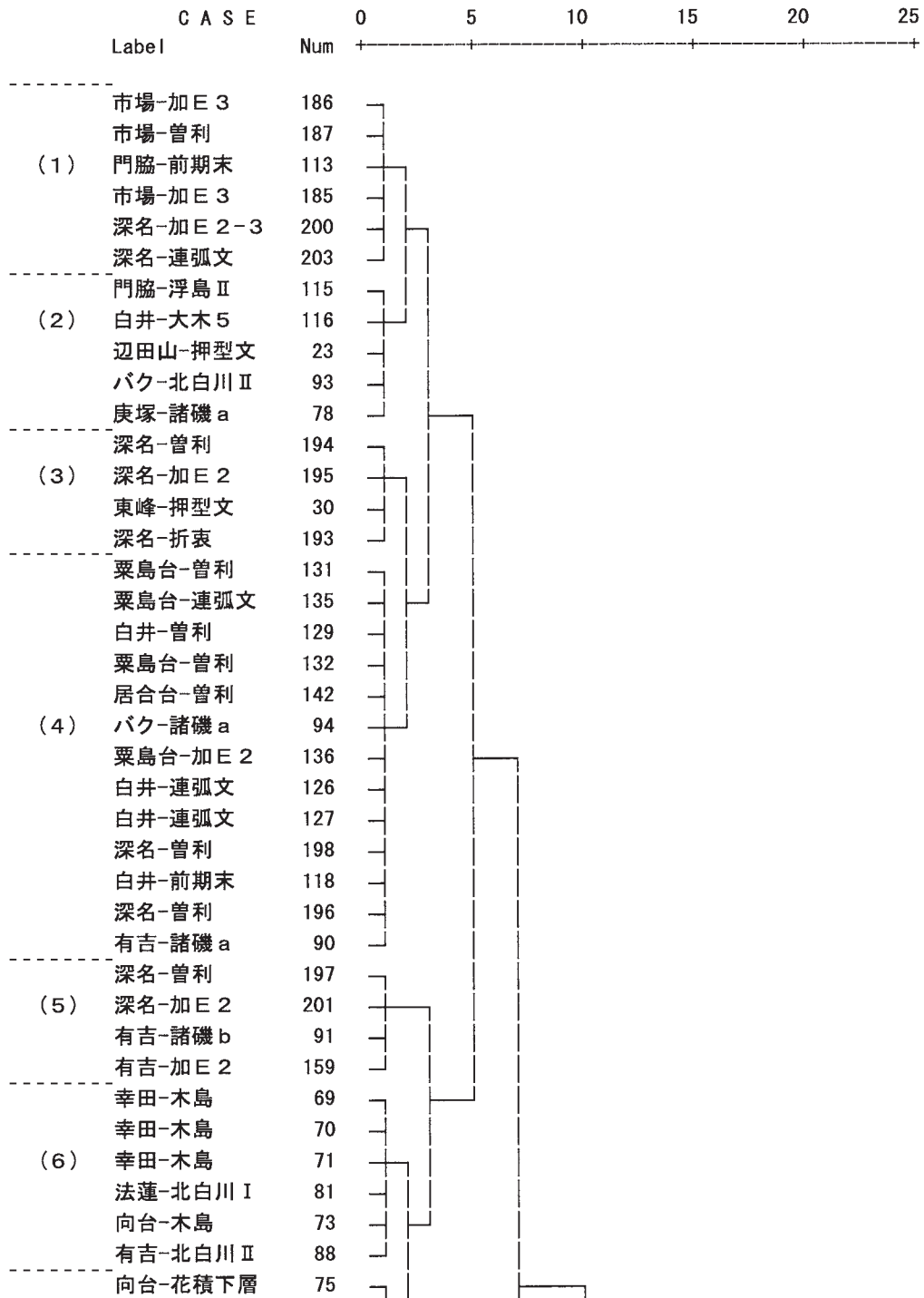
第6表(4) 千葉県内出土縄文土器の胎土分析結果 (wt%)

分析No	遺跡名	所在地	大別時期	型式	図版No	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	大粒粒子
154	有吉北	千葉市	中期	加曾利E 2～E 3	85図10	2.9	36.2	50.0	0.3	0.2	2.1	0.0	8.3	wg、rg、bg
155	有吉北	千葉市	中期	曾利式系	85図11	0.0	27.4	57.2	0.5	0.4	1.9	0.1	12.6	wg、rg、Q、bg
156	有吉北	千葉市	中期	曾利式系	85図12	0.6	33.4	48.7	0.3	0.4	2.1	0.0	14.4	wg、rg、bg
157	有吉北	千葉市	中期	連弧文系	85図13	4.4	31.3	53.5	0.3	0.4	1.1	0.2	8.7	wg、bg
158	有吉北	千葉市	中期	「船元式」	85図14	0.0	20.0	57.4	1.7	4.5	1.5	0.1	15.0	Mi-w、wg、bg
159	有吉北	千葉市	中期	加曾利E 2	85図15	1.7	25.1	59.8	0.3	4.1	1.2	0.0	7.7	wg、rg、bg
160	有吉北	千葉市	中期	曾利式系	85図16	0.6	25.4	59.3	0.4	2.8	1.8	0.5	9.2	wg、bg、rg、Q
161	野口(海保野口)	市原市	中期	曾利式系	85図17	2.3	26.2	61.8	0.9	0.5	1.3	0.0	7.0	wg、gg、Q
162	野口(海保野口)	市原市	中期	加曾利E 2～3	85図18	2.2	29.9	58.0	0.4	0.9	2.4	0.0	6.1	wg、Q
163	野口(海保野口)	市原市	中期	加曾利E 2～3	85図19	2.4	29.6	57.6	0.4	0.3	2.1	0.1	7.5	wg、gg
164	野口(海保野口)	市原市	中期	加曾利E 3	85図20	2.1	28.0	59.7	0.6	0.2	1.4	0.1	7.9	wg、Q、gg
165	野口(海保野口)	市原市	中期	加曾利E 3	85図21	1.4	25.3	62.7	0.6	0.7	1.9	0.0	7.3	wg、Q
166	野口(海保野口)	市原市	中期	連弧文系	85図22	2.1	28.6	57.3	0.6	0.4	1.3	0.1	9.6	wg、Q、gg
167	野口(海保野口)	市原市	中期	連弧文系	85図23	0.0	17.5	51.2	0.5	1.6	2.2	0.1	26.9	wg、Q
168	野口(海保野口)	市原市	中期	曾利式系	85図24	2.8	27.5	59.3	0.4	0.8	0.9	0.1	8.3	wg、gg
169	久野	木更津市	中期	曾利式系	86図1	0.8	34.5	46.6	0.7	0.4	1.3	0.1	15.5	wg、bg
170	久野	木更津市	中期	曾利式系	86図2	2.2	31.3	55.2	0.4	0.6	1.8	0.1	8.4	wg、bg、rg、Q
171	久野	木更津市	中期	曾利式系	86図3	2.3	29.6	57.8	0.4	0.3	1.8	0.1	7.6	wg、bg、Q
172	久野	木更津市	中期	加曾利E 3	86図4	3.0	32.1	55.0	0.6	0.4	1.8	0.2	7.0	wg、bg、Q
173	久野	木更津市	中期	加曾利E 3	86図5	2.0	31.8	52.1	1.2	0.3	1.3	0.1	11.1	wg、bg、rg、Q、骨針
174	久野	木更津市	中期	連弧文系	86図6	2.1	28.1	61.9	0.4	0.3	1.4	0.0	5.8	wg、rg、Q、bg
175	伊豆山台	木更津市	中期	加曾利E 3	86図7	3.1	26.8	60.4	1.0	0.2	0.9	0.0	7.5	wg、Q
176	伊豆山台	木更津市	中期	連弧文系	86図8	1.5	32.4	55.0	0.4	0.2	1.8	0.0	8.6	wg、Q
177	伊豆山台	木更津市	中期	「咲畑式類似」	86図9	2.5	30.6	48.1	0.4	0.4	1.4	0.1	16.5	wg
178	伊豆山台	木更津市	中期	曾利式系	86図10	1.7	31.2	57.8	0.7	0.4	1.7	0.1	6.5	wg、Q
179	伊豆山台	木更津市	中期	加曾利E 2～3	86図11	2.2	29.3	56.8	0.8	0.3	1.4	0.0	9.2	wg、骨針
180	伊豆山台	木更津市	中期	加曾利E 3	86図12	1.9	30.5	56.0	0.7	0.3	1.8	0.0	8.9	wg
181	伊豆山台	木更津市	中期	曾利式系	86図13	2.5	33.9	47.4	0.8	0.6	2.1	0.0	12.7	wg
182	伊豆山台	木更津市	中期	加曾利E 1	86図14	2.3	32.6	55.2	0.4	0.4	1.7	0.1	7.4	wg、Q
183	伊豆山台	木更津市	中期	加曾利E 古	86図15	1.9	28.8	53.8	0.6	0.9	1.7	0.0	12.4	wg
184	伊豆山台	木更津市	中期	曾利式系	86図16	1.6	29.3	54.0	0.8	0.3	1.7	0.0	12.3	wg、Q
185	市場台	大多喜町	中期	加曾利E 3	86図17	2.4	19.9	66.3	1.0	0.6	0.9	0.1	8.8	wg、Q
186	市場台	大多喜町	中期	加曾利E 3	86図18	1.9	22.9	62.0	1.0	0.7	1.1	0.0	10.4	wg
187	市場台	大多喜町	中期	曾利式系	86図19	1.8	23.4	61.3	1.0	0.8	1.0	0.0	10.6	wg、Q
188	市場台	大多喜町	中期	曾利式系	86図20	1.4	22.7	60.5	0.7	0.3	1.5	0.0	12.9	wg、Q
189	土島田	大多喜町	中期	加曾利E 2	86図21	1.9	25.5	59.2	0.7	0.5	1.5	0.2	10.5	wg、Q
190	土島田	大多喜町	中期	曾利式系	86図22	1.9	28.9	50.2	0.6	0.4	2.1	0.1	15.9	wg
191	土島田	大多喜町	中期	曾利式系	86図23	1.2	23.7	56.0	0.7	0.3	1.4	0.2	16.4	wg、Q
192	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系	87図1	1.9	22.8	62.5	0.5	1.6	1.4	0.1	9.3	wg、Q
193	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系(折衷)	87図2	0.9	17.3	66.0	1.6	2.9	1.4	0.0	9.9	gg、wg、Q
194	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系	87図3	0.9	21.0	66.1	1.2	1.9	2.0	0.0	6.9	wg、gg
195	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	加曾利E 2	87図4	1.4	22.5	66.0	1.0	2.9	1.5	0.0	4.8	wg、Q、Mi-f
196	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系	87図5	2.5	20.2	64.2	1.0	2.6	0.9	0.0	8.5	骨針、wg、rg
197	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系	87図6	2.7	19.5	62.5	0.5	2.6	0.9	0.1	11.1	wg、骨針、Q
198	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系	87図7	2.1	25.5	60.4	0.7	2.0	1.4	0.0	7.9	wg、Mi-w
199	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	曾利式系	87図8	2.3	26.8	58.6	0.3	1.7	0.7	0.0	9.6	wg、gg、Q
200	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	加曾利E 2～3	87図9	1.9	21.5	67.0	1.0	0.9	1.0	0.0	6.7	wg、Q、bg、rg
201	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	加曾利E 2	87図10	2.8	21.1	62.0	0.6	2.4	0.8	0.1	10.2	wg、gg、rg、Q
202	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	連弧文系	87図11	2.0	24.3	57.7	0.7	0.8	1.0	0.2	13.3	wg、骨針、Q
203	深名(深名瀬島)	南房総市	中期	連弧文系	87図12	1.6	19.8	66.3	1.0	0.6	1.4	0.0	9.2	wg、Q、gg

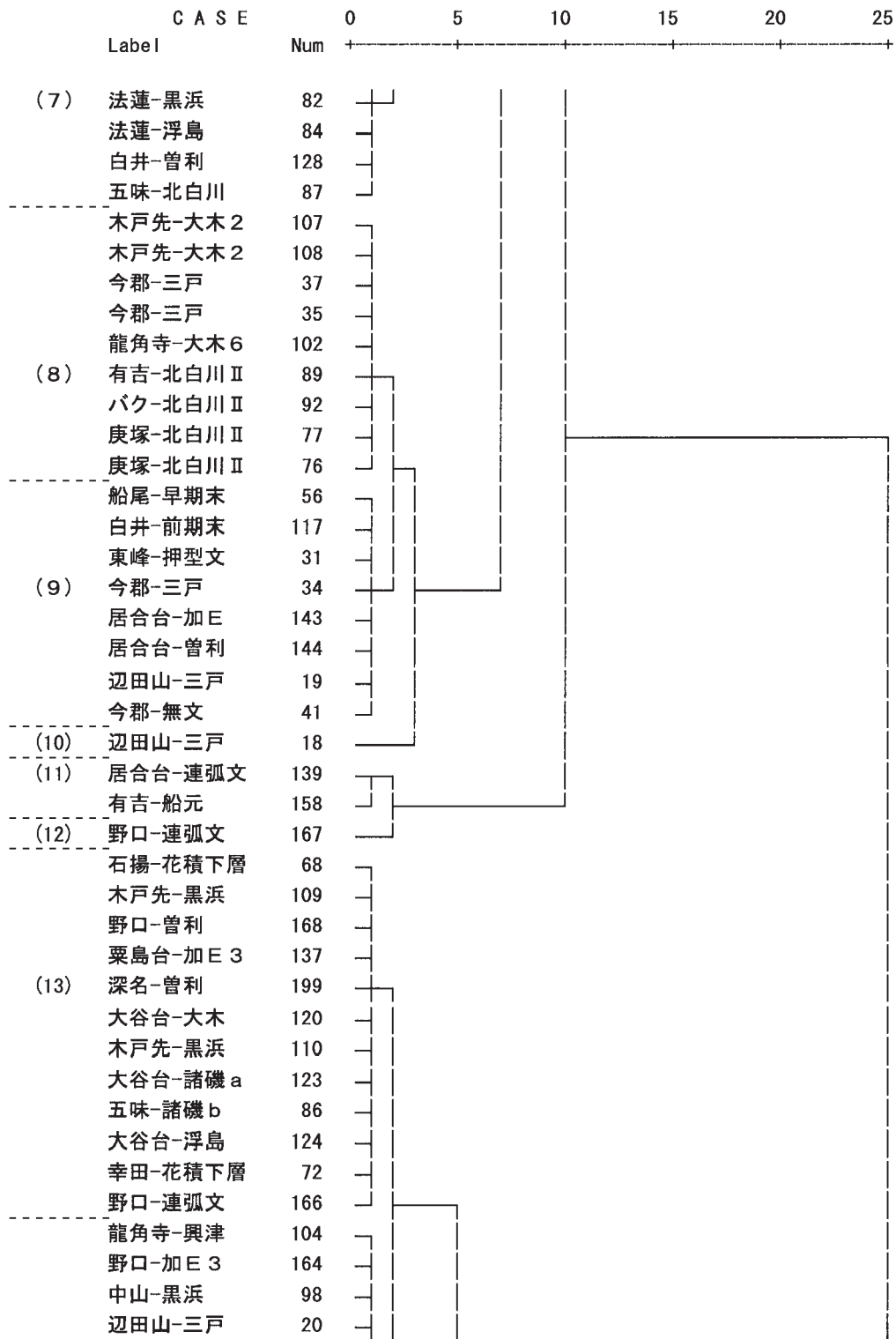
凡例(大粒粒子): wg(白色粒子)、bg(黒色粒子)、rg(赤色粒子)、gg(灰色粒子)、骨針(骨針状物質)  
Gr(花崗岩片)、Q(石英)、Mi-f(新鮮な雲母類)、Mi-w(表面が風化した雲母類)

Dendrogram using Ward Method

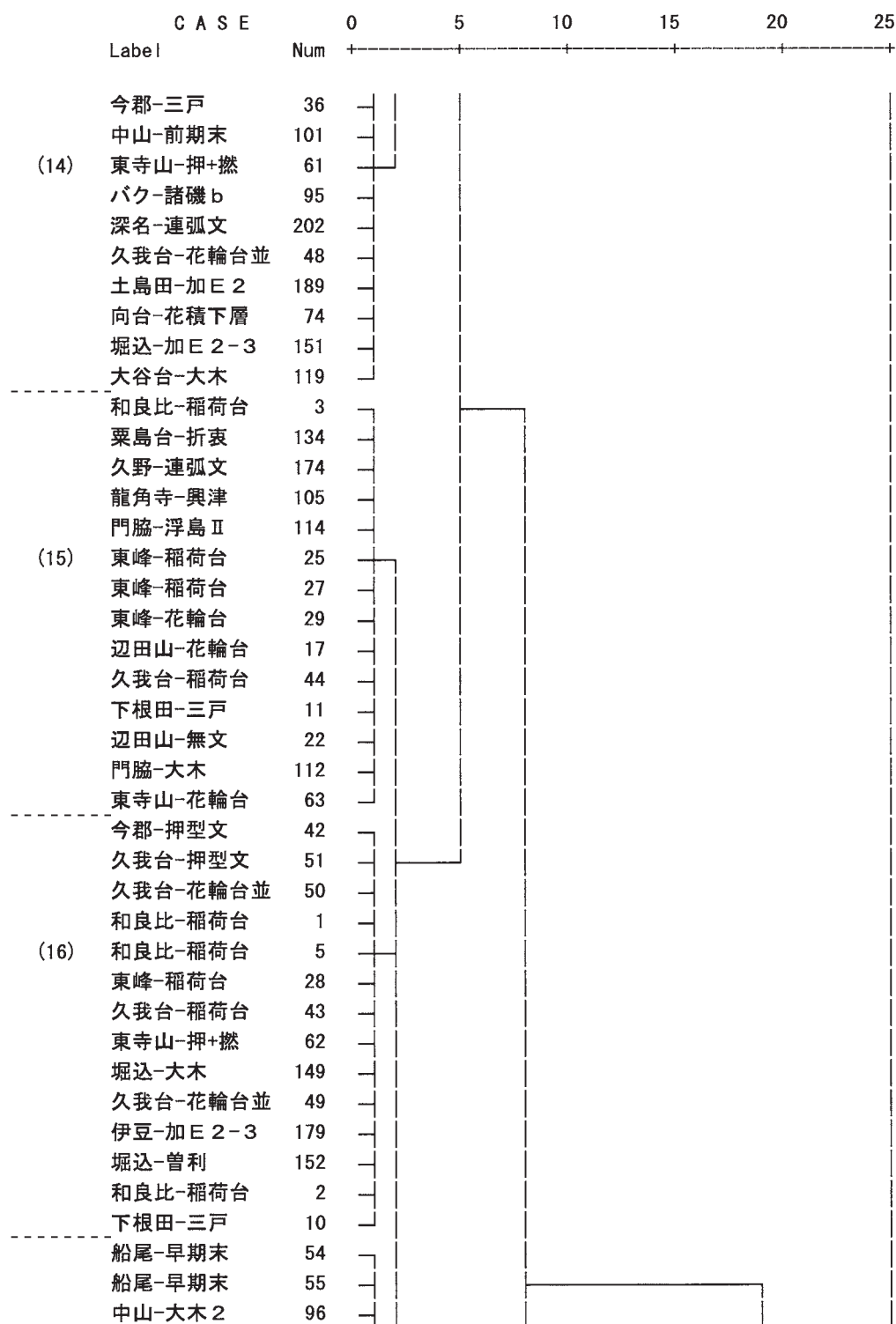
Rescaled Distance Cluster Combine



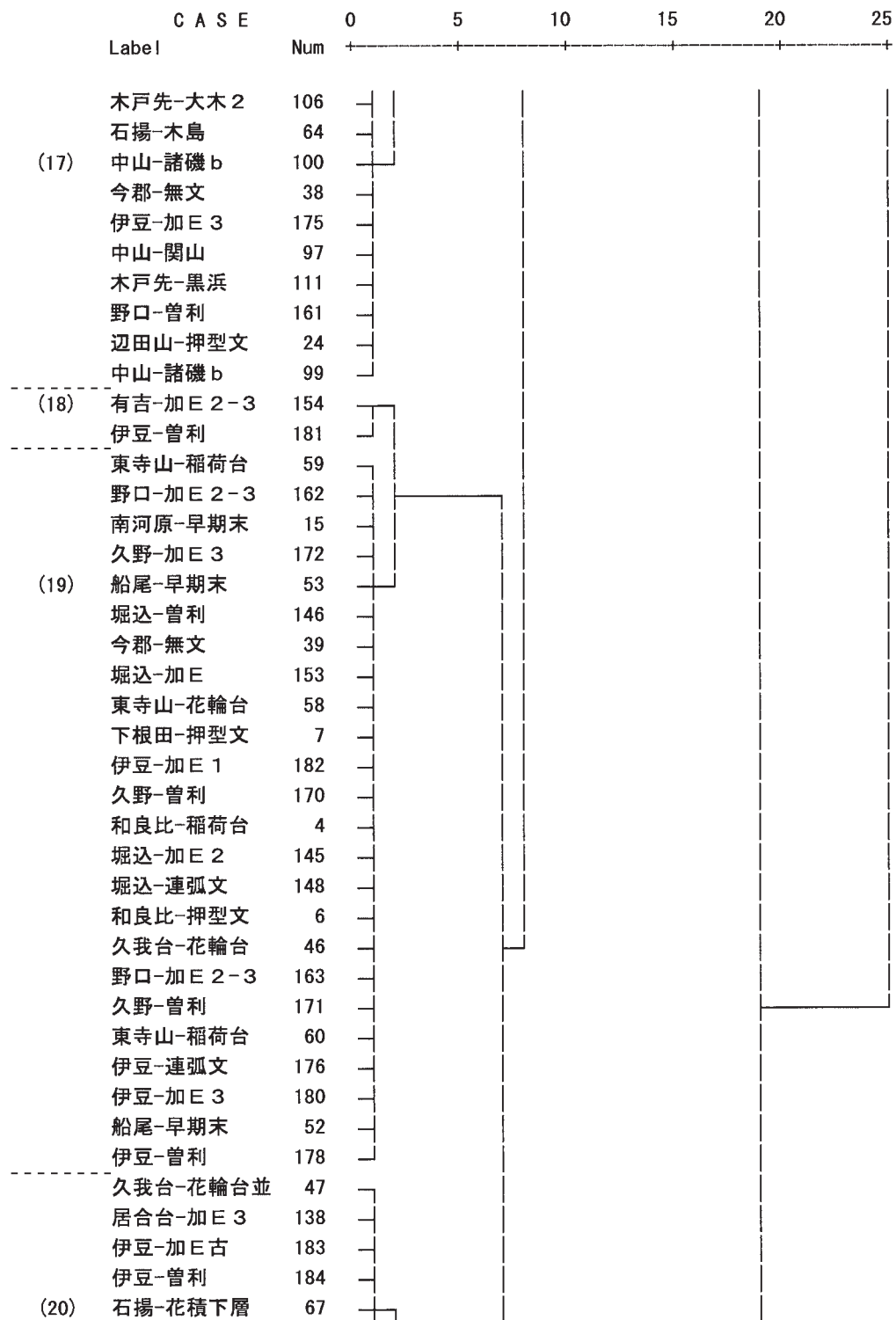
第88図(1) クラスター分析の結果



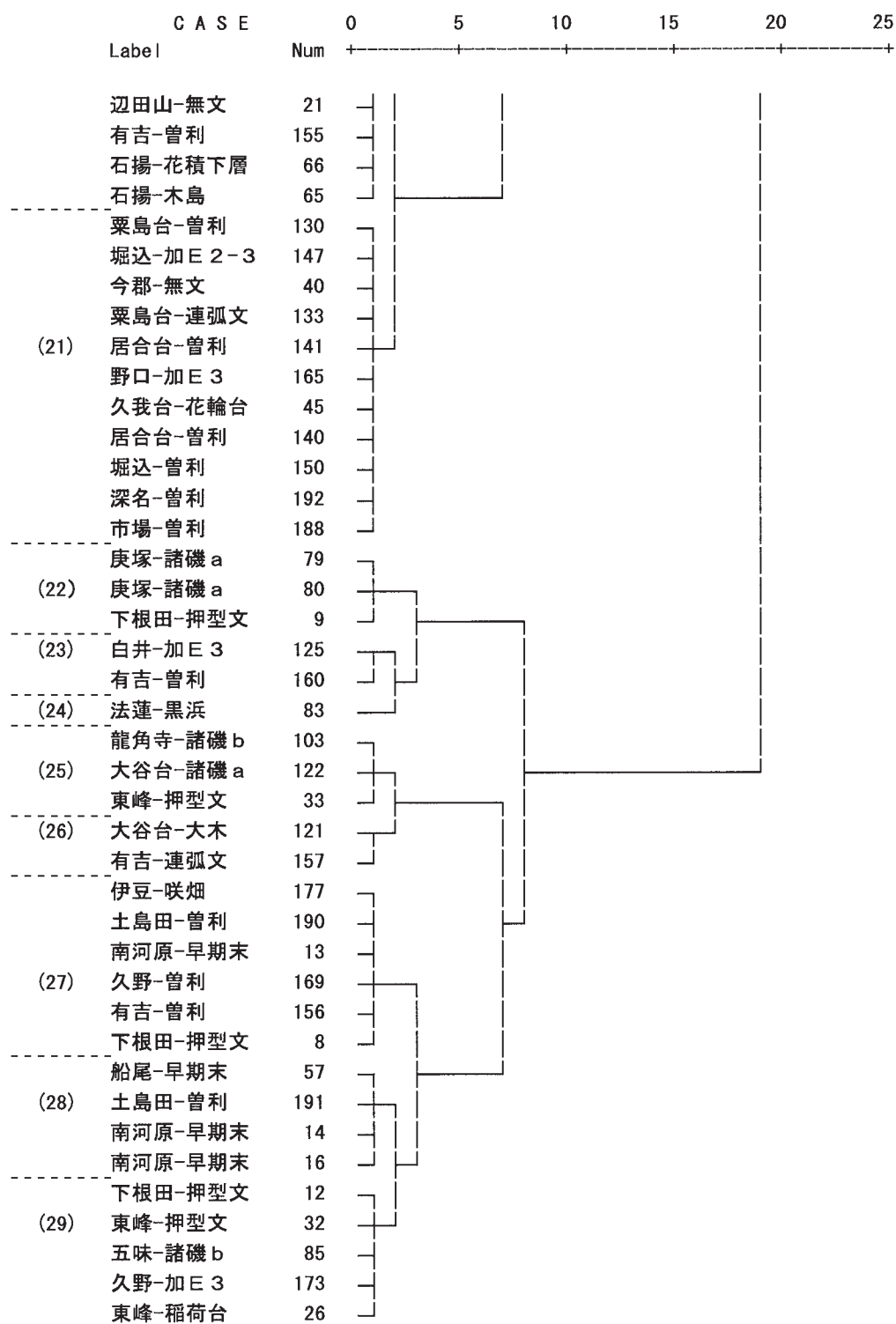
第88図(2) クラスタ分析の結果



第88図(3) クラスター分析の結果



第88図(4) クラスター分析の結果



第88図(5) クラスター分析の結果



#### 4-4. 型式分類と胎土の分類の相関

ここでは土器の型式学的分類と胎土の分類の相関等について概観する。

早期は比較的、型式学的分類と胎土の分類が一致する 경우가多く認められた。すなわち、非在地系とされる型式を有する土器の胎土は在地系のそれとは異なる事例が頻繁に認められた。

千葉県からみれば西側に型式学的故地をもつ山形や楕円形の押型文土器の多くは、同じ遺跡出土の撚糸文系とは異なる胎土をもつ傾向が認められた。同様に、千葉県からみれば西側に型式学的故地をもつ隆帯文系の多くも、同じ遺跡出土の条痕文系とは異なる胎土をもつ傾向が認められた。

一方、押型文をもつ土器でも在地系とされる和良比長作No.2遺跡の「変形押型文」をもつ土器群や東寺山石上遺跡の「押型文+撚糸文」の土器群等は概ね同じ遺跡出土の撚糸文系と類似した胎土をもつ傾向が認められた。

前期は比較的、型式学的分類と胎土の分類が一致する 경우가多く認められた。すなわち、非在地系とされる型式を有する土器の胎土は在地系のそれとは異なる事例が頻繁に認められた。特に非在地系土器群（木島式、北白川下層式、前期大木式等）が極端にまとまるクラスターが2つ（第6群、第8群）認められたことは、早期資料群の分析では明瞭には認められなかった傾向でもあり、注目される。第6群は、千葉県からみれば西側遠方（東海地域以西）に型式学的故地をもつ木島式と北白川下層式のみで構成される。

木島式は、分析に供した6点のうちNo.69～73の4点がとてもよく似る（第6群）。他の2点（No.64、65）はこれとは大きく異なり、特にNo.65は同じ遺跡の花積下層式（No.66、67）ととてもよく似る（第20群）。北白川下層式は、分析に供した8点のうちNo.76、77、89、92の4点がとてもよく似る（第8群）。またNo.81、88の2点もとてもよく似る（第6群）。これとNo.87は比較的似る。No.93は他の北白川下層式とは大きく異なる（第2群）。前期大木式は、分析に供した10点のうちNo.102、107、108の3点がとてもよく似る（第8群）。また、No.96、106もとてもよく似る（第17群）が、むしろNo.96は同じ遺跡から出土した諸磯式や関山式とよく似ること、No.106は同じ遺跡から出土した黒浜式とよく似ることに注目すべきであろう（第17群）。

中期は他の時期と比べ、比較的、型式分類と胎土の分類が一致しない 경우가多く認められた。土器型式よりむしろ出土遺跡ごとに胎土の特性がまとまる傾向が強く、特に粟島台遺跡、伊豆山台遺跡、久野遺跡、深名（深名瀬島）遺跡、堀込（和良比）遺跡等では顕著であった。この中で、第4群はやや傾向が異なり、千葉県からみれば西側に型式学的故地をもつ曾利式系、連弧文系が比較的集中する。

曾利式系や連弧文系よりさらに西側遠方（東海地域以西）に型式学的故地をもつ「船元式」（No.158）と「咲畑式類似」（No.177）は、先の検討の通り、いずれも他と大きく異なる胎土をもつことが理解できた。

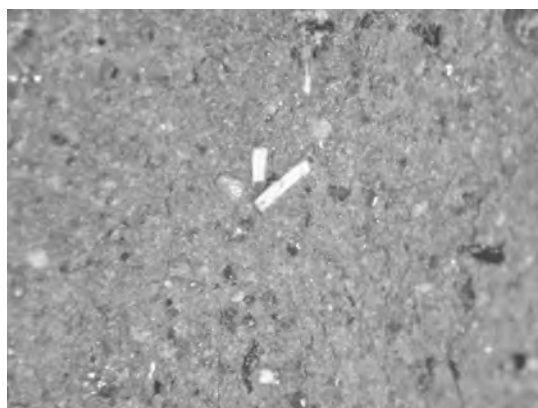
#### 4-5. 骨針状物質について

大粒粒子の観察により、少なくとも7点の胎土中に骨針状物質が認められた。この物質はかつて成瀬正和により「白色針状物質」（成瀬1979）、宇津川徹・上條朝宏により「動物珪酸体」（宇津川・上條1980a、1980b）として注目、報告がなされたもので、その後、関東周辺では主に土師器や須恵器の胎土の記載でよく見かけるようになった。関東周辺では埼玉県南比企古窯跡群の須恵器等が特に著名である。縄文土器については、神奈川県内の諸遺跡や東京都多摩ニュータウン遺跡群の早期後半土器群等での存在が知られ

る。千葉県内では永田不入古窯跡の須恵器等にその存在がよく知られるが、縄文土器について同様の記載がなされた事例は意外に少ない。

今回、骨針状物質が認められた7点の内訳は、早期1点（No.13 南河原坂遺跡出土早期末）、前期1点（No.123 大谷台遺跡出土諸磯a式）、中期5点（No.173 久野遺跡出土加曾利E3式、No.179 伊豆山台遺跡出土加曾利E3式、No.196・197 いずれも深名（深名瀬島）遺跡出土曾利式系、No.202 深名（深名瀬島）遺跡出土連弧文系）で、中期が多く、特に深名（深名瀬島）遺跡は3点と目立つ。いずれの資料も骨針状物質のサイズは長軸が200～1,000 $\mu\text{m}$ （0.2～1mm）程度のもが目立った（第89図）。

主成分元素組成値のクラスター分析結果によれば、No.123（大谷台遺跡出土諸磯a式）とNo.202（深名（深名瀬島）遺跡出土連弧文系）は比較的似る（第13群、第14群）。これ以外の5点はどれも同様の特徴をもつ土器同士ではまとまらない（第4群、第5群、第16群、第27群、第29群）。



第89図 骨針状物質（No.196。写真の横幅は原寸約3mm。）

#### 註

1. 分析資料の選定にあたっては、基本的に別個体の資料（片）を抽出するよう心がけた。ただし、「非在地系」とされたもののうち比較的小破片のものについては、一部、同一個体となる可能性のある資料（片）を分析Noを違えて複数選定したところがある。No.69～71（幸田貝塚出土木島式）、No.88・89（有吉北貝塚出土北白川下層Ⅱc式）、No.106～108（木戸先遺跡出土大木2b式）、No.119～121（大谷台遺跡出土前期大木式系）がそれに概当する。
2. 後述するとおり、当該地域の押型文をもつ土器群の中には「在地系」とされるものも多数存在する。
3. 千葉県内出土の諸磯式の全てを「在地系」とすることはできないが、ここでは便宜的に「在地系」として扱った。今後、より詳細な型式学的検討を踏まえて考察する必要がある。

#### 引用参考文献

- 宇津川 徹・上条朝宏 1980a「土器胎土中の動物珪酸体について(1)」『考古学ジャーナル』181 ニューサイエンス社  
1980b「土器胎土中の動物珪酸体について(2)」『考古学ジャーナル』184 ニューサイエンス社  
大村 裕・建石 徹 2003「入れ子状に出土した二つの土器－千葉県佐原市朝日森遺跡第九号土坑出土中期縄紋土器の研究－」『佐原の歴史』3 佐原市教育委員会  
建石 徹 2002「練木遺跡採集縄文中期土器の胎土分析ならびに黒曜石の原産地推定」『土曜考古』26 土曜考古学研究会

- 建石 徹・北田正弘・小林謙一・二宮修治 2002「縄文土器製作における粘土と混和材の選択性に関する基礎的研究－阿玉台式土器の事例を中心として－」『日本文化財科学会第19回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 千葉県文化財センター 1981「自然科学的手法による遺跡、遺物の研究1－概論－」『研究紀要』6 千葉県文化財センター
- 千葉県文化財センター 1984「自然科学的手法による遺跡、遺物の研究3－土器胎土分析の基礎的研究－」『研究紀要』8 千葉県文化財センター
- 成瀬正和 1979「『白色針状物質』を含む須恵器をめぐる問題」『埼玉県上福岡市ハケ遺跡C地区』上福岡市ハケ遺跡調査会

### 第3節 胎土分析を終えて

#### 1 はじめに

本稿では各時期の胎土分析結果の簡単なまとめと、今後の課題と展望の概略を示す。

#### 2 早期

撚糸文系を中心に沈線文系、条痕文系を含めた在地系土器群と、押型文系、隆帯文系を中心とする非在地系土器群について、胎土の類似性、非類似性を検討した。なお、押型文系土器には千葉県周辺に特有の在地化した土器群とされるものも存在する。

胎土分析の結果は、概ね、型式学的な在地・非在地の分類と、胎土の分類が一致するものであった。すなわち、多くの遺跡で型式学的に在地系とされた土器群の多くがそれぞれにまとまり、非在地系とされた土器群はこれから外れる傾向が認められた。同じ遺跡から出土した非在地系土器群のうち在地系土器群とは胎土のまとまりを異にするものは、船尾白幡遺跡の隆帯文系（No.54、55 第17群）のようにまとまるものも一部には認められたが、それらがまとまらずばらばらである場合の方がむしろ一般的である印象をもつ。

押型文をもつ土器のうち、型式学的に在地系とされる「変形押型文系」や「押型文と撚糸文が組合わさる土器」はいずれも在地系土器群とまとまる胎土をもつことが多いことが理解できた。

#### 3 前期

花積下層式、関山式、黒浜式、諸磯式、浮島式、興津式等の在地系土器群と、木島式、北白川下層式、前期大木式等の非在地系土器群について、胎土の類似性、非類似性を検討した。なお、諸磯式については、単純に在地系といえない部分もあり、より詳細な検討が今後の課題となる。

胎土分析の結果は、早期土器群の結果と同様、概ね、型式学的な在地・非在地の分類と、胎土の分類が一致するものであった。すなわち、多くの遺跡で型式学的に在地系とされた土器群の多くがそれぞれにまとまり、非在地系とされた土器群はこれから外れる傾向が認められた。ただし、非在地系土器群のうち在地系土器群とは異なる胎土をもつものは、同一遺跡出土資料同士でまとまることが多く、さらに、遺跡を違えても同じ型式や系譜の土器同士に胎土の類似性が認められる場合もあり（第6群、第8群）、早期資料群との相違も認められた。

また、大谷台遺跡、石揚遺跡、中山新田Ⅰ遺跡等では、型式学的な分類と胎土の分類が一致せず、むしろ、同一遺跡から出土した土器群については型式を違えても胎土が類似する傾向が認められた。

なお、前期土器群の分析資料の選定にあたっては、一部に同一個体の可能性があるものをあえて分析No.を違えて選定し分析に供した。その大半は分析結果もよくまとまり、同一個体あるいはそれに準ずる類似性の高い資料群であることが理解できた。一方、一部の資料については同一個体の可能性が考えられた資料群の分析結果がまとまらず、これらについては同一個体の可能性自体を再検討する必要があるのかもしれず、改めて検討の機会をもちたい。

#### 4 中期

加曾利E式等の在地系土器群と、連弧文系、曾利式系、「船元式」「咲畑式類似」等の非在地系土器群に

ついて、胎土の類似性、非類似性を検討した。なお、連弧文系、曾利式系の二者と、「船元式」「咲畑式類似」の二者では、同じ「非在地系」といってもそのニュアンス（型式学的故地との距離等）は異なる。

胎土分析の結果は、早期、前期資料群でみられた傾向とは大きく異なり、多くの遺跡で、型式学的な分類と胎土の分類が一致せず、むしろ、同一遺跡から出土した土器群については型式を違えても胎土が類似する傾向が認められた。すなわち、多くの遺跡や地域で、加曾利E式、連弧文系、曾利式系は、型式ごとではなく遺跡や地域ごとにまとまる傾向がみてとれた。

また、「船元式」（No.158）と「咲畑式類似」（No.177）については、いずれも同じ遺跡から出土した資料とは異なる胎土の特徴をもち、特に「船元式」（No.158）については今回の分析に供した全資料の中で「孤高の存在」であることが示唆された。

## 5 早期、前期、中期資料群の胎土分析を通じて

早期、前期資料群は、多くの遺跡で、型式学的な在地・非在地の分類と、胎土の分類が一致する傾向が認められた。この傾向が認められた非在地系土器の多くは、型式学的故地あるいはその方面から「搬入」されたものである可能性が示唆されるものである。これらには型式学的な識別が比較的容易なものと同難なものがある。例えば、同様の様相が中期において識別された「船元式」や「咲畑式類似」の土器等は、比較的それが困難な事例と思われるが、今回の検討をもって、報告段階での型式同定がきわめて正確であったことが裏付けられたともいえる。訓練された観察者をもってすれば、こうした「搬入土器」の存在を見抜くことができる可能性が高いことが傍証された。ただし、これらの土器は、一見してそれとわかるような特徴をもつ土器とまでは言えず、報告書に掲載された図や写真のみで判断することはかなり難しいといえる。今回の結果を受け、小片でも重要な考古学的情報をもちえるものが存在することを改めて認識し、報告段階でのフィルタリングについて今後よりいっそう意識していく必要がある。

中期資料群は、多くの遺跡で、型式学的な分類と胎土の分類が一致せず、むしろ、同一遺跡から出土した土器群については型式を違えても胎土が類似する傾向が認められた。この傾向は前期のいくつかの遺跡等でも認められたものであったが、中期（この場合は加曾利E 3式期をはじめとする中期後半）には特に顕著に認められるものであった。これは、型式学的な出自を異にする様々な土器が、同一またはかなり狭い地域において作り分けられていた、というような縄文土器製作のスタイルが反映されているようにもみえる。ある意味きわめて「縄文的」な土器製作スタイルを反映した結果である可能性を指摘しておきたい。

ただし、房総半島では非在地的と判断される曾利式系と連弧文系だけが比較的まとまるクラスターも存在する。こうしたまとまりについては、「西関東」と「東関東」といった、より狭い地域での差異を反映するまとまりとして意味づけうる可能性もある。こうしたまとまりの中に含まれる加曾利E式と、あるいはこうしたまとまりに含まれない曾利式系、連弧文系と、他のクラスターに含まれる同種土器との間に、より細かな型式学的差異が見出せるのか否か、そうした差異が地域的なまとまりをもつのか否か、今後の課題となろう。

## 6 おわりに

今回の分析の結果は、早期・前期・中期の各時期において、それぞれ特徴的な結果を示すこととなっ

た。もとよりこの結果が房総半島における各時期の非在地系土器のありかたのすべてを反映するものではないが、ある程度の時期的、地域的な傾向を示すものであることも間違いなからう。今回の結果は、縄文土器製作の実態が、きわめて複雑であることを示しており、少なくとも房総半島においては、そうした複雑な土器製作のあり方が一定ではないことを示唆していよう。分析の所期の目的であった、房総半島というある程度の広さを持った領域における通時的・網羅的な分析の結果としては、充分満足できるものと考ええる。

今回の胎土分析の結果を、より詳細な型式学的な検討にさらにフィードバックすることによって、縄文土器の製作や交換の実態により具体的に接近できる可能性が高い。本研究では、基礎データの提示を第一とし、これに焦点を絞ったが、今後はこのデータをどのように洗練させ、統合すべきなのか、検討を重ねていきたい。

研究紀要26

---

平成21年11月26日 発 行

発 行 者 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

電話 043 (422) 8811

印 刷 所 株式会社 正文社

千葉県千葉市中央区都町1-10-6

---